

私 部 城 跡  
発掘調査報告

2015. 3

交野市教育委員会

交野市埋蔵文化財調査報告 2014 - I

# 私部城跡 発掘調査報告

2015. 3

交野市教育委員会

## 例　　言

- 1 本報告書は、大阪府交野市に所在する私部城跡に関する報告書である。
- 2 本城跡の名称については、文献史料では交野城、私部城といずれも用いられているが、本書では、周知の遺跡名が私部城跡であること、一般的に定着していることより、私部城とした。また、本郭・二郭などと名称については、基本的には中井均氏作製の絹張り図（本文9頁第5図）に従った。
- 3 調査にあたっては、私部城跡調査検討委員会を組織し、平成24年度から平成26年度にかけて実施した。
- 4 報告書執筆にあたっては、交野市教育委員会吉田知史が行った。なお、第4章については考古学的見地から中井均氏に、また、第5章については文献的見地から小谷利明氏に玉稿を賜った。
- 5 調査・報告書の作成にあたっては、下記の次の機関・個人よりご指導・助言・協力を頂いた。記して謝意を表します。

（敬称略・五十音順）

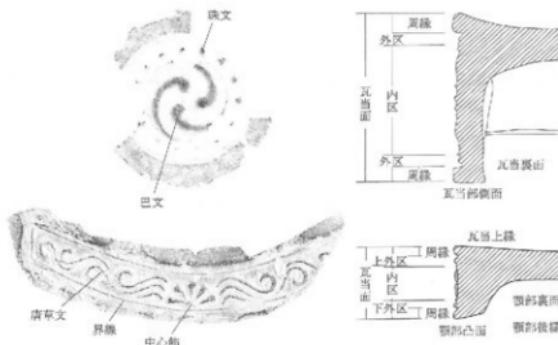
芦田勇人	大北勇	岡田賢	岡本敏行	奥野和夫	尾谷雅彦	梶原太郎	梶利弘
梶浩和	鍾ヶ江一朗	金松誠	川村紀子	北村七郎	黒田慶一	小谷利明	小谷徳彦
小林義孝	近藤滋	珠敷弘一	関真一	千田稔	高田徹	辻康雄	富田和男
富田千鶴子	中井均	中西裕樹	馬部隆弘	早川圭	福島克彦	藤本史子	堀寛之
堀江門也	堀口健次	水野正好	宮崎康雄	村田修三	毛利信二	森原直樹	
藤田貴	山上弘						

（公財）大阪市博物館協会大阪市文化財協会　　大阪府教育委員会　　大阪歴史学会　　大津市教育委員会  
交野古文化同好会　　京都大学　　城郭談話会　　高槻市教育委員会　　東大阪市立郷土博物館  
枚方市教育委員会　　三木市教育委員会

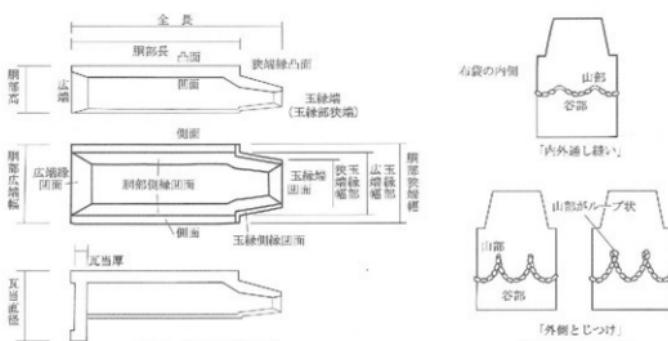
## 凡　　例

- 1 調査区・遺構平面図の方位は、国土座標を用いたものを除いて磁北を示す。
- 2 使用した標高は、東京湾平均海面水位（T.P.）からのプラス値であり、「T.P.+」を省略して示した。
- 3 第1～3章については発掘調査報告は次の構成をとった。第4・5章については個別の構成をとった。  
第1章　第2章…/第1節　第2節…/第1項　第2項…/（1）（2）…/（a）（b）…

4 瓦の部位名称については次の図に従い報告した。

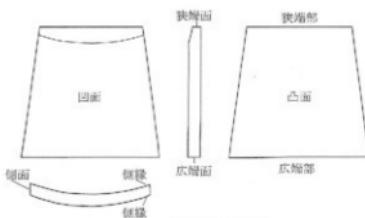


①軒丸瓦・軒平丸瓦の瓦当の各部名称



②丸瓦・軒丸瓦の部位名称  
《(佐川1989)を基に書き起こして一部追記修正》

③丸瓦吊り組模式図



④半圓瓦の部位名称  
《京本文中の左右は狭縊部を上にして見たときの左右を表す。》

河内長野市教委2011『鳥帽子形城』  
をもとに一部改変して作製

## 序 文

京都と奈良の都に隣接する交野市には、その地理的に恵まれた立地から歴史的な遺跡や遺物が数多く存在します。古くから京都と河内の中心部とは東高野街道にて、奈良とは磐船街道にて通じ、さらにこれらの街道から派生する古道が村々を結んでいました。このことから戦国時代においても交野の地は交通の要衝として重要視され、この地に本拠をおいた安見氏によって私部城が築かれたとされます。

この城は、交野の平野部に古くから形成された私部という集落に築かれました。大阪府内において、平野部に築かれた城のほとんどが開発によりその姿を失っている現在、良好な保存状態で残る私部城跡は貴重な文化遺産であります。

戦後間もない頃の城跡には周囲より一段高く土が盛られた郭跡と堀や土塁跡とされる池や竹藪などが残っていて往時の城の面影を窺い知ることができます。しかしながら、近年の都市化の波は例外なくこの城跡にも押しよせ、かつての郭や堀跡などは宅地や駐車場として利用され、しだいにその原形を失いつつあります。

近年、このような開発の波から貴重な城跡を守り保存しようとする活発な動きが、行政だけでなく市民の間からも湧き上がっています。このため当教育委員会では、この貴重な遺跡保護のため、文献史学、城郭研究、考古学の各分野の専門家から様々な意見や指導を得、故水野正好先生を中心に私部城検討委員会を設置し、平成24年度より本格的な発掘調査を実施しています。

これまでの発掘調査により私部城に関する多くの事実が解明されましたが、まだまだ不明なことが多く残されています。教育委員会といたしましては今後もこれらの解明を進め、保存活用に繋げていく所存です。

最後になりましたが、本報告書の刊行に際しましてご指導並びにご協力を賜りました諸先生方並びに各関係機関の皆様に深く感謝申し上げますとともに、私部城跡の保存活用に向け今後ともより一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## 本文目次

第1章 調査報告に至る経緯と目的	1	第4節 本郭・三郭間の堀部の調査	69
第1節 私部城跡の現況	1	第1項 2011・6次調査	69
第1項 私部城跡の概要	1	第2項 2013・6次 第2・4・5調査区	73
第2項 私部城跡の保存状況	1	第3項 本郭・三郭間の堀部の調査成果	81
第2節 調査検討委員会の設置と報告の目的	2	第5節 本郭南の平坦面の調査	83
第1項 設置の経緯	2	第1項 1986・2次調査	83
第2項 私部城跡調査検討委員会について	2	第2項 2013・6次 第1・3・6~8調査区	84
第3項 本報告の目的	2	第3項 本郭南平坦面の調査成果	93
第2章 私部城跡の位置と環境	3	第6節 本郭・二郭間の堀部の調査	95
第1節 私部城跡の位置と地理的環境	3	第1項 2013・9次 第1・2調査区	95
第1項 交野市の概要	3	第2項 2013・3次調査	101
第2項 交野市と私部城跡周辺の地形	4	第3項 本郭・二郭間堀部の調査成果	111
第3項 周辺の街道と城郭	6		
第4項 私部城跡の地上遺構と縄張り研究	8	第7節 二郭北～北西部の調査	113
第2節 私部城跡の歴史的環境	11	第1項 1982年調査	113
第1項 交野の歴史概要	11	第2項 2012・3次調査	117
第2項 中世以前の埋蔵文化財と歴史	11	第3項 2013・5次調査	123
第3項 中世の歴史と文化財	14	第4項 二郭北西部の調査成果	127
第4項 私部周辺の寺院と石造物	16		
第5項 近世以後の私部と城跡	18	第8節 二郭南西部～南部の調査	129
第6項まとめ	21	第1項 2011・1次調査	129
第3章 私部城跡の発掘調査	23	第2項 1999・1次調査	135
第1節 発掘調査の経過と報告の目的	23	第3項 2011・5次調査	136
第1項 郡土史家による採集と発掘	23	第4項 2005・1次調査	137
第2項 開発に伴う発掘調査	23	第5項 2013・1次調査	141
第3項 範囲確認調査	23	第6項 二郭南西部～南部の調査成果	143
第4項 発掘調査報告の目的と構成	24		
第2節 本郭上面の調査	28	第9節 二郭南の堀跡（本丸池）の調査	145
第1項 1994・2次 第1・2調査区	28	第1項 2012・4次 第4調査区	145
第2項 1990・1次調査	42	第2項 2013・9次 第3調査区	149
第3項 2011・7次調査	44	第3項 二郭南堀跡（本丸池）の調査成果	152
第4項 本郭上面の調査成果	53		
第3節 本郭北側斜面の調査	57	第10節 本丸池西の郭（土壤状態）の調査	153
第1項 1994・2次 第3調査区	57	第1項 1990・2次調査	153
第2項 2013・4次調査	60	第2項 1992年度調査	154
第3項 本郭北側斜面の調査成果	66	第3項 2012・4次 第1～3調査区	156
		第4項 本丸池西の郭（土壤状態）の調査成果	167
第11節 駅便局付近の郭の調査	169		
第1項 1986・1次調査	169		
第2項 2013・2次調査	173		
第3項 駅便局付近の郭の調査成果	175		
第12節 私部城西側の調査	176		
第1項 1996・1次調査	176		
第2項 1993年度調査	178		
第3項 2006・1次調査	179		
第4項 私部城西側の調査成果	180		

第13節 私部城北東の試掘調査	181	第4章 私部城と近畿の戦国期城館	297
第1項 試掘 2010・3次調査	181		
第2項 試掘 2013・1次調査	183	Iはじめに	297
第3項 私部城北東の試掘調査成果	185		
第14節 三郭～四郭の調査	187	II構造的特徴	297
第1項 1965・1969年度調査	187	構造	297
第2項 2013・7次調査	190	信長の攻城戦	297
第3項 1994・1次調査	194		
第4項 三郭～四郭の調査成果	195	III私部城跡出土の瓦	300
		河内	300
第15節 出郭(現・光通寺)の調査	197	摂津	304
第1項 1997・2次調査	197	山城	305
第2項 1999・2次調査	221	大和	307
第3項 2008・1次調査	223	近江	309
第4項 2013・8次調査	224	播磨	310
第5項 出郭(現・光通寺)の調査成果	227	考察	314
第16節 私部城東の調査	229	IVおわりに	315
第1項 2012・2次調査	229		
第2項 私部城跡東の調査成果	256	第5章 文獻史料からみた私部城	317
第17節 私部城南の調査	257	I宝町・戦国期の私部郷	317
第1項 2012・5次調査	257	1、私部城の築城時期	317
第2項 私部城南の調査成果	260	2、室町期の石清水八幡宮と私部郷の在地領主大塚兵衛	318
第18節 私部城跡発掘調査のまとめ	263	3、牧・交野一揆と鷹山弘頼	319
第1項 私部城以前の遺構の変遷	263	4、鷹山弘頼と安見宗房の対立	321
第2項 私部城期の遺構と遺物	267	小括	322
第3項 発掘調査成果のまとめ	274		
参考文献(第1～3章)	275	II安見右近と私部城	323
遺物観察表	279	1、安見右近の登場	323
		2、天下再興の戦い	323
		3、織田信長の上洛と私部城の登場	324
		4、私部城の最後	325
		小括	326
		まとめ	326
		史料集	1 (328)

## 写真図版目次

### 遺構等写真図版

- 写真図版1 私部城跡 航空写真  
写真図版2 私部城跡 航空写真  
写真図版3 私部城跡 昭和写真  
写真図版4 私部城跡現況  
写真図版5 地籍図・絵図  
写真図版6 第2節 本郭上面の調査  
写真図版7 第2節 本郭上面の調査  
写真図版8 第2節 本郭上面の調査  
写真図版9 第2節 本郭上面の調査  
写真図版10 第2節 本郭上面の調査  
写真図版11 第3節 本郭北側斜面の調査  
写真図版12 第3節 本郭北側斜面の調査  
写真図版13 第3節 本郭北側斜面の調査  
写真図版14 第4節 本郭・三郭間の堀部の調査  
写真図版15 第4節 本郭・三郭間の堀部の調査  
写真図版16 第4節 本郭・三郭間の堀部の調査  
写真図版17 第5節 本郭南の平坦面の調査  
写真図版18 第5節 本郭南の平坦面の調査  
写真図版19 第5節 本郭南の平坦面の調査  
写真図版20 第6節 本郭・二郭間の堀部の調査  
写真図版21 第6節 本郭・二郭間の堀部の調査  
写真図版22 第6節 本郭・二郭間の堀部の調査  
写真図版23 第7節 二郭北～北西部の調査  
写真図版24 第7節 二郭北～北西部の調査  
写真図版25 第7節 二郭北～北西部の調査  
写真図版26 第8節 二郭南西部～南部の調査  
写真図版27 第8節 二郭南西部～南部の調査  
写真図版28 第8節 二郭南西部～南部の調査  
写真図版29 第9節 二郭南の堀跡(本丸池)の調査  
写真図版30 第10節 本丸池西の郭土量状態の調査  
写真図版31 第10節 本丸池西の郭土量状態の調査  
写真図版32 第10節 本丸池西の郭土量状態の調査  
写真図版33 第11節 郡便局付近の郭の調査  
写真図版34 第12節 私部城西側の調査  
写真図版35 第13節 私部城北東の試掘調査  
写真図版36 第14節 三郭～四郭の調査  
写真図版37 第15節 出郭現・光通寺)の調査  
写真図版38 第15節 出郭現・光通寺)の調査  
写真図版39 第16節 私部城東の調査  
写真図版40 第16節 私部城東の調査  
写真図版41 第16節 私部城東の調査  
写真図版42 第17節 私部城南の調査

### 遺物写真図版

- 写真図版43 第2節 本郭上面の調査  
写真図版44 第2節 本郭上面の調査  
写真図版45 第2節 本郭上面の調査  
写真図版46 第2節 本郭上面の調査  
写真図版47 第2節 本郭上面の調査  
写真図版48 第2節 本郭上面の調査  
写真図版49 第2節 本郭上面の調査  
写真図版50 第2節 本郭上面の調査  
写真図版51 第3節 本郭北側斜面の調査  
写真図版52 第4節 本郭・三郭間の堀部の調査  
写真図版53 第4節 本郭・三郭間の堀部の調査  
写真図版54 第5節 本郭南の平坦面の調査  
写真図版55 第6節 本郭・二郭間の堀部の調査  
写真図版56 第6節 本郭・二郭間の堀部の調査  
写真図版57 第6節 二郭北～北西部の調査  
写真図版58 第7節 二郭南西部～南部の調査  
写真図版59 第8節 二郭南の堀跡(本丸池)の調査  
写真図版60 第9節 第10節 本丸池西の郭土量状態の調査  
写真図版61 第10節 本丸池西の郭土量状態の調査  
写真図版62 第11節 郡便局付近の郭の調査  
写真図版63 第12節 三郭～四郭の調査  
写真図版64 第13節 出郭現・光通寺)の調査  
写真図版65 第13節 出郭現・光通寺)の調査  
写真図版66 第14節 出郭現・光通寺)の調査  
写真図版67 第14節 出郭現・光通寺)の調査  
写真図版68 第15節 私部城東の調査  
写真図版69 第15節 私部城東の調査  
写真図版70 第16節 私部城東の調査

## 図版目次

第 1 図 交野市と私郎城跡の位置	3	第 64 図 2011 - 6 次 第 4 調査区断面図	70
第 2 図 私郎城周辺地質区分図	4	第 65 図 2011 - 6 次 第 4 調査区南壁・東壁断面図	71
第 3 図 昭和 36 年私郎城跡周辺地形測量図	5	第 66 国 2011 - 6 次 第 5 調査区北壁・東壁断面図	71
第 4 国 私郎城跡周辺の城と街道	7	第 67 国 本郭・三郭閣の縦 東西南面合成図	72
第 5 国 中央丸太製私郎城跡構造図	9	第 68 国 本郭南東突出部～三郭 東西南面合成図	72
第 6 国 中西裕裕氏作製私郎城跡構造図	9	第 69 国 2013 - 6 次 調査地点位置図	73
第 7 国 馬鹿頭弘氏作製私郎城跡構造図	10	第 70 国 2013 - 6 次 調査区位置図	73
第 8 国 交野市内遺跡分布図	13	第 71 国 2013 - 6 次 第 2 調査区断面図	74
第 9 国 でがひ遺跡 位置図	14	第 72 国 2013 - 6 次 第 4 調査区断面図	75
第 10 国 私郎南遺跡 研磨研位置図	15	第 73 国 2013 - 6 次 第 5 調査区断面図	75
第 11 国 地図合成図	20	第 74 国 本郭・三郭閣の縦 南北断面合成図	75
第 12 国 私郎城跡調査点位置図	24	第 75 国 2013 - 6 次 第 2 - 5 調査区平面図	76
第 13 国 1994 - 2 次 調査地点位置図	28	第 76 国 2013 - 6 次 第 2 調査区 37 号出土遺物	77
第 14 国 私郎城跡調査点位置図	28	第 77 国 2013 - 6 次 第 2 調査区北部上層出土遺物	78
第 15 国 1994 - 2 次 第 1 - 2 調査区断面合成図	29	第 78 国 2013 - 6 次 第 2 棚区 10 号出土遺物	79
第 16 国 1994 - 2 次 第 2 調査区南壁断面図	29	第 79 国 2013 - 6 次 第 2 棚区 11 号出土遺物	80
第 17 国 1994 - 2 次 第 1 - 2 調査区遺傳平面・断面合成図	30	第 80 国 本郭・三郭閣部 東西南面合成図	80
第 18 国 1994 - 2 次 第 2 調査区生土遺物平面・断面合成図	31	第 81 国 1986 - 2 次 調査地点位置図	82
第 19 国 1994 - 2 次 第 2 調査区土坑 1 出土軒瓦平瓦	32	第 82 国 1986 - 2 次 調査区断面図	83
第 20 国 1994 - 2 次 第 2 調査区土坑 1 出土軒瓦丸瓦	33	第 83 国 1986 - 2 次 調査区平面図	83
第 21 国 1994 - 2 次 第 2 調査区土坑 1 出土平瓦	35	第 84 国 2013 - 6 次 第 1 - 5 ~ 8 調査区断面図	84
第 22 国 1994 - 2 次 第 2 調査区土坑 1 出土丸瓦	36	第 85 国 2013 - 6 次 第 1 - 6 ~ 8 調査区位置図	84
第 23 国 1994 - 2 次 第 2 調査区土坑 1 出土丸瓦	37	第 86 国 2013 - 6 次 第 1 - 6 調査区断面図	85
第 24 国 1994 - 2 次 第 2 調査区土坑 1 出土丸瓦・面戸瓦	38	第 87 国 2013 - 6 次 第 3 調査区断面図	85
第 25 国 1994 - 2 次 第 2 調査区土坑 1 出土古代平・丸瓦	39	第 88 国 2013 - 6 次 第 6 調査区断面図	86
第 26 国 1994 - 2 次 第 2 調査区土坑 1 出土遺物	40	第 89 国 2013 - 6 次 第 7 調査区断面図	86
第 27 国 1994 - 2 次 第 2 調査区ビット 6 号出土物	41	第 90 国 2013 - 6 次 第 8 調査区断面図	87
第 28 国 1994 - 2 次 第 1 調査区出土遺物	41	第 91 国 2013 - 6 次 第 1 - 6 ~ 8 調査区遺構平面図	87
第 29 国 1990 - 1 次 調査地点位置図	42	第 92 国 2013 - 6 次 第 3 調査区遺構平面図	88
第 30 国 1990 - 1 - 2 次 調査区位置図	42	第 93 国 2013 - 6 次 第 1 - 3 調査区遺構断面図	89
第 31 国 1990 - 1 - 2 次 第 1 - 3 調査区断面図	43	第 94 国 2013 - 6 次 第 1 - 6 ~ 8 調査区 1 号出土瓦	90
第 32 国 2011 - 7 次 調査地点位置図	44	第 95 国 2013 - 6 次 第 1 - 6 ~ 8 調査区 1 号出土物	91
第 33 国 2011 - 7 次 調査区位置図	44	第 96 国 2013 - 6 次 第 1 調査区 2 号出土遺物	92
第 34 国 2011 - 7 次 調査区断面図	45	第 97 国 2013 - 6 次 調査区南壁断面合成図	93
第 35 国 2011 - 7 次 中世遺構平面図	46	第 98 国 本郭跡平坦面平面合成図	94
第 36 国 2011 - 7 次 中世遺構断面図	47	第 99 国 2013 - 9 次 第 1 - 2 調査区位置図	95
第 37 国 2011 - 7 次 調査区中层出土物	47	第 100 国 2013 - 9 次 第 1 - 2 調査区平面図	95
第 38 国 2011 - 7 次 弥生時代遺構平面図	48	第 101 国 2013 - 9 次 第 1 調査区断面図	96
第 39 国 2011 - 7 次 弥生時代遺構断面図	49	第 102 国 2013 - 9 次 第 2 調査区断面図	97
第 40 国 2011 - 7 次 弥生時代遺構出土物	50	第 103 国 2013 - 9 次 第 1 調査区出土遺物	98
第 41 国 2011 - 7 次 弥生時代遺構出土石器	51	第 104 国 2013 - 9 次 第 1 調査区出土瓦	99
第 42 国 2011 - 7 次 弥生時代遺構出土石器	52	第 105 国 2013 - 9 次 第 2 調査区出土瓦砾	100
第 43 国 人耕操作痕跡	54	第 106 国 2013 - 9 次 第 2 調査区出土土器	100
第 44 国 南北断面合成図	55	第 107 国 2013 - 9 次 第 2 調査区位置図	101
第 45 国 本郭上面 平面合成図	56	第 108 国 2013 - 3 次 調査区位置図	101
第 46 国 1994 - 2 次 第 3 調査区位置図	57	第 109 国 2013 - 3 次 調査区断面図	102
第 47 国 1994 - 2 次 第 3 調査区平面図	57	第 110 国 2013 - 3 次 調査区断面図	103
第 48 国 1994 - 2 次 第 3 調査区断面合成図	58	第 111 国 2013 - 3 次 調査区平面図	103
第 49 国 1994 - 2 次 第 3 調査区接集造物	59	第 112 国 2013 - 3 次 調査区出土遺物	105
第 50 国 2013 - 4 次 調査区位置図	60	第 113 国 2013 - 3 次 北ナブトレンチ出土遺物	105
第 51 国 2013 - 4 次 調査区平面図	60	第 114 国 2013 - 3 次 中ナブトレンチ出土遺物	106
第 52 国 2013 - 4 次 第 1 - 2 調査区断面図	61	第 115 国 2013 - 3 次 中ナブトレンチ出土瓦	107
第 53 国 2013 - 4 次 第 3 ~ 5 調査区断面図	62	第 116 国 2013 - 3 次 南ナブトレンチ出土遺物	108
第 54 国 2013 - 4 次 第 3 調査区瓶陶出土遺物	63	第 117 国 2013 - 3 次 調査区周辺採集遺物	109
第 55 国 2013 - 4 次 第 1 調査区出土瓦 1	64	第 118 国 2013 - 3 次 本郭・二郭閣の縦 (北半) 東西南面合成図	111
第 56 国 2013 - 4 次 第 1 調査区出土瓦 2	65	第 119 国 2013 - 3 次 本郭・二郭閣の縦 (南半) 東西南面合成図	111
第 57 国 2013 - 4 次 第 4 調査区出土遺物	66	第 120 国 2013 - 3 次 本郭・二郭閣の縦 平面合成図	111
第 58 国 本郭北側斜面南北断面合成図	67	第 121 国 2013 - 3 次 二郭閣の縦 南北断面合成図	112
第 59 国 本郭東西断面合成図	67	第 122 国 1982 年 調査区位置図	113
第 60 国 本郭北側斜面平面合成図	67	第 123 国 1982 年 調査区断面合成図	114
第 61 国 2011 - 6 次 調査区位置図	69	第 124 国 1982 年 調査 出土遺物	115
第 62 国 2011 - 6 次 調査区平面図	69	第 125 国 1982 年 調査 出土・周辺採集遺物	116
第 63 国 2011 - 6 次 第 3 調査区断面図	70	第 126 国 2012 - 3 次 調査区位置図	117
		第 127 国 2012 - 3 次 調査区剖面図	117
		第 128 国 2012 - 3 次 調査区東壁断面図	118

第129回	2012・3次	調査区南壁断面図	118	第194回	2012・4次	第1調査区出土遺物	163	
第130回	2012・3次	調査区北面・断面図	119	第195回	2012・4次	第2調査区盛土下面構出土器	164	
第131回	2012・3次	調査区遺構断面図	121	第196回	2012・4次	第2調査区土器出土器	165	
第132回	2012・3次	調査区出土遺物	122	第197回	2012・4次	第2調査区土器出土瓦	166	
第133回	2013・5次	調査地点位置図	123	第198回	2012・4次	第3調査区出土遺物	167	
第134回	2013・5次	調査区位置図	123	第199回	本丸池西の跡（土壌状遺構）平面合成図	168		
第135回	2013・5次	調査区断面図	124	第200回	1986・1次	調査地位置図	169	
第136回	2013・5次	調査区北面・断面図	125	第201回	1986・1次	A調査区南壁断面図	169	
第137回	2013・5次	調査区出土遺物	126	第202回	1986・1次	調査区平面図	170	
第138回	二軒之側斜面推定復元図		126	第203回	1986・1次	C調査区出土遺物	171	
第139回	2013・5次	調査区平面合成図	127	第204回	1986・1次	C調査区出土遺物	172	
第140回	二郭之西の郭・南北面合成図		128	第205回	2013・2次	調査区位置図	173	
第141回	二郭之北部	東西南面合成図	128	第206回	2013・2次	調査区平面・断面合成図	173	
第142回	2011・1次	調査地点位置図	129	第207回	2013・2次	調査区北壁断面図	174	
第143回	2011・1次	調査区位置図	129	第208回	鷹見町付近の郭	東西南面合成図	175	
第144回	2011・1次	調査区断面図	130	第209回	鷹見町付近の郭	平面合成図	175	
第145回	二郭西南部	南北断面図（2011・1次断面合成図）	131	第210回	1996・1次	調査地位置図	176	
第146回	2011・1次	二郭西南部	東西南面合成図	131	第211回	1996・1次	調査区平面図	176
第147回	2011・1次	調査区平面図	132	第212回	1996・1次	調査区断面図	177	
第148回	2011・1次	遺構断面図	133	第213回	1993年度	調査位置図	178	
第149回	2011・1次	調査区出土遺物	134	第214回	1993年度	調査区平面図	178	
第150回	1999・1次	調査地点位置図	135	第215回	1993年度	調査区断面図	178	
第151回	1999・1次	調査区断面図	135	第216回	2006・1次	調査地位置図	179	
第152回	1999・1次	調査区位置図	135	第217回	2006・1次	調査区断面図	179	
第153回	2011・5次	調査区位置図	136	第218回	2006・1次	調査区断面図	179	
第154回	2011・5次	調査区断面図	136	第219回	私邸城西側平面合成図	180		
第155回	2011・5次	調査区断面図	136	第220回	試掘2010・3次	調査地点位置図	181	
第156回	2005・1次	調査地点位置図	137	第221回	試掘2010・3次	調査区平面図	182	
第157回	2005・1次	調査区平面図	137	第222回	試掘2010・3次	調査区断面図	182	
第158回	2005・1次	調査区断面図	138	第223回	試削2013・1次	調査地点位置図	183	
第159回	2005・1次	第1調査区平面図	138	第224回	試掘2013・1次	調査区断面図	183	
第160回	2005・1次	溝（南側）出土遺物	139	第225回	試掘2013・1次	調査区断面図	184	
第161回	2005・1次	溝（北側）出土遺物	140	第226回	私邸城北東平面合成図	185		
第162回	2013・1次	調査地点位置図	141	第227回	1965・1969年度	調査地点位置図	187	
第163回	2013・1次	調査区断面図	141	第228回	1965・1969年度	調査区断面閉鎖図	188	
第164回	2013・1次	ボーリング柱状断面合成図	142	第229回	1965・1969年度	調査地平面図	188	
第165回	2013・1次	調査区出土遺物	142	第230回	1965・1969年度	出土遺物	189	
第166回	二郭西南部～南部	平面・断面合成図	144	第231回	2013・7次	調査地点位置図	190	
第167回	2012・4次	調査地点位置図	145	第232回	2013・7次	調査区断面図	190	
第168回	2012・4次	第4調査区・ボーリング地点平面図	145	第233回	2013・7次	調査区平面図	191	
第169回	2012・4次	第4調査区断面図	146	第234回	2013・7次	調査区出土遺物	192	
第170回	2012・4次	第4調査区・ボーリング断面合成図	147	第235回	2013・7次	調査区出土瓦	193	
第171回	2012・4次	第4調査区出土雁振り芋	148	第236回	1994・1次	調査地点位置図	194	
第172回	2013・9次	調査地点位置図	149	第237回	1994・1次	調査区平面図	194	
第173回	2013・9次	調査区平面図	149	第238回	私邸城三郭	南北断面合成図	195	
第174回	2013・9次	調査区断面図	150	第239回	私邸城三郭～四郭	東西面合成図	196	
第175回	2013・9次	第3調査区・ボーリング断面合成図	150	第240回	私邸城三郭～四郭	平窓合成図	196	
第176回	2013・9次	第3調査区湖内出土遺物	151	第241回	1997・2次	調査地点位置図	197	
第177回	二郭南の櫛根（木丸池）	調査区断面合成図	152	第242回	1997・2次	調査区断面図	197	
第178回	1990・2次	調査地位置図	153	第243回	1997・2次	調査区断面図	198	
第179回	1990・2次	調査区断面図	153	第244回	1997・2次	井戸出土・雲錦軒平瓦	199	
第180回	1990・2次	調査区断面図	153	第245回	1997・2次	井戸出土丸瓦	200	
第181回	1992年	調査地点位置図	154	第246回	1997・2次	井戸出土丸瓦	201	
第182回	1992年	調査区断面図	154	第247回	1997・2次	井戸出土丸瓦	202	
第183回	1992年	調査区断面図	155	第248回	1997・2次	井戸出土丸瓦	203	
第184回	2012・4次	調査地位置図	156	第249回	1997・2次	井戸出土丸瓦	204	
第185回	2012・4次	調査区断面図	157	第250回	1997・2次	井戸出土丸瓦	205	
第186回	2012・4次	第1調査区断面図	157	第251回	1997・2次	井戸出土丸瓦	206	
第187回	2012・4次	第2調査区断面図	158	第252回	1997・2次	井戸出土丸瓦	207	
第188回	2012・4次	第3調査区断面図	159	第253回	1997・2次	井戸出土丸瓦	208	
第189回	2012・4次	第1～3調査区断面合成図	160	第254回	1997・2次	井戸出土丸瓦	209	
第190回	2012・4次	第1調査区遺構平面図	161	第255回	1997・2次	井戸出土丸瓦	210	
第191回	2012・4次	第1調査区遺構断面・平面図	161	第256回	1997・2次	井戸出土平瓦	211	
第192回	2012・4次	第2調査区遺構平面図	162	第257回	1997・2次	井戸出土平瓦	212	
第193回	2012・4次	第3調査区遺構平面図	163	第258回	1997・2次	井戸出土平瓦	213	

## 挿図写真目次

第 259 図	1997 - 2 次	井戸出土平瓦 4	214	
第 260 図	1997 - 2 次	井戸出土丸瓦	215	
第 261 図	1997 - 2 次	井戸出土筒瓦	217	挿図写真 1 那須局付近の糸
第 262 図	1997 - 2 次	井戸出土瓶瓦	218	挿図写真 2 私部城南の開谷谷
第 263 図	1997 - 2 次	井戸出土丸瓦	219	
第 264 図	1997 - 2 次	サブトレチナ出土遺物	220	
第 265 図	1999 - 2 次	調査地点位置図	221	
第 266 図	1999 - 2 次	調査区平面図	221	
第 267 図	1999 - 2 次	調査区断面図	222	
第 268 図	1999 - 2 次	調査区出土遺物	222	
第 269 図	2008 - 1 次	調査地位置図	223	
第 270 図	2008 - 1 次	調査区断面図	223	第 1 表 私部城南石造物一覧表
第 271 図	2008 - 1 次	調査区平面図	223	第 2 表 私部城跡発見地点一覧表 1
第 272 図	2013 - 8 次	調査地位置図	224	第 3 表 私部城跡測定地点一覧表 2
第 273 図	2013 - 8 次	調査区平面図	224	第 4 表 私部城跡測定地点一覧表 3
第 274 図	2013 - 8 次	調査区断面図	225	第 5 表 私部城跡出土地点・重量一覧
第 275 図	2013 - 8 次	調査区出土遺物	226	第 6 表 遺物種類表 1
第 276 図	出羽	東西断面合成図	227	第 7 表 遺物種類表 2
第 277 図	出羽	平面合成図	228	第 8 表 遺物種類表 3
第 278 図	2012 - 2 次	調査地位置図	229	第 9 表 遺物種類表 4
第 279 図	2012 - 2 次	調査区断面図	229	第 10 表 遺物種類表 5
第 280 図	2012 - 2 次	調査区東北断面図	230	第 11 表 遺物種類表 6
第 281 図	2012 - 2 次	第 2 調査区北壁断面図	231	第 12 表 遺物種類表 7
第 282 図	2012 - 2 次	第 3 調査区北壁断面図	231	第 13 表 遺物種類表 8
第 283 図	2012 - 2 次	第 1 調査区北壁断面図	232	第 14 表 遺物種類表 9
第 284 図	2012 - 2 次	第 1 調査区南壁断面図	232	第 15 表 遺物種類表 10
第 285 図	2012 - 2 次	第 1 調査区東北壁断面図	232	第 16 表 遺物種類表 11
第 286 図	2012 - 2 次	近世以後遺構・擾乱平面図	233	第 17 表 遺物種類表 12
第 287 図	2012 - 2 次	第 1 調査区埋蔵窓 1 断面図	233	第 18 表 遺物種類表 13
第 288 図	2012 - 2 次	中世末～平成初期遺構平面図	235	第 19 表 遺物種類表 14
第 289 図	2012 - 2 次	中世末～平成初期遺構所正断面図	235	第 20 表 遺物種類表 15
第 290 図	2012 - 2 次	中世区断面・闕堤遺構平面図	236	第 21 表 遺物種類表 16
第 291 図	2012 - 2 次	第 1 調査区中世遺構（瓦面荷物）断面図	237	第 22 表 遺物種類表 17
第 292 図	2012 - 2 次	古代まで～平成前半遺構平面図	239	第 23 表 遺物種類表 18
第 293 図	2012 - 2 次	第 1 調査区古代まで～中世まで遺構断面図	239	
第 294 図	2012 - 2 次	弥生時代遺構平面図	241	
第 295 図	2012 - 2 次	第 1 調査区弥生時代遺構断面図	241	
第 296 図	2012 - 2 次	第 2 - 3 調査区弥生時代遺構断面図	241	
第 297 図	2012 - 2 次	第 1 調査区弥生時代遺構断面図	242	
第 298 図	2012 - 2 次	遺構全体図	244	
第 299 図	2012 - 2 次	擁壁部出土丸瓦 1	246	
第 300 図	2012 - 2 次	擁壁部出土丸瓦 2	247	
第 301 図	2012 - 2 次	擁壁部出土丸瓦 3	248	
第 302 図	2012 - 2 次	擁壁部出土丸瓦 4	249	
第 303 図	2012 - 2 次	擁壁部出土丸瓦 5	250	
第 304 図	2012 - 2 次	第 1 調査区出土遺物	251	
第 305 図	2012 - 2 次	第 1 調査区出土丸瓦	252	
第 306 図	2012 - 2 次	第 1 調査区出土平瓦	253	
第 307 図	2012 - 2 次	第 1 調査区遺構出土遺物	255	
第 308 図	私部城東（字市場）	平面合成図	256	
第 309 図	私部城東（字市場）	南北断面図	256	
第 310 図	2012 - 5 次	調査地点位置図	257	
第 311 図	2012 - 5 次	調査区平面図	257	
第 312 図	2012 - 5 次	調査区断面図	258	
第 313 図	2012 - 5 次	調査区出土遺物	259	
第 314 図	私部城跡南の開谷谷		260	
第 315 図	私部城東の開谷谷		261	
第 316 図	私部城下層	弥生時代遺構・遺物分布図	264	
第 317 図	私部城築城以前	遺構・遺物分布図	266	
第 318 図	私部城跡	遺構合成推定図	270	
第 1 図	近畿地方の破壊期城郭川上瓦（1）		303	
第 2 図	近畿地方の破壊期城郭川上瓦（2）		306	
第 3 図	近畿地方の破壊期城郭川上瓦（3）		308	
第 4 図	近畿地方の破壊期城郭川上瓦（4）		311	
第 5 図	近畿地方の破壊期城郭川上瓦（5）		313	

## 表目次

第 1 表	私部城南石造物一覧表	17
第 2 表	私部城跡発見地点一覧表 1	25
第 3 表	私部城跡測定地点一覧表 2	26
第 4 表	私部城跡測定地点一覧表 3	27
第 5 表	私部城跡出土地点・重量一覧	273
第 6 表	遺物種類表 1	279
第 7 表	遺物種類表 2	280
第 8 表	遺物種類表 3	281
第 9 表	遺物種類表 4	282
第 10 表	遺物種類表 5	283
第 11 表	遺物種類表 6	284
第 12 表	遺物種類表 7	285
第 13 表	遺物種類表 8	286
第 14 表	遺物種類表 9	287
第 15 表	遺物種類表 10	288
第 16 表	遺物種類表 11	289
第 17 表	遺物種類表 12	290
第 18 表	遺物種類表 13	291
第 19 表	遺物種類表 14	292
第 20 表	遺物種類表 15	293
第 21 表	遺物種類表 16	294
第 22 表	遺物種類表 17	295
第 23 表	遺物種類表 18	296

# 第1章 調査報告に至る経緯と目的

## 第1節 私部城跡の現況

### 第1項 私部城跡の概要

私部城跡は、戦国期の政治・文化の中心の一つであった河内國の北部に位置する平地城郭である。戦乱の時代から400年以上が過ぎた現在においても、交野市中心部に土の城の姿を残している。

その名称については、同時代の文献史料に「交野城」「私部城」などとして登場している。近世以後になると、地元に残る伝承にもとづき「後家が城」などの名称も用いられていた。その中で「私部城」の呼称が地元を中心として定着していった。

文献史や城郭史の研究者からは、戦国期の文献史料において多く用いられた「交野城」の名称が一般化しているものの、行政上の周知の埋蔵文化財包蔵地としては、「私部城跡」の名称で扱われる。こうした経緯を受けて本報告においては「私部城跡」の名称に統一する。

戦国期における交野は、東高野街道によって京都と河内中心部の中間地として機能していた。また、かいがけ道（傍示越道）、磐船街道といった街道によって、大和から河内への玄関口の一つとしても機能していた。こうした交通上の特性から、戦国期における河内國の要衝の一つとなる。

特に織田信長の上洛以後、熾烈を極めた戦乱の舞台ともなった。わが国の戦乱の歴史を語り継ぐために欠かせない平地城郭である。

### 第2項 私部城跡の保存状況

私部城跡が語られる際に常に強調されてきたのが、大阪府内に地上遺構を残す希少な平地城郭であるという点である。戦後の高度経済成長の波の中で、日本列島の平野部では著しい開発が進展し

てきた。近世城郭が地域のシンボルとして保存活用される一方で、戦国期に土で築かれた平地城郭の多くは失われてきた。

ここ大阪府内においても例外ではなく、地上遺構を残す戦国期の土の平城は、私部城跡と、羽曳野市所在の高屋城跡の本丸部分のみである。高屋城の本丸部分が残されているのも、宮内庁により陵墓として管理されるという特殊な理由によるものである。このため、大阪府内において、平地城郭へ立入ることができるのは、私部城跡のみとなっている。歴史学習・体験の場としても私部城跡は重要な資料である。

戦国期の平地城郭としての私部城跡の希少性は、昭和56年（1981）に刊行され、日本全国の城郭の様相が明らかにされた『日本城郭大系』第十二巻（田代・渡辺・石田編）において、早くから指摘されていた。これを受けて、北河内の郷土史家を中心にして、城跡の周知が進められた。それ以後、現在まで城郭史・文献史研究者から保存活用の必要性が叫ばれてきた。

こうした指摘に対して、交野市では、本城跡を周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱ってきた。

これにより記録保存調査を実施し、可能な限り遺構の保存につとめてきた。平成6年（1994）には保存を目的とした範囲確認調査を実施したが、本格的な保存整備にいたることはなく現在に至っている。

交野市域においては、第二京阪道路の開通後、徐々に周辺地の開発が進みつつある。こうした状況の中で、私部城跡周辺では宅地開発が増加傾向にある。地下遺構は保存されつつも、かつての城跡の景観は徐々に失われつつある。

## 第2節 調査検討委員会の設置と報告の目的

### 第1項 設置の経緯

平成23年度以後、戦国期の平城の景観を良好に残す私部城跡の本郭・二郭の周辺で開発の進展が予期されることとなった。

これに対して、文献史学、城郭研究、考古学から検討した上で、保存活用をはかることを目的として、私部城跡調査検討委員会を設置し、歴史的価値を明確にすることとなった。

### 第2項 私部城跡調査検討委員会について

委員会は、大阪府教育委員会の指導のもと、次の委員により平成24年に組織し、要綱を定めた。委員会による指導のもと、平成24年度から25年度まで私部城跡の範囲と内容を確認するための発掘調査を実施するとともに、文献・城郭史よりの調査研究を進めた。

#### ・委員長

水野正好（奈良大学名誉教授）

#### ・副委員長

蔽田貴（関西大学文学部教授）

#### ・委員

千田嘉博（奈良大学文学部教授）

中井 均（滋賀県立大学人間科学部准教授）

小谷利明（八尾市立歴史民俗資料館学芸員）

奥野和夫（交野市文化財保護委員）

### 第3項 本報告の目的

以上のような経過を経て、私部城跡について文献史、城郭史、考古学と諸専門分野から調査研究を重ねてきた。その過程で得られた成果は極めて大きい。

発掘調査の中では、地中に埋没していた堀跡などの遺構も確認された。この結果、従来の縄張り研究の成果とあわせて、城郭の形態が明らかになった。さらに、その築城年代等について、新たな情報が得られた（第3章）。

発掘調査における出土遺物の整理作業からは、特に戦国期の平地城郭としては多量の瓦を利用していたものと認められた。畿内地域の戦国期城郭における瓦の出土状況を検討する中で、私部城は畿内地域の先進性を示す城郭の一つであることが明らかにされた（第4章）。

そして、近年の河内周辺の戦国期における文献史研究は着実に進みつつある。文献史研究の蓄積をふまえた検討によって、私部城主として歴史上に登場した安見氏の動向や、私部城登場以前の中世私部の状況について多くの事実が明らかにされた（第5章）。

こうした過程で、これまで交野市が周知してきた従来の私部城跡の歴史像から変更された点が多い。本書は、その成果について、これまで実施してきた発掘調査成果を中心に報告するものである。

## 第2章 私部城跡の位置と環境

### 第1節 私部城跡の位置と地理的環境

#### 第1項 交野市の概要

私部城跡は、大阪府の東北部である北河内の一  
角を占める交野市私部に所在する。北を大阪府枚  
方市、西を大阪府寝屋川市、南を大阪府四條畷市、  
東を奈良県生駒市と接する。大阪府と奈良県境に  
位置し、京都府境にも近い。

旧国区分では、河内国の北端に位置する交野市  
の南半に相当する。歴史上重要な役割を果たし  
てきた京都・大阪・奈良の中心のいずれからも  
20kmほどの距離の中間地に位置しており、この  
三都からの影響を密接に受けながら歴史・文化を  
育んできた。

交野市域には北から郡津、倉治、神宮寺、守、

私部、森、傍示、星田、私市の地区が存在する。  
いずれも、近世頃の地域区分を踏襲したものであ  
り、この村々の統合合併を繰り返し発展を遂げた  
結果として、昭和46年（1971）に市制を施行した。  
その母体となった各地区は、現在も相互に一定の  
自律性を保っている。

JR片町線（学研都市線）と京阪本線・交野線  
により現代においても三都の中間地として機能し  
ており、交野市は人口を増やし、田園住宅地とし  
て発展をとげた。さらに、平成22年（2010）に  
第二京阪道路が開通したことによって、交通・物  
流の条件が整えられた。その影響は徐々に現れて  
おり、開発が減少・縮小傾向にある現在において  
も、市域の田園風景は次第に姿を変えつつある。



第1図 交野市と私部城跡の位置

## 第2項 交野市と私部城跡周辺の地形

## (1) 交野山地

交野市域の3分の2は、生駒山地より派生した交野山地が占める。この山地は中生代白亜紀末の花崗岩より構成される（景守ほか1986）。近世以後、資源利用のための樹木伐採により山地の風化が進んだ結果、土砂崩れも多発したことが伝えられる。（千葉1973）。

## (2) 交野台地

残り3分の1は交野台地が広がる平野部である。新生代第三紀末から第四紀にかけて堆積した砾層・砂層・粘土層から構成される。交野市の中でも居住域が広がる部分である。河川の開析作用などにより生じた谷地形が無数にめぐらされている。私部城はこうした平野部にめぐる谷地形の合間に段丘面を利用して築かれたものである。

## (3) 河川

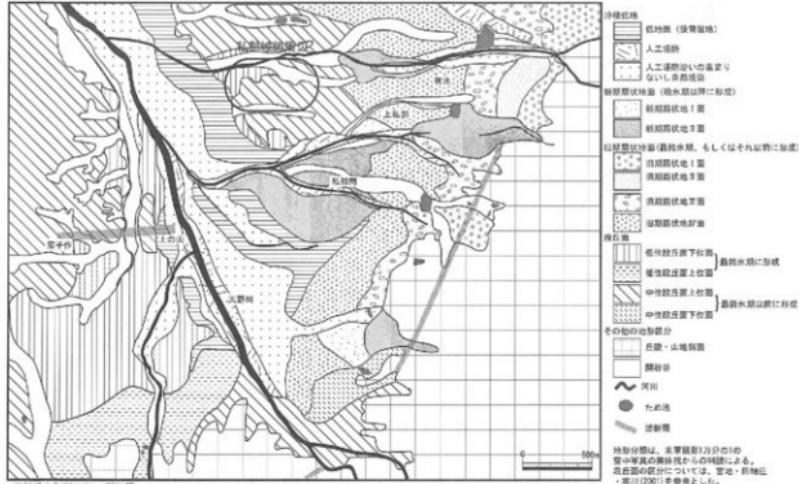
交野市域の河川は、天野川水系と寝屋川水系に分かれる。このうち、市域西部の星田地区を流れる傍示川のみが寝屋川水系に属す。そのほかの河川はすべて奈良から大阪北部の淀川へと注ぐ天野川に合流する。

こうした河川による開析・沖積作用により、現状の交野台地の景観がかたちづくられてきた。この地形を生じさせる要因となっている無数の河川は交野山地より流れ出し平野部へと注ぐ。

## (4) 私部城跡の立地と周辺の地形

私部城跡は、交野台地上の中位段丘面から低位段丘面のなかでも、枝分かれして東から西へと伸びる段丘面の北西隅に立地し、南北を開析谷によりはさまれる。段丘面上には、南北方向に5箇所ほどの城の堀跡が確認できる。私部城周辺の地形・環境を北から南へと順に見ていく。

城域の北側を見た時にまず目立つのは、東から



第2図 私部城周辺地質区分図

西へと蛇行しながら流れる免除川である。伝承では、氾濫を繰り返す自然河川であったとされ、それを現在の流路に固定する際に、河川周辺の耕作地の税を免除したことに由来して名称がつけられたともいわれる。現在の流路に固定されたのがいつごろか不確定であるが、いずれにしても、中世段階の現流路付近には、自然流路と氾濫原が広がっていたものとみられる。この免除川より北側には、郡津集落が立地した段丘面まで低湿地帯が広がっている。この河川と低湿地帯が天然の堀として機能したことは想像に難くない。

免除川の南には、面積の小さい段丘面が東西に延びる。「行殿」の字が残るこの付近の地形は、從来の縄張り図において、砦の可能性も指摘されてきた。行殿の段丘面と私部城域の間には、東西に延びる開析谷が位置し、その谷内部は低湿地帯として現在においても水田として利用される。その開析谷の南端には百々川という折れを伴う水路

が東から西へと流れる。この流路は、その不自然な形状から城の堀の痕跡の可能性も指摘される。このように私部城域の北側には河川と低湿地、そして段丘面から構成された分厚い天然の要害が認められる。

私部城域の西には、天野川の氾濫原が広がる。また、私部城の南には、私部の集落中心部を隔てる開析谷の筋が伸びる。東側には段丘面が続き、標高が緩やかに高くなっていく。天然の要害ともいえる低地が広がる北・西・南の三方に比べ、東は地形上は防御効果が弱い。これを補うために城域に南北方向の堀を多くつくったものと考えられる。

以上のように、私部城の立地は自然地形の制限を受けながらも、巧みに利用したものであることが見て取れる。それがどのような経過を経たものであるかという点については、発掘調査報告をふまえて整理したい。



第3図 昭和36年私部城跡周辺地形測量図（大阪府作成 3000分の1地形図を転載）

### 第3項 周辺の街道と城郭

#### (1) 私部城周辺の街道の概要

交野市は、東高野街道によって京都中心部と河内中心部に通じ、磐船街道とかいがけ道によって奈良にも通じていた。

また、主要街道から派生して交野郡内を網の目のようにめぐる地元の古道も存在する。こうした交野郡内の村々を結ぶ街道のうち、私部街道と山根街道は私部城に近接して通っている。

次に、各街道について述べる。

#### (2) 東高野街道

京都を起点とし、河内の中心部を通り高野山へと続く道である。私部城から西に0.7～0.8km付近に位置する。

高野山参詣の道の一つとして現在の呼称が定着するのは、中世以後のこととみられる。その起源は古代国家によるものとの指摘もある（足利1985）。南河内の柏原市域においては、飛鳥時代に同街道に近接する位置に寺院が並ぶなど計画的な配置が認められ、飛鳥時代にさかのぼる可能性も指摘される。

交野市域では、上の山遺跡にて東高野街道沿いに溝が検出され、街道の側溝である可能性が指摘されている（矢倉編2005）。周辺で検出された飛鳥時代の建物群の方位が、東高野街道と軸を揃えており、交野市域においても東高野街道の原型が古代に成立していた可能性を示す。私部と河内中心部・京都を結ぶ主要街道である。

#### (3) 磐船街道（岩舟越え）

現在の奈良から交野・枚方へと抜ける道である。私部城の西0.7km付近で東高野街道と交差する。『五畿内志』（河内志）に割石越、岩舟越と記され

る。明治時代に「岩船街道」と命名される（棚橋1989）。古代の「上つ島見路」の有力候補ともされ、水野正好氏は同道と推定し、古墳と主要集落の分布から古墳時代に原形があつたものとみる（水野2009）。

#### (4) かいがけ道（傍示越え）

交野市寺に所在する住吉神社裏手から山道に入り、傍示の里を通り、奈良へと抜ける道である（棚橋1989）。伝承では、戦国期の騎馬も通ったと伝えられる。

私部城から大和へと抜ける主要ルートの一つである。特に、第5章で登場する鷹山氏の本拠地、奈良県生駒市高山を通ることが注目される。

#### (5) 山根街道

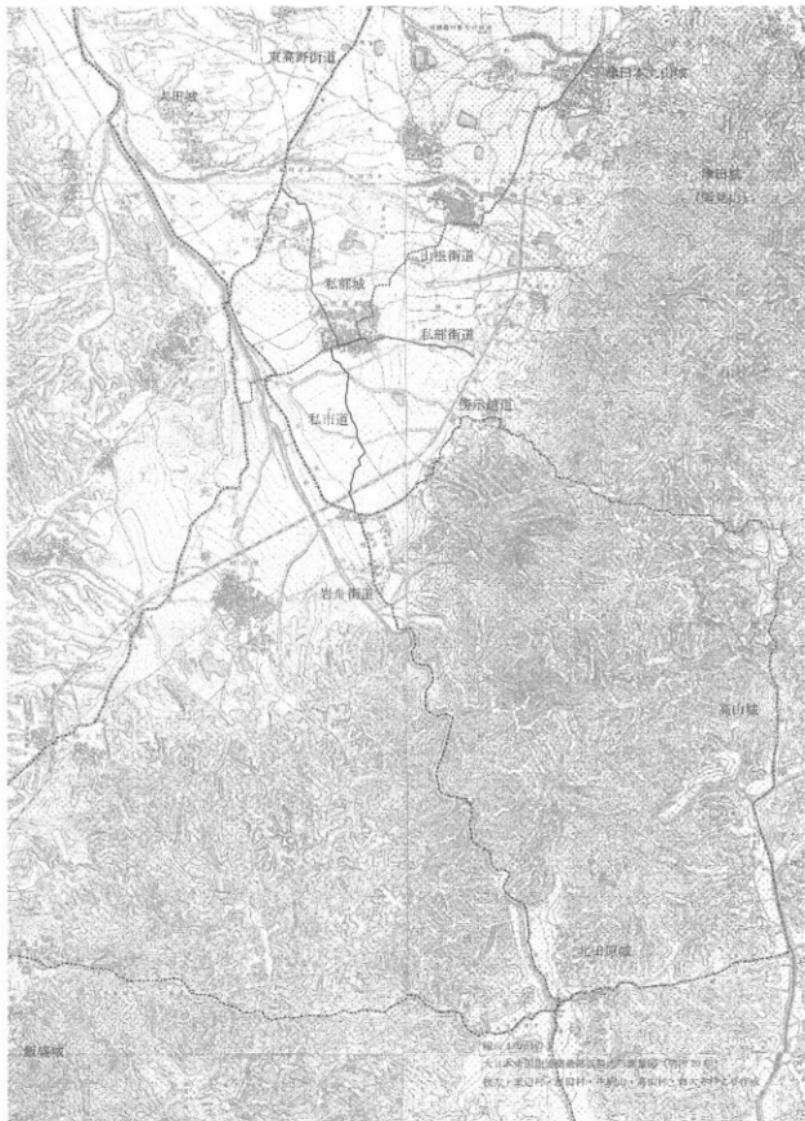
枚方の津田方面から私部を通り、南西の星田へと抜ける道であり、交野山地から平野部へ下る傾斜変換点付近を通る。この道に対して初めて「山根街道」の名称が用いられるのは、明治27年（1894）の『大阪府茨田・交野・讚良郡役所統計書』とされる（小島1998）。

道沿いに連續と遺跡が多く存在することから古来より通路が存在したみられ（石部1989）、中世頃には一定の機能を果たす道が存在したとみられる。松永久秀が私部城を攻める際の拠点とした津田城と私部を結ぶ街道として重要である。

#### (6) 私部街道・私市道

ともに私部と周辺の村落を結ぶ道である。私部街道は東の寺・神宮寺方面を経由して傍示越え道に、北の郡津を経由して東高野街道に接続する。私市道は山根街道から派生して私部の南端から南の私市へと続き、岩舟街道へ接続する。

両道とも年代の詳細は不明ながら、私市道周辺



第4図 私部城跡周辺の城と街道

の私部南遺跡の調査で側溝とみられる溝が検出され、中世にさかのぼる可能性が高まつた（交野市教委 2014）。

さらに、市道から私部への入り口付近には、後述するように、中世のしきしろ遺跡や、私部南遺跡の薬研堀遺構など軍事的機能を有する遺構があることから、中世段階からこの道を介した交通が行われていたものとみられる。

### （7）周辺の城郭

街道の周辺には、戦国期の城郭がいくつか所在する。その歴史的背景については第5章にて詳細に述べられるので、位置と概要を確認する。

私部より北西へ2kmほどの枚方市村野には、室町時代の畠山義就と畠山政長の抗争で、政長方の野尻氏が入った犬田城がある（馬部 2004b）。

私部より山根街道を通じて北東3kmほどの枚方市津田には、津田城（国見山城・本丸山城）が所在する。三好長慶死後の三好三人衆と松永久秀、三好義継による勢力争いの中で、国境の城として機能した（馬部 2004b）。松永久秀による私部城攻めに利用された「津田ノ付城」もこのいずれかを指すものとみられている。

私部より傍示越え道から大和へ入ると、高山城が所在する（村田 1980、千田 2006）。私部にも領地を有した大和の鷹山氏の本拠である。

私部城の南西約6kmに、四條畷市・大東市にまたがる広大な山城、飯盛城が立地する。木沢長政によって築かれ、後に三好長慶が拠点として畿内一円を支配した。私部城が築かれる経緯を考える際に、飯盛城の存在は欠かせない。

磐船街道を南下し、清滝街道との交差点付近の奈良県生駒市に北田原城（村田 1980、中西 2013）、さらに南の四條畷市田原に田原城が所在する（中井 1981、中西 2013）。ともに飯盛城背後の城で密接な関連が想定されている。

こうした城郭の存在から、戦国期の争乱の中で

北河内が山城・河内・大和の三国の中間の要衝として浮上してきたことがうかがえる。

### （8）小結

父野郡内において、私部は古道によって周辺主要地と結ばれる場として機能していた。その中でも東高野街道によって京都方面・河内中心部方面に通じていた。さらに、かいがけ道・磐船街道によって大和方面へ通じていたことも重要である。この立地条件により、京都方面からみれば河内中心部へ進出する際の玄関口となり、大和の勢力からすれば河内を介して京都方面へ進出する際の重要な拠点となっていた。

戦国期に河内・山城・大和の三国の諸勢力による争乱が続く中で、軍事拠点としての重要性が高まつたことが背景として考えられる。

## 第4項 私部城跡の地上遺構と縄張り研究

### （1）私部城跡の地上遺構

以上みてきたように、周囲の街道が集約される段丘上に私部城は築かれた。その遺構のいくつかは、現在も地上に残されている。私部城本郭・二郭とその間の堀跡を中心として、その周囲に本丸池などの堀跡・土星状の高まりなど、平地城郭の遺構が残存している（写真図版4）。

この地上遺構については、近世の『宝町殿日記』などに記載され、『河内名所図会』にも紹介されており、城跡として認識されていた。その遺構に関する知識は郷土史家により広く周知された。

### （2）私部城跡の縄張り研究

#### （a）中井均氏作製図

城郭研究が進む中で、私部城の縄張りが明らかにされた。私部城の最初の縄張り図は1981年の

『日本城郭大系』刊行に伴い作製され、1982年にも北河内の郷土歴史雑誌『まんだ』にて掲載されている。中井氏は、郷土史家をはじめとした地元の情報も得ながら、現地踏査により同図を作製さ

れた。同図により、本郭・二郭・三郭が連なる郭群を中心として、周囲に本丸池などの堀跡や、土壘状の高まりが配置された城の構造が初めて明らかにされた。



第5図 中井均氏作製私部城跡縄張り図 (中井 1982 に一部加筆)



第6図 中西裕樹氏作製私部城跡縄張り図 (中西 2002 より転載)

北側の百々川を堀跡である可能性を示したほか、南東の寺院群の一部が出郭として機能したものとみるなど、それまで想定されていたものより広域に城郭として機能したものとみた。地上遺構を良好に残す土の平地城郭としての全体像とその希少性が明らかにされた。

## (b) 中西裕樹氏作製図

『近畿城郭事典』に掲載された（中西 2004）。2500 分の 1 の都市計画図をベースとして現地踏査により、郭・土塁群を書き入れている。

縄張り図として中井図と大きく異なるのは、中井氏作製図における本郭を II の郭とする一方で、中井図の二郭を I の郭としている点である。中心となる郭の捉え方について差が認められる。また、III の郭の東の高まりを IV の郭として示している。

中西氏は、字市場付近の標高と本郭付近の標高が同程度であり、平地城郭としてはかなり厳しい立地条件にあることを指摘している。

特に字市場に近接して城が造営されているという点に着目する。これは畿内地域の他の平地城館との共通点が認められるものであり、集落の中心域を取り込むように築かれた城の姿を推定している。

## (c) 馬部隆弘氏作製図

馬部氏は昭和初期の航空写真の読み取りをもとに、2500 分の 1 都市計画図に書き入れを行っている。3 者の縄張り図の中では、最も古い地形状況をもとに作製されたものである。

連郭式の城郭とみる点では前者と一致するが、各郭の細部の表現が異なっている。頗著であるのは、I 郭の南東部と、IV 郭の東側に、外郭形の張り出しを記載していることである。さらに、光通寺の境内付近に認められる複雑な道の折れや、郭配置に、複雑化した城の形状が認められると指摘した。馬部氏は歴史的背景もふまえ、織豊城郭からの影響を受けた可能性を指摘している。

## (3) 小結

以上のように、城郭研究の中で私部城の縄張りが明らかにされるとともに、大阪府内および西日本における希少な平地城郭としての位置が示されてきた。共通する見解も多いが、細部の評価については意見が分かれる面もある。特に、近年指摘された織豊城郭からの影響についても評価が定かではない。こうした課題については本報告の発掘調査成果をふまえ検討することとしたい。



第7図 馬部隆弘氏作製私部城跡縄張り図(馬部 2009 より転載)

## 第2節 私部城跡の歴史的環境

### 第1項 交野の歴史概要

私部城跡が立地する交野市は、旧国区分では河内国交野郡にあたる。東高野街道をはじめとした街道により、京都・奈良・大阪の中間地として、各都市の影響を受けながら発展してきた。

私部城の由来となった地名「私部」は、『日本書紀』の敏達紀に記される部の一つで、部民制のもと后につかえる集団・土地が所在したことに由来するとされる（片山編 1970 ほか）。

なお、戦国期の同時代の史料のなかでは、「私部城」との記述もあるが、「交野城」として記されることが多い（本報告史料集）。私部は、交野の地域内交通のみならず、他地域との遠隔交通の上でも重要な結節点にあった。

### 第2項 中世以前の埋蔵文化財と歴史

#### （1）旧石器時代から縄文時代の埋蔵文化財

##### （a）旧石器時代

現在の交野市域における最古の遺跡・遺物は旧石器時代後期のものである。

この頃の遺跡として、ナイフ形石器とともに剥片が検出され製作遺跡であることが明らかになった布懸遺跡がある（水野 1992、佐藤・絹川 2010）。また、遺構内容は不明であるが、石核やナイフ形石器が採集された神宮寺遺跡は交野山の裾野に位置し、現在の山麓を中心に旧石器時代の遺跡・遺物が確認されている。

平野部に位置する私部城跡では旧石器は未確認であるが、私部南遺跡でサヌカイト製細石刃核などの後期旧石器が検出された（三好ほか 2011）。後世に、山麓から平野部へ二次移動したものである可能性が高いが、今後関連遺構が発見される可能性もある。

##### （b）縄文時代

旧石器も採集されている山麓の神宮寺遺跡では、縄文時代草創期のものとみられる有茎尖頭器が採集される。さらに、縄文時代早期の押型文土器が発掘調査で検出されている。畿内地域でも早い段階での検出例であったこともあり、現在においても近畿地方の縄文時代早期の標識遺跡の一つとなっている。

縄文時代前期頃の遺構・遺物は不明であり、中期以後に現在の平野部においても上の山遺跡などで土坑などの遺構とともに遺物が確認されるようになる。

私部城域では縄文時代遺物は未確認であるが、私部南遺跡で縄文時代中期から後期の土坑などが検出されている（船瀬ほか 2011）。

#### （2）弥生時代の埋蔵文化財

交野市域における弥生文化は、弥生時代前期後半から中期初頭に始まる。私部南遺跡において、低地部で、松菊里式の堅穴建物跡が検出された。同建物内では、サヌカイト剥片が多量に出土しており、石器製作工房であった可能性も指摘されている（後川編 2007）。

また私部城跡が位置する高台上では、古くから石廈丁や弥生土器が検出されてきたほか、包含層の堆積が確認されており、環濠の可能性も指摘されている（水野 1992）。こうした遺物は、弥生時代中期中頃のものである。弥生時代中頃においては、北河内地域では低地部から一部段丘上への移動が行われていた（濱田 2001）。交野台地周辺では環濠集落は確認されていない。その背景には、段丘とそこにもぐる自然の谷筋が環濠の機能を果たしたものと推定されている（西田・荒木 2000）。第3章で確認する私部城下層の集落域についても同様のものであろう。この地形を利用し

て後の私部城の郭群が窺かれている。

一方で、低地部では弥生時代後期には、しがらみを伴う水路や水田が確認されている（三好ほか2011）。

北河内地域には古墳時代前期から連続と古墳が築造されるが、弥生時代後半の集落展開がそれを準備したと考えられる。

### （3）古墳時代の埋蔵文化財

#### （a）古墳時代前期

古墳時代前期に山地部に造営された森古墳群は、前方後円墳から構成される畿内地域でも有数の古墳群である。また、その麓に広がる沖積平野に時期を同じくして営まれた森遺跡は、古墳群の造営主体の集落として注目を集めている。

古墳時代の前期頃には、私部周辺で集落域は確認されていない。私部南遺跡で庄内式期から古墳時代前期頃の水田が検出されており、低地部を耕作地として利用していた（後川編2007）。それは森古墳群の造営主体を支えた生産基盤として評価されている（交野市文化財事業団2010）。

#### （b）古墳時代中期～後期

古墳時代中期になると、私部南遺跡では堅穴住居群が検出される（三好2011）。私部の東方に位置する上私部遺跡においても堅穴住居からなる集落域が形成される（若林・黒須2009）。この私部南遺跡と上私部遺跡で古墳時代中期から形成され始めた集落域は、古墳時代後期に最盛期を迎えている。

特に上私部遺跡では、南北を指向する区画溝がめぐり、掘立柱建物群からなる集落域が形成される。この内容については、豪族居宅としてみる見解、地域の開発拠点的集落としてみる見解などが提案されている（若林2010）。また、新羅系の陶質土器が出土したことから、この集落形成に渡来系集団が関与したこととも指摘されている（網

2006）。

決着していないものの、いずれにしても北河内地域でも有数の規模の集落として機能していたことがわかる。

### （4）古代

#### （a）飛鳥・奈良時代

古墳時代集落であった上私部遺跡（若林・黒須2009）や森遺跡（真鍋1997b）は、7世紀前葉頃に廃絶している。

この中でも、私部南遺跡では古墳時代の集落域と異なる地点で7世紀後半ごろから大型掘立柱建物群とともに、銅製幣金具や硯、わずかながら墨書き器が検出されており、同地周辺に地域の有力者層の居住地または、官衙的機能を有する施設がおかれたものとみられている（船橋ほか2011）。

また、私部南遺跡では、重弧文軒平瓦など古代の瓦も出土していることも注目される。私部城域出土瓦の中にも古代の平瓦が混入している（第3章第2節ほか）。

交野市域においては、白鳳期から奈良時代前期頃までの瓦が出土した郡津の長宝寺跡（奥野・鶴飼1976・1977、水野1992）、奈良時代の瓦が出土した森の須弥寺跡（真鍋編2004）が存在するが、私部周辺にも古代寺院が存在した可能性を示唆するものである。

#### （b）平安時代

平安時代頃になると現在の交野市域の大半は、石清水八幡宮領として寄進されており、私部についてもこの時に石清水八幡宮の管理下に入ったものとみられる。森遺跡などにその管理を担う集落が存在したと目されている（奥野・真鍋編2001）。

私部南遺跡の掘立柱建物群は平安時代頃まで存続する。ただし、奈良時代頃までの官衙的な様相は弱まっている。



第8図 交野市内遺跡分布図

### 第3項 中世の歴史と文化財

#### (1) 交野市域の中世の様相

私部城と周辺の歴史については、第5章において最新の成果にもとづいて報告される。ここでは遺跡の状況を中心に中世の状況を整理したい。

平安時代末に交野郡域に多くの領地を有した石清水八幡宮は鎌倉時代以後の中世においても交野郡域で多大な勢力を誇っていた。また、市域にはほかにもいくつかの莊園が設置された。

中世の集落遺跡では、石清水八幡宮領に関わる集落とみられる森遺跡のほか（奥野・真鍋編 2001）、有池遺跡の屋敷地跡などが検出されてきた（若林編 2007）。平地部に居館の原型となるような集落遺跡が出現し、各遺跡で耕作地の拡大が進んだ状況が認められている。

寺社関連遺跡として、星田の新宮山遺跡（真鍋編 1993）や小松寺跡（交野市文化財事業団 2012）、神宮寺の岩倉開元寺跡（交野考古学研究会 1955・交野考古学会 1956）などが調査さ

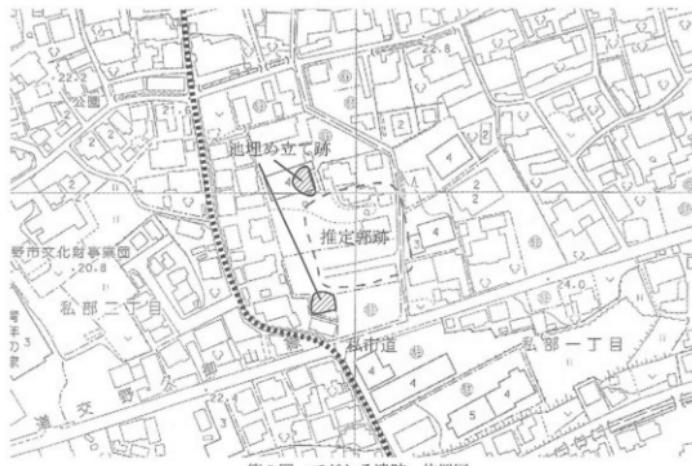
れてきた。また、市指定文化財の梵光明經瓦質土器が検出された獅子窟寺も中世頃から続く寺院である。交野市域は中世の山岳寺院などの社寺遺跡が多く分布する。

寺社や集落が濃密に分布する一方で、南河内地域などに比べると、山城などの軍事関連遺構は極めて少ない。以下では私部城の近隣の中世遺跡の様相を整理しておきたい。

#### (2) でがしろ遺跡

私部南部に位置する。明治地形図においては同遺跡付近は耕作地として描かれており、旧集落の南端に接する。『私部村絵図』においては、集落域の南に接して「畑入交」と記される地点がある。これは、同絵図において、私部城の中心域にも認められる記述であり、本郭や二郭と同様の高まりが同地周辺にあったことが推測される。ここに小高い堤状の地形が残されていたと記録される（片山 1970）。この堤付近を迂回するように私市道がクランクする点も注目される。

この堤状の地形について、私部村庄屋であった



第9図 でがしろ遺跡 位置図

原田家所蔵の『私部名寄帳』『私部検地帳』には延宝年間（1673～1681）に土居が城と記されている。これが証り、「でがしろ」と呼ばれるようになったといわれる。

原田英二氏によれば、モーターピール設営時に須恵器・土師器の破片と多量の焼け瓦が出土したと伝えられる（交野市教委 1991）。また、市で所管している遺物中に、瓦質土器、鍋などの土器類が含まれている。その年代は室町時代頃とみられている。

出土瓦の一部は、『交野市の瓦』にて報告した。現時点で確認できるものでは、糸切り痕跡のある雁振り瓦がある（交野市文化財事業団 2012）。また、このほかに平瓦数点が保管されている。

その他に、市で所管している遺物としては、中世以後のものとみられる陶器壺の体部片がある。また、でがしろ遺跡の南端にあたる「蜻蛉」と呼ばれる土地で、平安時代頃のものとみられる須恵器壺片、古墳時代のものとみられる壺類の体部片、古墳時代の蓋杯片が出土している。

従来、南北朝期のものと伝えられてきたが、現状の出土瓦から年代を限定することは難しく、瓦も含む遺物の出土状況からは、私部城築城以前における私部の集落域の中心の一つがでがしろ遺跡付近にあった可能性が高い。

### （3）私部南遺跡

#### （a）府センター調査による耕作地の確認

第2京阪道路建設に先立ち調査された。江戸期の私部村の南部を東西に横断するように大規模な調査が実施された（三好ほか 2011）。

室町時代から安土桃山時代に、ほぼ全城が耕地化される。鎌倉時代までの耕地の段差が平準化されるなど、大きな開拓がなされている。

#### （b）府センター 07-1 調査区の薬研堀

07-1 調査区で特に注目されるのが、矩形の大

規模な溝である。薬研堀で、開削後に時間を感じて埋め戻されているとの所見が与えられている。郭を周囲する堀であったと考えられる。埋土中からは、瓦器挽片および16世紀末～17世紀初頭の陶磁器片が検出された。調査報告の所見もふまえて、出土遺物から年代を推測すると、戰国期末に利用されたものとみられ、私部城と併存した可能性が極めて高い。

同地点は、私部集落の立地する段丘面南に広がる低湿地帯と前川という天井川を隔てた箇所に立地し、私部集落の外縁にあたる。

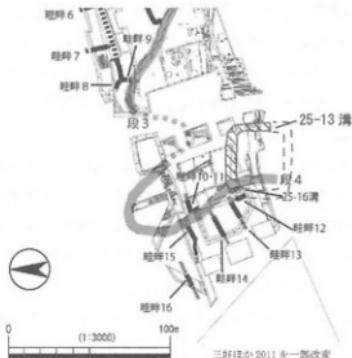
この調査地点のすぐ西には「大門」という地名ともに、合戦場となったとの伝承が残る。

また、松永久秀が私部城を攻めた時に、津田と私部に付城を築いたことがわかっている（馬部 2009、本報告第5章）。

私部集落の南側の周縁に築かれている点や、16世紀末前後のごく短期間に機能したという点をふまえると、本報告第4章で述べられるように、同遺構は松永久秀による私部城攻めに伴い築かれた付城の痕跡である可能性が高い。

#### （c）府センター 06-1・06-2 調査区の陶磁器類

06-2 調査区では明確な遺構に伴うものではなく



第10図 私部南遺跡 薬研堀位置図

いが青磁香炉が出土している。また、その蓋とみられる透かし孔のある製品も確認されている。06-1 調査区では青磁天目台などの陶磁器が出土する。こうした出土陶磁器からは、唐物文物を賞讃し、喫茶をたしなむ武士階級が近隣に居住したと推定されている（三好はか 2011）。この点は、私部城域中心部の堀跡などで土器・陶磁器類の出土量が少ないと対照的である。

#### (d) 市 2013・1・2 次調査の私市道側溝

貯水池設置に伴い、小規模の調査を行っている（交野市教委 2014）。ここでは、現在の私市道と方向をおおむね揃える溝が検出されており、道路側溝とみられる。同溝からは、15世紀前後のものとみられる瓦質土器羽釜の破片などが出土している。中世段階には現在の私市道へと引き継がれるような道が機能していたことがうかがえる。

#### (4) 小結 - 遺跡からみた私部城周辺の中世 -

以上のように、これまでの私部城跡の周辺の発掘調査では、私部南遺跡や、でがしろ遺跡といった私部集落の南半の遺跡で主に中世遺構や遺物が多く検出してきた。

後述するように、私部城域の縁辺部では、14世紀前葉の瓦器椀片が一定量出土するものの、私部城中心域の本郭・二郭などでは、当該時期の頗著な遺構・遺物は出土せず、わずかな遺構・遺物が出土するのみである。

私部城中心域よりもむしろその周辺で中世の遺構・遺物が多く認められる点からは、中世集落域の中心は、私部城中心域というよりはその縁辺部から、私部南遺跡の立地する私部の南半付近にあった可能性が高いといえるだろう。その評価については、第3章の発掘調査報告と第5章の文献史学による考察をふまえて行いたい。

## 第4項 私部周辺の寺院と石造物

### (1) 私部の寺院・神社と石造物（第1表）

現在、交野私部城跡の南東に光通寺・無量光寺・想善寺という3つの寺院が存在する。また、私部地区の南東部には、私部住吉神社が所在する。これらの寺社の存在は、私部城が築城された背景を考える時に重要になる。

特に、光通寺・無量光寺には私部城とその城主である安見氏との対立関係が伝えられており、私部という地域において私部城とその築城主体が異質な存在であったことがうかがえる。3つの寺院はそれぞれどのような経過を経て現在の位置に建てられたのか確認しておきたい。

現在、寺院などに集積されている石造物は、南北朝期に遡るもののが数点のみながら光通寺・想善寺・住吉神社に分布する（内田編 2005・2006）。これらの中には、不時に発見され、各寺社などに預けられたものもある可能性があるが、ある程度は本来の分布状況を反映したものとみておきたい。これが本格的に増加するのは、室町時代中期以後のことである。これは第5章で述べられるように、光通寺とその背景に存在した私部の諸勢力の活動が活発化する時期とおおむね合致する。

### (2) 光通寺

私部の字「札の辻」に所在する。長寿山と号する。隆済宗の寺院で、京都東福寺の塔頭である莊嚴院末寺である。

『東福寺誌』によれば嘉慶年中（1387～1389）に建立されたと伝えられる。光通寺に残る縁起によれば、南北朝時代に赤松円心により開かれたと伝えられる。室町時代に私部に多く所領を有していたとみられ、石清水八幡宮と争いを起こすほど勢力となる。また、朝廷に茶を納めていたことが知られている。

第1表 私部周辺石造物一覧表

	私部三丁目	私部五丁目	光通寺	想善寺	住吉神社	交野小学校横
南北朝期			五輪塔基礎（～室町前）	十一重層塔	空海數 層塔屋面 部	
室町前期				地藏菩薩立像	空海數 地藏菩薩立像	
室町中期	阿弥陀如來坐像石仏 如意三体石仏		阿彌陀如來立像 阿彌陀如來坐像	阿彌陀如來坐像	空海數 地藏菩薩立像	
室町後期		板碑形阿彌陀如來坐像（向山地藏）	阿彌陀如來坐像 阿彌陀如來坐像 阿彌陀如來坐像	石龕仏二尊仏 阿彌陀如來坐像 阿彌陀如來坐像 阿彌陀如來坐像 阿彌陀如來坐像		阿彌陀如來坐像（字び地藏）
桃山時代		般音菩薩立像（またべ地藏）	石龕仏阿彌陀如來立像 地藏菩薩立像	阿彌陀如來坐像 文祿三年六字名号碑		

『私心記』の永禄4年3月21日条では、著者である実従が私の獅子窟寺からの帰りに光通寺を見物したことが記される（馬部2009）。

また、その四方は堀で囲まれていたと伝えられる（上田編1995）。室町時代頃の中心は、現在の寺域より東に位置し、集慶殿と呼ばれていたという。

私部城が永禄年間から元亀年間に築かれ、安見右近が城主となった後に、光通寺域が破壊されたことが寛文4年（1664）の光通寺棟札に記されている（上田編1995）。

『御湯殿上日記』によると、天正3年（1575）6月5日条に光通寺から朝廷にお茶の葉30袋が献上されており、安見右近による破却後も、寺が存続していたことがうかがえる。

江戸時代に入ると、現在の地点に再建され現在まで続いている。なお、現在の光通寺は私部城域の南西部に張り出した出郭と目されている。同地點の一部では発掘調査が実施されており、その成果については第3章15節において後述する。

### （3）無量光寺

真宗の西本願寺派に属する。平安時代の阿彌陀仏を本尊とする。現在、私部で多くの檀家を抱える寺である。

これまで、『交野町史』では同寺の歴史について

て、『無量光寺450年史』という文献に依拠して記されてきた（片山編1970）。これは、交野市森の向井馬太郎氏により、古文書を年順順に集録されたものである。それによれば、本来は天台宗の尼寺であり、室町時代初期に、私部住吉神社の西100mの「馬場浦」付近に草庵を開いたのが始まりとされる。嘉吉元年（1441）の赤松の乱により、足利軍に焼き払われた。明応3年（1494）に足利將軍家に仕えた星野親忠により、再興される。その一族の能末は了道と称し、中興した無量光寺の第一世となり、浄土真宗へと転宗した。第3世の覺心は、織田軍と本願寺との戦いにおいて大坂方にいて戦ったために、私部城主の安見氏に追われ、摂津などを転々とした。そして江戸時代になって私部に帰還し、現在の無量光寺を建てたと寺に伝えられる（上田編2010）。

しかしながら、『無量光寺450年史』による記述の中には、誤りも認められる。例えば、星野親忠は、天文年間頃にその生涯を北部九州で終える人物であり、明らかに齟齬がある。

ただし、近年の北河内の戦国期研究の中でも無量光寺の活動を裏付けるものが認められる。枚方寺内においても活動した浄土真宗の僧、実従による『私心記』は同時代史料として貴重なものである。この永禄4年2月28日条から無量光寺に覚道という僧がいたことがわかる（馬部2009、本報告第5章）。

また、永禄4年8月10日条、永禄4年12月13日条では、『私心記』の著者実従が私部出身の彦四郎を使として京都に送っている。これらの記録から、私部に本願寺との関わりがあったことは確認できる。

#### (4) 想善寺

山号は修元山、浄土宗来迎寺末寺にあたる。浄土宗西山派。天正年中に懇善が堂を建てたのが始まりと伝えられる（上田編2003）。この由来を裏付ける資料は少ないが、現在の境内には南北朝期以後、室町時代を中心とした石造物が多く残されている。

#### (5) 私部住吉神社

私部集落の南東に位置する。底筒男命、中筒男命、表筒男命、息長姫命を祀る。宮座構えの位置を定めた根石が広場土中に埋没しており、天正（1573～1592）が記されていると伝承されている（片山編1970）。しかしながら、その他には江戸時代以前の歴史上に記されることもなく、由緒も残されていない。

ただ、宮守であった鹿現光寺の境内跡である空禅藪に、南北朝期から室町時代の石造物もいくつか残されている。

また、交野市収蔵資料中に住吉神社採集瓦がある。これは初期内叩きが施されるもので、私部城中心部で出土するものと同時期でおおむね室町時代後期から戦国期のものとみられる。こうした資料からは、私部城段階もしくはそれ以前に原形となる寺社が存在した可能性が高い。

#### (6) 小結

以上のように、中世の私部においては、光通寺・無量光寺といった寺院勢力が有力であった。その

背景については第5章で詳しく述べられる。

このうち、特に有力であった光通寺と無量光寺に私部城主の安見右近との対立関係についての伝承が残されていることが注目され、新勢力として安見氏が入ってきたという点では両者の見解は一致している。

なお、私部城の築城背景を考える時に、光通寺・無量光寺ともに、もともとは私部の中でも南部または東部に立地していたとされることにも注目しておきたい。もう一つの想善寺に関しても、私部城築城後に現地点に堂を立てたものである。また、中世に遡る可能性のある私部住吉神社は私部の東に位置していた。こうした寺社の立地からは、江戸期以前においては、寺社の多くが私部の南部から東部に集中していたことがわかる。この点は、私部集落でも南端にあたる私部南遺跡の調査において、茶器として利用される高級陶磁器類が一定数出土していることとあわせて、私部城築城以前の私部の私部集落の中心が、私部城域以外に存在したことを見かがわせる。

### 第5項 近世以後の私部と城跡

#### (1) 『宝町殿日記』に記される交野私部城

私部城が破城され、交野における安見氏の活動は認めなくなつた桃山時代には、私部は天領としておさめられる（馬部2009ほか）。そして近隣の星田には、天正12年「石清水八幡宮寄進状」の記述から、この段階で既に市橋家が領地を有していたことが知られる（振角2006）。郡津には片桐貞隆が領地を有していた（大阪城天守閣編1997）。豊臣家の家臣によって、私部周辺が抑えられることとなっていた。

この近世に入って間もない頃の私部城の状況を記録している可能性がある史料として、『宝町殿日記』がある。安土桃山時代末から江戸時代前期の17世紀頃に成立した軍記である（佐竹1980）。

「後家が城」として私部に所在した城の記述がある。また、この名称は、江戸時代後期の枚方市文書にも登場しており、交野郡域で江戸期に定着していた呼称のひとつであったとみられる。(馬部 2009)。

戰国期当時の状況をどこまで反映したものかは不明ながら、江戸時代前期においては私部城の存在が戦乱の時代を語る時に北河内で重要であったことを物語るとともに、その城郭が良好に遺存していたこともうかがえる。

## (2) 江戸時代の私部

江戸時代の私部は、大久保藩領と天領として治められた。当時の私部城の様子は古文書・絵図とわずかながら埋蔵文化財の状況から知られる。

「私部城」の呼称が定着したのは、江戸時代以後のことであり『河内名所図会』などでこの呼称で紹介されている。

この頃の私部城周辺の様相は私部村に残された絵図などから確認できる。江戸時代後期の絵図では、私部城域は必ずしも明確に描かれていない(写真図版5)。L字に大きく描かれる本丸池の存在は明らかである一方で、私部城の輪郭は、畠地としておぼろげに確認できるものの、実際の面積に比べて小さく描かれている。江戸期においては、私部城域は耕作地として利用されるものであり、村の状況を描写するときには必ずしも重要ではなかったことがうかがえる。

明治時代初めの地籍図をみると、私部城域のうち郭や土塁の大半は畠として、堀部の大半は池、水路、水田として利用されていることがわかる。

私部の庄屋・代官屋敷である北田家住宅は、村内でもいち早く瓦屋根を本格的に取り入れたとみられる。北田家に残る古文書には私部の瓦屋の見積書も残される(文化財建造物保存技術協会編 1988)

## (3) 明治初期の地籍図と関連地名

現在、交野市教育委員会で所管している地籍図で最古のものは明治初期のものである(第11図)。

ここでは城、行殿・市・出・札の辻という字により区分されている。その小字の由来とともに地籍図から読み取れる情報を整理する。

### (a) 城周辺の小字の由来

城 繩張り研究により明らかにされてきた私部城域の中心部にある。城ノ一はその北半、城ノ二が南半にあたる。なお、このうち、二郭付近には、天守(テンシ、テンシュ)の地名が伝承される。また二郭南付近に位置するL字形状の池は「本丸池」と呼ばれ、地元の住民の間ではこの二郭が城の中心部として考えられていたことがうかがえる。小字城の大半は明治初期の段階で水田もしくは畠として利用されており、宅地は所在していないかった。この状況は、昭和50年頃まで続いた。このうち、水田として利用されている部分が堀などの低地部にあたるのに対して、郭、土塁などの高まりの部分は畠として利用されている状況が確認できる。

出(出屋敷) 小字城の南に接し、私部城の立地する中位段丘面の南西部にあたる。L字形状の本丸池とその付近に農地が多く残るが、南西部の五角形の区画付近などには、屋敷地も構えられている。「出屋敷」とも伝えられる。光通寺付近から西へのびる道沿いに家が並ぶ路村形態をとる箇所があり、江戸時代の新田開発にともない、郡津へ通じる道沿いに集落形成されたと推測される(中 1981)。「出」が城に対してつけられたものかは不明である。

市(市場) 一般的に、城館と関連をもつこともあると指摘される地名である(小島 1993)。私部城の城下として、または無量光寺の門前町として栄えたことに由来すると地元では伝承される(中 1981)。また、T字形状や遠見遮断などの防御的

な道も残る。

私部城の周辺の事例では、奈良県郡山市の筒井城でも城下に市場の地名がある。中西裕樹氏は、私部城の築城がこの先行した市場に伴うものであった可能性を指摘している（中西 2004）。

**札** 北田家が私部の代官・庄屋として置かれた後、この無量光寺門前から北田家住宅付近が私部村の中心となつた。ここが高札を立てられるようになつたことに由来する（中 1981）。

**行殿** 「ギヨドノ」と読み、交野市史ではその由来として、2つの伝承を記載している。一つは本来「経田」を示したとするもので、読経料として光通寺へ寄進された莊園があつたことに由来するとする。

もう一つは、免除川沿いに行者が修行する池と、修行のための堂があつたことに由来するというものである。ここからこの池が「行當の池」と呼ばれるようになり、行殿と呼ばれるようになったとする。

また、転化したものである可能性があるにしても、「殿」地名は城館に関連する場合もあり、注

目される（小島 1993）。

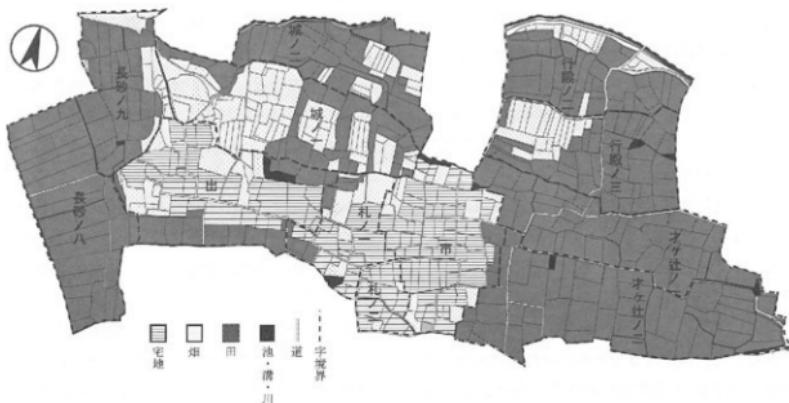
**長砂** 長砂は出と城より西に広がる低地部にある。天の川の氾濫原から後背湿地にあたる。周辺の雨水が流れ込むため、周辺が泥海と化すこともあった。こうした状況から泥田として配水・灌漑のむずかしさもあったが水田地帯として利用されてきた（中 1981）。私部城の機能した中世段階では、まさに泥田状の地形が広がる地点であり、私部城の西側を守る天然の堀であったといえる。

#### (b) 周辺の関連地名

今回とりあげた地籍図の範囲外であるが、私部城に関連する可能性のある地名をあげておく。

**馬場浦** 現在の住吉神社周辺である。字札と字市の南側に接する。安見氏が城を構えた時代に軍事訓練場、厩舎などが置かれたことに由来すると伝えられる（中 1981）。

**大門** 落合橋から南へ少し進んだ所にある田地である。ここは、江戸時代私部の代官・庄屋をつとめた北田家の先祖である北田久左衛門尉好忠と筒井順慶が争つた場として地元に伝承されてい



第11図 地籍図合成図

る。この伝承は椿井文書に由来するものであり、馬部隆弘氏の偽文書研究によって、その内容を再検証すべきものである（馬部 2004）。しかしながら、ここが私部村の南側の玄関口にあたることは事実である。そこにこうした防衛拠点の存在をうかがわせる地名が残ることは注目すべきである。

タテ 現在の私部落合橋から、私市へと私市道がのびる付近をさし「大門」のやや北にあたる。どのような漢字をあてるかは不明であるが、「橋」「館」をあてる可能性が高いとされる。天井川である南川の堤が防御的機能を備えたものと推測し、その南側に出城的な館があったことによれば、この地名がつけられた可能性を推定している（中 1981）。

出が城 落合橋より私市道を北へのぼったところにある屈曲部の東一帯に残る地名である。前述したように、ここで中世遺物が出土していることから、周知の埋蔵文化財包蔵地「でがしろ遺跡」として扱われている。文政 12 年（1829）に「でがしろ」と記されているが、延宝年間（1673～1681）の検地帳で「どいがしろ」とあり、本来の呼び方が変化したものとみられている（中 1981）。

安平池 現いきいきランドのサッカーグラウンド付近に所在した。名称は「安井右近丞」の墓地があったことに由来すると伝えられている（片山編 1970）。また、出が城に住んだ武士が矢を放ち、墓地を選定したのが同地とも伝えられる（奥野 1981）。その名が一字違いであることから、安見右近に関する伝承である可能性がある。

#### (c) 字城とそれ以外の字の地割軸の差

地籍図や現況の測量図および航空写真的観察からは、字城に認められる地割の軸は私部集落の中で特異なものであることがわかる。

地籍図に描かれた字城の地割は、私部城の堀・郭に方向がそろい、郭の形態の影響下で設定されたものとわかる。この字城付近の地割軸は、地籍

図上では、正方位に対してやや東側に傾いて描かれる（第 11 図）。現在の測量図でみるとおおむね南北の軸に沿ったものである（写真 1 ほか）。

これに対して、私部村地籍図の南北軸は、字市や字出付近の地割をもとに設定されている。この軸は、私部集落の大部分で認められるものである（写真図版 5）。この字市の軸は現在の測量図でみると、北から西に 10 度ほど傾き、北北西から南南東を通るものであり、字城付近の軸とずれる。この軸は、後述の 2012～2 次調査成果で得られた堀の方針と一致することから（第 3 章 16 節第 1 項）、中世段階に遡る可能性がある地割である。

これに対して、字城付近の地割の軸はやや東方向にずれて設定されている。この差は、字城付近における築城の背景を考える際に重要になる。この点については、発掘調査成果をふまえた上で後述する。

## 第 6 項 まとめ

私部城周辺の利用状況の変遷を整理してまとめとしたい。

私部城周辺においては、低地部にあたる私部南遺跡でいちはやく縄文時代中期末頃から遺跡形成が認められる。弥生時代に入って、前期末頃には集落城も形成されるようになる。

交野私部城の所在する中位・低位段丘面における確実な土地利用は、弥生時代中期の中頃からである。後に城としても利用されることとなる高台が集落城として利用されるようになった。環濠が所在した可能性も指摘された（水野 1992）。弥生時代中ごろに台地上を利用した集落は、枚方・交野の台地でほかにも認められ、自然地形を環濠の代替として利用していた可能性が指摘されている。私部城下層の集落も同様に防御性を重視した集落であったと考えられる。発掘調査成果の中で述べるように、その後、私部城本郭などの中心部の本格的な利用は私部城としての軍事利用が開始され

るまで認められない。

古墳時代前期頃の私部周辺の集落遺跡の様相は不明である。古墳時代中期になると上私部遺跡、私部南遺跡で集落形成が始まり、古墳時代後期には上私部遺跡に北河内地域で類例のない規模の計画的な集落が営まれた。

飛鳥時代以後の古代においては、私部南遺跡を中心として建物群が連続と続いた。

中世になると、私部南遺跡は主に耕作地と化すが、建物跡がいくつか検出されるほか、谷部に陶磁器などの中世遺物が認められるようになる。年代は不詳ながら、でがしろ遺跡は中世後半には利用されていた可能性が高いものである。

また、中世における私部の社寺の大半は、私部の南部または東に所在したと考えられた。

こうした状況をみると、私部城築城以前の中世私部集落の中心は、現集落の南側の台地上から、現在の字市付近の山根街道沿いにあったものと考えられる。

これらの私部集落の大半で、西に 10 度振る町割りの軸が認められる。これに対して、字城の地名が残る私部城中心域では、南北の正方位軸の遺構痕跡が多く認められることも注目される。この 2 種の地割の関係については、第 3 章の私部城域の発掘調査成果をふまえて評価することとしたい。

## 第3章 私部城跡の発掘調査

### 第1節 発掘調査の経過と報告の目的

#### 第1項 郷土史家による探集と発掘

私部城域においては、これまで40年近くにわたりて断続的に発掘調査が行われてきた。その一覧を第12図と第2表～4表で示した。その経緯をみておきたい。

私部城に関する歴史については、郷土史家である平尾兵吾氏や片山長三氏、奥野平次氏により周知され、本郭や二郭などの認識は定着していた(平尾 1972)。

私部城における最初の発掘は、奥野平次氏の指導する交野古文化同好会による。これは1969年の市道敷設にともない掘削された三郭付近で、断面図を作成し、その記録を残したものである(交野町教委 1970)。その内容は、市域で初めてとなる弥生時代の遺構・遺物が確認されたことに主眼が置かれる一方で、三郭付近の地形について断面図などの記録が残され、貴重な報告となっている。

その後、『日本城郭大系』で城の縄張り図が作製され、大阪府内における希少な平地城郭であることが明らかにされた。この成果は城郭史研究者のみならず、郷土史家を通じて歴史を愛好する市民にも周知されることになった。その後に、私部城域における瓦などの遺物採集がなされることとなった。

#### 第2項 開発に伴う発掘調査

宅地開発の増加に伴い、1990年代以後に私部城域において小規模な試掘調査が多数実施された。幸いなことに多くの宅地開発は、盛土により旧地表面を保護する状態で実施されるものが多く、遺構・遺物の破壊を伴うものは少なかったようである。

これら的小規模かつ短期で実施された試掘確認調査において、私部城に関連する可能性のある中世の遺構・遺物が確認されることは稀であった。しかしながら、過去の堆積状況についての記録からは、おおむね地盤層であるのか、堀などに堆積する泥田状の堆積であるのか、または、郭などに置かれた盛土であるのかといったことは確認できる。このため、私部城築城以前の旧地形の復元と、私部城の形態を考証するために重要な成果も得られている。

#### 第3項 範囲確認調査

私部城の実態を明らかにし、保存を目指した調査を1994年度に交野市教育委員会にて実施した(小川 1995)。これにより、本郭上面の遺構状況および周辺の調査を行っていたが、その後私部城の実態を調査する機会はなくなっていた。私部城周辺における開発の進展状況を鑑みて、平成23年(2011)、私部城跡の調査検討委員会が置かれ、その指導の下、城跡の調査を行うこととなつた。

平成24年度第1回調査検討委員会では、本郭・二郭の中心部よりも、周辺の調査を進めよう指導を受けた。この指導を受けて調査を実施したのが、平成24年度の調査である。

平成25年度第1回調査検討委員会では、本郭・二郭の城域の中心部について、これまで状況が不明な地点の発掘調査を実施するよう指導を受けた。これに従い、平成25年度は本郭・二郭の四方のうち、これまで調査が不十分であった地点の調査を実施してきた。

## 第4項 発掘調査報告の目的と構成

### (1) 報告の目的

以上のように、これまで私部城とその周辺域では様々な目的で発掘調査が徐々に重ねられてきた。この中では、現在地上遺構として視認できる本郭、二郭の状況のみでなく、周辺の地下に埋没した遺構についても成果が得られてきた。

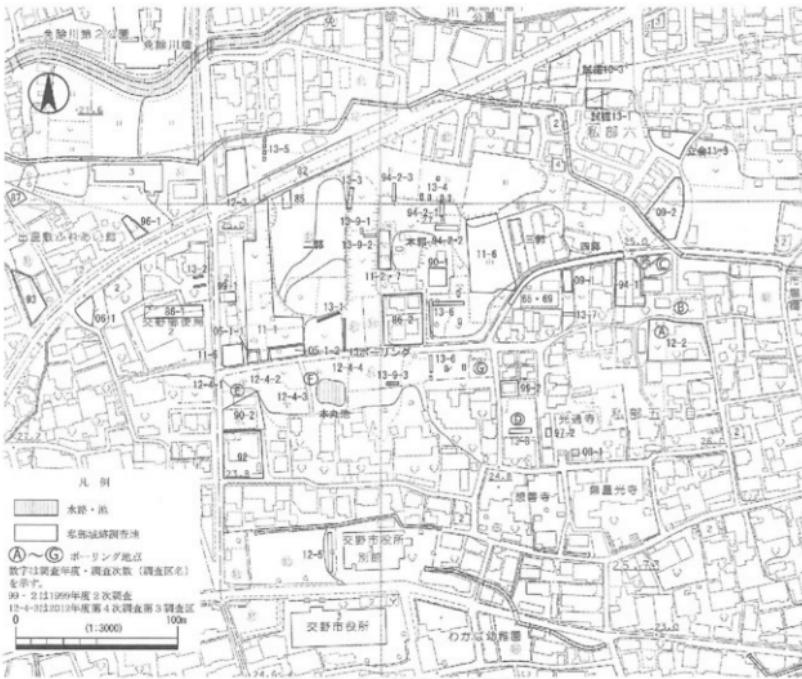
その中の一部成果については概要を報告した調査はあるものの、その全体像を整理することはこれまでできていなかった。

また、既に概要を報告したものについても十分に内容を周知できていない場合もある上に、現在

の研究状況に照らし合わせて遺構・遺物の再評価を行う必要もあった。過去50年近くにわたる発掘調査成果を総括することにより、私部城跡の変遷を明らかにすることを目的とする。

### (2) 報告の構成

長期にわたって行われてきた発掘調査は地点・規模・内容や目的ともに多岐にわたる。このため、本報告では、これらの調査成果を城の部分ごとに整理して報告する。城郭の中心部と目される本郭を起点として、城の外側へと順を追って調査成果を報告する。



第12図 私部城跡調査地点位置図

第2表 私部城跡調査地点一覧表1

調査年度・次数	私部城域の位置	検出構など	検出遺物	第3章 掲載箇所
1965年度	三郭・四郭	なし	洗けた甕石・布目瓦 弥生土器片	第14節第1項
1969年度		三郭盛土 三郭・内郭間の堀 包含層(弥生集落遺構か谷)	石包丁・弥生土器片	
1982年	二郭北部	井戸・七坑 二郭盛土	中世瓦	第7節第1項
1985年度	二郭北部	なし	付近で水素通宝採集 (第7節4項に掲載)	なし
1986-1次	郵便局付近の郭の西	谷(組跡か)	中世瓦	第11節第1項
1986-2次	本郭の南	なし	なし	第5節第1項
1987年度	私部城西の高台	なし	なし	なし
1990-1次	本郭上面の南東部	本郭上面の地盤層	瓦器片・櫛鉢片(第1調査区・3層) 富田利一氏採集	第2節第2項
1990-2次	本丸池西の郭 (土壟状遺構)	盛土・地盤層	なし	第10節第1項
1992年度	本丸池西の郭 (土壟状遺構)の南	地盤層・盛土残存	なし	第10節第2項
1993年度 第1調査区	私部城西の高台	なし	なし	第12節第2項
1993年度 第2調査区		なし	牛伏瓦・土師器片	第12節第2項
1994-1次 第1~5調査区	四郭・四郭東の堀	ピット	土師器片(第2調査区拡張部・第3層ピット3) 土器片・木片(第2調査区・第2層・ピット4)	第14節第3項
1994-2次 第1調査区	本郭上面北東部	なし	瓦質土器	第2節第1項
1994-1次 第2調査区		廐棄土坑・土壠基礎 弥生時代懸穴建物 自然谷	中世瓦・土師器・瓦質土器 銅錢・水晶製品 石臼・砥石・台座	
1994-1次 第3調査区	本郭上面北西部	本郭北側斜面 堀切の泥田状堆積	中世瓦	第3節第1項
1995年度	四郭東の低地部	なし	なし	なし
1996-1次 第1調査区	私部城西の高台	なし	なし	第12節第1項
1996-1次 第2調査区		なし	中世平瓦3点	
1996-1次 第3調査区		構	なし	
1997-2次	出郭(現・光通寺)	井戸?	中世瓦 鏡・釘・土師器片・瓦器片 弥生土器	第15節第1項

第3表 私部城跡調査地点一覧表2

調査年度・次数	私部城域の位置	検出遺構など	検出遺物	第3章 掲載箇所
1999 - 1次	二郭西の平坦面	なし	土師器片	第8節第2項
1999 - 2次	出郭（現・光通寺）の北西	なし	中世瓦・瓦器・瓦質土器	第15節第2項
2005 - 1次 第1調査区	二郭南の平坦面	溝（中世） 井戸	瓦器・瓦質土器・瓦・陶器	第8節第4項
		なし	なし	
2005 - 1次 第2調査区				
2006 - 1次	私部城西の高台	溝	なし	第12節第3項
2008 - 1次	出郭（現・光通寺）	ピット等	土師器等小片	第15節第3項
2009 - 1次	三・四郭間の堀	なし	なし	なし
2009 - 2次	四郭の東	なし	なし	なし
2009 - 3次	本郭南の平坦面	なし	なし	なし
試掘 2010 - 3次	私部城北東の高台	なし	なし	第13節第1項
2011 - 1次	二郭西南部	ピット・土坑等	中世瓦片・青磁片・鉄器	第8節第1項
2011 - 2・7次	本郭上至西南部	郭状の区画溝・盛土痕跡 ピット・土坑・溝 弥生時代建物跡	瓦器片・土師器片 弥生土器	第2節第3項
2011 - 5次	二郭南西の平坦面	なし	なし	第8節第3項
2011 - 6次	本郭・三郭間の堀	三郭北西隅を検出 本郭南東隅を検出	瓦片・土器片	第4節第1項
2012 - 2次	私部城東 (字市場)	中世区画溝・建物 溝・ピット群 弥生堅穴建物跡	瓦片・瓦器片・陶磁器片 弥生土器片・石器	第16節第1項
2012 - 3次	二郭の北西	二郭南北西の郭・溝 中世の溝・建物跡 弥生時代ピット	瓦片・陶磁器片 弥生土器片	第7節第2項
2012 - 4次 第1～3調査区	本丸池西の堅 (土壠状遺構)	郭盛土上の築（築地か） 土坑 郭盛土下層のピット・溝	瓦器・土師器・瓦片 陶磁器片	第10節第3項
2012 - 4次 第4調査区	二郭南の堀 (本丸池)	堀底面	中世瓦	第9節第1項
2012 - 5次	私部城東の谷部	中世溝・中世耕作土・自然谷	瓦器・陶磁器片	第17節第1項
2013 - 1次	二郭南斜面	二郭南の包含層	中世瓦	第8節第5項
2013 - 2次	郵便局付近の郭の東	堀跡	なし	第11節第2項

第4表 私部城跡調査地点一覧表3

調査年度・次数	私部城域の位置	検出遺構など	検出遺物	第3章 掲載箇所
2013・3次	二郭東斜面・堀	二施上の櫛 犬走り状の段 斜面樹杭列（近世以後か）	瓦質土器・中世瓦	第6節第2項
2013・4次	本郭北斜面・堀	ピットほか 斜面樹杭列（近世以後か）	瓦質土器・瓦・石ほか	第3節第2項
2013・5次	二郭北斜面	ピットほか	瓦質土器・瓦・石ほか	第7節第3項
2013・6次 第1調査区	本郭南の平坦面・堀	堤跡・土坑・ピット・溝	瓦・瓦質土器・陶磁器片	第5節第2項
2013・6次 第2調査区	本郭南の平坦面 本郭・三郭間の堀	堤跡・溝	瓦・瓦器・瓦質土器・陶磁器片	第4節第2項
2013・6次 第3調査区	本郭南の平坦面	土坑・ピット・溝	瓦質土器・陶磁器片	第5節第2項
2013・6次 第4調査区	本郭・三郭間の堀	堀跡	陶磁器片	第4節第2項
2013・6次 第5調査区	本郭・三郭間の堀	堀跡	瓦・陶磁器片	第4節第2項
2013・6次 第6調査区	本郭南の堀	堀跡	瓦・瓦質土器	第5節第2項
2013・6次 第7調査区	本郭南の堀	堀跡	瓦・瓦質土器	第5節第2項
2013・6次 第8調査区	本郭南の平坦面・堀	堀跡		第5節第2項
2013・7次	三郭・四郭間の堀	堀壁土・底面の確認	中世瓦・瓦質土器・陶磁器片	第14節第2項
2013・8次	出郭（現・光通寺）の西	堀・溝	中世瓦・瓦質土器・陶磁器片	第15節第4項
2013・9次 第1調査区	本郭・二郭間の堀	近世溝・疊疋 箱根窓面・自然谷	瓦質土器・土師器片・陶磁器片	第6節第1項
2013・9次 第2調査区			瓦・瓦質土器・陶磁器片	
2013・9次 第3調査区	二郭南の堀 (本丸池)	堀跡	瓦器・土師器片	第9節第2項

## 第2節 本郭上面の調査

第1項 1994・2次 第1・2調査区

## (1) 調査にいたる経過と地点の概要

私部城跡の範囲確認を目的として実施された。城の中心と目される本郭の中でも、北半の一段高い部分にあたる。本郭北東の中心部から縁辺部に南北方向に第1調査区が、縁辺部から郭中心部へ東西方向に第2調査区が設定され、遺構遺物の状況を調査しながら地盤層まで掘り下げられた。



第13図 1994・2次 調査地点位置図

## (2) 層序 (第15・16図)

より詳細に層序が確認されている第2調査区断面(第16図)を基準にして記述し、補足的に第1調査区の対応層について記す。

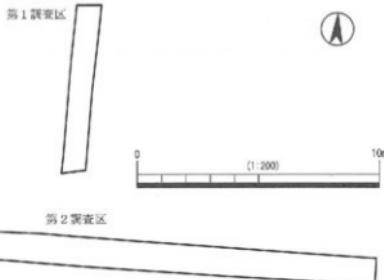
## (a) 現代耕作土

第2調査区第1層にあたり、上下面ともほぼ水平に堆積する。耕作土の性格上、下層の上部を削平しながら形成されたものとみられる。第1調査区第1層に対応する。

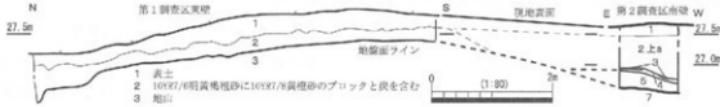
## (b) ブロック土(廃城後片づけ土)

第2調査区(第16図)第2上層は既報告では一括した層として報告されたが、写真観察から、郭中心部に堆積する2上a層と、郭縁辺部に堆積する2上b層に分けられる。

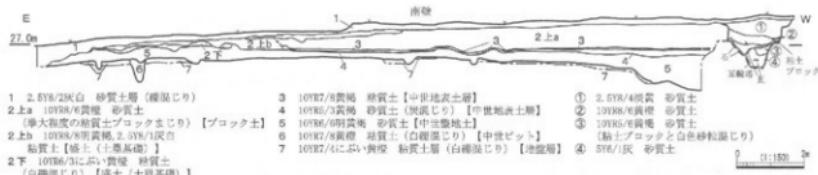
2上a層 垣大程度までのブロック土を含み、空隙が多い。郭中心部に向かって厚く堆積する(写真26)。第1層の耕作土とは層相が異なり、現代までの耕作による堆積とは異なる要因が考えられるものである。2上a層下面には、炭などの混じる第3・4層が堆積する。層相や堆積状況から2上b層や周辺に堆積した旧地表土層を母材とした可能性が高い。2上b層上に土壌状に積まれた盛



第14図 私部城跡調査地点位置図



第15図 1994-2次 第1・第2調査区断面合成図



第16図 1994-2次 第2調査区南壁断面図

土が切り崩されて堆積したものと推測される。

#### (c) 中世表土層

第3・4層は郭中心部でほぼ平坦に堆積する。第4層は炭も含まれる旧地表土層である。上下層の出土遺物から中世末に比定できる。さらに同層堆積時には、郭周縁に土星が存在したことからも、私部城段階の郭上面の表土層と考えられる。

#### (d) 土壌基礎・中世整地土層

2上b層 土色・土質は2上a層と類似するが、写真観察からブロック土は顕著でなく空隙が認められない（写真図版7）。むしろ、第1調査区（第15図）第2層に類似するものである。

2上b層は2上a層のブロック土の母材とみられる。2上a層は、本来は郭縁部に土壌状に積まれた層と考えられる。

2下層 2上b層下面の郭周縁部のみに分布し、第3・4層をはさまない。2上a層と同様に土壌盛土の下部層とみられる。2下層・2上b層下面には第3・4層が確認できないという差があり、第5層と一連で整地されたものと考えられる。

第5層は郭の東端部で20cmほど、郭の中央部付近で1mほどの分厚く堆積する明褐色の砂質土

である。第5層下面では傾斜を持つのに対してその上面ではほぼ平坦面を形成しており、整地土と考えられる。同層下面の6ピット（第16図6層）出土遺物と上層遺構出土遺物から、第5層の堆積段階は中世後半に置くことができる。その整地土上に土壌が存在した可能性もふまると、私部城築城に伴うものと考えられる。また、概要においては、地盤層直上の溝などの遺構埋土を第5層で一括していたが、下部には弥生時代以後の遺構埋土と旧地表土層が含みこまれている。

#### (e) 整地土層以前の中世・弥生時代遺構

地盤面上には中世のピット以外に、弥生時代のものとみられるピット・溝の埋土が確認できた。

#### (f) 地盤層

白樺の混じる黄褐色シルトからなる段丘面の地盤層である。第2調査区断面から東西方向の変化をみると東端が高く、西端すなわち郭中心部に向かって低く傾斜する。同様の堆積は、後述の本郭北側斜面においても確認できる。両者の位置関係からは、私部城築城以前の谷地形と考えられる。

南北方向の変化を第1調査区断面（第15図）でみると、北側が高く、南へ向かい急に落ち込む。

郭周縁部では第1調査区で第2調査区第3～5層が認められないことから、地盤層がそのまま土塁基礎として利用されたものとみられる。

### (3) 遺構

遺構は上層から下層へ (a) 廃城段階の堆積土中遺構、(b) 焼土層下面、(c) 地山直上・包含層下面の3面で検出された。

#### (a) 廃城後遺構面 (第1層下面)

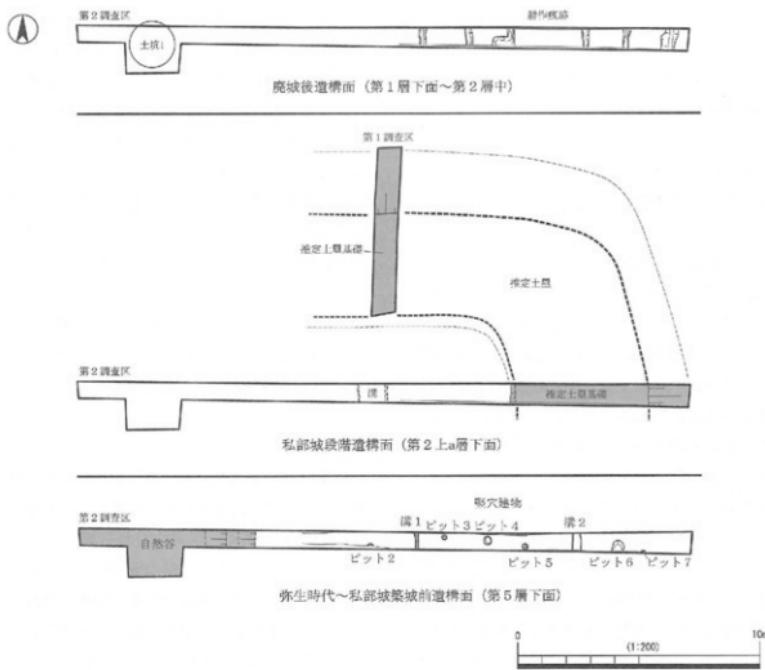
**土坑1 (断面第17図)** 多量の瓦・石とともに、瓦質土器・土師器皿などが検出された。出土遺物の接合を行ったが、完形に復元できたものではなく、

廃棄土坑と考えられる。

概要においては、表土下面の遺構とされ、現代までの耕作土によって私部城期の地表土が完全に削平されながらも遺存したものであり、前身の光通寺を破壊した際の土坑と位置づけていた。

出土遺物と層序の再検討から、私部城廃城に伴う土坑として再評価できる。

出土遺物の年代等を再検討した結果、後述のように、その埋没年代は16世紀の終わり頃と考えられるようになり、私部城期に合うものであることが判明した。そして、瓦以外に寺院関連の遺物は、宝鏡印塔基礎部と、一部の瓦質土器・水晶製品 (第26図33)など少数である。戦国期の城において石造物を軒用することは珍しいことではな



第17図 1994-2次 第1・2調査区遺構平面・断面合成図

く、京都勝竜寺城（岩崎編 1991）や奈良多聞城（篠原 1984 ほか）の発掘調査でも検出されており、出土遺物内容から寺院の廐棄土坑に限定できるものではない。

層序については、埋土上部の第2・3層の層相が2上a層と類似することに加え、写真観察からも土坑掘方は不明瞭であった（写真31）。2上a層のブロック土により郭上面を平坦にした際に、石や瓦などを集積させた痕跡と評価できる。土坑埋没後の陥没、または埋没時に完全に平坦化されなかつたため堆積した第1層によって表土下の遺構とされたものと考えられる。加えて、その他の調査区の成果もふまると、廐棄以後の耕作による削平は私部城期の遺構を完全に削平するほどのものとは考えられない。現在確認される郭上面の層序のなかで、中世末の堆積層にあたるこの廐棄土坑は、私部城の廐棄に伴うものと考えられる。

#### (b) 私部城段階遺構面（第2上a層下面）

**土壌基礎** 郭の周縁部にあたる第1調査区では地盤層によって、第2調査区東端では地盤層上の盛土によって構成される土壌が確認された。規模は幅10m前後、第4層との比高40～50cmである。郭中心部に堆積する多量のブロック土の存在をふまると、郭周縁の土壌基礎と考えられる。

**溝** 焼土層面に伴う幅15cm前後の溝が確認できる。層序から土壌基礎と併存したものであり、私部城段階のものと判断できる。土壌基礎に沿うことから、土壌に伴うものと推定できる。

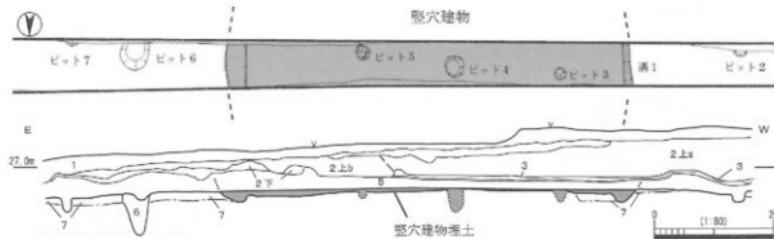
#### (c) 弥生時代～私部城築城前遺構面

地盤層直上では、ピット・溝群が検出された。ピット6 直径約60cm、残存部の深さ73cmである。瓦・瓦質土器片を出土する（第27図）。第5層下面の遺構で、中世後半以後に埋没したものである。

ピット7 一部サヌカイト製の打製石器が出土しており、弥生時代中期頃のものとみられる。これと層相の類似する以下の遺構は弥生時代の遺構と考えられる。

**堅穴建物** 溝とピット群から構成され、平面・断面・層相の観察から堅穴建物と考えられるものである。溝2は西側の上端が高く、東側の上端が低く段差がつく。溝1は溝2とは逆に、西側の上端が低く、東側の上端が高い。両者とも標高・層相とも類似するものであり、同時併存したと考えられる。その溝の間に、落ち込みが存在することから、堅穴建物の周溝とみられる。2本の溝の間隔は6.8mほどで、これが堅穴建物の直径と推定できる。2011-7次調査で確認された堅穴建物とおおむね同規模のものである。ピット4は堅穴建物の中心柱、ピット3・5も建物に伴うものと考えられる。

**谷地形** 層序から判断すると、弥生時代には調査区西端に向かって落ち込む谷地形が存在していた。この谷自体は自然地形と考えられるが、弥生時代に台地上に形成された集落域を防衛する環濠の代替機能を有したと考えられる。



第18図 1994-2次 第2調査区弥生遺構平面・断面合成図

## (4) 出土遺物

## (a) 土坑1出土遺物

多量の瓦の他、瓦質土器などの土器類が出土した。

**軒平瓦（第19図）** 瓦当面を残すものは3点存在する。

1は三葉唐草文である。中心の三葉から、外側へ2つめの唐草に、90度近く屈折する箇所が認められる点が特徴である。また、界線の左側に、コの字を反転させたような形の凸線が加えられている。焼成によるもので外面は黒色から黒褐色で断面は灰白色を呈する。

瓦当外区は平滑であるが、その上縁に沿って粘土のはみ出しが認められる。これは外区まで一体の瓦范の押圧時にはみ出した粘土が未調整のまま残存したものとみられる。

頸部破断面の観察から、接合面にはカキメ調整による凹凸が確認できる（写真図版43）。播磨では16世紀頃（田中2004）、浜津においては16世紀中頃以後の接合技法とされる（芦田1998）。同様の技法は交野市域では16世紀代初め頃までの中世瓦を多量に出土した新宮山遺跡（真鍋編1993）、岩倉開元寺跡（交野市文化財事業団

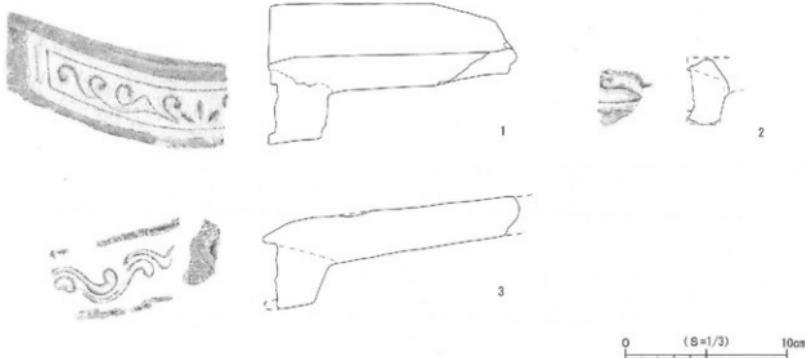
2012）で確認できず、浜津地域と同様に16世紀中頃以降のものと判断できる。

瓦の年代と性格を考える時に重要なのが、大坂城下層（植木・鈴木ほか1988）、若江城跡（才原編1988）で同范瓦が出土している点である。

大坂城下層出土瓦と1を対照した結果、同范で頸の接合技法・細部調整も共通することを確認した。また、界線の左外側に加えられた逆コの字状の凸線は1のみに認められることから、大坂城下層の瓦が古く、私部城瓦が新しいとわかる。大坂城下層の軒平瓦は、「永禄五天」（1562）銘の丸瓦の出土層より上層の溝で出土している。16世紀中頃以後の中でも、永禄年間かそれ以後の年代が与えられる可能性の高いものである。

また、若江遺跡の瓦は、若江城の堀跡より検出されたものである。対照した結果、私部城跡の瓦当と同范であるが、改変が大きく、文様の傷みが進み全体として丸みを帯びたものとなっている。焼成は焼成で強い黒色を呈する。各部の調整技法はおおむね一致するものである。

若江城跡出土瓦の瓦当内区は1の界線が消失し、内区自体が縮小していることから、1の型を切落とし、瓦當に用いたことがわかる。この瓦当の切落し線、すなわち瓦当内区外縁は1の上下の



第19図 1994-2次 第2調査区土坑1出土軒平瓦

界線と、左の界線の外側に加えられた逆コの字状の凸線におおむね一致しており、この凸線が、瓦当切落しのために施された目地であると推定できる。この観察結果から、若江城跡と私部城跡の瓦が年代的にも技術系譜的にも密接に関連したものとわかる。界線が消失している点、瓦当外区外側の幅が拡大することなどの特徴からも、若江城跡出土瓦が新しい年代のものと判断できる。若江城跡は天正9年（1581）の時点で廃城となっていることが知られている。

以上の点から、1の軒平瓦の年代は16世紀中葉から後半頃にある。特に永禄年間から天正年間におさまる可能性が高い。その技術系譜については、大坂城下層の瓦との関係から摂津周辺で活動した瓦工人に系譜をたどることができる。また、若江城跡の瓦については、織田期の瓦とみる見方（土山1990）も強いが、それ以前の三好義継期のものとみる見方もある（清水2014）。私部城跡、大坂城下層の出土瓦は、少なくともその技術系譜からは摂津から河内在来の工人によるものと判断できる。

3は複線により唐草を描いたものである。同瓦のものが交野山上の岩倉開元寺跡で確認されている（交野市文化財事業団2012）。ただし、岩倉開元寺跡出土瓦が瓦当貼り付けて須恵質に近い焼成であるのに対して、2は額貼り付けて、外面は他の土坑出土瓦と同様に黒色の燻焼きである。この

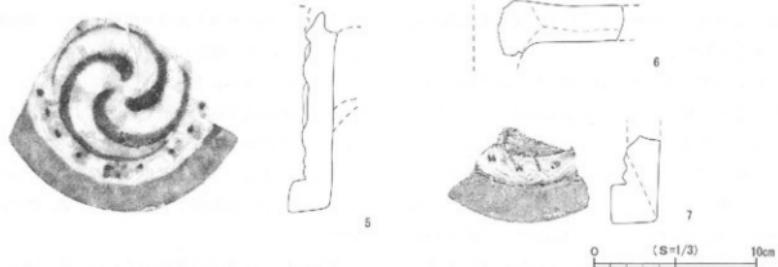
ことから岩倉開元寺跡で使用された瓦が本郭上の瓦製作に再利用されたものと考えられる。

複線により軒平の瓦当文様を描く例は、田中幸夫氏の研究で、四天王寺系工人の特徴と指摘される（田中1995）。しかしながら、15世紀頃のものとみられる交野の岩倉開元寺跡出土瓦、戦国期の私部城跡にも認められることから、その一部に関しては、北河内の瓦に系譜をたどることができる。

2は小片であり、唐草文の一部と額貼り付けであることが確認できるのみである。

破片のみが廃棄されたものと考えられるが、その中でも同瓦のものが認められず、多彩な軒平瓦が利用されていたことがうかがえる。

**軒丸瓦（第20図）** 巴文軒丸瓦の瓦当部が2点出土している。5は断面は灰白色で、外面が黒色に燻焼かれている。瓦当裏面にわずかに丸瓦部との接合部が残存しており、瓦当部側に櫛状工具で凹線を施している（写真5）。この接合技法は、法隆寺出土瓦で江戸時代以後とされるが、（佐川1989）。これは16世紀中葉以後、戦国期における奈良で瓦工人の系譜と活動が不明瞭になった結果によるものとみられる（山川1996・山崎2000）。戦国期の奈良市多聞城（中井公1979・篠原1984）、長岡京市勝龍寺城（岩崎編1991）の出土瓦に確認できる。交野市内の16世紀初め頃の新宮山遺跡出土軒丸瓦や（真鍋編1993）、室町時代頃までの出土瓦を主体とした岩倉開元寺跡の出



第20図 1994-2次 第2調査区土坑1出土軒丸瓦

土軒丸瓦では、丸瓦部の広端面側に刻みはいれるが、瓦当裏面接合部には認められない（交野市文化財事業団 2012）。こうした点から、私部城跡の軒丸瓦は、16世紀代初頭までさかのぼることはなく、勝龍寺城出土軒丸瓦などと同じく16世紀中頃から16世紀後半頃のものとわかる。6は丸瓦部の接合面を残す破片で、明瞭なカキヤブリ痕跡を残す（写真図版43）。7は瓦当縁の一部である。珠文部に2箇所の範傷が認められる。

**平瓦（第21図）** 土坑1の中世平瓦の調整技法はおおむね類似する。凸面に糸切り痕などは認められず<sup>6</sup>、縱方向のナデの痕跡を残すものが多い。径1mm前後の砂粒や粘土が多く付着しづらいた面をなす。凹面のような仕上げのナデ調整は施されていない。製作の最終工程を凹型台で行っていることを示すものと考えられる。凸面端部には台のあたる部分からはみだしたバリが残るものが多く、面取りは施さない。凹面側は丁寧に中央部を横方向にナデ調整し、端部は面取りをする。

厚さや長さ、幅などの法量にはばらつきがあることがうかがえる。法量もふまえて分類可能なのは次の3点である。

8は、中世の平瓦のうち、全長と幅が確認できるもので、全長30.0cm、最大幅23.8cm、厚さ2.1cm前後である。狭端部の面取り幅は2.1cmほどである。

9は縦横の法量が確認できるものである。残存部の最大幅23.5cm、全長30.1cmをはかる。厚さは2cm前後と比較的薄手である。狭端部面取り幅も8と類似する。

10は全長不明だが、最大幅25.0cmと最も幅の広い平瓦である。厚さも2.2cm前後と最も厚い。

幅がやや狭い8・9と、幅広の10の少なくとも2種の平瓦が存在する。年代の詳細を決定することは難しいが、平瓦の縦横比や製作技法は、鞍国期の若江城などの平瓦と類似する（森田1984ほか）。この点からは、軒丸瓦や軒平瓦の年代と大きく齟齬のない年代のものとみてよい。

**丸瓦（第22～24図）** 有段丸瓦である。凹面は糸切り（コビキA）と吊り縦痕跡を残す。吊り縦痕跡の繩目単位は明瞭に認められ、外側継付けである。山の部分で小さくループさせ、谷部に大きく垂らす。側縁端部は大きく二か所に面取りを行う。丸瓦凹面は縦叩き後、全面に縦方向に板状工具によりナデを施す。ナデのあたりが弱い部分には縦方向の縦叩き痕跡が残るものもある。法隆寺編年では16世紀代には消える特徴とされるが、16世紀後半の城郭である多聞城・坂本城・勝竜寺城などでも同様の特徴のものは認められ、16世紀後半頃までは残存するものと考えられる。

玉縁側縁凹面側の面取りは胴部狭端に及び、胴部狭端凹面の面取りがされる。

断面は灰白色の緻密な胎土で、黒色から灰色に焼き上げた焼成を行っている。

以上はおおむね共通する技法特徴であり、法量と端部の特徴から、少なくとも2種以上の丸瓦が混在する。

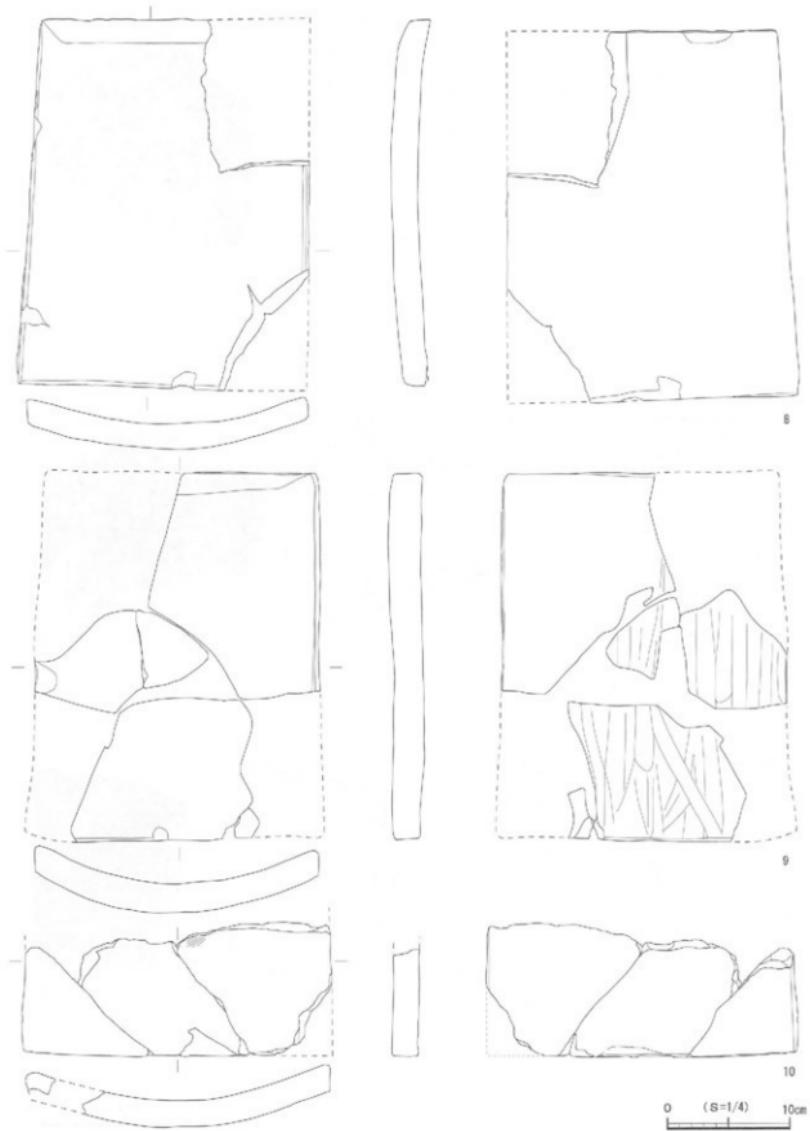
第22図12は胴部一部から玉縁部を残すもので、胴部幅12.6cm、玉縁長は2.8cmである。厚さに偏りがあり、図上右半分で1.9cm、左半分で2.4cmである。胴部側縁凹面側の面取りは、玉縁部から一気にかける。側面幅は11.1cmほどで、幅は広い。凹面側縁面取り幅は1.6cmから1.0cmほど、側面幅1.3cmほどで、端部はやや鈍い。

第24図17は、厚さ1.7cmほどと薄いが、16のように左右で厚さに偏りのある丸瓦の破片と考えられる。凹面側縁の面取り幅は1.2cm、側面幅1.3cmで、ぶい端部のものである。

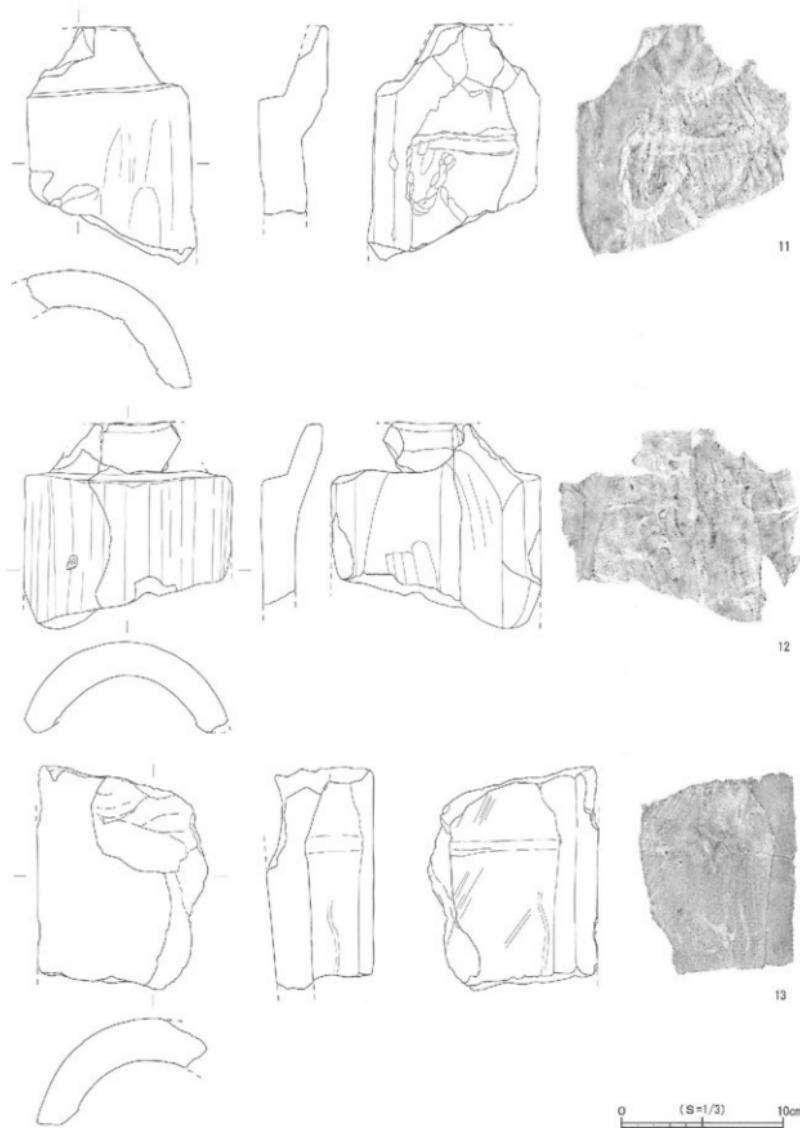
第22図13は丸瓦玉縁部から胴部付近の破片である。丸瓦凹面側縁の面取り幅は1.0cm～1.2cmほどで、側面幅1.2cmほどで鈍い端部である。

第23図15は、胴部端部片で、凹面側縁の面取り幅は1.0cm、側面幅1.2cmほどで、鈍い端部をなす。

第23図16は丸瓦広端部辺である。推定復元による胴部幅は10.8cmである。凹面側縁の面取り



第21図 1994 - 2次 第2調査区土坑1出土平瓦



第22図 1994・2次 第2調査区土坑1出土軒丸瓦



第23図 1994-2次 第2調査区土坑1出土軒丸瓦



第24図 1994-2次 第2調査区土坑1出土丸瓦・面戸瓦



第25図 1994-2次 第2調査区土坑1出土古代平・丸瓦

幅は1.2cmほど、側面幅1cmほどで、やや鈍い端部である。広端縁の凹面側は幅4.6cmほどと深めに削られる。

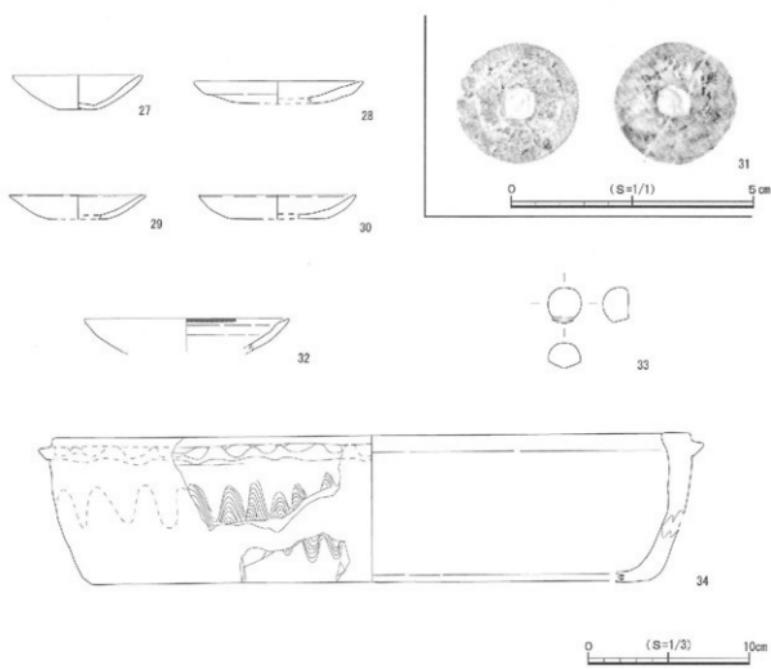
全容のわかる丸瓦はなかったが、法量から胴部幅が12.5cm前後の1群（第22図12ほか）と、側縁端部の尖り、胴部幅が11cm前後の1群（第23図16）に分けられる。破片資料からうかがう限り、側縁端部形態をのぞくと他の製作技法はおおむね類似するものである。製作技法から、共伴した軒丸瓦と同様16世紀中頃～後半頃のものと考えられる。

面戸瓦（第24図19） 1点のみ検出されている。丸瓦素地からつくられた蟹面戸瓦である。凹面にわずかに布目を残す。横方向の条痕が一条認められるが、コビキ痕跡ではなく、製作中に生じた粘

土のしわである。側縁をけずり、凹面側の調整は荒く、砂粒を引きずった痕跡を残す。

古代平・丸瓦（第25図） わざかながら古代の平・丸瓦片が認められる。平瓦は凸面を繩叩きにより調整するものを2点、格子目タタキで調整するものを3点確認している。目の細かい格子目のタタキ痕を残すものがある。目の大きい格子叩きにより凸面を調整した瓦が数点出土している。これらは平安時代以前の古代の平瓦片である。丸瓦は凸面に横方向のナデを施している。凹面の布目は荒いものであり、側面に工具による分割痕跡が残る。奈良時代頃のものと考えられる。

土師器皿（第26図） 30（旧報告37）は赤褐色系の胎土で、千喜良分類s類に属し、形態から16世紀後半に位置付けられる。28（同38）は黄



第26図 1994-2次 第2調査区土坑1出土遺物

橙色系で千喜良分類t類に属し、16世紀前半に位置付けられる。27（同39）は白色系の胎土であり、千喜良編年のq類に属し、16世紀後半のものとみられる。

第29・32図は黄橙色系の胎土の中皿で、千喜良編年のu類に属し、16世紀後半にあたる。交野産のものか。年代はおおむね16世紀代のものである（千喜良2002）。

**瓦質土器** 34は口縁部の外面に波状の凸帯がめぐり、その下部に櫛状工具により波状文が施される。形態から盤とみられる。口縁部形態は異なるものの、奈良県古市城などに類例があり、奈良産の瓦質土器の一例とみられる。

**水晶製品** 33は球状の形態に基部がつくものである。仏具の破片である可能性が高い。

**銭貨** 31の天聖元宝が1点検出されている。

**石材・石造物** 今回図面掲載しないが、概要で報告した茶臼片が3点確認されている。その他に石造物としては連弁が刻まれた塔の台座が確認されている。

また、土坑中から人頭大の石が多量に出土している。既報告によれば、大218点、小344点で計562点にのぼる。これは井戸枠のように組まれたものではなく、素掘りの土坑に廃棄されたものとみられる。被熱により赤く変色していた。こうした石類は、地盤層に含まれるものとしては大きす

ぎるものである。私郭域の施設に利用するためを持ち込まれたものとみられる。

#### (b) ピット出土遺物

**ピット6出土遺物** 瓦質土器擂鉢片と瓦片が出土している。擂鉢の底部片36は、一単位あたり9本の擂り目を内面に残す。外面は縦方向のミガキを施している。瓦片はいずれも中世後半の遺物である。

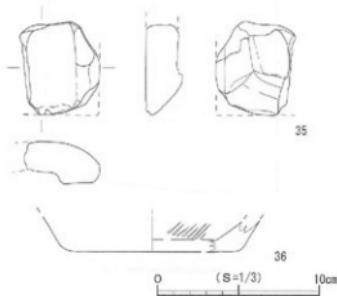
この他には今回掲載していないがピット7中からは、サヌカイト製の打製石鎌が出土している。本郭上面の別の地点で弥生時代の遺構・遺物が検出されていることからは、弥生時代中期頃のものとみられる。

#### (c) 第1調査区出土遺物

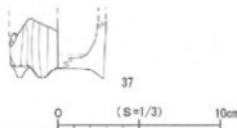
37は第1調査区包含層、郭整地に伴う盛土出土である。足のつくもので花瓶とみられる。仏器として利用された可能性もある。

### (5) 小結

本郭上面の貴重な調査となった。当該調査区では、出土遺物の再検討から私郭城闇連の遺構として、廃城にともなう廃棄土坑などの痕跡と、郭縁辺部の土壘痕跡とみられる堆積層を確認した。また、重要な出土遺物として、多量の瓦などが出土している。瓦には一部古代瓦も含まれるが、戦国期の16世紀中葉から後半頃の瓦が種類・量とともに豊富に出土した。出土状況・遺物の年代から、本郭における瓦利用の可能性が高くなった。



第27図 1994-2次 第2調査区ピット6出土遺物



第28図 1994-2次 第1調査区出土遺物

## 第2項 1990 - 1次調查

### (1) 調査地点の概要と調査にいたる経過

調査地点は私部城本郭南東部に位置する。おおむね一連の平坦面を形成している。その標高は、現況でT.P. 26m前後であり、本郭上面の中でも最も低い。その広さは、およそ25m四方ほどで、本郭上面の四分の1ほどを占める。現地形では北側へ向かって緩やかに標高が高くなる。

個人住宅の建設に伴い調査され、概要を報告されている（交野市教委 1991）。未掲載の写真・断面図等の資料が存在することに加えて、本郭上面の形状を考察するために必要な調査成果であるため、ここで改めて報告する。

第1調査区は、調査地南端に設定された東西5.3m、南北1.0mの調査区である。

第2調査区は調査地北西隅に東西1.0m、南北1.0mで設定し、深さ0.65mまで掘削した。



第29図 1990-1次 調査地点位置図

第3調査区は調査区北東端に設定し、東西1.0m・南北1.0mを深さ0.45mで掘削した。

(3) 番序(第31図)

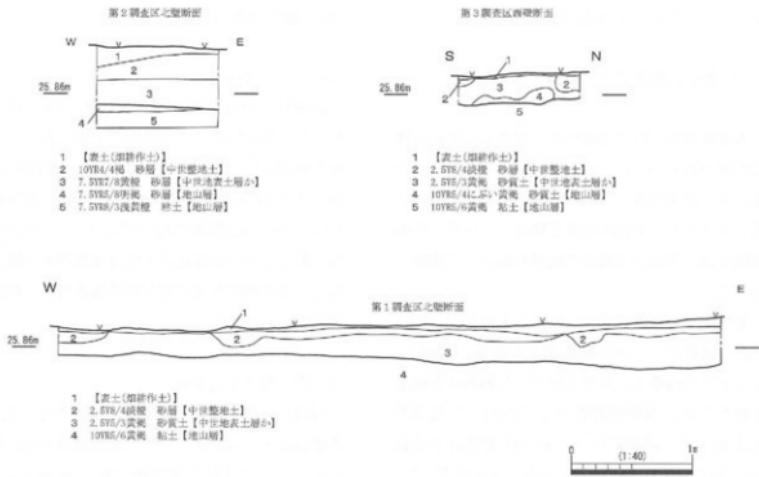
(a) 現代表十

耕作上及び、整地土である。現地表面では、調査地北西に位置する第2調査区から、北東に位置する第3調査区に向かって低くなる。第3調査区から調査地南の第1調査区にかけては平坦である。

なお、第2調査区の地表面の標高がやや高いのは、現況の郭北半へ上がるための緩やかなスロープ状の通路上に位置するためである。第2調査区第2層はこの通路を形成するための整地土と考えられる。出土遺物がないため詳細な年代は不明ながら、堆積状況からは比較的新しい時期に取り付けられたものと考えられる。



### 第30回 1990-1・2次 調査区位置図



第31図 1990-1・2次 第1～3調査区断面図

## (b) 近現代耕作土

各調査区の第2・3層は砂層または砂質土であり、近現代まで行われてきた耕作による堆積層とみられる。ただし、第3層下部から第1・2調査区第4層においては、中世段階の旧表土が残存している可能性がある。

## (c) 地盤層

第2・3調査区の第5層、および第1調査区の第4層は黄褐色系の粘土層により構成される地盤層である。検出高は若干異なるがおおむね平坦な面を形成している。

なお、写真観察では、第1調査区の東端には、目の粗い堆積層が確認される。地盤層の切り替わりとみられるが、溝等の遺構である可能性も考えられる。また、第2調査区の第5層は、層相がやや異なる流転や、湧水量が著しい点から同じく遺構埋土を検出している可能性が残る。

## (4) 小結

同調査においては、本郭南東部における地盤面の標高が確認された。そこでは、現況以上に高低差が少ない平坦な地盤面 T.P. 25.7m 前後で形成されていた。

その標高は、後述の 2013-6 次調査において確認された標高とはほぼ同等である。その一方で、本郭上面南西部にあたる 2011-7 次調査地点における地盤面と検出高からは 1m 近く低く、さらに本郭北半の 1994-2 次調査における検出高からは 1.5m 近く低い。

この著しい段差からは、本郭が単なる方形居館としてではなく、複雑な郭内部構造を伴うものであったことが認められる。

また、こうした構造は一定程度は旧地形を反映したものであったとしても、自然地形としては異様なものである。相当量の切土によりこの平坦面が形作られたものと考えられる。

## 第3項 2011 - 7次調査

## (1) 地点と調査に至る経過

本郭南西部の縁に位置する。本郭上面で最も標高の高い郭北半から、それから20~30cmほど標高の低い郭南西隅へと、ゆるやかに北から南へと低くなるスロープ状の地形を構成している。その東側には、方形の土壇状の地形が畑として残存している。

住宅建設の計画が立てられたことに伴い、2011 - 2次調査として試掘確認調査を実施した結果、ピット等の遺構と、弥生土器片、瓦器片が検出されたため、本発掘調査として2011 - 7次調査を実施した。調査区は、当初の住宅建設予定範囲に南北13.0m、東西4.1mの調査区を設定した。ただし、調査区中央部の樹木を伐採・処分することができなかつたため未調査範囲が生じた。

なお、調査の過程で市による保存方針が立てられ、事業主と協議の結果、住宅建設は中止されており、最下層で確認した遺構は保存された。



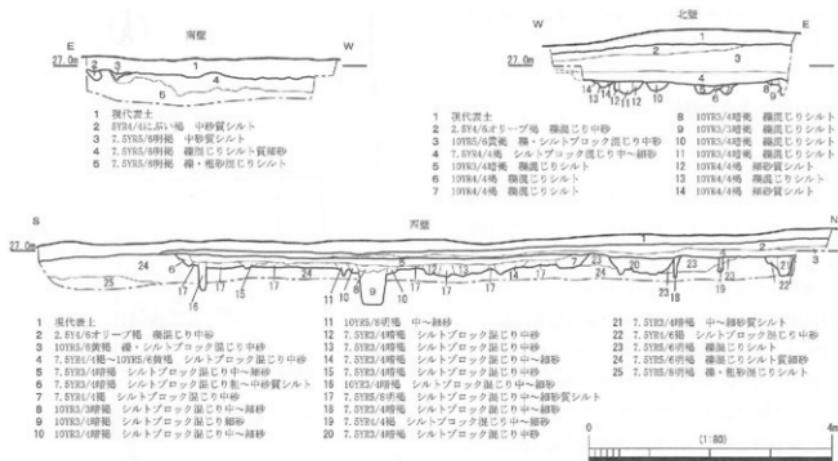


図34-4 2011-7次 調査区断面図

土壌・土壤などの地上遺構が同地点の北側もしくは東側に存在したものと考えられる。同堆積層中では近世以後の遺物は認められず近世以前の堆積層と考えられる。

同層下面是ほぼ平坦であった。この面上の調査地東端にて南北方向の中世溝2・3を検出している(写真42)。同溝も地山由来のブロック土を含む土によって埋没しており、盛土と一連で埋没したものとみられる。後述するように同溝の方向が本郭の南北軸に沿うことや、溝と併存して周囲に土壌・または土壤が存在したと考えられることからは私部城期の遺構の可能性が高い。溝以外にピット群も検出した。

#### (c) 中世整地土面遺構

調査区全体に薄く堆積しており、断面図では調査区西壁第4層が対応する。地盤層と弥生時代以後の遺物包含層が混在する整地土である。同層下面で後述の弥生時代遺構上部及び地盤層が削平されている。瓦器梶小片などを含み中世前半以後の形成層で、郭西端を切土により平坦に整地した痕

跡と考えられる。先述の盛土の供給元となるブロック土はこの整地の際に生じた排土である可能性が高い。

同層中から下面では浅い溝やピット等を検出した。多くは整地時の加工痕跡とみられる。

#### (d) 弥生時代遺構

堅穴建物1(北壁断面第4~14層、西壁断面第20~22層)、堅穴建物2(西壁断面第5~17層)をはじめとした弥生時代の遺構を検出した。地盤層上に掘り込まれている。

#### (e) 地盤層

黄褐色で締まりのよい砂質シルト層で、白色の礫が多く混じる。南壁第4・5層、西壁第23~25層が対応する。上面の標高が、調査区北西端・南東端・北東端でT.P. 26.9m、南西端でT.P. 26.8mとおおむね平坦ながら、北から南西隅へとゆるやかに低くなる。

地盤層の切り替わりから推定される東西方向の本来の傾斜は現況の堤斜面に比べて緩やかなもの

であったことが推定でき、本郭・二郭間の堀が切土によるものである根據となる。

### (3) 盛土下面の遺構

(a) 中世漢2・3

調査地の東側もしくは北側から供給された多量の盛土下面で中世溝2・3を検出した。次の整地土層の上面で形成された遺構群である。

調査地東端で検出された中世溝2・3は堆積層の層相差から分けたが、これは溝の形成時もしくは機能時堆積層と廃絶時の埋土差を反映したものと推定される。本来は一連の溝の可能性が高い。

その方向は南北方向に大きく伸びており、本郭の西縁と軸を同じくする。同溝の形成以前に郭西縁を平坦に整地する切土が行われていることや、同溝の北もしくは東側に土塁または土塙が存在したと推定できる。出土遺物は認められないが、埋土となる盛土層から近世以後の遺物が検出されなかつたことからは、近世以前の遺構と推定できる。以上の状況からは、私部城の本郭上の区画溝と考えられる。

(b) 溝に伴うピット群

また、中世溝2・3の西側に沿うように、ピット46・21・6・55・56・57・58などが南北方向に並んで多く検出されている。

これらはやや深い構造を残すものである。中世溝2・3に伴う柵列などの区画施設が存在した可能性が考えられる。

#### (4) 中世整地土中から下面の遺構と遺物

(a) 中世漢文

調査区全体に薄く堆積する整地上中から下面で検出された遺構である。

中世溝1の検出標高は、中世溝2・3に比べて低く、後述の弥生時代匂い金属を切り込むもので



第35図 2011-7次 中世遺構平面図



第36図 2011-7次 中世遺構断面図

あつた。深さは10cm未溝の浅いものである。また、中世溝2・3に比べると蛇行が認められる。

周辺で中世前半の遺物片が含まれることから、整地以前の中世遺構の可能性も残るが、郭上の整地の際の切土痕跡と推定される。

(b) ピット

また、弥生時代包含層直上で浅いピットが多く検出された。整地上層により削平された中世の建物遺構などの残存の可能性も残るが、大半は整地時の加工痕跡と推定される。

(c) 整地土中出土遺物 (第37図)

37は、中世溝1などの検出時に整地土層中で検出された遺物で、一部は弥生時代遺構直上に混入していた。図化し得たものは少ないが瓦器碗や青磁小片などの中世遺物がわずかにながら検出されている。これらの遺物は、後述の弥生時代包含層直上で検出しており、溝2などの加工時に下層まで混入したものと考えられる。

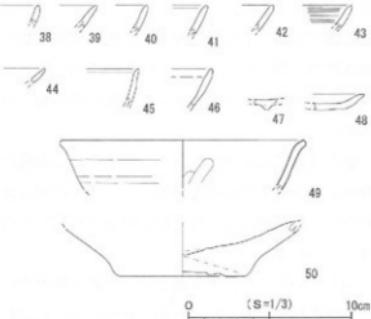
38～47は瓦器楕片である。小片ながらいすれも楠葉型もしくは楠葉系の瓦器楕片とみられる。

全体に摩耗が著しいが、47は小さな三角形の高台をつける底部片で、楠葉型瓦器椀のIV-1期、13世紀後葉頃のものとみられる。43のように内面に丁寧なミガキ痕跡を残し、12世紀後半頃の可能性のあるものも認められる。

48 は瓦器皿の口縁部から体部片である。

49は青磁碗の口縁部片である。

50は弥生土器壺類の底部片である。整地時に竪穴建物覆土より巻き上げられたとみられる。以上のように遺物小片が多く混在していた。これら



第37図 2011-7次 調査区中世層出土遺物

の遺物から、郭西端において行われた整地の年代は13世紀後葉以後のこととわかるが、それ以上を限定しうるものではない。

### (5) 弥生時代の遺構と遺物

後世の削平を受けた地盤面上で竪穴建物2基と関連遺構を検出した。この建物は本郭・二郭間の堀跡に近接する。弥生時代の段階では堀跡として改変を受ける以前の自然の谷が存在したものとみられる。自然の谷を防護に利用し、段丘上に築かれた環濠集落に近い機能をもつものと推定できる。

#### (a) 竪穴建物1

円形の建物の東半分を検出した。南北長6.9mである。東西長も同様の規模のものとみられる。

入口は明確ではないが、建物南の試掘坑西側に周溝があり、この付近に入口として機能した可能性がある。

溝1が周溝としてめぐり、その周辺にはピットが検出された。同溝中からは弥生土器甕片が出土している。溝底面で検出されており、溝の機能時に廃棄されていたものとみられる。

地盤面上に明褐から褐色の貼り床層が確認された。同層中からは上器小片が含まれたが図化したものはなかった。

建物内では、上部構造を支えた柱痕跡が多数検出された。特にピット7は、住居の中心に位置し柱穴の径・深さとともに大きく、建物の中心軸とみられる。

竪穴建物中心よりやや南東では黒色から赤褐色の焼土が堆積する炉跡を検出した。その周囲に浅めのピットが伴っており、炉に関連する施設の痕跡とみられる。

覆土中からは、弥生土器小片と石器が検出された。出土弥生土器はいずれも小片ながら、おおむね弥生時代中期前葉頃のものであり、建物の機能



第38図 2011-7次 弥生時代遺構平面図

時から廃絶の年代を示すものと考えられる。サヌカイト製の打製石礫や剥片・石核は覆土中から計20点ほど検出された。磨製石斧とともに、打製石器などの製作に使用されたとみられる敲き石と、磨製石器の仕上げに用いられたとみられる砥石が炉跡の南東部、貼り床面上で集中して検出された。同建物内で、打製・磨製石器の製作が行われたものとみられる。

#### (b) 壁穴建物2

調査区の北端で、壁穴建物1と同様に地盤面に掘り込まれた建物の一部を検出した。規模の詳細は不明であるが、壁穴建物1と同規模のものとみられる。

調査区北壁断面で堆積状況を確認したが、壁穴

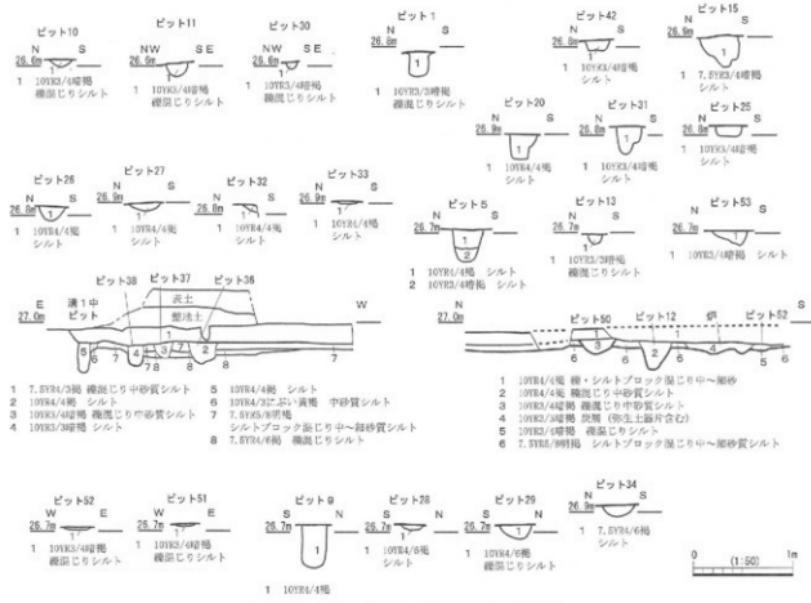
建物1で認められたような貼り床は確認できていない。

周溝は溝2と溝3の2条認められる。、いずれも同一標高で検出された。層相が類似しており先後関係を明瞭にし得なかったが、建物の建て替えもしくは拡張の痕跡と推定される。さらに建物中心より外に延びる溝4も認められる。排水溝と考えられる。

#### (c) 出土遺物弥生土器

全体として胎土に荒い縞が多く含む。主に壁穴建物1・2で検出された。

壁穴建物1出土 51は端部が下方へ突出する口縁部片で、甕とみられる。端部外面は摩耗するが、わずかに刻み目の痕跡とみられる起伏が残る。



第39図 2011-7次 弥生時代遺構断面図

52は強く外反する壺の口頭部片である

54は壺口頭部片で、頸部外面を横方向のハケメにより調整する。

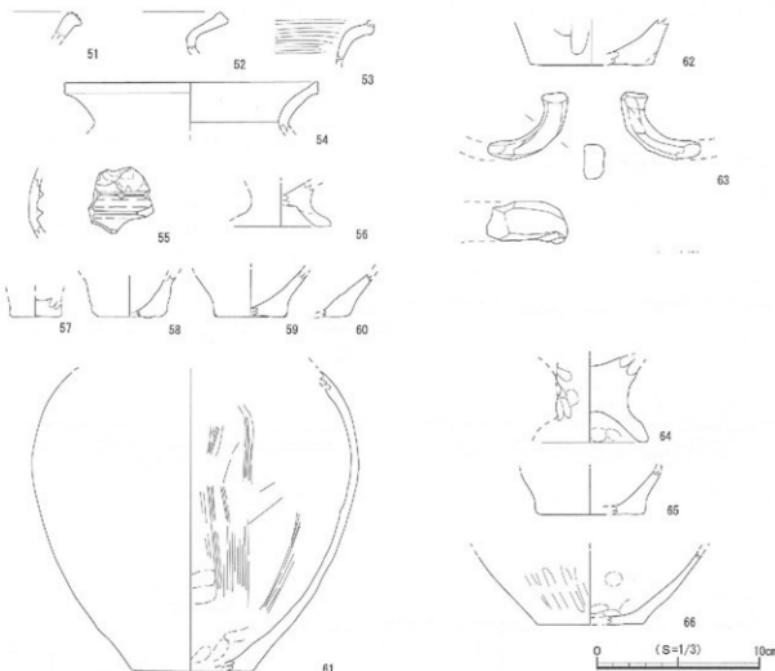
55は壺の頸部片とみられる。断面三角形の突帯を外面に二条貼り付ける。突帯に刻み目は認められない。

56は鉢壺類の上げ底状の底部とみられる。底部外面のみに煤が付着する。57～60も鉢壺類の底部片である。61は溝1底部で出土した壺の破片である。外面は摩耗が著しく、礫が多く表面に露出する。わずかに縦から斜め方向の擦痕が残り、ハケメ調整を行った可能性が高い。内面は板状工具で縦から斜め方向にハケメ調整を行うが、部分

的に砂粒が引きずられたケズリ痕跡も認められる。内外面ともに煤が付着するが、外面側は摩耗によるためかやや不明瞭である。

以上の土器片はおおむねII様式の範疇で捉えられるものであり、弥生時代中期前葉頃のものとみられる。

**竪穴建物2** 62は壺の底部片とみられる。63は把手片で、水差し型土器などに伴うものとみられる。64は蓋などのつまみの可能性も考えられたが、内外面ともに著しく煤が付着し、壺の底部片と推定できる。65は壺または壺の底部片である。66は壺の底部片である。この他に図化し得なかった破片中には、擬似的な流水文を施す小片



第40図 2011・7次 弥生時代遺構出土遺物

があった。II様式のものとみられるが、堅穴建物1よりも後出のものである可能性が高い。

## (d) 出土石器

**堅穴建物1** 67～70の剥片は堅穴建物1の覆土中から検出された。69のみチャートで他はサヌカイトである。73は石錐の可能性がある。石材はサヌカイトである。

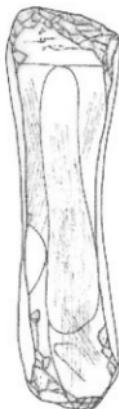
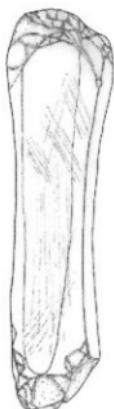
75～77は炉跡南東の貼り床直上で検出された。

75は磨製石斧である。石材は閃緑岩である。

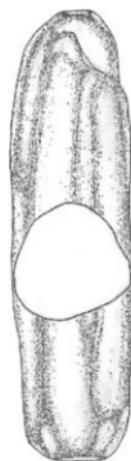
76は砥石で、目が細かく仕上げ用のものとみられる。4面ともに使用痕跡が残り、緩い曲面のものと直線的なものに分かれる。石器の種類によって使用面を使い分けていると推定される。石材は頁岩で風化して灰白色を呈する。京都の鳴滝産の可能性がある。



第41図 2011-7次 弥生時代遺構出土石器



76



77



0 (S=1/2) 10cm

第42図 2011-7次 弥生時代遺構出土石器

77は棒状の石製品で、端部に敲打痕跡が認められ敲石と推定した。磨り石のように用いた可能性もあるものである。

**豎穴建物2** 71・72・74の剥片は豎穴建物2の覆土中から検出された。71のみ、節理面を残す頁岩片で、他はサヌカイトである。74は石錐のように利用されたものである可能性もある。

### (5) 小結

同地点は、堅固な地盤層からなる段丘上にあたる。確認できる最古の遺構は、弥生時代の豎穴建物であった。從来から、本郭上の1994・2次調査、三郭付近の1966・1969年調査において、私部城下層の弥生時代遺物と包含層が検出されてきたが、初めて確定な集落域を確認できた。台地に入り混じる谷を利用し、環濠集落と同等の防御性を備えたものと評価できる。

弥生時代層から中世整地上層までの間に顕著な遺構は認められないが、整地土層中に中世前半の瓦器椀片などが含まれることからは、この頃既に本郭上面が集落域の一部として利用された可能性もある。ただ、遺物量の少なさからは、極めて限的な利用と推定できる。

中世の整地土層は、弥生時代層をも削平し、郭上面の形態を整えたものである。その整地上面上に形成された溝は、郭の軸と方向を同じくする。

また、その整地の際に生じた排土は、同地点より北側もしくは東側で土塁または土壙として利用された可能性が高い。これらの痕跡からは、この整地が郭上面全体の利用に関わる規模のものと認められる。その内容からは、私部城本郭の築城に伴うものとみるのが妥当であろう。

その年代については、本調査区の成果のみでは推定できないが、郭上面の他調査区との成果をふまえると、おおむね16世紀代の中頃から後半のことと考えられる。

## 第4項 本郭上面の調査成果

### (1) 本郭上面における石材の散布

古くから城郭の中心部として認識されてきたこともあり、近隣住民らによって伝えられた情報や、採集された遺物が存在する。その内容には本郭上面の状況を評価するために重要な点を含まれたため、ここで記述する。

本郭上面では、石造物・石材が多く確認されている。本郭中心の一段高く残る部分における耕作時には、人頭大の石が数点出土したとの教示を地元農家より受けた。現在、本郭北東部に安置される中世石仏も、本郭北東部における耕作時に出土したものと土地所有者より伝えられている。現在も畠周辺には地山由來のものとは認めにくい人頭大の石材が散布している。

こうした石類は本郭上面で利用するために持ち込まれた可能性が高い。現在の散布状況や、これまでの耕作に伴う出土状況からは、石仏等の寺院関連の石造物の量は極めて少ないことがわかる。1994・2次調査土坑出土の石・石製品においても石造物の量は少なかったこととも一致する。

この状況からは、石仏などの出土によって寺院の存在を裏付けるものとは捉えられず、周辺の寺院から転用されて本郭上面で利用するために持ち込まれたものと推定するのが妥当である。その用途としては、礎石・井戸枠などが想定できる。調査面積の限られる現況において、郭上面の利用状況を推定するために重要な情報である。

### (2) 周辺の採集遺物

本郭南東部の住宅付近では、丸瓦、平瓦、青銅製盃などが採集されている。これらは、遺存状況が良好なものが多い。

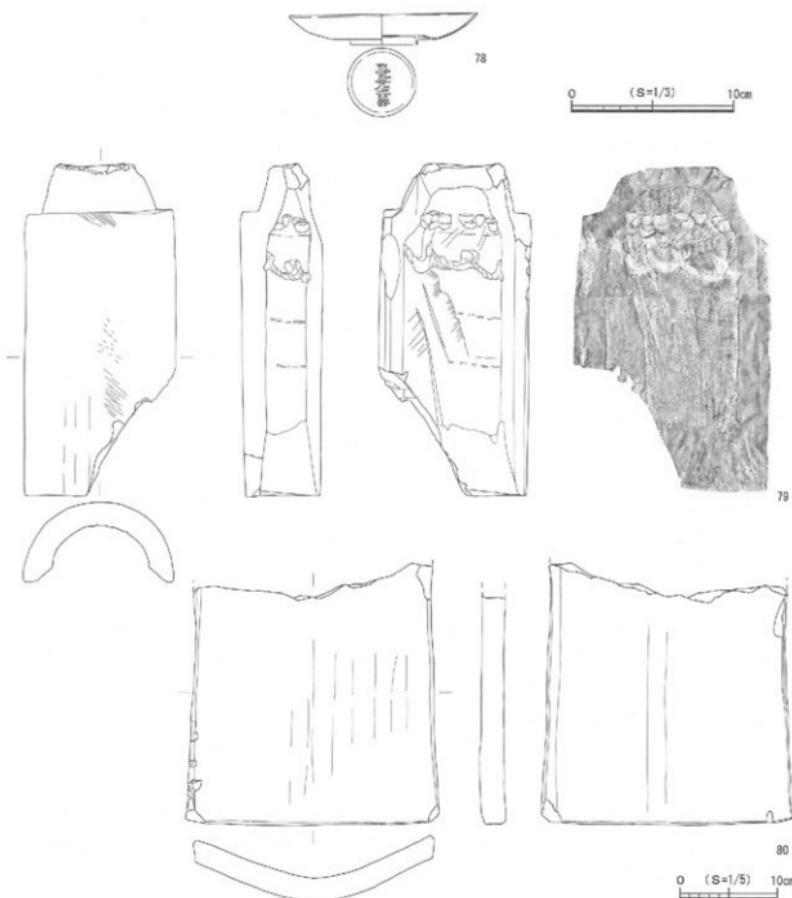
78の青銅製盃は、土圧等によるものか、口縁部の歪みが大きいものの、ほぼ完形で残るもので

ある。底部外面に「長光土器」の文字が浮彫される。年代等の詳細は不明で、近世以後の可能性もある。

79の丸瓦は、広端部に欠損があるものの、法量を明確にできる数少ない資料である。その細部製作技法については、1994・2次調査土坑1出土

丸瓦と類似する。法量は、全長34.2cm、胴部幅15.6cmをはかる。大ぶりなものであり2012・2次調査で同法量のものが出土している。

80の平瓦は、凹凸面の調整技法が1994・2次の土坑1で出土したものと一致することから私部城跡の瓦とみられる。



第43図 本郭採集遺物

### (3) 郭上面の構造

本郭上面には現況で3段ほどの段差面が認められるが、これが地山層を削平し、盛土を行ったものとみられる。低い面から高い面へと記述すると、南東部の4分の1が25.8m付近と最も低く、南西部の4分の1が中間にあたり、北半の2分の1が最も高い。さらに北半の中央部には、10m四方ほどの一段高い畝が残る。こうした形状からは、私郭部本郭上面が、複雑な内部構造を備えたものであったことがわかる。後述するように、郭の南に堀が回らないことも含めて、方形居館として築かれたものではなく城郭として形成されたものと考えられる。

#### (4) 郷周縁の土壌の可能性

現在の郭上面の周縁には土壘などの痕跡は認められなくなっているが、調査の断面図の再検討からは、土壘基礎部が地中に残存するものと考えられた。郭北辺では地盤層によって、東辺では盛土によるものであった。私部城期に郭周縁に存在した土壘を本郭中心側へと切り崩すことによって、現状の平坦面が形成されたとみられる。なお、郭上の遺構に、改修痕跡は認められなかった。

### (5) 土坑1と出土瓦・石の評価

瓦を主体とした遺物群を検出した土坑については、交野市としては城の前身の光通寺を破却した痕跡として考えていた。その一方で、従来から郭中心部で出土したことなどをふまえて、瓦が私部

城に伴うものである可能性も指摘されていた（中井 2013 ほか）。

今回の遺物・遺構の再検討からは中井氏の見方を支持する成果が得られた。まず、瓦の再検討によって、年代が16世紀中頃から後半、その中でも永禄年間から天正年間頃の可能性が高いものが存在することが判明した。その年代から、安見氏の私部城段階のものであることが確定的になった。遺構や周辺の堆積状況の再検討の結果、この遺構が近世以前の最末期の遺構であることが確認された結果とも一致する内容である。

さらに、出土遺物中にわずかに石造物は含まれるもの、寺院の存在を示す仏器等の遺物が顕著でない。石仏等を石材として戦国期城郭で再利用される例は多々みられるが、私部城出土の石造物の量は他の城郭と比較しても少量である。

こうした土坑と出土遺物については、16世紀後葉から末葉に、私部城本郭上面を破壊した痕跡として再評価するのが妥当である。私部城本郭上面ではなんらかの形で瓦が利用されていたことが確認できる。石材の出土からは、礎石を伴うものである可能性もあるが、今後の調査検討課題である。

#### (6) 郭上面形成の年代

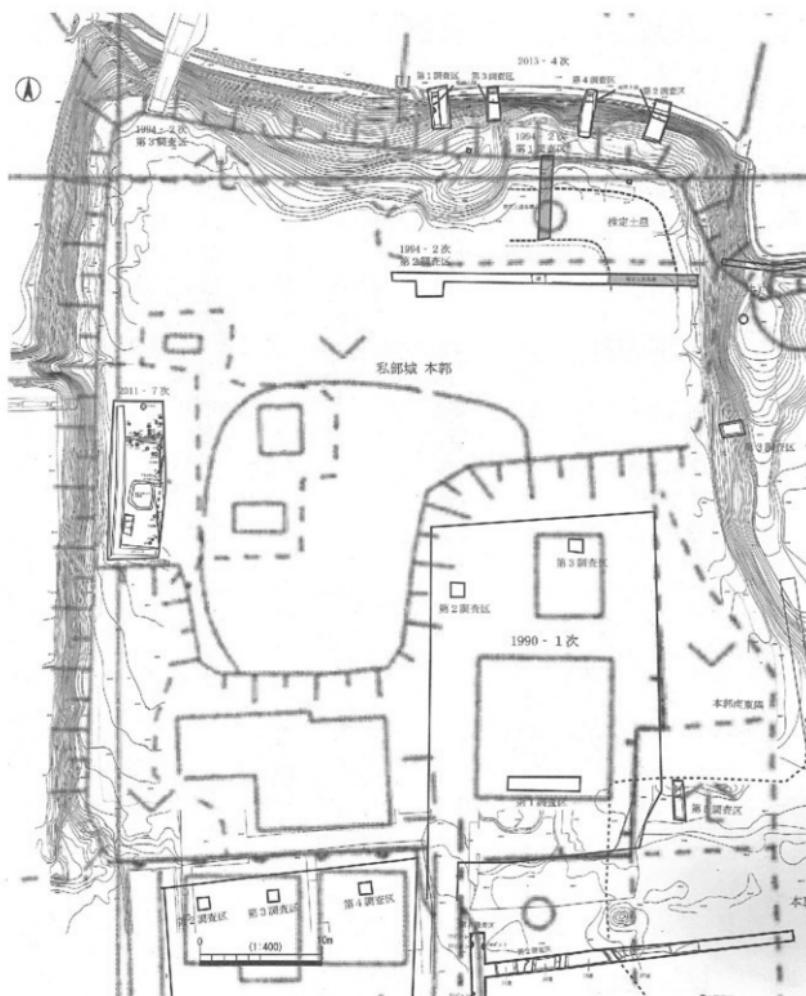
本邦上面においては、瓦こそ多量に出土したものの、上器類の出土量は少なかった。また、郭上面を被却以前に改修したような痕跡も認められなかつた。これらの点から、比較的短期に機能したものとみられる。出土遺物からは、おおむね16世紀中頃から後半頃と推定される。それ以前の郭



#### 第44図 本郭 南北断面合成図

上面の利用状況については、本格的な利用は弥生時代にまでさかのばる。それ以降の郭上面の整地土層にはわずかに中世遺物が含まれるのみで、顯著な遺構・遺物は認められなかった。また弥生時

代以来の谷地形や小さな起伏が存在していた可能性がある。本郭形成以前の同地周辺は、中世の私部集落の中でも、遺跡形成の少ない周縁地であつたものとみるのが妥当であろう。



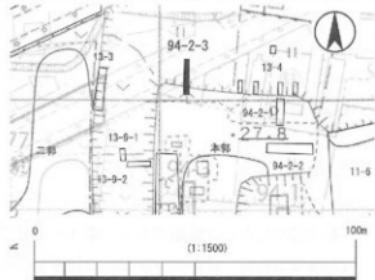
第45図 本郭上面 平面合成図

### 第3節 本郭北側斜面の調査

#### 第1項 1994-2次 第3調査区

##### (1) 調査地点の概要

交野私部城跡の本郭北側斜面は、急角度の切岸を良好に残している（写真13）。またその斜面より北側は現況では一部の水田を残し宅地化しているが、昭和36年頃より前の航空写真では、北側

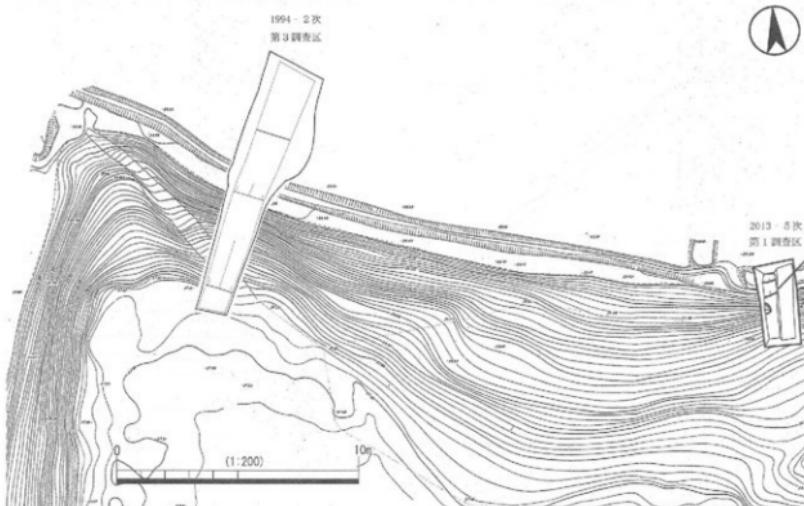


第46図 1994-2次 第3調査区位置図

の百々川・免除川一帯まで、一面の水田が広がっていたことを確認できる（写真1）。

本調査は、私部城跡の範囲内容を確認するため1994年に実施された（小川1995）。その調査目的としては、まず、本郭北側に広がる水田域に、私部城本郭に伴う堀が埋没しているのかどうか確認することがあった。それに加えて、現代表土下の状況は不明であったため、急傾斜の切岸がどのように形成されているのかを確認する必要もあった。

本調査区は、私部城本郭北西隅の張り出した箇所の北側急斜面にある。現在は北東側斜面に農業用の道がつけられている。この道の下り口付近から、斜面の下方に広がる水田面にかけて、水平距離で南北約11m、東西幅約2.5mの調査区を設定した。



第47図 1994-2次 第3調査区平面図

## (2) 層序 (第48図)

概要では堀部のみ断面図を掲載していたが、堆積状況と斜面部から堀部への傾斜変化を明瞭にするために斜面部の断面図を左右反転し、合成して示した。

## (a) 斜面部の現地表土および水田耕作土

現在の斜面部表土(斜面部第1層)は、雑草・樹木などが繁茂する土壤である。現地表面の傾斜は40度ほどである。堀部第1層は、現在の水田耕作土である。

## (b) 堀部の堆積

堀部第3層は現代以前の水田耕作土から泥田状の堆積層である。最下層の第11層から10層付近の段階では上面・下面ともに起伏を大きく残しており、水田耕作に利用された痕跡が認められない。

この付近が私部城段階の堀部の標高にあたるものと考えられる。第3・8・9層の堆積段階で現況に近い水田としての利用が始まったものと考え

られる。

なお、堀部埋土中には、斜面部を切土した際に生じる地山由来のブロック土の堆積は認められない。現況では、斜面の切土によって生じた大量の土は、郭上面へと運び盛土として利用されたものと考えられる。

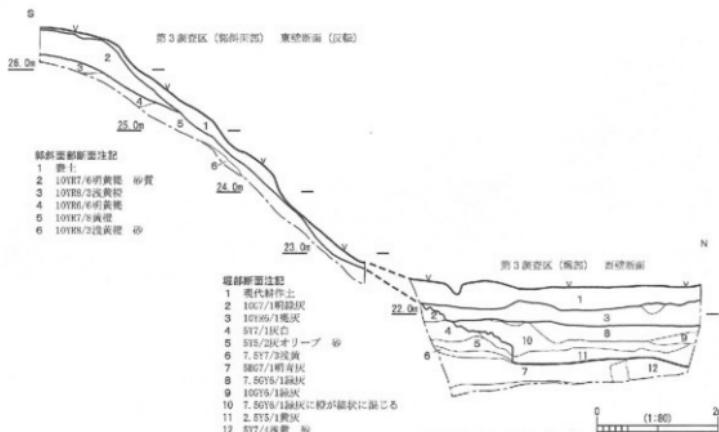
## (c) 郭上面の盛土

斜面部の第2層は、郭上面の縁辺部に堆積する。層の色調は地盤層と類似するが、写真による観察からは、自然堆積状況を保ったものではなく、人為的な搅拌を受けたものであることがわかる。斜面の切土により生じた大量の土を、郭上に盛上した痕跡と考えられる。

## (d) 地盤層

斜面部第3～6層は黄褐色を基調としたシルト・粘土層からなる地盤層である。第3・4層間で自然堆積層の切り替わりが切られて斜面を作られていることが確認できる。

堀部の地盤層は第2・4～7・12層である。



第48図 1994・2次 第3調査区断面合成図

最下部では砂層が堆積する。斜面部と同様に自然堆積層の切り替わりが大きく切られている。堀部第12層上面の北端に緩やかに北側へと落ち込んでいく箇所があり、これが本来の谷地形を残すものとみられる。

堀部第5・6層の北端は、垂直に切り落とされている。同様の層は、2013-3次調査で、護岸を目的とした杭とともに検出されている。築城に伴うものか水田に伴うものか、本調査区では判然としなかった。

### (3) 斜面と堀部の形状

地盤面では30~40度ほどの急な傾斜面を形成している。斜面部から堀部にかけて地盤層の切り替わりが切られている箇所が認められることから、地盤層を切土して急傾斜を作り出したことがうかがえる。

土壌盛土の残存部上面から、堀部底面までの比高は、5.4mである。後述する本郭東部における比高にくらべると1m前後大きい。これは、堀部にあたる開折谷に東から西へと下る地形が残存するためである。

堀部底面の地盤面上には青灰色の泥田状堆積がほぼ水平に堆積する。本調査では明確な堀底施設

は認められなかった。箱堀に近い形状の泥田状の低地が広がっていたと推定できる。

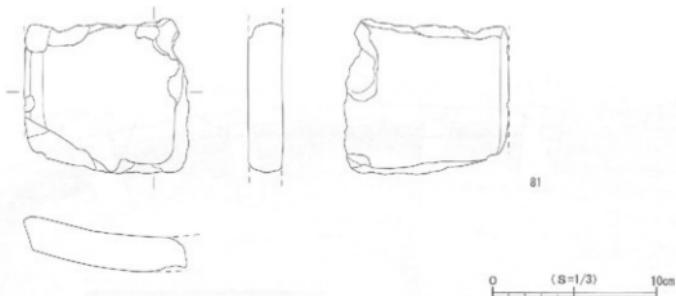
### (4) 採集遺物

第3調査区調査時に、斜面周辺で近世瓦に混じって中世平瓦片が採集されている(第49図)。81は平瓦の側縁部片で、厚さ2.1~2.2cmで、焼成は堅敏である。凹面側をナデ調整する。凸面側の側縁部に調整台設置時のバリ痕跡を残し、ナデなどの調整も行っていない。本郭出土平瓦などと類似するもので、中世後半のものと考えられる。

### (5) 小結

本郭北側の急傾斜面から、堀部までの形態を確認した。斜面の地盤層の堆積状況からは、本来、緩やかに北側へ続いている自然の谷部の肩を切土し、現状の急斜面から堀部の形状を形成したと考えられる。その際に生じた大量の土は郭上に盛土したものとみられた。

堀部に関しては、堀部以外に切土痕跡が認められなかった。自然の谷内部を堀として利用され、平坦に堆積する泥田状の地形が広がっていたものと考えられた。

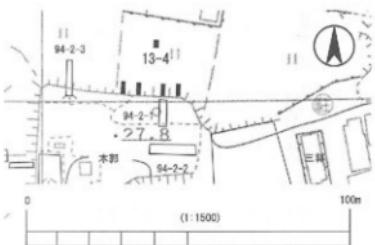


第49図 1994-2次 第3調査区採集遺物

## 第2項 2013 - 4次調査

## (1) 地点と調査にいたる経過

私部城本郭北東部の北側斜面のうち、中央部から東部にあたる。1994 - 2次第3調査区における調査地点の東方にあたる。既往の調査において、不明な点の多かった範囲を確認し、私部城本郭北



第50図 2013 - 4次 調査区位置図

東の郭の根のラインや郭構築状況を確認するため発掘調査を実施した。

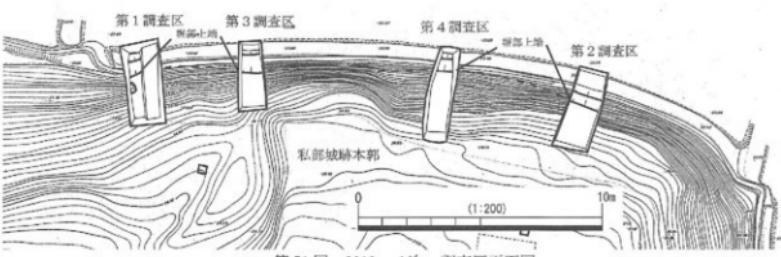
なお、調査前に集中豪雨により斜面が崩落しており、復旧に先立ち崩落の影響を確認することもあわせて目的とした。

まず、郭北側斜面中央部に第1調査区を、北東隅斜面に第2調査区を設定した。この調査区を精査した結果、後述のように、両者の堆積状況に大きな差異が認められた。

次に、堆積状況の変化点を確認する必要が生じたため、両者の間に第3・4調査区を設定した。その後、現況の水田面、すなわち城の機能時の堤部に相当する位置における下層の状況を確認するため第5調査区を設定した。

なお、崩落は地盤面上の現代土壌の範囲にとどまっており、私部城本郭の北側斜面の地盤層については影響が認められなかった。

第5調査区



第51図 2013 - 4次 調査区平面図

## (2) 層序 (第 52・53 図)

第 2 ~ 4 調査区の層序は 1994 - 2 次調査第 3 調査区に類似するのに対して、郭北側斜面の中央に位置する第 1 調査区の層序には異なる特徴が認められる。

## (a) 現代表土・現代耕作土

第 1 ~ 4 調査区の郭斜面では、集中豪雨により、郭上から郭斜面より徐々に郭斜面下方へと流出しつつある現代表土を確認した。草の生い茂る土壤化層である。

水田面にあたる第 5 調査区では、現代の水田に伴う耕作土を確認している。

## (b) 水田面下層

現代までの耕作土層で、第 1 ~ 4 調査区の裾部、第 5 調査区で確認できる。郭斜面を切り込んでほぼ水平に堆積する。

第 5 調査区の水田面下層では、現代以前のシルト・粘土を確認している。層相から、攪拌が強く、現代の水田層に堆積状況の近い第 2 ~ 第 6 層が耕作土層にあたるとみられる。

## (c) 私部城期盛土層・遺構層

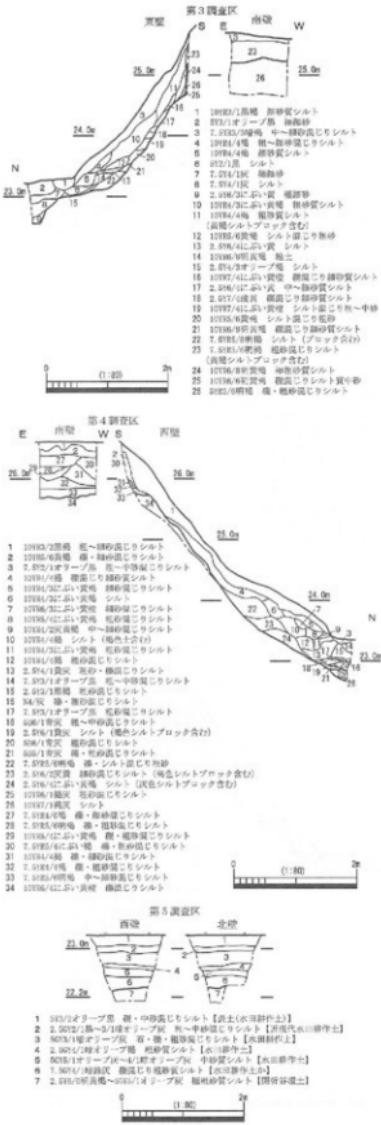
第 2 ~ 4 調査区では、調査区南端の郭上面周縁部にて、標高 25.5m 付近より上に盛土が確認できる。

一方で、郭中央部にあたる第 1 調査区では、地盤層の標高が T.P. 23.7m 付近と低く、郭斜面中ほどから盛土がなされている。これは地盤面上に沿うように交互に質の異なる層が堆積しており、盛土されたものと考えられる。これは後述の自然の開析谷を築城にともない埋め込んだものと考えられる。また、その裾部には、斜面に掘り込まれたピットが確認できる。

出土遺物や層序からはこれらの層が私部城築城に伴う堆積層に比定できる。



第 52 図 2013 - 4 次 第 1・2 調査区断面図



第53図 2013-4次 第3~5調査区断面図

(d) 地盤層

地盤層は黄褐色のシルト・粘土で、白色礫が多く混じる。第1~4調査区の東壁または西壁断面から、自然堆積層の切り替わりに認められる傾斜が切岸斜面によって切られていることがわかる。本来の北側斜面の傾斜はより緩やかなものであったことが確認できる。

また、第1～4調査区の南壁断面で確認できた地盤面の比高から、郭中央部の地盤面は、郭東半部に比べて1.8mほど落ち込むことが判明した。

同様の地盤面の落ち込みは 1994 - 2 次調査の第 2 調査区でも確認できることから、本来は郭中央部に南北に延びる開析谷が存在したと認められる。前述のようにこの谷は私部城築城時に埋没させられたものとみられる。現況で、郭中央部に緩やかな落ち込みが存在し、裾部のラインも中央部で南側へ入り込む形状は、この自然地形をある程度反映したものと考えられる。

### (3) 郭中央部の北側斜面の形状と遺構

第1調査区の斜面上方では近現代に土取りが行われたことを土地所有者より伝えられていた。しかしながら、その土取りの影響を受けたとみられる堆積土は比較的上層にとどまっており、下層では私部城期のものとみられる堆積層が確認できた。同地点のみ T.P. 23.7m 付近で地盤層が確認され、それより上の斜面の大半を盛土により構築している。斜面の傾斜は 35 度程度と他の調査区の斜面に比べ緩やかである。またピットが裾部で検出された。また、斜面から堀内で中世瓦の破片十数点（第 54 図-82・83）が出土した。ここでは雁振り瓦片数点（第 55 図-86・第 56 図-90）、鬼瓦の可能性のある道具瓦 1 点など、大型の瓦の破片（第 56 図-88）が目立った。なお、古代の平瓦 1 点も含まれていた。

私部城本郭の北側斜面では初めてピットが確認されたほか、遺物も集中して一定量出土している。

この点からは、郭北側斜面中央部には、私部城に伴う門などの施設が存在したものと推定される。ここで中世前後の瓦が集中することからは、瓦を利用したものであった可能性が高い。

#### (4) 郭東半の北側斜面の形状

北側斜面の崩落個所の東端部に第2調査区、西端部に第4調査区を、西側崩落個所の東端部に第3調査区を設置した。これらの調査地の状況は1994-2次第3調査区の堆積状況と類似していた。いずれの地点も、自然堆積層の切り替わり線を傾斜面が切っていることから、地盤層を削り、45~50度の急傾斜を作り出していることが確認できた。

また、T.P. 25.6m付近から上の郭上面に当たる部分に、盛土層が確認された。これらの盛土は郭上面をかさ上げしたもの、または、郭周縁にめぐらされた土壘の堆積層と考えられる。1994-1次第2次調査区の成果からは土壘の可能性が高いものとみられる。

#### (5) 推定される堀部底の形態

堀部内の深さを確認するために設定した第5調査区では、現地表下約1mのT.P. 22.3m以下で、攪拌をうけた砂質シルト層から、自然堆積層とみられるシルト質極粗砂に切り替わる。この自然堆積層の上面が私部城段階の底面にあたるとみられる。

同層と、第1~4調査区で確認された地盤面ラインを合わせて堀底の形態を推定すると、比較的平坦な泥田状の地形が広がっていたものと考えられる。自然の湧水により浅く溜水していた可能性もある。その底面には現況で堀底施設の存在は確認できない。現在の調査状況からは、箱堀状の自然地形を、天然の堀として利用したものと評価できる。

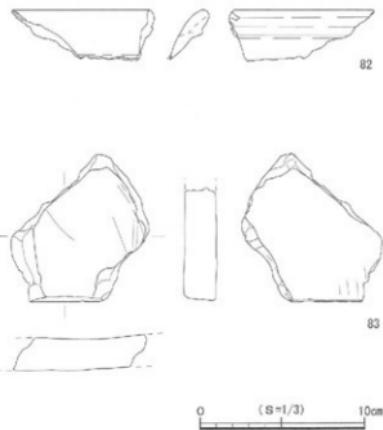
#### (6) 出土遺物（第54図）

堀部の堆積層中、第1調査区の斜面上で主に遺物が出土している。また、わずかではあるが、郭周縁の盛土中からも出土品がある。

##### (a) 堀部出土

第54図は、第3調査区の堀部より出土したものである。82は、江戸時代の炮烙の口縁部片である。津田などの枚方市域で生産されていたものとされる（難波1992）。堀部の堆積層で比較的下層から出土したものである。上層からの混入を考慮しても、堀部の堆積が私部城期においては現況ほどの標高がなかったことを裏付けるものである。

83は、第3調査区で出土した平瓦の広端部片である。焼成と調整技法から中世段階のものに比定できる平瓦である。郭上から流出したものとみられる。



第54図 2013-4次 第3調査区堀部出土遺物

## (b) 第1調査区（郭中央部斜面）出土

85は西壁断面精査時に下層より検出した。私部城期の盛土上に堆積したものである。廃城後に郭上より流出したものとみられる。平瓦の狭端部片である。

84は、第1調査区付近で採集された丸瓦片である。凸面側は丁寧に縦方向にナデ、凹面に糸切り痕と格子状の細い紐があたった痕跡が認められる。

第56図の遺物は第1調査区斜面を掘り下げ中に、表土下から盛土上面で出土したものである。やはり、郭上面より流出したものとみられる。

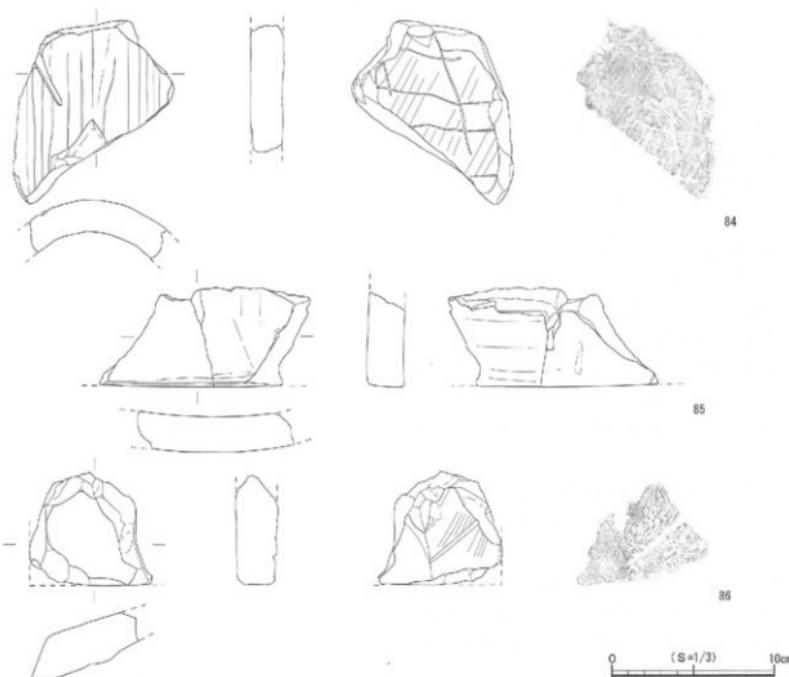
87は同調査区で出土した平瓦片である。裏面

に粗い格子目による叩き痕跡を残す。本調査区で確認された1点のみの古代瓦である。

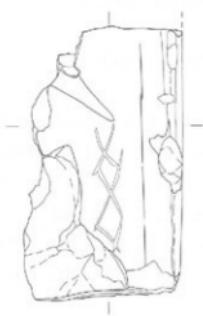
89は平瓦である。丸瓦部から平瓦部への接合部付近にあたる。糸切り痕を確認することができ、中世以前のものと確認できる。また厚さが2cm前後である点は本郭上面出土の平瓦と同様であり、中世後半のものと考えられる。

90は雁振り瓦である。表面に櫛状の工具で凹線を施す。裏面の製作技法から中世のものと考えられる。

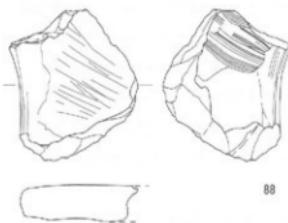
88は鬼瓦片である。下縁の一部とみられる。糸切り痕を残すことや、裏面の製作技法から中世のものと確認できる（小林1991）



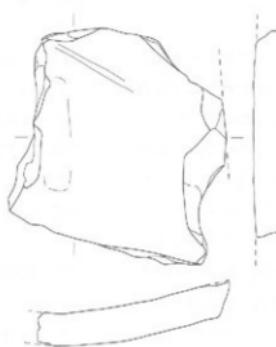
第55図 2013-4次 第1調査区出土瓦1



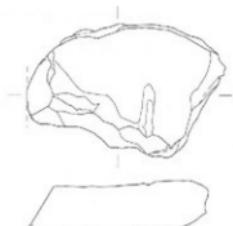
87



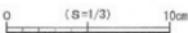
88



89

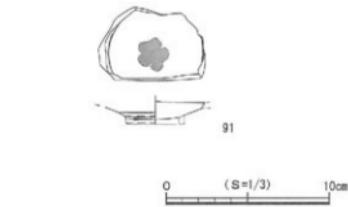


90



第56図 2013-4次 第1調査区出土瓦2

## 第3項 本郭北側斜面の調査成果



第57図 2013-4次 第4調査区出土遺物

91は、第4調査区南壁の第26層付近で検出された。染付楕の底部片である。見込みに青色の着色料で花弁状の文様が描かれる。

## (7) 小結

地盤層を切って急傾斜を作り出す第2～4調査区の郭北東部の状況は、1994年度調査第3調査区で確認した本郭北西部の状況と類似していた。

これに対して、盛土も行い、やや緩やかな斜面をなす第1調査区の状況は大きく異なっていた。第1調査区のみで斜面にピットが存在したことや、中世段階の瓦が多く出土したことなどまえると、第1調査区周辺に私部城段階の施設があった可能性が考えられた。その詳細については、今後の調査の中で明らかにすることとしたい。

また、現況で本郭上面北半の中央部にあたる1994-2次第2調査区で認められた自然の谷地形が、今回の第1調査区の断面においても認められた。同様の形状は郭上中央部において実施された1994-2次第2調査区の成果もあわせると、自然の谷地形と考えられた。私部城築城時にこの谷地形を盛土によって埋没させて郭形状が形成されたものと考えられる。なお、この谷地形は、2011-7次調査で確認された居住域の東を開くものである。弥生時代の集落域の中で、天然の環濠として機能を果たしたものと推測される。

## (1) 北側斜面中央部の谷地形

北側斜面の東端、西端の地盤面標高がT.P. 26.0mと高いのに対して、中央部の地盤高はT.P. 23.7m前後まで落ち込んでおり、谷状の地形が存在することを確認した。同様の落ち込みは、本郭中央部にあたる1994-2次調査第2調査区でも確認できることから、自然の谷地形と考えられる。

弥生時代頃にはこの谷地形は埋没していなかった。2011-7次調査において確認された弥生時代の居住域を開み、天然の環濠としての役割を果たしたものである。

また、その層序や出土遺物からは、私部城築城にあたってこの谷部を埋め本郭上面を形成したものと考えられた。その際は、北側斜面の形成によつて得られた堆土が利用されたものと推測される。

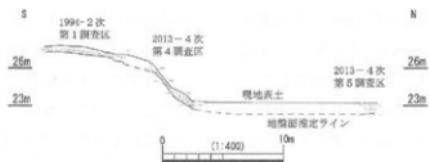
本郭北側に認められるやいびつな形状は、自然地形の影響を受けたものと考えられる。

## (2) 北側斜面中央部の遺構

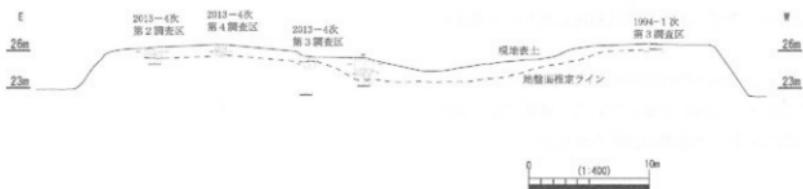
自然の谷地形を埋め込んで形成された本郭上面においても、中央部には、東西長10mほどの落ち込みが確認できる。

その下方に設定した2013-4次第1調査区では、やや緩やかな斜面上に盛土が水平堆積する状況が確認できた。また、その下方の斜面上では、ピットが検出され、北側斜面の他調査区とは異なる堆積状況が確認できた。

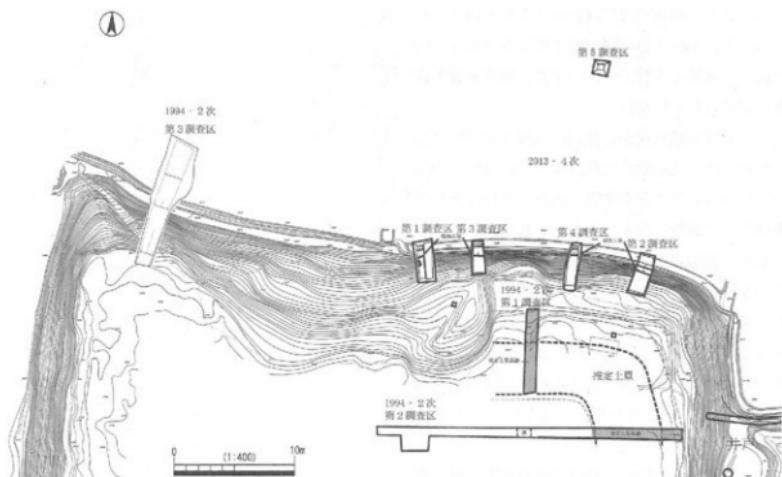
また同調査区では、雁振り瓦などの瓦が検出された。同地点に通路、門などの施設が存在した可能性がある。この調査区の南にあたる郭中心部では、遺物が集中して廃棄された土坑も確認されており、郭中心部付近の一連の遺構である可能性も考えておきたい。



第58図 本郭北側斜面南北断面合成図



第59図 本郭東西断面合成図



第60図 本郭北側斜面平面合成図

### (3) 切岸の形成

本郭北側斜面の西部にあたる 1994 - 2 次第 3 調査区と、東部にあたる 2013 - 4 次第 2 ~ 4 調査区では、地盤層を削平した切岸が確認された。

40 度 ~ 50 度の急傾斜を形成し、比高は本郭東半で 3 ~ 4 m、西半で 4 ~ 5 m と、西に向かうにつれ大きくなる。これは東から西へ向かって低くなる開析谷の地形を反映したものである。

また、切土によって生じた地盤層由来の排土が堆積した痕跡は堀部底では確認できていない。これに対して、郭上面では地盤面上に大きく盛土を行った痕跡が認められたことから、切岸により生じた排土を郭上面の形成に利用したものと考えられる。

なお、切岸の斜面はやや屈曲する箇所もあるがおおむね一直線に傾斜している。現状では、切岸の改修を行った痕跡は認められなかった。

### (4) 北側の堀部の形状と利用

堀部底面の調査では、現況のような水田となる以前から、泥田状の堆積が続く開析谷がのびていた様子が確認できた。その一方で、堀底施設の存在は認められていない。

こうした堆積状況からは、私部城の機能時には、本郭北には、泥田状の地形が緩やかに開析谷内部に広がっていたことが確認された。これは天然の箱堀として機能したものと考えられる。

なお、堀部埋土では出土遺物はほとんど含まれていない。これは、中世前半の遺物が一定量出土した私部城南の開析谷の埋土の状況とは大きく異なっていた。このことからは、私部城北側の開析谷内部について水田等としての利用が始まる時期は中世前期にまで遡るものではないことがわかる。

『室町殿日記』では、「城は北は高津野と申て露ふかき沼にて馬の足立かたし」とある。「高津」

は私部の北に位置する郡津のことを指すものとみられ、私部城域の北側から郡津の間に踏み込み難い沼地が広がっていたとする記述である。

堀部の調査で得られた成果は、この記述に沿うものである。私部城本郭の北側に広がる堀部については、人為的に掘削されたものではなく、沼などが広がる自然の低地部を利用し、天然の堀としたものと位置づけられる。

私部城が廃城になって以後、『室町殿日記』の成立する江戸時代初め頃までは自然の沼地であったと推定できる。現況のように水田利用が開始されるのは、江戸時代の途中からと考えられる。

## 第4節 本郭・三郭間の堀部の調査

### 第1項 2011 - 6次調査

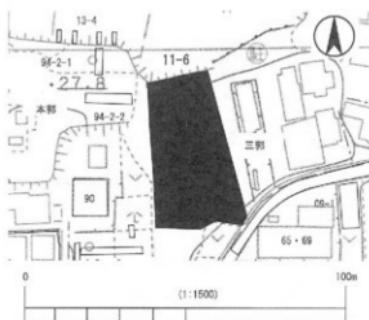
#### (1) 調査地点の概要

本郭と三郭の間の堀部に相当する。調査地の北側を東西方向の畦畔によって区切られ、北側が低くなる段差となっている。昭和初期の航空写真と測量図では、本郭・三郭間の堀跡が水田として利用されている状況が確認できたが、現況では、その畦畔付近から南に向かって盛土が分厚く置かれ、堀はほぼ埋没している状態であった。

この盛土は、昭和57年（1982）に二郭を横断してつくられた大阪市水道道の工事堆土を持ち込んだものと近隣の地主より教示を受けた。現在、市で保管している本郭・三郭間の堀部の写真（写真5）はいずれもこの盛土後のものである。

なお、当地点のうち、畦畔と本郭の接合部の南には近年まで使用された農業用の井戸が露出していた。現在視認できる部分ではコンクリート舗装されたものであった。ただし、近世以前の井戸を踏襲している可能性も残るものである。また、同地点で井戸の設置が可能であることを示すものである。

本郭・三郭間を埋める盛土上にて宅地造成が行



第61図 2011 - 6次 調査区位置図

われることとなった。それに先行して擁壁等の設置により、城郭に破壊が生じる可能性が高い部分について発掘調査を実施した。

2011 - 1次の第1～3調査区は、造成工事施工により、遺構面破壊が生じないか確認するために設置したが、いずれも現代の盛土内におさまるものだった。

2011 - 6次の第4調査区は造成に伴う擁壁設置により、遺構面破壊が生じることが確定的であったため設定した。本郭東斜面、三郭の北西隅、そして両者の間の堀部の状況を確認している。

第5調査区は土地境のブロック塀設置にともない、私部城本郭南東部の突出部に一部破壊が生じる可能性があると判明したため設定した。



第62図 2011 - 6次 調査区平面図

(2) 層序 (第 63 ~ 66 図)

(a) 表十～現代盛十

現代表土はいずれも耕作などの土壤である。

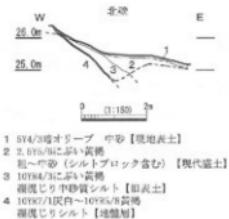
現代盛土は、本郭・三郭間の水田面上におこなわれたものであり、主に、第1～4調査区（本郭～3郭堀部）で確認された。1982年の水道設置工事に伴う排土が持ち込まれたものである。

第2層は現代盛土以前の水田耕作土である。青灰色の膠・砂混じりシルトから構成される。

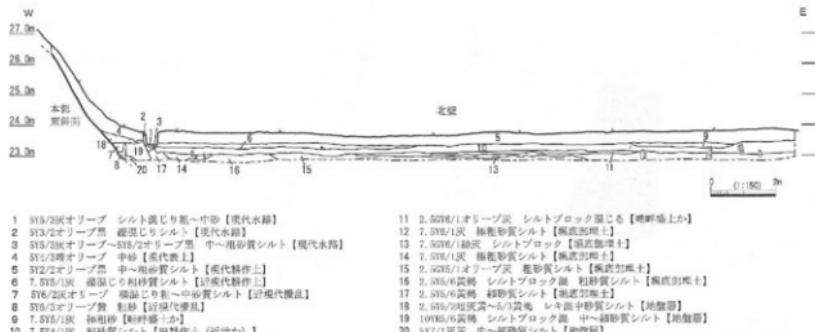
(b) 旧表土~私部城段階地表土層

現代盛土以前の表土層は、第1・2調査区では検出できず、第3～5調査区で確認できた。

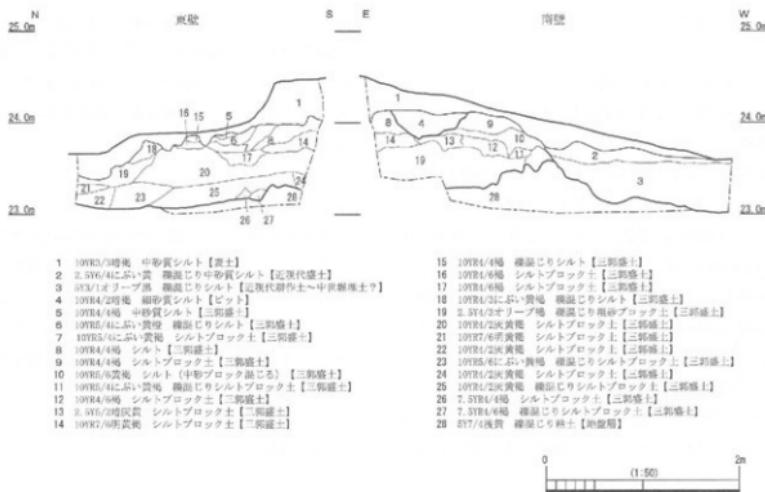
第3調査区では、本郭東斜面の地盤層上に堆積する土壤化層である。



第63図 2011-6次 第3調査区断面図



第64図 2011-6次 第4調査区断面図



第65図 2011-6次 第4調査区南壁・東壁断面図

## (d) 地盤層

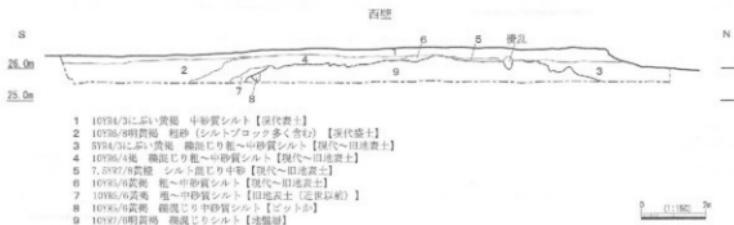
第3調査区、第4調査区の本郷東斜面では切土されたとみられる地盤面の急傾斜が確認できる。その傾斜は、最大で約55度ほどである。特に堀への傾斜変換点付近では地盤層の切り替わりを切っている痕跡が認められ、この斜面が切土によるものと判断できる。

第4調査区の堀部断面の最下層で確認されているシルト混じりの砂は脆弱なものである。谷部の

## 地盤層と考えられる。

第4調査区南壁・東壁では堅固な地盤層が確認されているが、標高はT.P. 23.3m前後と低いものであり、先述の盛土により三郷南東端部を形成していることがわかる。

第5調査区ではT.P. 26.2m付近ときわめて浅い地点で検出された。また地盤層の切り替わりを切る痕跡も認められ、切土により現在の形状に整えられたことがわかる。



第66図 2011-6次 第5調査区南壁・東壁断面図

## (3) 遺構

## (a) 本郭・三郭間の堀部

水田耕作に伴う現地表土下面では、ほぼ水平に堆積するシルト・粘土のみを確認しており、顕著な落ち込み等は認められなかった。箱堀状の平坦な堀底の形態であったと考えられる。

その規模は上端幅で東西約25m、下端幅で約20mを測る。底面標高はT.P. 23m付近に求められ、本郭上面との比高は4m前後となる。本郭東側の斜面は直線的に切土されており、最大で55度ほどの急傾斜をなす。

三郭側の斜面形態は十分に明らかになっていないが、今回の調査成果からは、本郭の斜面に比べて緩やかなものであったと推定できるようになつた。

## (b) 本郭突出部の東先端

地盤層を切土して形成されたことが確認された。南東部に突出部を持つ本郭の形態は、郭の形成当初からのものと確認できた。

外枠形虎口として機能した可能性も指摘されているが（馬部2009）、今回の調査地点の中では、虎口状の構造は認められていない。

また、郭上面から南斜面への切り替わり部付近

にピットとみられる堆積が確認されている。同様の地点にピット痕跡が認められる例は、二郭東斜面の2013-3次調査地点でも確認されている。郭周縁に設けられた防護施設の痕跡である可能性がある。

## (c) 三郭北西隅

旧地表土層下で、三郭の形成に用いられた盛土を確認した。三郭北西隅においては、地盤層の標高はT.P. 23.2～23.3mほどと極めて低く、この上に盛土を行って形成されたことが判明した。同地点では、年代の手がかりとなる遺物は検出されていない。

## (4) 小結

以上のように、宅地造成に伴う部分的な調査ではあったが、本郭から三郭間の堀部および郭端部の形状及び構築方法について一定の成果が得られた。出土遺物は極めて少なく、年代等の詳細については周辺の調査成果をふまえて評価することとなる。ただ、本調査区でも、郭、堀部の改修や拡張などの痕跡は認められなかった。この点は他の調査地点と同様であり、一連の築城工事の中で同時期に形成されたものである可能性が高い。



第67図 本郭・三郭間の堀 東西断面合成図



第68図 本郭南東突出部～三郭 東西断面合成図

## 第2項 2013 - 6次 第2・4・5調査区

## (1) 調査地点の概要

本郭の南から南東部に位置する。1990 - 1次調査地点の南にあたり、1986 - 2次調査で確認された平坦面が広がる。昭和36年頃までの航空写真では、南北にのびる本郭・三郭間の堀が同地点付近で西に屈曲して入り込んでくることが確認できる。

これが、現代の盛土により埋没したことによつて、現状では平地となっていた。今回の発掘調査において本郭周辺の状況を確認する中で、本郭・三郭間の堀の終点を探るとともに、その形成年代等の詳細を明らかにするために設置したものである。

第2調査区は、堀の西端をおさえるために、南北1m、東西25mで設定した。調査区東半では堀を埋没させた現代盛土を確認し、西半で私部城に関連する遺構と地盤層を検出した。

第4調査区は、堀の南端をおさえるために南北2.5m、東西1mで設定した。調査区北半で現代盛土を確認し、南半で地盤層を検出している。

第5調査区は、堀の北端をおさえるために南北

2.7m、東西1mで設定した。ここでは現代盛土から旧表土のみを検出している。

## (2) 層序 (第71~73図)

## (a) 現代表土～現代盛土

各調査区第1層は、現代耕作土または竹林造成土で構成される現代表土である。表土上面では、本来の堀の起伏はほぼ認められない。

第2調査区第2～3層・第4調査区第2～4層・第5調査区第2層は現代盛土である。第2調査区で約2.3m・第5調査区で約2mと分厚く堆積する。特に第2調査区東半はこの盛土のみを確認しているため、断面図を省略している。その構成土中には、周辺の地盤層由來のブロック土も多量に含まれており、二郭を切土した道路設置時の排土が持ち込まれたとの証言を裏付けるものである。

## (b) 盛土以前表土

盛土下層は近現代までの表土である。

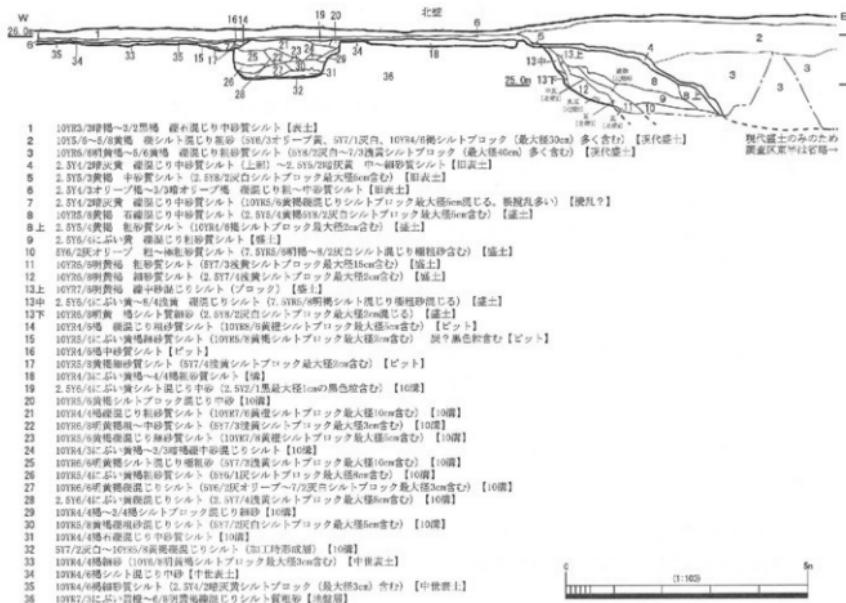
第2調査区第4～6層・第4調査区第5～7層・第5調査区第3層（斜面部）・第5層（水田面）が対応する。第3層は、盛土以前の近現代表土である。同層までに近世以後の陶磁器類が含まれる。



第69図 2013 - 6次 調査地点位置図



第70図 2013 - 6次 調査区位置図



第71図 2013-6次 第2調査区断面図

## (c) 中世末盛土

地盤層・土壤化層由来のブロックを含むものである。第2調査区、第4調査区で主に確認された。第2調査区第8～13層・第4調査区第9～16層に対応する。第5調査区で認められる第7・8層の堆積がこれに対応する可能性がある。

いずれも郭上方より、堀斜面下方へと供給された堆積土である。近現代遺物は含まず、中世の瓦片を主とした遺物を含む。また切岸状の地山上に堆積するもので、郭周縁にめぐらされていた土壌盛土が切り崩されたものとみられる。

## (d) 構造埋土・中世表土

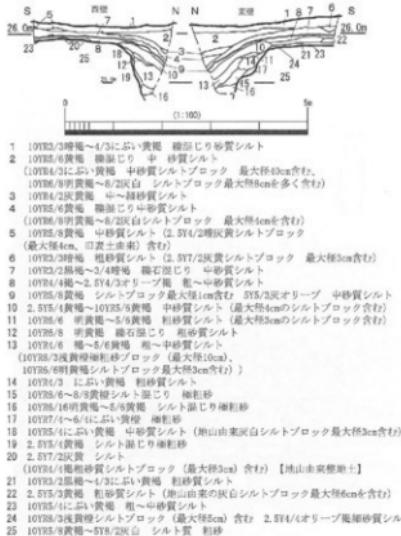
第2調査区の旧表土下、地盤層直上で検出された。第18・34層で確認された浅い溝、および第19～32層で確認された10溝が対応する。特に

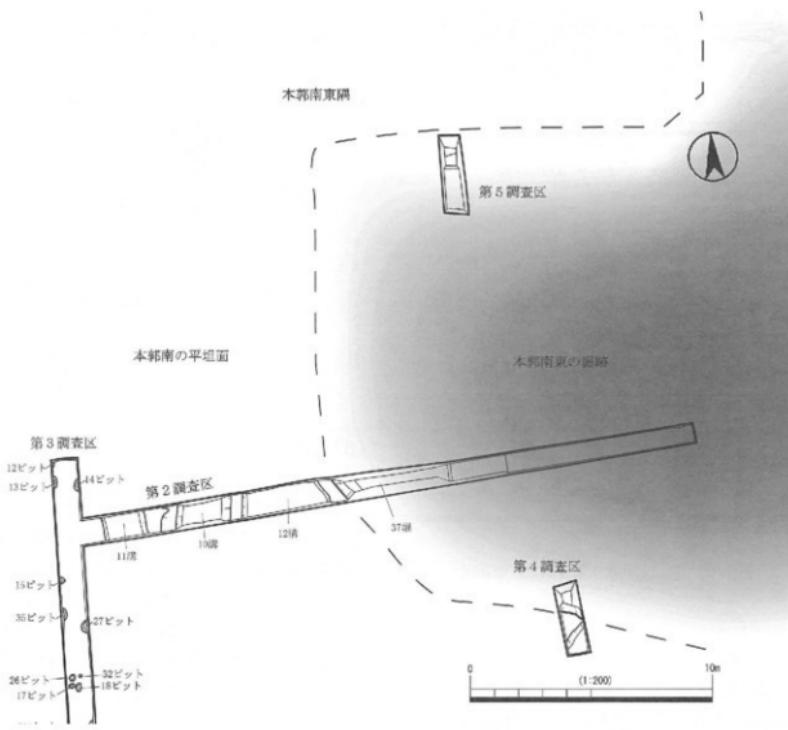
10溝埋土には地山由来ブロック土が含まれ、中世末の切岸状に堆積した盛土と類似する。また出土した瓦等の遺物も類似したものである。なお、10溝埋土上に堆積する第14～17層は溝に伴う遺構埋土の可能性がある。中世末盛土と近い時期の堆積層のものと考えられる。

18溝では遺物が含まれず、地山由来のブロック土が認められず、異なる機会に堆積したものである可能性が高いものと考えられる。

なお、盛土下面の第2調査区第12層下面・第4調査区第17層下面には斜面上に凹みが認められる。これも柱を据えるなどした痕跡である可能性がある。

また、平坦な地盤層直上に薄く堆積する第2調査区第33・35層、第4調査区第20・23層は中世段階の表土である。





第75図 2013・6次 第2～5調査区平面図

**10溝** 切岸沿いの溝の内側でやや角度の異なる幅2.2m、深さ0.6mの溝である。溝より西の平坦面より供給された埋土上半から、中世瓦片、土師器皿小片などを検出している。出土遺物の内容・層相が、切岸状の盛土と類似することから、同一機会に埋没した遺構と判断できる。溝の方位が南北に延びることもふまえると、私部城段階に平坦面上で機能していた構であると考えられる。堆積状況からは37堀と同時に埋没したものと位置付けられる。堀およびその周囲にめぐらされた防御施設に伴うものと推測される。

**11溝 10溝の西**で検出された。幅約1.8m、深さ0.1m以下の極めて浅い溝である。同溝からは固化しないほどの瓦器碗などの小片が検出されており、14世紀前半ごろまでのもの遺構とみられる。

溝の方向はやや西側に振れていること、また私部城南の平坦面の機能時には極めて浅い溝であることからも、私部城段階に機能したものとは考えられない。私部城期以前の中世集落に伴う構と考えられる。私部城築城時の平坦面形成に伴い大きく削平された痕跡と推定できる。

## (4) 出土遺物 (第76~79図)

## (a) 切岸 (37堀) 出土遺物

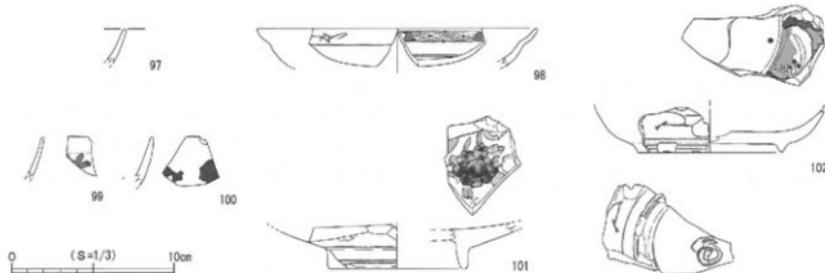
平垣面上からの切岸直上への流出土中からは中世の瓦片が出土した。92~95は丸瓦小片である。端部の残るものは鋭い形態で、厚さは2.4cm前後

と厚い。92、93は平瓦に近い焼成で、94は須恵質焼成に近い。

96は平瓦片である。厚さ2.3cm程度、側縁から狭端部片で凹面を横方向にナデ、側縁端部を面取りする。凹面狭端部の面取り幅は残存部で1.7cm前後と広い。断面灰白色で外面は黒く焼成く。凸



第76図 2013-6次 第2調査区37堀出土遺物



第77図 2013・6次 第2調査区堤部上層出土遺物

面はナデ後に砂粒が付着し、端部も面取りせず、凹型台のバリ痕が残る。また、上層旧表土層（北壁第4層）付近では、近世以後の陶磁器片が含まれていた。97～102は第2調査区の切岸壙肩部の埋土のうち、北壁断面第4層中で出土した近世以後の陶磁器片である。

#### (b) 10溝出土遺物

いずれも溝埋土上部の10溝埋土の第21～25層から検出された。堆積状況から、郭平坦面上の西側から供給されたものとみられる。

103は、溝埋土上部の第21層出土の染付椀皿類の高台部小片である。やや青みがかった白色の素地に、青色の呉須により外面に絵柄を描くが、小片のため不明である。小片でかつ上層からの出土であり、混入品の可能性も残る。

104は土師質土器の鉢部である。羽釜か、炮烙とみられ詳細は不明であるが、煮炊に利用された土器片と考えられる。

105は土師質土器の端部片である。台付器種の脚台部片とみられる。外面上半に指押さえ状の凹みが連続して三か所ほど認められる。

106は丸瓦部瓦当の外区から内区の破片であり、灰白色を呈するものである。内区の厚さ0.9cmと薄い。鳥食の破片である可能性が考えられる。

108は面戸瓦片である。凸面側は横方向にナデる。凹面側は全体を工具により横方向にナデてお

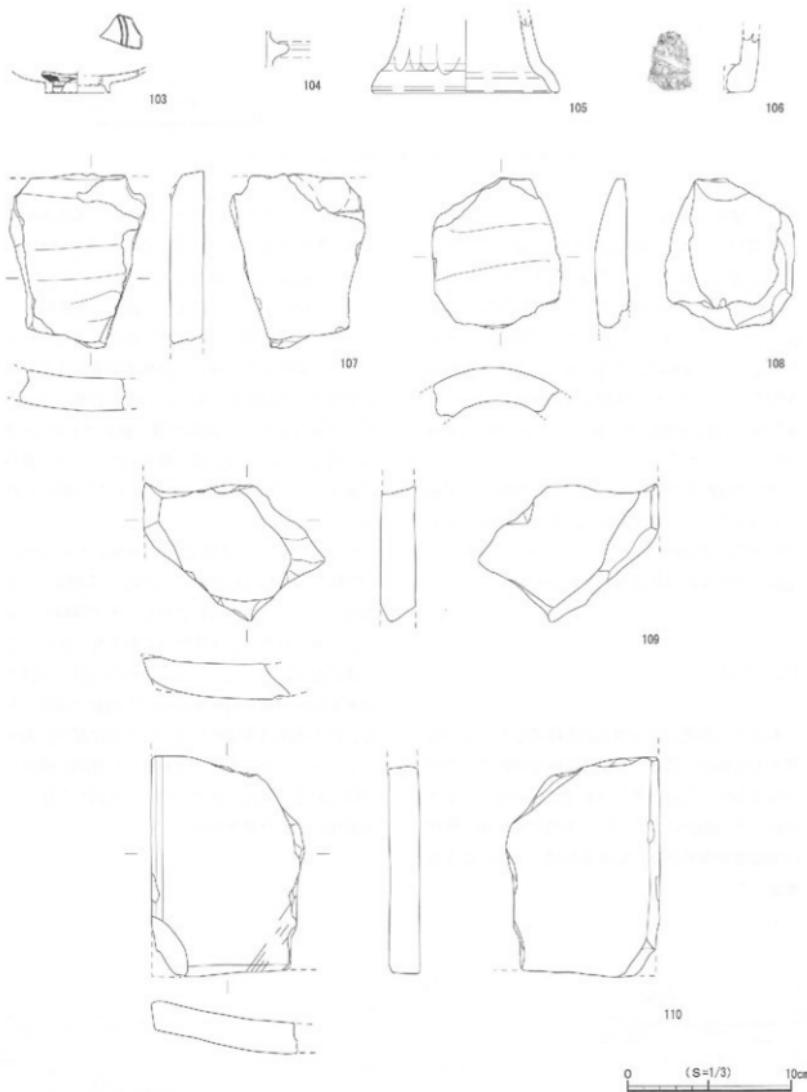
り、砂粒をひきずった痕跡が認められる。凹面端部を幅広く面取りする。

107・109・110は平瓦片である。107は狭端部片で凹面は横方向にナデ、狭端部の面取り幅は残存部で1.2cmほどである。凸面はナデにより平滑にした後に砂粒が付着している。110は、広端部から側縁部までを表す破片で、凹面は横方向にナデ、側縁端部、広端部を面取りする。凸面側は板状工具により縦方向にナデるが、端部は面取りしない。また凸面には砂粒が付着し器表は荒い。

出土瓦の特徴は、本郭上の1994-2次調査土坑2出土瓦と類似するものである。16世紀中頃～後半ごろのものとみられる。10溝の埋没時期が平坦面上の層序の中でも近世以前の最末期にあたることとも合致する。

#### (c) 現代盛土出土瓦類

今回図化していないが、第2調査区東半の現代盛土中からも丸瓦・平瓦片が検出された。これらの特徴も、本郭上の1994-2次調査土坑2出土瓦と類似し、16世紀中頃～後半頃のものとみられる。これらの瓦を含んでいた現代盛土は、二郭周辺の切土時に生じた排土を持ち込んだものと地元住民より教示を受けている。このことからは、二郭付近においても本郭と同様の瓦利用がなされていたことを示す資料である。



第78図 2013・6次 第2調査区10溝出土遺物



第79図 2013・6次 第2調査区11溝出土遺物

## (d) 11溝出土遺物

11溝は10cmにも満たない起伏を残す溝であるが、瓦器挽片などの中世遺物が一定量出土した。

111は瓦器挽口縁部片である。口縁端部をやや鋭くとがらせ、内面側に浅い沈線を施す。内外面ともに、ナデ痕跡は認められるが、ミガキ痕跡は不明瞭になっている。橢葉型瓦器挽IV期のものとみられ、おおむね13世紀後半から14世紀前半頃のものとみられる。

112は陶器の底部片である。小片であり、器種は不明である。内外面ともに回転ナデにより仕上げた後に、外側に黒褐色の釉を施している。断面および内面は灰黄色を呈している。

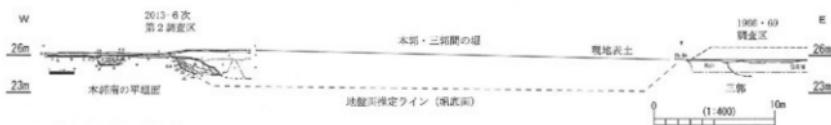
## (5) 小結

本郭・三郭間の堀の西端部を確認した。その堀部の上端幅は、第4・5調査区間で確認された南北幅で20mとなる。推定される比高は3mほどとなる。その斜面については、本郭北側斜面と同様に地盤層を削り込み、切岸を形成していたことを確認した。

堀の端部が確認されたことにより、本郭南側を囲繞する堀は存在せず、通路状の平坦面が本郭の南に張り付くことを確認できた。

この平坦面上より堀斜面へと流出した堆積上の存在からは、平坦面上に土星が存在したものとみられる。平坦面上で検出した数条の溝のうち、浅く不定形の12溝は、郭上の土星の基礎にあたるものとみられる。12溝より西で検出された10溝は、南北方向にのび、深く残るものであり、郭平坦面上の土星と同時に機能したものと考えられる。

出土遺物では、平坦面上の10溝および、切岸(37堀)の郭斜面上の盛土中に瓦片が比較的多く混在していたことが注目される。その種類も、平瓦、丸瓦に加えて、小片ながら軒丸瓦、面戸瓦など豊富なものであった。その特徴からは、本郭の廐棄土坑出土瓦と同時期のものと判断できる。また、出土状況は廐城時の片づけ土中に瓦片が混在していたことを示すものである。私部城の機能時段階に同地点周辺に瓦を利用する施設が存在した可能性を示す資料となる。



第80図 本郭・三郭間堀部 東西断面合成図

### 第3項 本郭・三郭間の堀部の調査成果

#### (1) 堀と斜面の形成

本郭東斜面から三郭北西隅部までの形成の状況が確認できた。本郭東斜面から本郭南東部については、2011 - 6次・2013 - 6次調査いずれの地点においても、地盤層が浅い地点で確認された。地盤層の自然堆積の切り替わりを切る痕跡も認められ、本郭東斜面は切土により形成されたことが確認された。

三郭北西端部を確認した2011 - 6次第4調査区東・南壁断面では、地盤層は極めて低い標高で確認され、その上層に盛土が1mほど堆積していた。三郭の端部については盛土により形成されたことが確認された。三郭の中北部における1966・1969年度調査でも、地盤面および弥生時代の包含層上に約1mの盛土が確認されており、三郭の大半は盛土により形成されたとみられる。

2011 - 6次調査成果からは、平坦な堀底面が確認された。同調査区の本郭東側斜面部および三郭北西隅の堆積状況からは周辺地には本来緩やかな谷地形が存在していたのを、本郭東斜面側に関しては切土を行い、三郭南西隅については盛土を行い現況の箱堀の形態をつくったものとみられる。

いずれの調査地点においても改修の痕跡は認められなかった。

#### (2) 堀および本郭東斜面～南平坦面の形態

##### (a) 堀部の規模と形態

2011 - 6次調査地点で箱堀を確認した。その規模は上端幅で東西約25m、下端幅で約20mをはかる。底面標高はT.P.23m付近に求められ、本郭上面との比高は4m前後となる。本郭東斜面は最大で55度ほどの急傾斜を呈していた。

また、2013 - 6次調査地点では、本郭・三郭間の堀が西側へと屈曲した部分の西端を確認した。

その堀部の上端は、第4・5調査区間で確認され南北幅20mほどである。推定される比高は3mほどとなる。

両地点における堀部底面の標高の比高は、本郭・二郭間の堀部で認められたものに比べると小さかった。本郭・二郭間で推定された段差のような形状はなかったものと考えられる。

##### (b) 郭斜面から平坦面の形態

本郭東斜面においては、直線的な切岸が確認された。ただ、2013 - 6次調査第2調査区の北壁・第4調査区東壁で、部分的に段状をなす箇所が認められた。これは、局所的なものであり、郭斜面に設けられた施設の痕跡ともみられる。また、埋土の状況からは、両地点の斜面上の平坦面に土壌が存在した可能性が高い。なお、瓦の出土状況からは、本郭南の平坦面上では瓦を利用した建物が存在したものとみられる。

それに対して三郭北西隅では、ピット痕跡とともに、段状の形状が認められている。盛土により形成されたため、本郭のような急傾斜を形成することができなかつたためと考えられる。

##### (c) 本郭南東隅突出部の形態

従来、外構形虎口に似た形状と指摘されてきた部分である(馬部2009)。2011 - 6次第5調査区でその東辺が、2013 - 6次第5調査区で南辺のラインが確認された。その標高は26.2~26.3m付近であり、本郭南東部で実施された1992年度調査において25.7~25.8m付近で地盤層が確認されたのに対して、やや高いことが判明した。

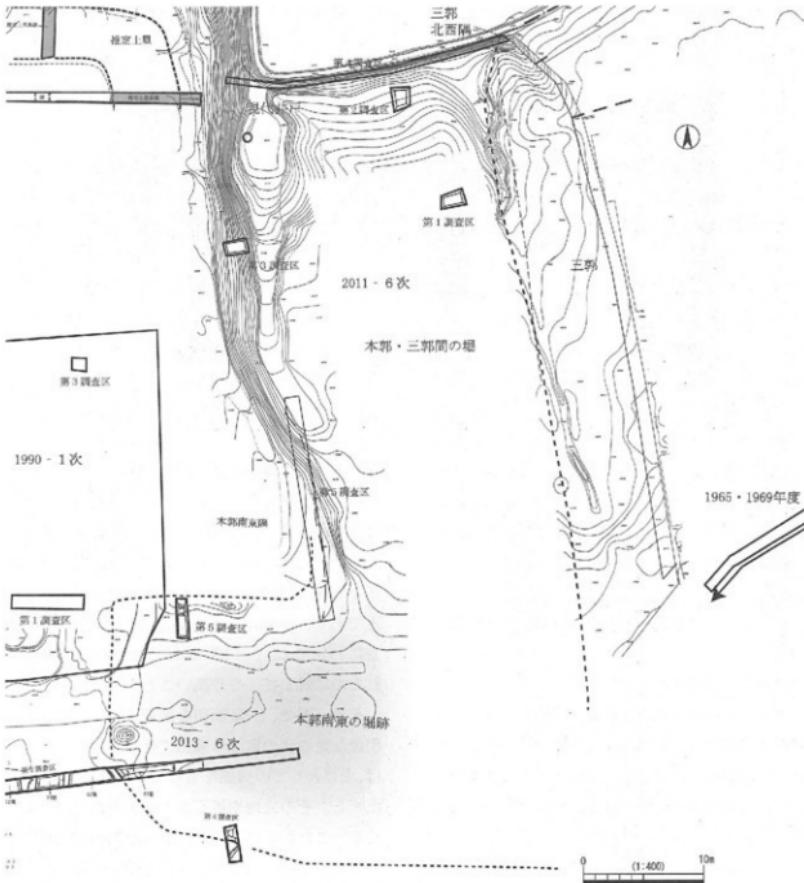
その一方で、一定面積を調査したにも関わらず明瞭な虎口状の施設は確認できていない。現状では、虎口としての機能をもったとは考えられない。ただし、その立地や標高が、周辺の平坦面に比べて高いことからは、本郭南から南東の平坦面に対する防御を行なう際に重要な地点であったことは十分にうかがえる。

### (3) 廃絶等の年代

廃絶に伴うとみられる堆積土は、2013 - 16次第2調査区における37堀の埋上および10溝の埋上、同第4調査区の切岸上の埋土であった。これらは堀周辺に存在した土壠などを平坦にした際の堆土とみられる。このうち、小部城廃城年代推定の手がかりとなる遺物は、37堀、10溝で検出された

ものである。これらはおおむね本郭上面出土の遺物群と類似し、概ね 16 世紀中頃～後半頃のものであることから、本郭周辺などの地点と同時期に廃絶されたものと考えられる。

また、改修や大量の遺物集中など、長期間利用された痕跡が認められなかったことからは、形成の時期についても他地点の遺構と同時期のものと考えられる。



第 81 図 本郭・三郭間堀部 平面合成図

## 第5節 本郭南の平坦面の調査

### 第1項 1986 - 2次調査

#### (1) 調査地点の概要

本郭の南に接する平坦面である。現況の標高は、本郭に比べて2~3mほど低い。

調査は宅地造成とともに実施された。住宅が建設されることが確定していた東半に調査区を設け、当面駐車場として利用される西半は未調査である。

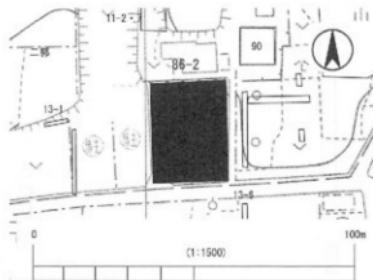
第1調査区は、調査地の中央部に東西幅1m、南北長15mで設定したものであり、調査途中で、南端部に西へ長さ5m、幅1mの拡張区を設定した。

第2~4調査区は、調査地北東に1m四方の調査区を3か所設定した。

#### (2) 層序

断面図は残されていないものの、実績報告に、すべての調査区で現地表土を取り去ると砂層から構成される地山層が検出されたと記される。第2~4調査区ではさらに1mほど掘り下げを行ったが、遺構・遺物は検出されていない。これを写真資料から追検証しておきたい(写真図版17)。

写真的うち、第1調査区の拡張前のものと、第



第82図 1986-2次 調査地点位置図

2調査区または第3調査区の写真からはこの記述通り、黄褐色の地盤層が確認できる。このことから、本郭南には地盤層を利用した平坦面が接続しており、堀などの施設はなかったものと考えられる。

ただし、第4調査区の写真では、地盤層由来とみられる層や、古土壤に由来するとみられる赤褐色のブロック土が堆積している様子がみてとれる。第4調査区の現地表土下で検出された層は、少なくとも私郭域の地盤層ではない。その堆積は、1m四方の調査区全体に広がっているものであることから勘案すると、溝などの遺構である可能性が考えられる。

#### (3) 小結

遺物は検出されていないものの、既往の報告資料から、本郭南部には、地盤面を利用した平坦面が張り付くことが確認できる。この内容は、本郭南部の他の調査区の成果と整合する。



第83図 1986-2次 調査区平面図

## 第2項 2013 - 6次

## 第1・3・6～8調査区

## (1) 地点と調査に至る経過

本郭の南東に接し、近世以後の集落域との境付近まで広がる平坦面にあたる。縄張り研究から、当地点には、本丸池より東側へ延長した堀が埋没している可能性が指摘されていた（中井 1981 ほか）。本調査は、この堀の有無など、本郭南の埋没状況を確認することを目的として設定した。なお、同次数で調査を実施した成果のうち、本郭・三郭間の堀部の成果に關わる第2・4・5調査区は、3章第4節第2項で報告した（73頁）。

まず、調査地南半に第1調査区、調査地北半に第3調査区を設定し、南北を縦断して堆積状況と遺構の有無を確認した。この結果、第1調査区南端で東西にのびる堀の北端を確認したが、その全容を確認することはできなかつたため、堀の南端を確認することを目的として、発掘可能な地点に設定したのが、第6調査区である。また、堀の東側への延長状況を確認するために設定したのが第7・8調査区である。



第84図 2013 - 6次 第1・6～8調査区位置図

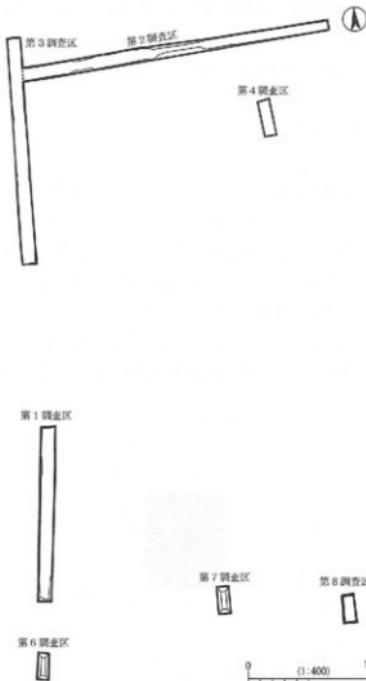
## (2) 層序 (第86・87図)

## (a) 現代表土

調査地の現況は畠、果樹林であり、表土にはその耕作土および床土が10～20cm堆積する。同層では、近現代遺物が出土している。下層の状況から近世以後から現代までの堆積層と考えられる。

同堆積の上面は起伏に富むものの、下面は比較的平坦である。耕作に伴い削平されたものと推定される。

表土直下で地盤面および、地盤面上に残存した遺構埋土を検出した。現代表土下面、すなわち残存する地盤面の標高はT.P. 25.9m前後である。



第85図 2013 - 6次 第1・6～8調査区位置図

(b) 遺構埋土

表土層直下の地盤面上で検出された。第1調査区南端・第6調査区前面・第7調査区前面・第8調査区北端で、壠の壌上を検出した。壠部の埋土には、ブロック土が堆積しており、これは、人為的に埋没させられたものと考えられる。ブロック土中からは近世遺物が出土しておらず、中世末段階で埋没したものと考えられる。その他の遺構埋土としては、深さ20～30cm程度の比較的残存状況のよいピットを第1・3調査区で検出している。土坑・ピットの埋土は赤褐色の小ブロックを含む。



第86図 2013-6次 第1調査区断面図

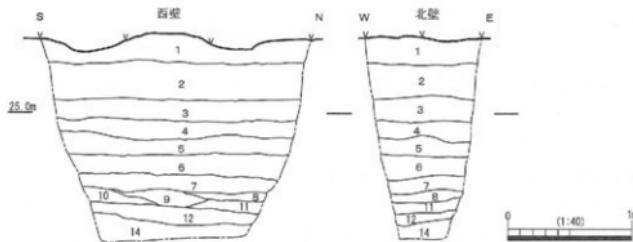
(c) 地盤層

第1・3調査区の表土下面全体で地盤層が検出された。これまで本邦などの地盤として検出されてきた層と類似するものあり、黄褐色のシルトまたは砂混じりシルトで構成される堅固な層である。

その標高は、堀における落ち込みを除くと、T.P. 25.4m 前後で平坦な面を形成する。これは人為的に削平されたものとみられる。また、堀間にあっても、人為的に掘削されたものである可能性が高いものと判断できる。

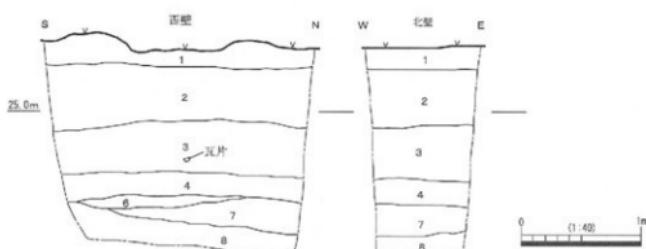


第87図 2013-6次 第3調査区断面図



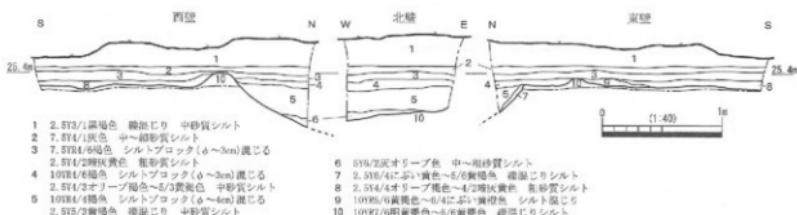
- 1 2.5Y3/2 黄褐色混じり中砂質シルト
- 2 2.5Y6/2 深褐色粘土質シルト (シルトブロック  $\phi \sim 2\text{cm}$  見る) 機械による
- 3 2.5Y6/2 深褐色粘土質シルト (10YR6/4 黄褐色シルト 見る)
- 4 10YR6/4 黄褐色砂質シルト (10YR6/6 黄褐色シルト  $\omega$  が見られる)
- 5 2.5Y7/3 黑褐色砂質シルト (2.5Y4/6 槍鉛砂質シルトブロック  $\phi \sim 3\text{cm}$ ) 見る
- 6 10YR4/6 黄褐色～2.5Y7/3 黑褐色砂質シルト (シルトブロック  $\phi \sim 3\text{cm}$ ) 多く見る
- 7 10YR5/2 黄褐色砂質シルト (2.5Y4/2 黄褐色シルト ( $\phi \sim 3\text{cm}$ ) のブロック混じる)
- 8 10YR5/2 黄褐色砂質シルトブロック ( $\phi \sim 3\text{cm}$ ) 見る 8Y5/2 オリーブ緑色混じりシルト
- 9 2.5Y7/3 黄褐色～6/4 黑褐色砂質シルト
- 10 7.5Y7/7 黄褐色～2.5Y7/3 黑褐色砂質シルト
- 11 10YR6/6 黄褐色砂質シルトブロック ( $\phi \sim 5\text{cm}$ ) 見る 10Y7/1 黄白緑色混じりシルト
- 12 7.5Y8/6 黄褐色砂質シルト (5Y7/1 明オリーブ灰砂)
- 13 10YR6/6 黄褐色シルト混じり砂質シルト
- 14 2.5G15/1 オリーブ灰褐色混じりシルト

第88図 2013-6次 第6調査区断面図



- 1 2.5Y3/2 黄褐色 混じり中砂質シルト
- 2 8Y5/2 黄褐色 シルト質シルト (上部)～中砂質シルト (下層)
- 3 7.5Y4/4 黄褐色 シルト ( $\phi \sim 5\text{cm}$ ) と 10YR5/3 (黄褐色 粗砂質シルト ( $\phi \sim 8\text{cm}$ ) のブロック土
- 4 10YR6/6 黄褐色 粗砂質シルト ( $\phi \sim 7\text{cm}$ ) と 2.5Y4/4 に見る 黄シルト ( $\phi \sim 3\text{cm}$ ) のブロック土
- 5 7.5Y8/6 黄褐色 シルト混じり砂質シルト 2.5Y7/7 黄白色 シルトブロック ( $\phi \sim 3\text{cm}$ ) 見る
- 6 10YR6/6 黄褐色 粗砂質シルト～2.5Y7/7 黄褐色 シルトブロック ( $\phi \sim 3\text{cm}$ ) 見る
- 7 7.5Y8/6 黄褐色 粗砂質シルト混じりシルト 2.5Y7/6 黄褐色混じりシルトブロック ( $\phi \sim 2\text{cm}$ ) 含む
- 8 2.5G15/1 オリーブ灰褐色混じりシルト

第89図 2013-6次 第7調査区断面図



- 1 2.5Y3/2 黄褐色 混じり 中砂質シルト
- 2 7.5Y4/4 黄褐色 シルト～細砂質シルト
- 3 2.5Y4/3 黄褐色 シルトブロック ( $\phi \sim 3\text{cm}$ ) 見る
- 4 10YR4/6 黄褐色 シルトブロック ( $\phi \sim 3\text{cm}$ ) 見る
- 5 10YR4/6 黄褐色 シルトブロック ( $\phi \sim 4\text{cm}$ ) 見る
- 6 8Y5/2 黄褐色～6/4 に見る 黄褐色～6/6 黄褐色 混じりシルト
- 7 2.5Y4/4 オリーブ色～4/2 黄褐色 粗砂質シルト
- 8 10YR5/6 黄褐色～6/4 に見る 黄褐色 シルト混じり
- 10 10YR7/6 黄褐色～6/6 黄褐色 混じりシルト

第90図 2013-6次 第8調査区断面図

## (3) 遺構

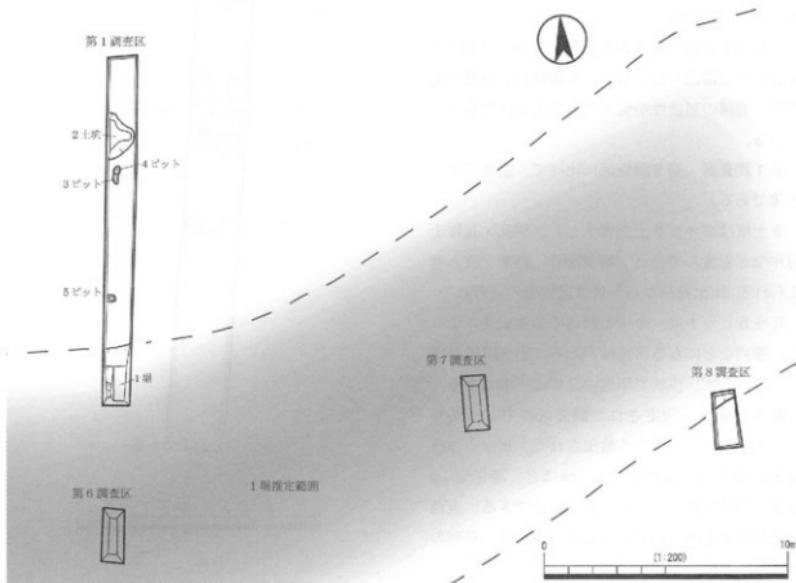
## (a) 1 堀

素掘りの堀であり、第1調査区で北側の上端・下端を確認した。その南の第6調査区では堀中央部の埋土を確認したのみである。第7調査区では第6調査区と同様の堀中央部の埋土が確認された。第8調査区で南側の上端が検出された。これにより、堀の東に直線で伸びるのではなく、クラシク状に屈曲するものであることが確認された。耕作地中にあたるため、これ以上の調査区は設置できず、平面形態についての詳細は今後の課題となる。

私部城機能時の堀底と考えられるのは、第6・7調査区底部で検出された青灰色のシルト層である。周辺地の低地部の地盤層と考えられる。その

上層にはブロック土が堆積している。北側がやや高く、南に向かってゆるやかに低く堆積し、堀の北側から供給されたと考えられる。耕作により削平されているが、堀上端より北へ3mほどに、地盤層の起伏が残ることに加えて、第3調査区に比べて著しく遺構が希薄であることから土壘が存在したと推定することができる。堀埋土中にレンズ状堆積は確認できない。地盤層がシルト層であることから、泥田状の地形を呈する空堀と考えられる。推定される堀の規模は、幅12~14m、深さ1.2mである。地盤のシルト層上面の標高を比較すると、東の第7調査区で24.0m、西の第6調査区で24.1m付近で、やや西に向かって高くなるがおおむね平坦な底面をなすと考えられる。

1堀の機能期間はさほど長くなかったものと想定される。根拠は次のような事柄である。



第91図 2013-6次 第1・6~8調査区遺構平面図

層序の面からは、堀の改修痕跡は認められなかった。長期間堀として機能した際に形成される堀肩部の土壤化層、堀底の堆積層も顕著ではなかった。

出土遺物は、13世紀後半頃まで遡りうる瓦器片から、16世紀後半頃までの瓦片と年代幅が大きいものである。ただし、これらは、小片であり、堀埋土のブロック土中から出土したものであつた。周辺に所在した集落域や城域の遺物が、堀の埋戻し時に混入したものと考えられる。堀底で土器が多量検出されることはなかった。

堆積状況と、同堀の出土遺物で最新の年代のものが16世紀後半頃の瓦であることから年代を推定すると、戰国期の終わり頃に比較的短期間に機能した堀と考えられた。年代から私部城本郭南平垣面に配置された堀と位置づけられる。近世に入ると同時に埋没していたと考えられる。

#### (b) ピット・土坑

地盤面上に掘り込まれた土坑・ピットを第1・3調査区で検出した。なお、現場検討、整理作業段階で遭構の可能性が低くなったものは欠番としている。

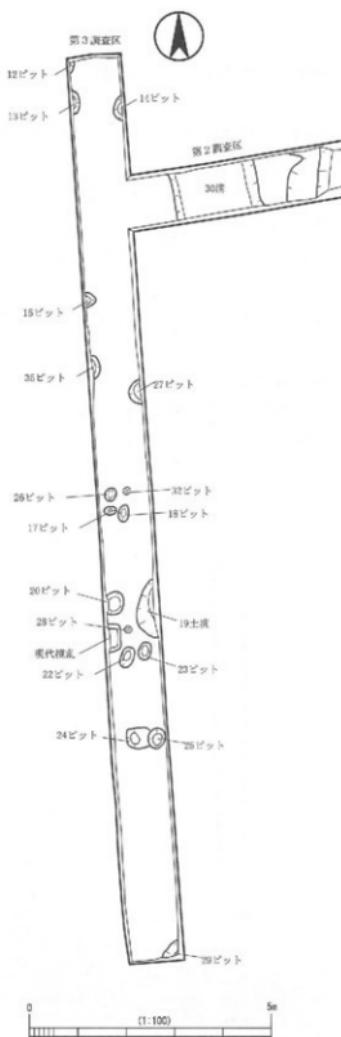
**第1調査区** 第3調査区に比べて、遺構密度が希薄である。

2土坑はブロック土を埋土とし、平瓦・瓦質土器片などを含んでいた(第96図)。廐棄土坑と考えられる。出土遺物から年代は近世と考えられる。

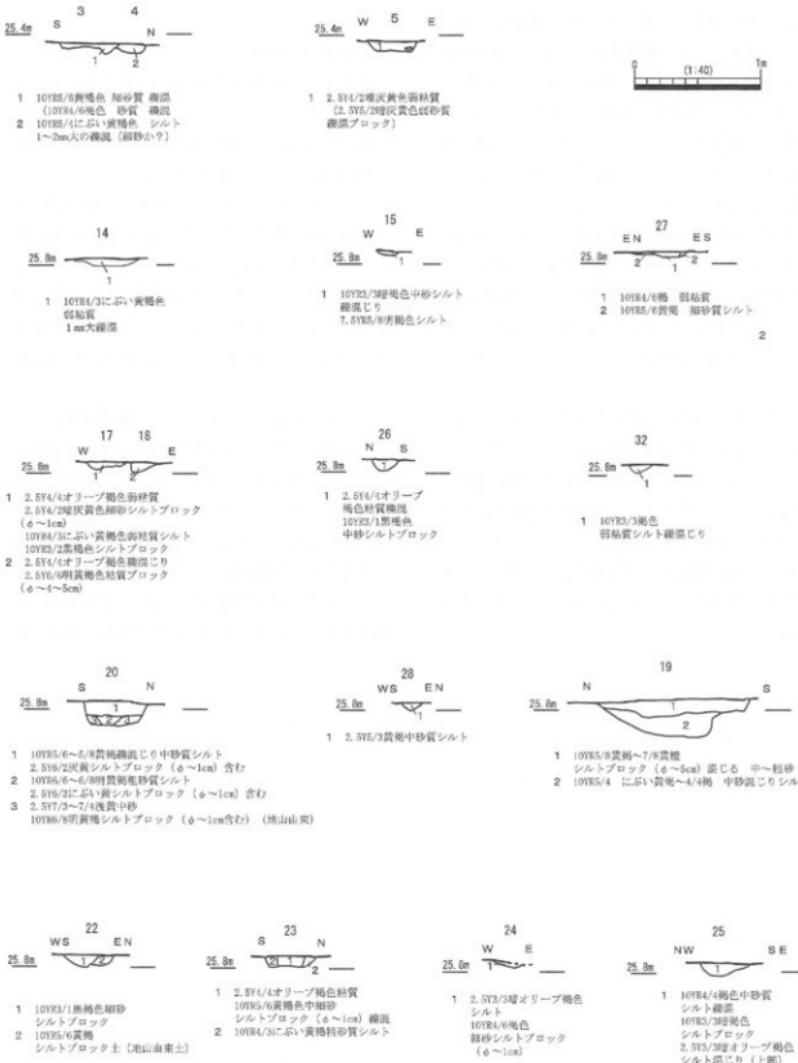
3~5ピットは、今後の周辺の調査成果によつて、柵列などになる可能性がある。出土遺物は得られておらず、現状で年代の詳細は不明である。

**第3調査区** 限定された調査区の中ではあるが、土坑・ピットが多く検出された。ピット20・22・23などは、直径40~50cmほど、深さ20cm前後の明瞭な柱穴で、列として確認できる。東西の調査成果を待つ必要があるが、建物跡、柵列の可能性がある。

28・32ピットは、残存径は小さいが、上部を



第92図 2013-6次 第3調査区遺構平面図



第93図 2013-6次 第1・3調査区遺構断面図

根などにより攪乱されていた。

19 土坑は検出時の最大長1.2m、深さ0.3mほどのものである。出土遺物は認められず、廐棄土坑の可能性は低い。段状の掘り方をもち、直径40~50cmの大柱を据えた痕跡である可能性が高い。

第3調査区のピット・土坑からは図化可能な遺物は出土しておらず、土師質土器の細片がごくわずかに含まれていたのみである。

状況証拠から時期を推定すると、ピットが残存するのに対して堅穴建物の周溝が認められないことからは、弥生時代の建物遺構である可能性は低い。打製石器などの弥生時代遺物が認められないことからも弥生時代のものではないと考えられる。

また、ピットの底部標高がある程度揃うことからは、現状の平坦面形成後に掘り込まれたものと考えられる。ピット列の軸が本郭と同様に南北を向くこともふまると、一定是私部城築城に伴うものが含まれている可能性が高い。郭南の平坦面上には、城に関連する建物等の施設が存在したものとみられるが、その全容については今後の課題となる。

#### (4) 出土遺物 (第94~96図)

##### (a) 1堀出土遺物

第1・6~8調査区の1堀埋土から瓦片・瓦質土器などが出土している。

**瓦** 本丸池東の堀跡の埋土中および周辺で中世瓦は小片も含めて10点ほど出土した。

113は軒丸瓦で、瓦当部と丸瓦部の接合部付近である。断面観察から、瓦当裏面と丸瓦広端面のいずれにも刻みを施して接合していることがわかる(写真113)。瓦当面には珠文から巴文の一部が残る。黒色に焼成くもので、胎土・焼成から近世に下るものではなく、16世紀後半のものと考えられる。

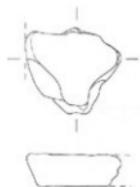
114は軒平瓦の瓦当面のうち、頸部が剥落したものである。平瓦部との接合面に、カキメが施されている。焼成度であるが、近世瓦のように銀黒色に焼き上げるものではない。また、胎土も近世のものほど精良ではない。瓦当文様は中央に凸線による花状の図像を配し、その左側に唐草を巻くものである。界線は認められない。この文様は市域の近世瓦に認められないものである。以上の特



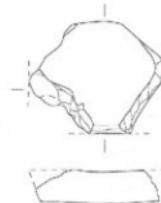
113



114



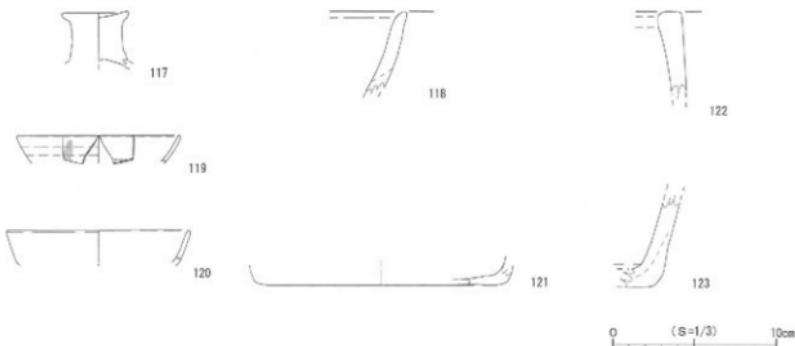
115



116

0 (S=1/3) 10cm

第94図 2013-6次 第1・6~8調査区1堀出土瓦



第95図 2013・6次 第1・6～8調査区1堀出土遺物

徴から、おおむね16世紀後半頃の年代と考えられる。

115は平瓦の端部片である。凸面側縁端部にバリ痕跡を残し、凸面は砂粒がつき手触りが荒い。凹面側側縁端部は面取りを施しており、凹面をナデ調整する。厚さは1.9cmである。本郷などで出土しているものと同様の特徴である。

116は上層出土のもので近世に下る可能性の高い平瓦片である。

瓦はいずれも小片ながら、軒丸・軒平瓦が出土していること、私部城が歴史上に登場する16世紀後半頃のものであることが注目される。私部城の南の堀周辺で、瓦利用がなされていた可能性が高い。

瓦質土器 118は瓦質土器擂鉢の口縁端部片である。外側へ外半し、内面側端部には面ができる。おおむね佐藤編年D期、近江編年4期にあたる、15世紀末から16世紀前半頃のものと考えられる(近江1994・佐藤1996)。122は瓦質土器深鉢の口縁部、121・123は瓦質土器鉢類の底部片である。

瓦器椀 119・120はともに先端をやや尖らせ気味におさめるもので、内外面ともにミガキは認められない。楠葉型瓦器椀IV期のもので、13世紀後半から14世紀前葉頃のものとみられる。

弥生土器 117は素焼きの土器片で、弥生土器の蓋のつまみ、または鉢の底部片と考えられる。

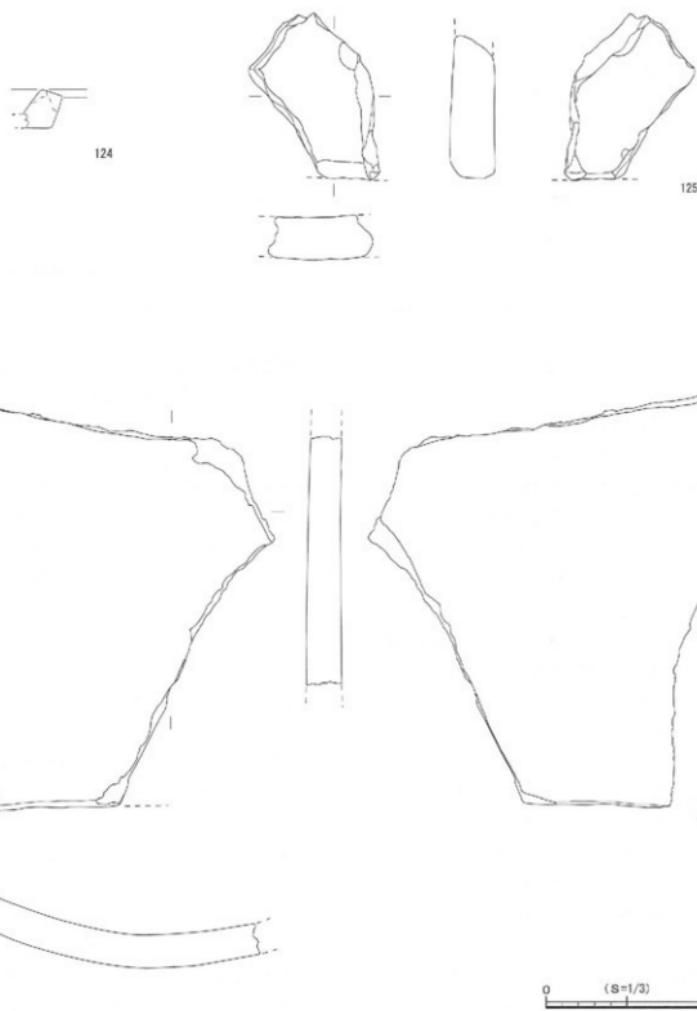
いずれも堀埋土のブロック土中で出土したものであり小片である。遺物の年代幅は広いが、長期間機能した堀の出土遺物としては量が少ない。また層序の観察からも、長期間堀として機能していた痕跡はうかがえなかつた。堀の機能時から、埋没までの年代を示すのは最新相の16世紀後半頃の瓦類または、16世紀代の瓦質土器類である。

#### (b) 2土坑出土遺物

124は瓦質土器であるが、小片のため器種は不明である。

125は平瓦狭端部片である。残存部では凹面側の面取り幅は小さく、ナデ調整が施される。凸面は板ナデ後に砂粒が付着する。厚さ2.6cm前後と分厚いことからも中世の瓦片と考えられる。

126は平瓦である。黒色の胎土で焼成かれている。凹面を横方向になで、側縁・広縁とともに面取りする。凸面も比較的平滑に仕上げており、端部を丁寧に面取りする。厚さは2.0cm前後である。凸面側の端部の丁寧な面取りや、瓦胎土は私部城本郷などの出土瓦に認められないものである。近世に下る可能性が高いものである。



第96図 2013-6次 第1調査区2土坑出土遺物

2 土坑は私部城期のものではなく、廃城後の近世に埋没した土坑と考えられる。

### (5) 小結

本郭南平坦面が地盤層により構成されたものであること、その標高からは、本郭の南東部の底部よりの一連であることを確認できた。

また、調査地の南端で、本丸池の東に位置する1堀を確認できた。その規模や、屈曲を伴う平面形からは、従来想定されていた以上に防御性を重視した堀であることが確認された。こうした成果の総括については、次項で行うこととしたい。

## 第3項 本郭南平坦面の調査成果

### (1) 本郭南の平坦面

本郭はこれまでほぼ50m四方の方形居館に近い形態が想定されていた。しかしながら、1986・2次調査と2013・6次調査の結果、本郭と南の平坦面を区画する堀は確認されなかった。

この平坦面は地盤層から構成され、その標高は、T.P. 25.9～25.4mと、本郭上南東部の平坦面と同等か少し高いものである。本郭とこの平坦面は一連のものと考えられ、本郭の切土に合わせて平坦面も形成された可能性が高い。西の二郭と東の三郭をつなぐ通路としての機能とともに、それを区画するために屈折をもたせたものと考えられる。

この平坦面上では、柱穴とみられるピットも検

出されており、堀に伴う施設が遺存する可能性が高い。その内容については今後の調査課題となる。

### (2) 1堀の構造と年代

2013・6次第1・6～8調査区で確認した。本郭南の平坦面の南端に位置する素掘りの堀跡である。推定幅は14～15m、底面の標高はT.P. 24.1～24.0mであった。また、これはクランク状の屈折を伴う平面形であることも確認された。

繩張り研究からは、同地点に、本丸池の延長線上の堀が伸びることが想定されていた。これに対して、発掘調査の結果からは、少なくとも一直線の堀ではないことが確認された。その根拠となるのは、まず、本調査で確認された堀が、本丸池の延長線上にくるのではなく、やや食い違いが認められる点である。

さらに、後述の本丸池跡の調査成果をふまえると（第9節149頁）、本丸池東端底面の標高は東端でT.P. 24.1m以上になることが想定され、1堀底面の標高とは高低差がある可能性が生じた。

この調査成果から、両者の間には土橋などの高まりが存在した可能性が高いものと考えられるようになつた。また、もう一つの可能性として、屈折箇所と堀内の段差を備えた一連の堀である可能性も残されている。

なお、1堀の埋土の観察結果や、1堀北側で遺構密度が希薄であることなどを総合すると、1堀北側には土壘が存在した可能性が高いものと考えられる。

1堀埋土の層序観察結果からは、長期間機能し

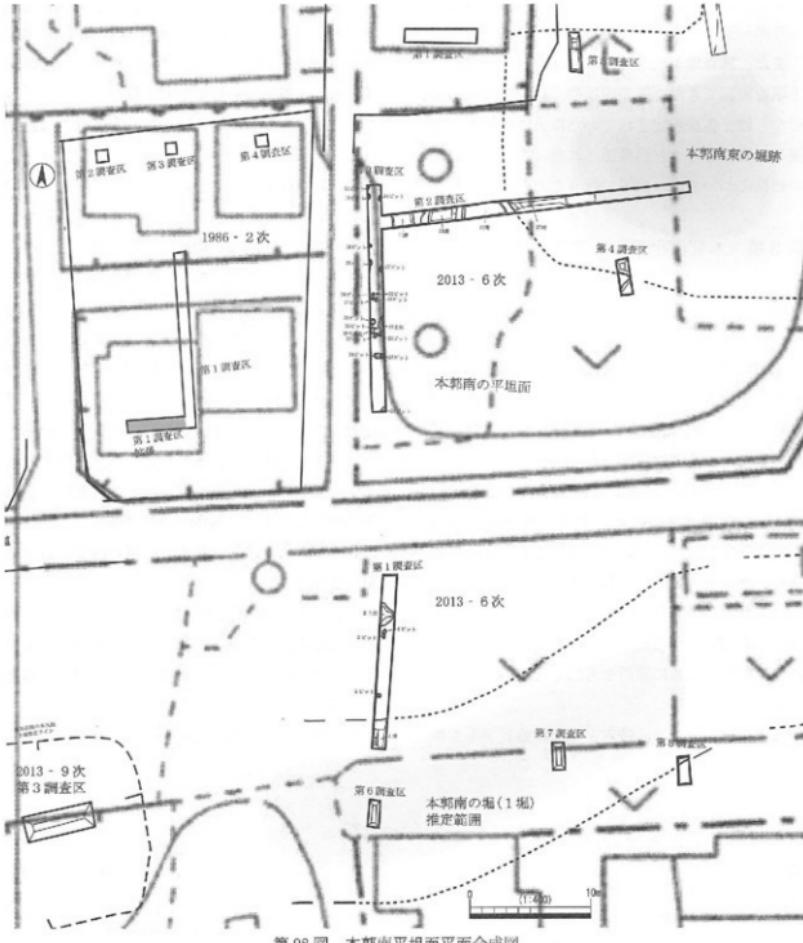


第97図 2013・6次 調査区南北断面合成図

た堀跡ではないものと考えられた。出土遺物も中世前半の瓦器梶片なども含み、時期幅の広いものであったが、出土量が少ないとや、底部に堆積するのではなく、埋土中に混入するものであった。

こうした出土状況から推測すると、出土遺物の時期幅がそのまま機能した期間を示すものとは考

えられず、出土遺物のうち最新相の16世紀中頃から後半頃に機能し、近世までには埋没していた可能性が高いものと考えられた。私部城の築城に伴い掘削され、その廃城とともに埋没したものと考えられる。



第98図 本郭南平坦面平面合成図

## 第6節 本郭・二郭間の堀部の調査

### 第1項 2013-9次 第1・2調査区

#### (1) 地点と調査に至る経過

同地点は、本郭と二郭間の堀跡の中央部にあたる。これまで私部城域の中でも良好に遺存する堀跡として知られてきた地点である（写真108・109）。

特に調査区を設置した付近には、本郭・二郭をつなぐ東西方向の大畦畔が確認されていた（中井1981ほか）。これは従来の縄張り図の中で、土橋状に描かれたことがあるものである。

同地周辺ではこれまで発掘調査による地中の状況は確認されていなかった。本調査は、この土橋

状の畦畔が私部城期に遡るものであるのか否かを確認するとともに、堀と本郭の斜面形状を確認するため実施した。

第1調査区は、土橋状に残る大畦畔の堆積状況を確認するために、東西0.5～0.6m、南北1.5mの調査区を設定した。

第2調査区は、本郭西側斜面から堀部までの形態と堆積状況を確認するため、東西3.2m、南北0.5mの調査区を設定した。いずれも人力掘削により、遺構・遺物の有無を確認しながら掘り下げを行った。

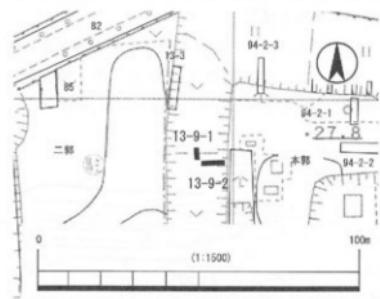
#### (2) 層序（第101・102図）

##### (a) 現代表土

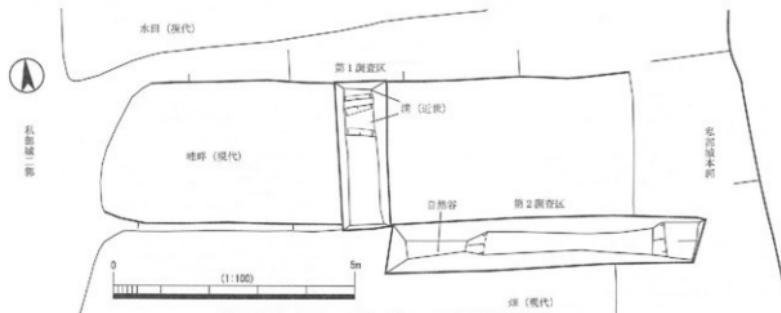
現代表土は両調査区の第1層にあたり、第1調査区では大畦畔の土壤である。第2調査区では斜面部から堀部の畠縁辺部にかけて堆積する土壤にある。

##### (b) 近世～近現代耕作土層～斜面流出土

現代表土下においては、第1調査区では旧畦畔（第3・6・9・13層）とそれに対応する旧耕作土層（第2・5・7～8・10～12層）を確認した。



第99図 2013-9次 第1・2調査区位置図



第100図 2013-9次 第1・2調査区平面図

第2調査区でもこれに対応する旧耕作土層(第2、6・8・12・23～28層)、畦畔(20～22・29～30)、耕作土層を確認した。

また、第2調査区の斜面部では、本郭上方から下方へと流出した土層が認められた(3～5・9～11層)。本郭北側斜面の堆積層に比べて分厚く堆積することが注目される。これらの出土物や、それを母材としたとみられる耕作土中では、中世の瓦片などの遺物も一定量含まれていた。本郭西側斜面では、廃城後に郭上面から土塁などの盛土が多量に流出している可能性が考えられる。

なお、出土物中の第2調査区第15～19層は樹木等の根による擾乱とみられる。

#### (c) 近世耕作関連層

前段階の畦畔を伴う耕作土層の下面で認められる(第1調査区第17～24層)。第1調査区におけるこの堆積の段階では、大畦畔がまだ築かれておらず、かわりに規模の小さい2条の溝(同第15・16・17・18層)と小さな畦畔(同第19・20層)

が認められた。これらの遺構は現在の大畦畔と方向が一致するものであり、現在の大畦畔の原形とみられる。第2調査区では同段階の耕作土は上層により削平され不明瞭である。

層中出土の陶磁器片から、近世頃のものと考えられる。

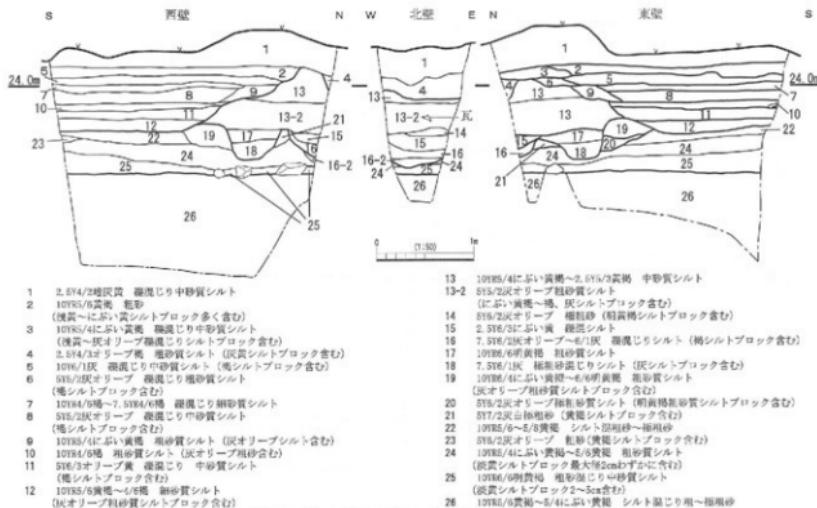
#### (d) 堀部形成層～機能時堆積層

人頭大的石などが混じるシルト混じりの砂層である(第1調査区第24・25層、第2調査区第31～33層)。同層が私部城の機能時の堆積層と考えられる。同層の段階では、堀は箱堀状の形態をとる。

第2調査区第34層は、地盤層由来土にブロックが混じり、堀の形成時の堆積層と考えられる。

#### (e) 自然谷堆積層

箱堀から二段落ち状に堆積する層を第2調査区で確認した(第2調査区第35層・第1調査区第26層)。顯著なブロック上は認められず、耕作な



第101図 2013-9次 第1調査区断面図

どによる攪拌の痕跡も顕著ではなかった。人為的な活動によるものではなく、本来の自然谷に、流水等の作用により堆積した層と考えられる。

この堆積状況の検討結果から、堀として機能していた段階においては、箱堀として機能していたとわかる。

#### (f) 地盤層

黄褐色または灰白の砂層または粘土・シルト層の互層により構成される（第2調査区第36～38層）。その切り替わりラインは、斜面の堆積土によって切られており、本来の堆積土は堀の斜面形成によって損なわれていることがわかる。また、先述の自然谷埋土（同第38層）下面のラインが、私部城築城以前の自然谷の谷底の形状を残している。

残存する谷地形と斜面部的地盤層の切り替わりラインから推測すると、箱堀の形成以前は、緩やかな谷地形が存在していたものと推測される。

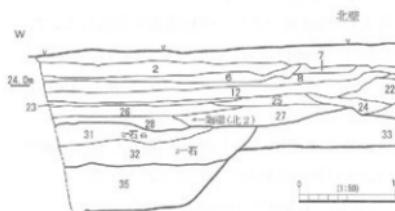
#### (3) 遺構

##### (a) 本郭・二郭間の堀

平面・断面の観察から堀の状況が判明した。

**堀の構築** 第2調査区最下面で自然谷の痕跡が確認されたが、その本来の傾斜は堀の肩によって削られていた。このことからは、築城以前の本郭の谷地形は、箱堀状の形態を形成するために切土されたものと推定できる。

**堀の形態** 推定で下端の幅約12m、上端の幅20mほどの箱堀と考えられる。その底部の堆積状況からは、多少のぬかるみを伴う空堀と考えられ



- 1 2/3埋糞層 緩混じ中砂質シルト
- 2 10Y35/6黄褐色 塗膜
- (2, 5/4/2浅黄褐色~6/6にぶる) 黄シルトブロック φ~10cm多く混じる)
- 3 10Y35/7明瞭な層 粘砂質シルト
- 4 10Y35/7灰褐色 中砂質シルト
- 5 10Y35/7灰褐色 中砂質シルト
- 6 10Y35/1灰褐色 中砂質シルト
- 7 10Y35/4砂~6/6灰褐色 緩混じり 中砂質シルト
- 8 10Y35/4砂~6/6黄褐色 中砂質シルト
- (5Y/4)灰リープ砂粗質シルトブロック φ~3cm多く混じる)
- 9 10Y35/6黄褐色 緩混じシルト質細粒
- 10 10Y35/4砂~4/3砂~5/5灰褐色 緩混じ中砂質シルト
- 11 8Y5/2灰オリーブ 緩混じり細粒質シルト
- 12 8Y5/2灰オリーブ 緩混じり中砂質シルト
- (10Y/2)灰オリーブ砂粗質シルトブロック φ~3cm以上)
- 13 10Y35/6黄褐色 シルト
- 14 10Y35/6黄褐色 シルト
- 15 2, 5/5/6黄褐色 粒砂質シルト
- 16 2, 5/5/6灰褐色 シルト質中砂
- 17 8Y7/2灰白 シルト質 粒砂質シルト (10Y35/6砂場) シルトブロック φ~1cm含む)
- 18 2, 5/5/2灰褐色 粒砂質シルト (10Y35/6黄褐色シルトブロック φ~1cm含む)
- 19 2, 5/5/6灰褐色 シルト
- 20 8Y5/3灰オリーブ 粗粒

- 21 10Y35/6/2灰黄褐色 粒砂質シルト (10Y35/8灰黄褐色シルトブロック φ~1cm含む)
- 22 10Y35/6灰褐色 風砂
- (2, 5/4/2浅黄褐色シルト) 10Y35/8灰黄褐色シルトブロック φ~4cm含む)
- 23 10Y35/4/2 粒砂質シルト (10Y/2灰オリーブ) 粒砂含む
- 24 10Y35/4/2 粒砂質シルト
- 25 8Y5/2灰褐色 粒砂質シルト (10Y34/6灰褐色 シルト含む)
- 26 8Y5/6灰褐色 粒砂質シルト (10Y35/6風砂) シルトブロック φ~5cm含む)
- 27 10Y35/6灰褐色~4/5砂 粒砂質シルト
- (7, 8Y5/2灰オリーブ) 粒砂質シルトブロック φ~1cm含む)
- 28 2, 5/7/3淡灰褐色 シルト混じ粗粒砂
- (BY/3浅黄褐色) 質中砂 (10Y35/6黄褐色シルトブロック φ~7cm含む)
- 30 10Y35/3/1灰褐色 シルト混じ粗粒砂
- (7, 8Y5/2灰褐色) 10Y35/7灰白シルトブロック φ~4cm多く含む)
- 31 10Y35/6灰褐色 粒砂質シルト
- 32 10Y35/6/4灰褐色~5/5灰褐色 粒砂質シルト  
(2, 5/5/6)灰褐色 シルトブロック 粒砂質シルト
- 33 2, 5/5/6/3灰褐色 シルト混じ細粒
- (2, 5/5/2灰褐色) 10Y35/8灰褐色シルトブロック φ~5cm多く含む)
- 34 10Y35/6/2灰褐色~6/4にぶる) 灰褐色 シルト混じ粗粒砂
- 35 10Y35/6灰褐色 シルト
- 36 8Y7/2灰褐色 シルト
- 37 10Y35/6灰褐色 シルト
- 38 8Y7/2灰褐色砂

第102図 2013 - 9次 第2調査区断面図

る。調査時には二段堀となる可能性も考えたが、層序の観察結果から、自然の谷の痕跡と確定した。

本調査区付近での推定規模は、下端の幅約12m、上端の幅は約20mである。底面の標高はT.P. 23.4mである。本郭北側斜面における堀部底面の標高は、1994-2次調査第3調査区でT.P. 21.6m付近と低いことから、堀底面に段差を伴うことが推定できる。第2調査区付近では、堀底面標高はほぼ水平であり、それより北側の現在の大畦畔の北端ライン付近で大きく落ち込むものと推測される。

**堀底面出土の石材** 堀機能時から耕作地化以前の堆積層（第1調査区第24・25層・第2調査区第31～33層）では、拳大から人頭大の石が数点検出された。特に第1調査区では人頭大の石4点ほどが集中していた。周辺の地盤層中に含まれるものではないことや、その出土層の推定年代からは、私部城で利用するために持ち込まれた石材と考えられる。現状では、廃城後に不要になった石材を廃棄したものと推定される。周辺の調査結果によっては、堀部におかれた施設に伴うものである可能性も考えられる。

**堀の推定年代** 切土により構築されたとみられる堀底面では、出土遺物は極めて少なかった。確認できているのは廃城時のものとみられる中世瓦、石等である。また、切土後の機能時の堆積層は必ずしも厚いものではなかった。長期間機能したものとしては、堀底の堆積は薄く、出土遺物も少ない。機能期間は短いものと推定される。堀底の機能時から耕作地化以前の堆積層出土遺物は、少ないが、16世紀後半頃の土師器小片が出土し

ている（第106図138）。その年代からは、16世紀後半頃に掘削され、ごく短期間に機能したことがうかがえる。歴史上私部城が廃城になるとともに、農地へと転用されていったものと考えられる。

#### (b) 近世以後の溝と大畦畔

土槽状の遺構としてみられてきたが、層序の検討結果と出土遺物の年代からは、近世以後の農地化に伴って構築されたものと確認できた。その下面では2条の溝も検出しているが、これも畦畔と同様に、農地に伴う水路と考えられる。

前述のように、私部城段階の堀底面の段差を利用して、農業用の水路や畦畔が設けられたものと考えられる。

#### (4) 出土遺物（第103～106図）

##### (a) 近世以降耕作層出土遺物

上層の近世耕作土層では、年代の定点となる近世土器・陶磁器のほか、中世遺物も混入していた。これは、斜面部堆積に認められたように、本郭上面・斜面からの流出土層とともに、郭上の遺物が堀底へもたらされたものとみられる。

**近世以後遺物** 第1調査区第7・8・10層では近世以後の陶磁器片等が含まれていた。

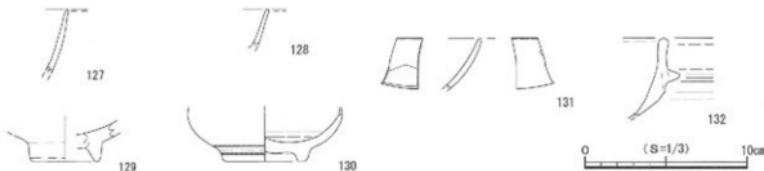
127は、青磁碗の口縁部片である。

128は、白磁碗の口縁部片である。

129・130は、陶磁器碗の高台部片である。

131は陶磁器碗の口縁部片である。

132は、第2調査区第28層出土の炮烙片であ



第103図 2013-9次 第1調査区出土遺物

る。枚方市星ヶ丘の窯跡出土例に類似する（難波1992）。近世以後のものと考えられる。

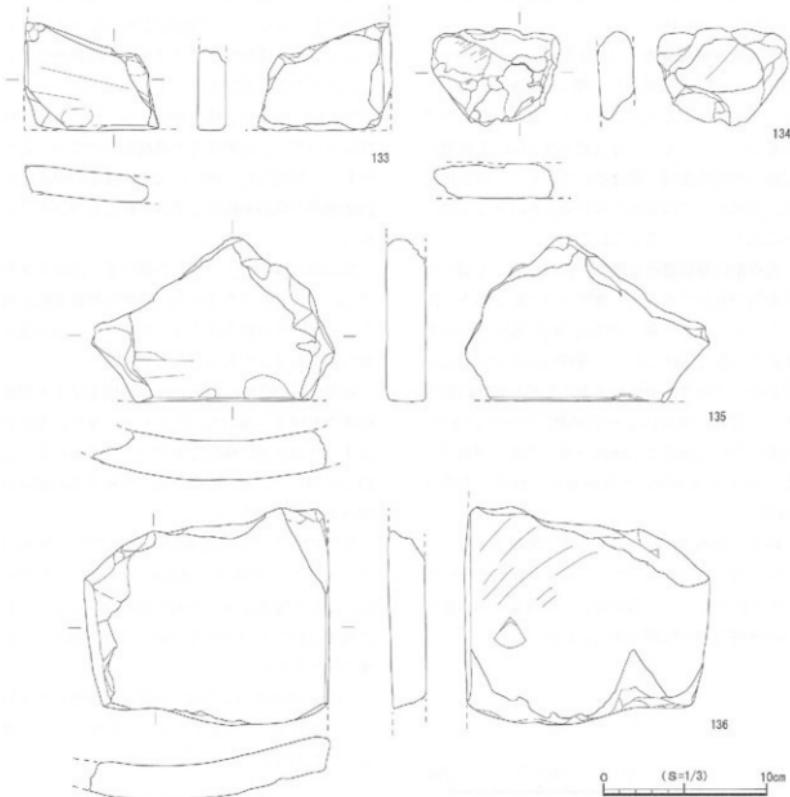
現在の大瓦群が、近世以後に形成されたことを示す遺物である。

**混入中世遺物** 中世瓦片が多く混入していた。郭上面からの流出土に伴うものと考えられる。いずれも製作技法が本郭上面出土瓦と類似しており、同時期の16世紀中頃～後半頃のものとみられる。私郭城の郭における瓦利用を示す資料である。

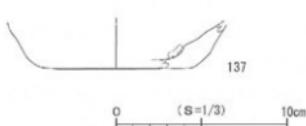
135は第1調査区第2層出土の平瓦である。広端部の一部を残すもので、凹面側に横方向のナデを施す。

133は第2調査区東端部の表土掘削時に出土した平瓦広端部から側縁端部の破片である。凹面側はナデ、側縁端部に面取りを施す。凸面側は調整が荒く、端部に面取りを行わない。

134は第2調査区第12層出土の丸瓦片で、凹面側に糸切痕跡とそれを切る押圧痕跡を残す。凸面側には縦方向のナデ痕跡が認められる。



第104図 2013・9次 第1調査区出土瓦



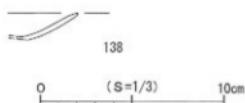
第105図 2013-9次 第2調査区出土弥生土器

136は、第2調査区第2層出土の平瓦である。凹面を横方向にナデ、凹面側側縁端部に面取りを施す。凸面側は斜め方向のナデ痕跡が認められるが、ナデ後に砂粒が付着しており器表面が荒れる。  
(b) 堀底出土遺物

混入弥生時代遺物 137は弥生土器壺甌類の底部片である。第2調査区の第31層付近で出土した。器表は著しく風化しており、混入したものであることがわかる。本郭上面では2011-7次調査で弥生時代集落域が確認されており、この包含層が、築城もしくは庭城に伴い切土されたことにより混入したものと考えられる。

堀機能時堆積層出土遺物 自然谷理土を切土した箇堀の底部で出土した遺物はわずかである。図化した138は、第1調査区第25層中、石の密集部の北側で検出された。黄橙色系の土師器皿片である。口縁端部を斜め上方にとがり気味におさめる。器壁の風化により不明瞭になっているが、内面において底部と口縁部の境の屈曲は明瞭である。16世紀後半頃の年代が与えられる(千喜良2002)。

堀底の堆積状況をみたときに、堆積層が薄いことや、変形痕跡がないこと、出土遺物も少ないことから推定すると、おおむねこの前後に堀の掘削から廃絶までの時期が求められる。



第106図 2013-9次 第2調査区出土土師器

## (5) 小結

本郭・二郭間の堀の発掘調査の結果、次のような成果が得られた。

まず、私部城段階の堀の形態が明らかになった。規模については、下端幅約12m、上端幅約20mと推定され、底面の標高はT.P. 23.4m付近で平坦面をなす箇堀である。堆積状況からは、同調査地付近においてはぬかるみも伴う程度の空堀であった。

堀の底面の標高については、南北方向で大きな高低差が存在することが確認されるとともに、それが緩やかに傾斜するのではなく、段状をなすものであることが推定されるようになった。

なお、これまで土橋状遺構とみられてきた大畦畔については、近世以後の農地化の中でつくられたものと判明した。現在の大畦畔はこの堀底面の段状地形の傾斜変換点に設置されたものと考えられる。

次に堀の構築は、自然の谷地形を一部切土することにより、現況の急斜面と箇堀の形状を割り出していた。その際の堆土は、本郭や、二郭の盛土部分に利用されたものと推定できる。

堀に変形の痕跡は認められず、切土による堀成形後の堆積層も薄いものであった。また、そこで出土した遺物量は極めて少なものであった。このことから、堀の形成から、廃絶までの期間は短いものと推定された。

年代の定点となる遺物はわずかであったものの、16世紀後半頃の土師器皿片が検出されている。これは廃城に伴う可能性が高い石などとともに検出されたものである。堀の利用時期はこの前後に推定できる。

また、郭上面から流出し、堀底に堆積したとみられる土層中では中世瓦片が一定数出土した。周辺での瓦利用の可能性が高まった。

## 第2項 2013-3次調査

## (1) 地点と発掘に至る経過

私部城二郭の東側斜面のうち北半に位置する。同地点付近においては、これまで堆積状況や、私部城段階の形状については明らかではなかったため、発掘調査を実施した。

また、2013年8月の集中豪雨により、二郭東側斜面で土砂崩れが起きていた。この復旧作業に先立つ調査もかねて発掘調査を実施した。

まず、水平距離で南北約14m、東西約5mを調査区として設定した。二郭上面側から重機により調査区上半を中心にして、崩落した表土を可能な限り取り除き平面精査を行った。

次に重機による掘削が及ばなかった調査地の下半の範囲については、調査区の北端に北サブトレンチ、南端に南サブトレンチ、そして中ほどの地点に中サブトレンチを東西方向に設定し、遺構・遺物の有無を確認しながら掘り下げを行った。



第107図 2013-3次 調査地点位置図

## (2) 層序 (第109・110図)

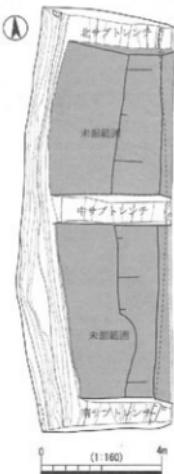
崩落土を除去した結果、調査区の中サブトレンチ付近で最も大きく土が流出したことを見認めた。ただし、それは二郭斜面の旧表土から現在の表土が動いたもので、地盤面への影響は少ないものであった。北壁断面および南壁断面では良好に地盤層から現在の表土までが遺存していた。

## (a) 表土層

各調査区の第1層に対応し、現況で約45度の傾きにより堆積する土壤化層である。層厚は10cm前後と薄い。本郭北側斜面の堆積状況と類似する。層厚や傾斜とともに現況の北側斜面などと類似するものである。

## (b) 近世～近現代堆積土

南壁断面第2～6層・北壁断面第3～5層・中サブトレンチ北壁断面第2～6層・同南壁断面第2層に対応する。郭上面より流出したとみられる

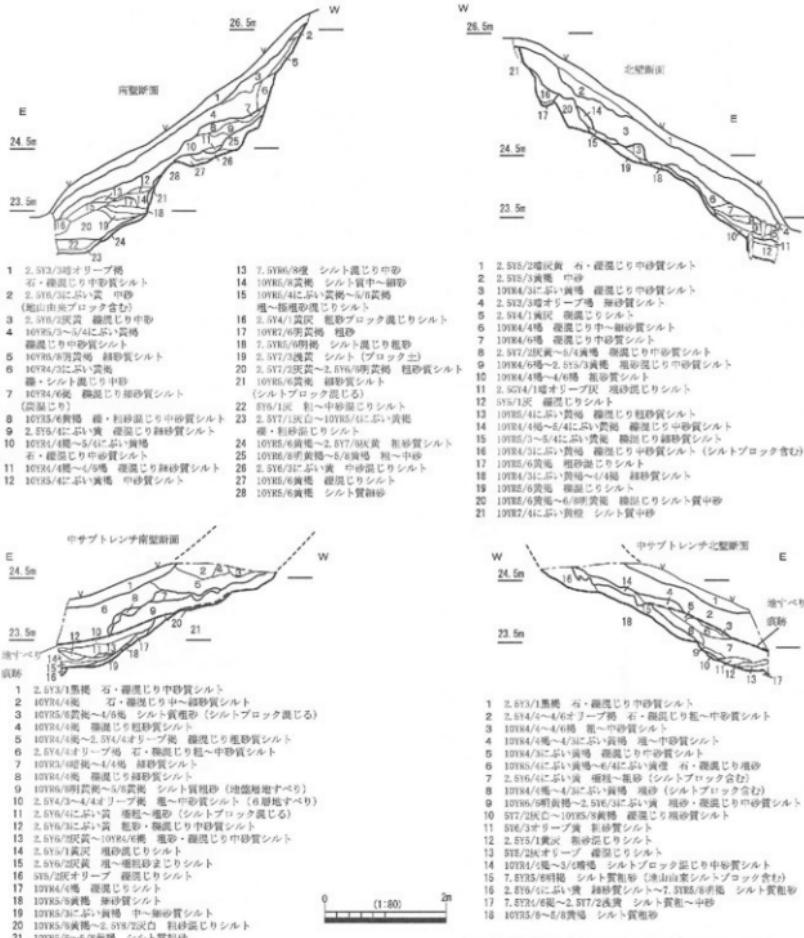


第108図 2013-3次 調査区位置図

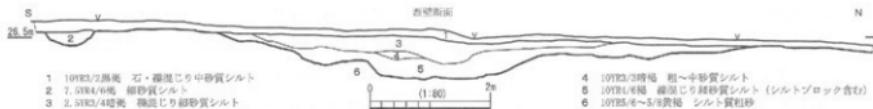
ブロック土は旧表土であり、今回の崩落以前にも幾度か小規模な流出が起きていたことがわかる。層中に近世以降の陶磁器を含む。

## (c) 中世末前後の流出土

郭上方より流出したとみられる堆積層が確認さ



第109図 2013-3次 調査区断面図



第110図 2013-3次 調査区西壁断面図

## (d) 中世段階堆積層

後述の切土された地盤層上に堆積する。

遺構埋土 西壁断面で4溝(第3～5層)とピット(第2層)を確認した。また、北壁断面でも2ピットを検出している(第16・17層)

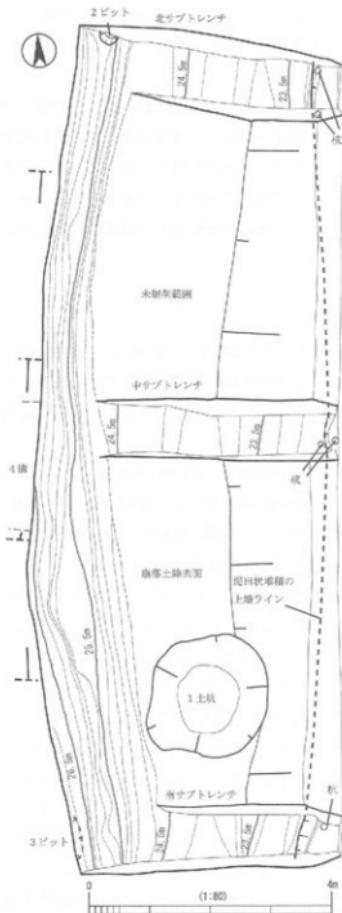
斜面地表土 地盤層上に薄くはりつく土壤化層である。南壁第21・24～27層、北壁第13～15・18・19層、中サブトレーンチ南壁第7・8・17～20層、同北壁第4・14層に相当する。とくに、犬走り状の段の上面に厚く堆積する。

堀部堆積層 各調査区の東端最下層に堆積する。南壁断面第22・23層、北壁断面第11・12層、中サブトレーンチ南壁断面第16層、同北壁断面第17層に対応する。堀に相当する部分である。粘土～シルト層が堆積する。この直上で中世後半の土器・瓦が出土し、近世に下るものでないとわかる。本郭北側斜面と同じく泥田状の堆積である。

## (e) 地盤層

地盤層は、南壁第28層・北壁第20・21層・中サブトレーンチ南壁第21層、同北壁第16・18層に対応する。T.P. 24.5m付近で犬走り状の段を形成している。段より下方で約45度の傾斜をみせるのに対して、それより上位では50～60度前後と傾斜がきつくなる。不自然なこの形状はいずれのサブトレーンチでも認められる。地すべりの影響がほぼない北端と南端のサブトレーンチでも頗著に認められ、地すべりによるものである可能性は低い。人為的に地山層を削り、この形状を切り出したと考えられる。

以上の層序観察からは、地盤層を削って成形し、郭として利用したとわかる。



第111図 2013-3次 調査区平面図

## (3) 遺構

## (a) 犬走り状の郭斜面

断面形状は層序にて述べたとおり、犬走り状の段をもち、それより上で傾斜がきつく、それより下で傾斜が若干緩くなる形状であったとみられる。平面でみると、現状ではほぼ直線となっていたが、大溝付近で、郭上面側にやや屈曲する形状をしている。

なお、現況の地形測量図においても、同様の段は二郭東斜面の南半でも確認でき、二郭東斜面全体にこの犬走り状の段がめぐっていたと推定できる。こうした形状は自然地形で生まれるものとは考えられず、地盤層を切土して形成されたものと考えられる。

## (b) 堀部

郭堀では、T.P. 23.2m～22.8mで、青灰色のシルト・粘土層の堆積を確認した。その堆積層の上部に中世末の流出土層が堆積することから私部城段階の堀部堆積と判断できる。

2013年度の他地点の調査成果を参考にすると、T.P. 22.8m前後を底面とした箱堀と推定される。同地点付近では、本郭北側斜面と類似する泥田状の箱堀であったと推定できる。

堀と斜面の変換点には、垂直に近い急傾斜で地盤層が切り込まれ、杭が打ち込まれている。杭は樹皮を残し、上方側の端部を尖らせたものである。上層から打ち込まれたものである可能性も残るが、現況の断面觀察からは、私部城段階のものである可能性が高い。また堀と斜面部の切り替わり部で、地盤層を垂直に切り落とした痕跡は本郭北側斜面でも認められた。箱堀の形成時に護岸として打ち込まれたものとみられる。また残存状況の良いものに先端を尖らせているものがあるところからは、防御を目的としたものである可能性もある。

## (c) 郭上の溝（4溝）

調査区西壁断面にて確認した。底部標高がT.P. 25.9m、南側の上端標高がT.P. 26.6m、北側の上端標高がT.P. 26.3mと溝を境にして郭上面で高低差が認められる。幅約7mである。二郭上面を区画するものとみられる。

断面のみの観察で同構から遺物は検出していない。ただし、この溝下方の中サブレンチで多量に遺物が出土したのはこの溝との関連が強いものと考えられる。また、溝以南の斜面裾部で遺物の出土が多いことからは、同溝南の一段高い平坦面上になんらかの施設があったことが推定できる。

## (d) ピット

郭上面から斜面への傾斜変換点付近でピットを2つ検出している。

2ピットは斜面に掘り込まれたもので、径約40cm、深さ約60cmである。

3ピットは径約70cm、深さ約20cmである。

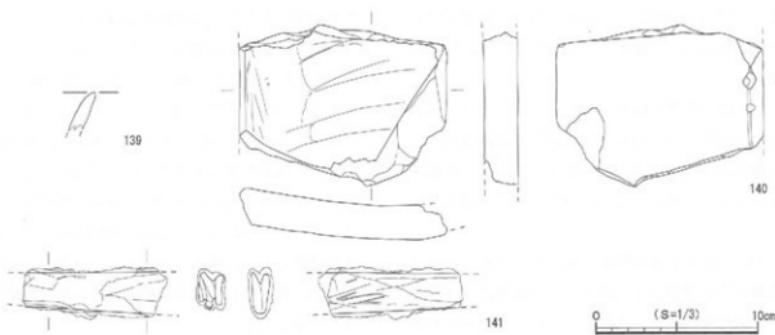
郭周縁の柵などの施設に伴う柱穴と考えられる。とともに、4溝上端から1.9m前後の位置にあり、4溝と関連した遺構である可能性も考えられる。

## (4) 遺物（第113～117図）

ピット・溝等の遺構に伴う遺物は検出されなかつたが、中世以後の斜面流出土中に遺物が含まれていた。4溝より南側の掘削時に多く出土し、中サブレンチ、および南サブレンチの斜面裾部で特に多かった。主な遺物は中世の瓦類で、軒丸瓦片・軒平瓦片・丸瓦片・平瓦片である。これに近世以降の層から出土した近世瓦が数点まじる。また瓦質土器・土師質土器片にくわえて陶磁器片も出土している。

## (a) サブレンチ以外調査区内出土遺物

サブレンチ以外の調査区上半で出土した遺物である。急斜面であるためか、遺物出土数は極め



第112図 2013-3次 調査区出土遺物

て少ない。

139は1土坑擾乱出土の土師質土器片である。流出土に混入したものと考えられる。

140は平瓦の側縁部を残す破片である。

141は斜面精査中に検出された鉄片である。薄い鉄片を少なくとも3枚重ねあわせ、断面V字状にしたものである。刀の可能性がある。

#### (b) 北サブトレンチ出土遺物

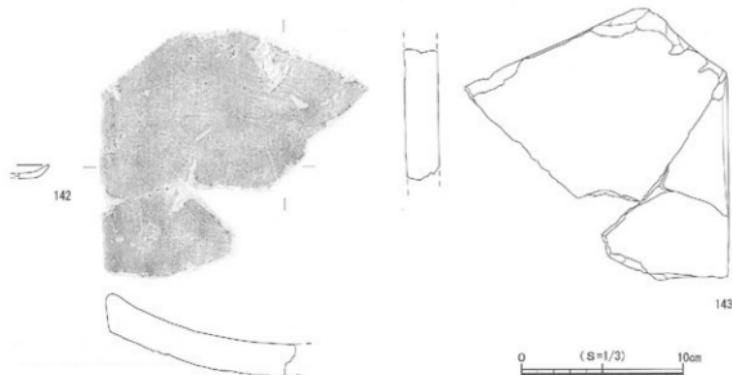
溝4より北側の範囲では出土遺物は少なく、北サブトレンチ内では斜面裾でも遺物はほぼ認めら

れなかった。図化し得たのは次の1点のみである。

142は赤褐色系の土師器皿の小片である。口縁部にヨコナデを施し、内湾気味に立ち上がる。千喜良分類のc類かd類にあたり、中世のものとみられるが、詳細は不明である。

#### (c) 中サブトレンチ出土遺物

主に斜面裾に人頭大の石などとともに集積して出土した(写真図版22)。144は赤褐色系の土師器皿で、千喜良分類c類に含まれるものである。14世紀前葉～15世紀中葉頃までの時期幅におさ



第113図 2013-3次 北サブトレンチ出土遺物

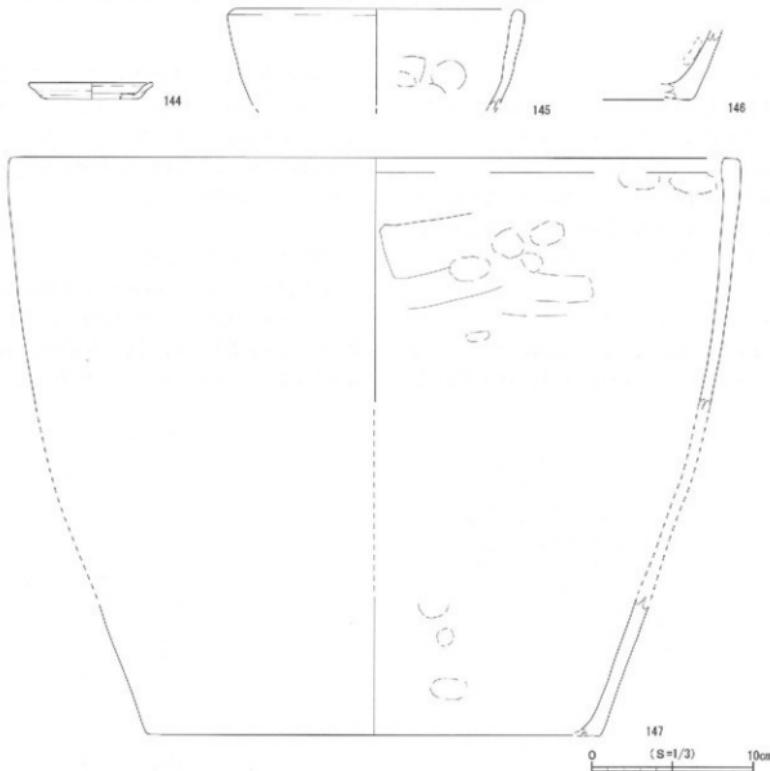
まる（千喜良 2002）。小片ながら、二郭付近における築城以前の土地利用の可能性を示す遺物である。

145は土師質土器の口縁部片である。口縁端部先端に平坦な面を持たせる。器厚は口縁部が厚く、体部は薄くなる。外面は回転ナデにより、内面に指頭圧痕が認められる。中世の炮烙の可能性が高い。

146は弥生土器壺甌類の底部片である。表面は摩耗のため調整は不明瞭だが、内面側にハケメラしき調整痕がみとめられる。二郭上面下層にも弥

生集落域が存在する可能性を示唆する。

147は瓦質土器の深鉢である。中サブトレンチ掘部の地盤層直上から検出された。比較的遺存状況の良好な大型品で、復元口径約45cm、復元底部径約30cmをはかる。ただし、体部片に欠損が大きく、器高を復元することはできなかった。口縁端部は明瞭な平坦面をなす。底部は残存部からは平底と推定される。内面側は指頭圧痕やナデ痕跡が明瞭であり、横方向のナデにより仕上げられている。外側も同様の調整とみられるが、痕跡は不明瞭である。

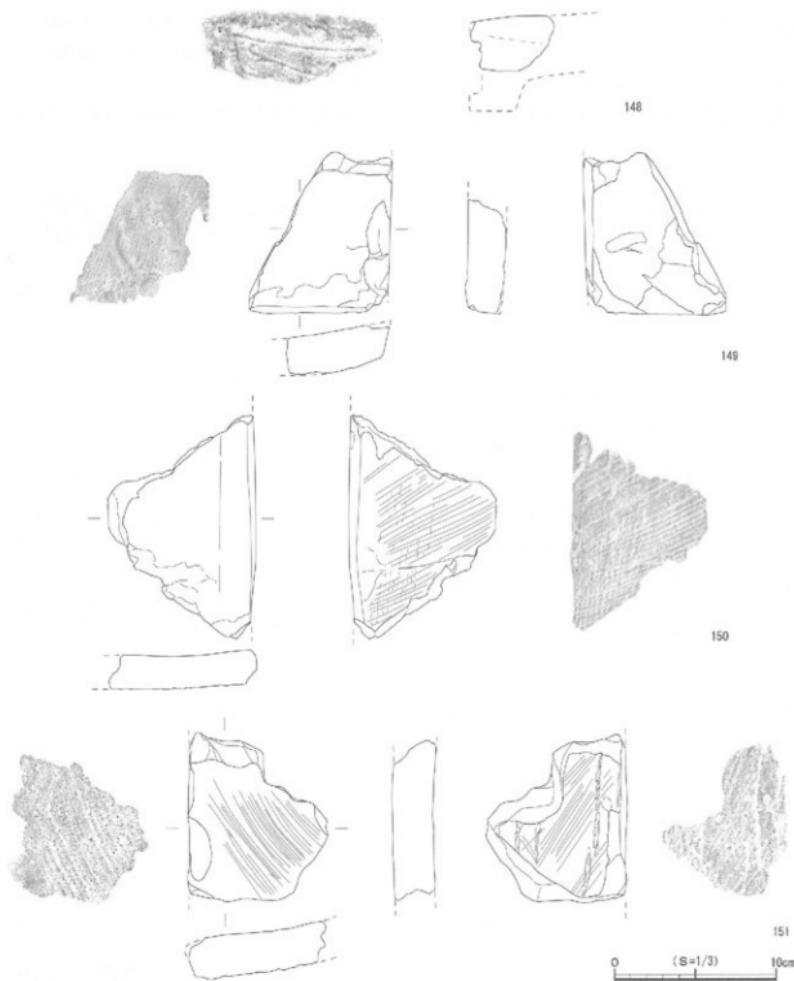


第114図 2013-3次 中サブトレンチ出土遺物

佐藤分類の深鉢形土器Ⅲ類に該当する（佐藤 1996）。奈良県内においては 14 世紀中頃から 16 世紀頃にかけて普遍的にみられるものとされるが、交野郡域においては新宮山遺跡（真鍋編

1993）、津田城遺跡本丸山地区（大阪府住宅供給公社ほか 1992）など 16 世紀代に多い。

148 は軒平瓦瓦当部片で界線と唐草文の一部を残す。残存部からは頸貼り付けと確認できる。



第 115 図 2013 - 3 次 中サブトレンチ出土瓦

149は、平瓦の広端部から側縁端部片である。

150、151は熨斗瓦などの道具瓦片とみられる。いずれも直線的な断面で、151は両面に糸切痕を残すなど未調整の範囲が多い。端部調整も荒い。

図化し得なかつたものも含めると、限定されたサブトレンチ内では出土量が多かった。

#### (d) 南サブトレンチ内出土遺物

郭上面からの流出土内に瓦片が含まれていた。

急斜面のため底部に集積されていたものとみられる。サブトレンチの掘削範囲に対して、瓦の出土量は比較的多い。

152は軒丸瓦の瓦当部片である。

153は丸瓦の玉縁部と胴部の一部の破片である。凹面側の胴部から玉縁部にかけての面取りの幅は2.2cmほどと比較的狭く、鈍い口縁端部のものとみられる。

154は、平瓦広端部から側縁部の破片である。



第116図 2013-3次 南サブトレンチ出土遺物

トレンチ東端の堀部掘削時に検出した。広端面に刻印を残す（写真図版 55）。刻印は□の中に、レ状の記号を刻んでいる。市内の近世瓦には認められないものである。近世瓦でも古相のものであり、中世段階に遡る可能性が高い。平瓦自体の製作技法は、黒色に焼成され、端部に面取りを施す丁寧なものである。

155 は平瓦の側縁から狭端部片である。凹面は丁寧にナデ、側縁端部と狭端部に面取りを施す。凸面側は砂が付着するなど調整が荒い。

156 は平瓦の広端部片で凹面側は丁寧にナデるが、凸面側は調整が荒く、糸切痕を残す。

158 は平瓦の広端部片から側縁部片で凹面側は丁寧にナデ、側縁端部に面取りを施す。凸面側はいわゆるハナレ砂とみられる砂粒が付着する。広端部には、横向方向に一直線の凹みが認められる。成形台の痕跡か、工具をあててナデしたものとみられる。

157 は平瓦小片である凹面を丁寧にナデるが凸面側は砂粒が付着する。

#### (e) 採集遺物

調査地周辺の水田耕作土中で採集された。

159 は鬼面の額部から、丸瓦受け部付近を残すものである。板の表面は額部の装飾などを貼り付けているが、欠損している。裏面の側縁部に粘土を貼り付け緩やかな側張をつくり、へら状の工具で全面を荒くナデしている。

160 は鬼面の左側辺の破片である。連珠は竹管状の工具を押し当てたものである。側張は板状のものとみられるが剥落している。

ともに、室町中期以後の年代のものである（小林 1991）。市域の近世瓦でも認められず、16世紀後半頃の津田城遺跡出土鬼瓦などと類似する点も多い。採集状況からは、二郭上面よりの出土中に含まれていたものである可能性が高い。二郭上面における瓦利用の根拠となる資料である。

以上、郭上面より斜面堀部へと流出した堆積土中に遺物が多く含まれていた。その年代は他調査区に比べ、時期幅が広く小片のものでは 14 世紀



第117図 2013-3次 調査区周辺採集遺物

前葉頃まで迺りうるもののが存在した。二郭付近において中世段階にも土地利用がなされていた可能性を示すものもあるが、小片であり混入の可能性が高いものである。

瓦質土器・瓦類などは、本来二郭上面で利用されていたとみられるものである。本郭のみならず、二郭においても瓦利用がなされていたことを示す資料である。

#### (6) 小結

##### (a) 二郭東斜面の構造

二郭東側斜面に犬走り状の段が備えられていることを確認した。犬走りを境として上方の斜面傾斜はよりきつくなる。この斜面形状は地盤層を切土して形成されていた。

こうした形状の斜面は本郭などでは確認されてもおらず、二郭独特の形状である。二郭では後述の北側斜面でも切土による段形状が認められ、複雑な斜面形状をとることが確認されている。

##### (b) 二郭東堀部の構造

**泥田状の堆積** 郭斜面の下方で泥田状の堆積への切り替わりを確認した。これは本郭北側斜面と類似しており、底面に泥田状の堆積を伴う箇堀であったことが確認できた。

本郭・二郭間の堀部でも、南半にあたる2013-9次調査第1・2調査区では泥田状の堆積が認められなかった。一連の堀の中でも堆積状況が大きく異なることを確認している。

**底面の構造** 底面の標高は、T.P. 22.5m前後で、調査区内ではほぼ平坦な面を呈していることを確認している。この底面標高は、1994-2次調査第3調査区で確認された本郭北側における堀部底面の標高よりは1mほど高く、2013-9次調査第1・2調査区で確認された本郭・二郭間堀南半における底面の標高よりは0.7mほど低い。いずれも限定された調査区ながら、いずれの調査区内で

確認された堀の底面は平坦な面を呈するものであり、傾斜は伴っていなかった。このことに先述の堀内部の堆積状況の差もふまると、私部城段階の堀底面は段構造を伴うものであったと確認できる（第121図）。

**堀・斜面の切り替わり部の構造** 堀の泥田状堆積から、郭東斜面への切り替わり部の堆積状況について、切土によって地盤層を垂直または急傾斜に落とす形態が確認できた。これは1994-2次調査第3調査区など、北側斜面でも確認されていたものであった。当調査区では、この垂直の切土に伴って、数本の杭が検出され、護岸によるものと推定できるようになった。また、その杭の一部には先端を尖らせたものがあり、防御的な機能もあった可能性がある。

##### (c) 郭上面の構

限定された調査区ながら、郭上面を区画する4溝およびそれに付随するとみられるピットなど遺構を断面で確認している。4溝より以南では30cmほど高く地盤層を切り出した壇状の平坦面が形成されていることを確認した。

##### (d) 遺物出土状況

東斜面の堀部には遺物が多く堆積していた。これらの遺物は、郭上からの流出土中に含まれていたものであり、二郭上面の片づけや、廃城後の耕作に伴って流出したものとみられる。

遺物は4溝堀野の中サブトレーンチおよび、4溝より南の南サブトレーンチ内で多く検出された。この分布状況からは、これらの遺物の供給元としては、4溝及び、4溝以南の壇上が想定される。現況で二郭上面でも最も標高が高く、立地から二郭上面の中心部であった可能性が高い地点である。

この中には、瓦も一定数出土した。限定された調査区面積に対して量は多かった。また採集品も含めると、瓦種類も豊富であり、二郭上面において瓦利用がされていたと推定できる。

### 第3項 本郭・二郭間堀部の調査成果

#### (1) 堀・斜面の構築

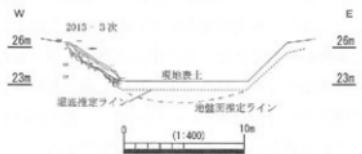
調査面積は限定されているものの、本郭・二郭間の郭斜面から堀部について、多くの手がかりを得ることができた。

同地点においては、斜面・堀部の形成は切土によるものであった。盛土が利用された痕跡は認められない。特に、2013-9次第1・2調査区では、自然の谷部を大きく切り開き現況の堀形状を切り出していることが確認できた。

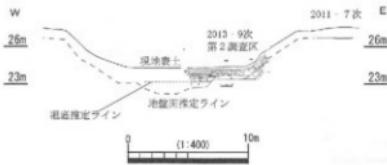
なお、この自然谷については、現地における調査段階では二段堀として構築されたか、または薬研掘を箱堀に変更した可能性も想定された。しかしながら、自然谷埋土に人为的改変の痕跡が認められなかつたことに加えて、遺物も含まれていなかつたことから現状の解釈に落ち着いた。

#### (2) 堀・斜面の形状

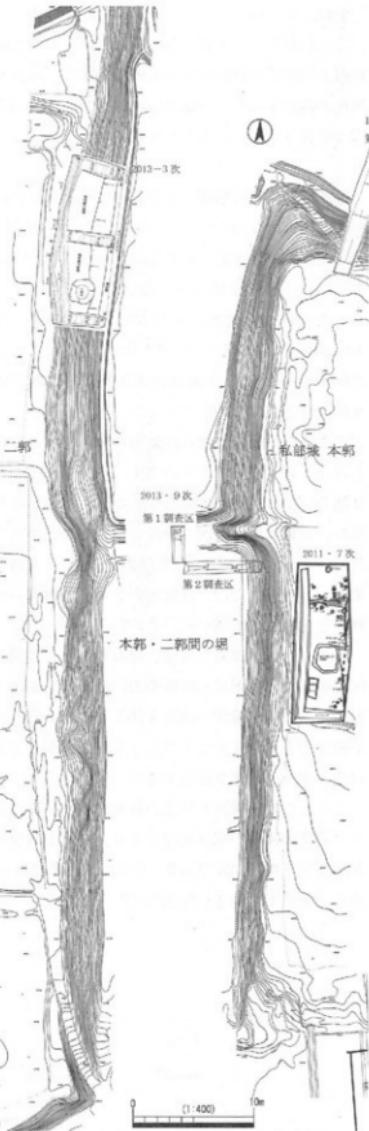
**斜面の形状** 二郭東斜面では犬走り状の段が認められた。この形状は、現地形にも反映されており、二郭東斜面全体に犬走り状の段がめぐらてい



第118図 本郭・二郭間の堀(北半) 東西断面合成図



第119図 本郭・二郭間の堀(南半) 東西断面合成図



第120図 本郭・二郭間堀部平面合成図

たものとみられる。

これに対して、本郭の西側斜面では、本郭北側斜面と同様に直線的な切岸が確認できた。現況の測量図観察からも、同様の形状が本郭西側斜面全体に踏襲されていたものと推定できる。

**堀底面の構造と規模** 各調査区で検出された堀部底面は平坦な面を呈していた。ただ、各調査区間で標高を比較すると高低差が認められた。南半の2013-9次調査第1・2調査区で底面標高がもっとも高く、堀部北半の2013-3次調査ではそれよりも0.7m低くなっていた。さらに、本郭北側斜面の1994-2次調査第3調査区の堀部底面標高はさらに1m低くなっていた。

また、堀底面の堆積状況は堀の南北で大きくとなっていた。堀の南半の2013-9次調査第1・2調査区では、荒い砂粒を中心とした堆積が認められ、空堀に近い状況で機能していたことが判明した。これに対して、堀北半の2013-9次調査第1・2調査区では、青灰色のシルト・粘土の堆積する泥田状の堆積が続いていた。

こうした底面標高と堆積状況の差から、各調査区で確認された堀底面は緩やかに高低差を備えるものではなく、段状の構造を伴うものであることが確認できる。北半で少なくとも2面、南半で少なくとも1面の面が確認できた。

こうした底面構造と先述の斜面形状をふまえると、私部城段階の堀は箱堀であり、推定上端幅約20m、推定下端幅12mである。比高は堀南半で3.4m前後、堀北半で約4m前後になる。

**土橋状の大畦畔の性格** 2013-9次第1調査区では、本郭と二郭を結ぶ土橋状の大畦畔を調査した。この結果、現況の大畦畔が近世以後に堰部を農地化する中で形成されたことを確認した。

また、堀段階の高低差はそのまま現況の水田・畑面の高低差にも踏襲されている。土橋状の大畦畔は、先述の私部城段階における堀底面の段構造を利用して、その傾斜変換点に設置されたものとみられた。

### (3) 堀の年代

堀部には改変の痕跡は認められなかった。また、機能時堆積が薄く、機能時堆積層中の出土遺物が極めて少ないとから、堀の形成から廃絶までは長い期間のものではないと考えられた。堀機能時から出土中の最新の遺物の年代からは、16世紀後半前に堀が機能した年代を推定することができる。

### (4) 郭上面の利用状況の推定

二郭東斜面の西側断面などでは、郭上の区画溝、ピットなどの遺構が確認された。また、その堀野では、郭上面より廃城後に流出した遺物が検出された。また、本郭西側斜面でも郭上面より流出した遺物が検出された。その中には種類・量とも豊富に瓦類が認められた。すでに郭上面で瓦が多量に検出されている本郭のみならず、二郭上面においても瓦利用がなされていたと推定できる。



第121図 本郭・二郭間の堀 南北断面合成図

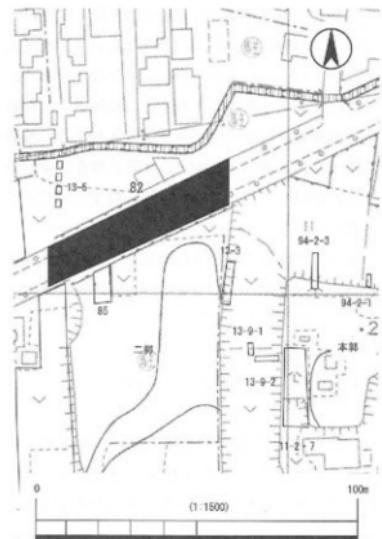
## 第7節 二郭北～北西部の調査

### 第1項 1982年調査

#### (1) 地点と調査に至る経過

二郭の北部を南西から北東方向に横断して敷設された大阪市水道道路工事に伴い立会調査が実施されている。調査成果については、これまで報告されておらず、わずかに紹介されているのみだった(交野市教委 1995)。1977年度調査と紹介されたものがあるが 1982 年が正しい。

なお、その当時の詳しい経過については、断面図の記録とともに、交野古文化同好会会誌である『石鏡No.50』に記されている(交野古文化同好会 1982)。この記録からは、現在交野市で所管している瓦資料の一部がこの時採集されたものであることが確認できる。現在残されている写真・図面・遺物から得られる情報を整理する。



第122図 1982年 調査地点位置図

#### (2) 写真資料より得られる情報

わずかに残る写真資料(写真図版 23)からは、二郭北半の構築状況・遺構・出土遺物について、重要な知見が得られる。

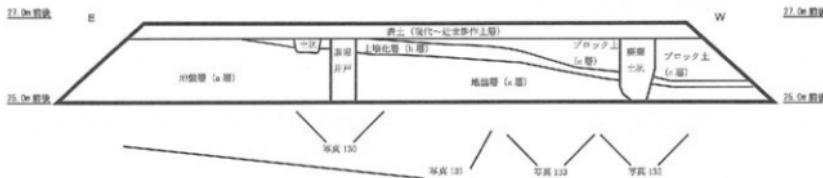
##### (a) 盛土と地山利用

北壁断面と南壁断面で堆積状況が大きく異なることが確認できる。

南壁断面(第123図) 写真図版 23 の写真 131 は南壁断面の東半、同写真 133 は中ほど、同 132 は西半の一部を撮影したものである。これらの写真では、表土下で a～c 層の 3 種類の堆積が認められる。なお、表土は、現代までの耕作土層である。

東半の写真 131 の最下層に堆積するのが a 層で、黄褐色または灰白色の明るめの色相を呈する地盤層である。a 層は東端(写真左端)で高く堆積しており、西(写真右端)に向かうにつれて、低く傾斜していく。その上層に堆積するのが b 層で褐色系の暗めの色相の堆積で、土壤化層とみられる。a 層の傾斜にあわせて、東から西へと低く傾斜して堆積する。写真西端(写真右端)では b 層と表土の間に、c 層が確認できる。これは、a 層と b 層を由来土としたブロック土層である。この a～c 層の比率は南壁断面の東西で緩やかに変化していることが確認できる。後述する遺構はこれらの a～c 層を切って堆積している。

この a～c 層の比率はより西側へ向かうにつれて変化する。南壁断面の中ほどを撮影した写真 133 では、a 層、b 層、c 層の比率が 2：1：2 ほどとなっており、a 層(地盤層)が低く傾斜し、それに合わせて b 層も低く傾斜していっているのに対して、それを埋めるように c 層(ブロック土)が堆積していることを確認できる。この傾向は、もっとも西側を写した写真 132 でより顕著になり、a 層、b 層、c 層の比率は 4：1：2 ほど



第123図 1982年調査 南壁断面模式図

となる。

**北壁断面** 北壁断面の写真は少なく、その西半を中心に撮影したものに限られる（写真129）。これをみると、黄褐色または灰白の自然堆積層が変形構造を伴って堆積している状況が確認できる。これは南壁断面のa層に対応する地盤層である。地山上に盛上がり確認できる南側斜面と対照的である。こうした状況は、二郭北側の先端部を調査した2013-5次調査でも追認される（第3章第7節第3項）。

**盛土と地山利用の状況** 北壁・南壁両断面の写真観察からは、現況の郭形状が形成される以前、二郭北半には、地盤層（a層）により構成され、東が高く西へ低く傾斜する谷地形が存在していたことがわかる。その上に土壤化層（b層）が堆積していた。これをブロック土（c層）を盛土することにより現況の二郭が形成された。

#### (b) 南壁断面の遺構・遺物

**井戸** 南壁断面の東半では、素掘りの井戸とみられる遺構が確認できる（写真130）。同井戸の埋土は、地山状に堆積する土壤化層によるものとみられる。この層中に近現代遺物が含まれている様子はない。

また、私部における近世以後の井戸は、2012-3次調査で確認した瓦質井戸枠などを伴う。それに対して、1997-2次調査で確認した井戸とみられる土坑などは、いずれも素掘りの状態で検出されている。このことをふまえると、同井戸は近世

以前に遡る可能性が高い。井戸の構造・堆積状況などからみると、私部城の廃城に伴って廃絶した井戸と考えられる。

**土坑** 素掘り井戸の左には、地盤層を切って、ブロック土により埋没した土坑が確認できる。同遺構も堆積状況から私部城段階のものと考えられる。

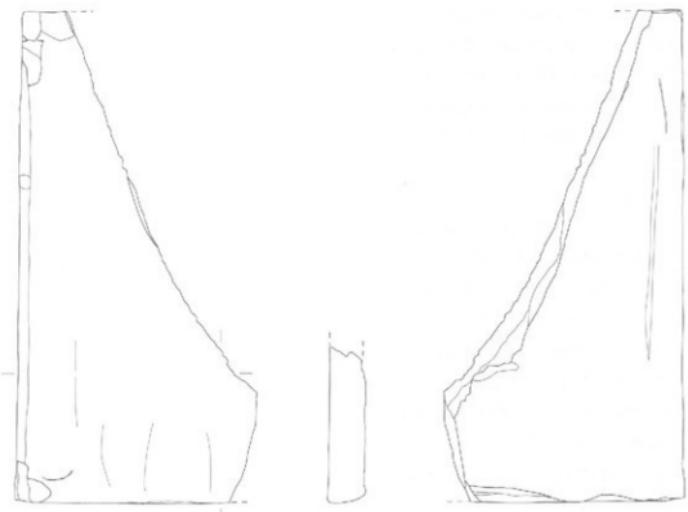
**廃棄土坑** 南壁断面の西半に所在し、写真132に記録される。この土坑については地元の歴史雑誌『石鎚No.50』に、瓦と被熱した石材が集積していたことが記されている（交野古文化同好会1982）。写真観察および雑誌の記録から、人頭大の石が少なくとも2点、そして平瓦などの瓦類が4点ほど断面で確認できる。この集積は、二郭盛土と地盤層を切る土坑に伴うものとわかる。規模に差はあるものの、1994-2次第2調査区検出の土坑に類似しており、廃城に伴う廃棄土坑であると考えられる。

また、同断面で検出された瓦の一部は採集者より奥野平次氏に預けられ、現在は交野市所管となっている（第124図）。

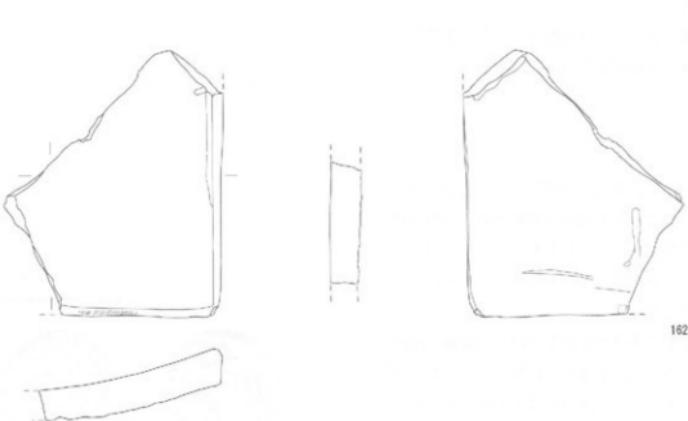
#### (3) 出土遺物（第124・125図）

1982年度の立会調査で検出された南壁断面の廃棄土坑出土瓦は、現在計4点が交野市所管となっている。うち2点が平瓦、もう2点が雁振り瓦である。

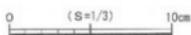
**平瓦** 161・162は平瓦片である。ともに凹面



161



162



第124図 1982年調査 出土遺物

側を丁寧にナデ、側縁端部に面取りを施す。凸面は縦方向に工具でナデを施した痕跡が認められるが、いわゆるハナレ砂の砂粒・粘土粒が付着し、表面が荒い。また凸面側縁端部には型台のバリ痕跡が明瞭に残る。製作の最終工程を凹型台で行ったことが明瞭である。

161は全長が判明し30.2cmである。厚さは2.3cmである。推定幅は20cm前後である。製作技法や法量について私部城本郭の廃棄土坑で出土した平瓦と同類のものである。本郭上の廃棄土坑と同時期のものであることが裏付けられる。

**雁振り瓦 163・164** 163・164は雁振り瓦の平瓦部片である。ともに凹面側は糸切り痕を残す。凹面狭端部を広く削り、側縁部をナデて、側縁端部に面取りを行う。凸面側は全面を丁寧にナデを施す。

164は残存状況が比較的良好で、全長が29.5cmと判明する。厚さは2.52cmほどである。この法量は、平瓦である161とおおむね一致している。平瓦・雁振り瓦の製作において、板状粘土の採取までは同様の工程を経ていることがうかがえる。これらは郭上面の片づけに伴って廃棄されたものとみられる。

**永楽通宝 165** 165は当調査地点付近の南壁断面の中ほど付近で採集されたものである。

#### (4) 小結

以上のように、本地点の調査から、築城以前の二郭北半における自然地形は谷状の落ち込みを残したものであったこと、その上に、盛土を行うことによって、平坦な二郭上面の形状を作り出したことが確認できた。

また、ここに井戸・廃棄土坑などの遺構も確認できた。そのうち、廃棄土坑に伴って、被熱した石材と瓦が出土した。瓦の特徴・層序からは本郭と同時期のものと考えられる。二郭上面において利用されていたものとみられ、二郭における瓦利用を裏付ける成果である。



第125図 1982年調査 出土・周辺採集遺物

## 第2項 2012-3次調査

## (1) 地点と調査に至る経緯

本調査地は、繩張り研究によって二郭と呼称されてきた長方形の郭の北西に隣接する位置にあたる。同地点の現況は、二郭に比べて低い平坦面を形成しており、從来二郭を囲う堀が埋没しているものとみられてきた。

宅地開発に先立って確認調査を実施したところ(私部城跡2012-1次調査)、二郭に西接する位置に溝を確認し、溝のさらに西に地盤層からなる高台が存在することを確認した。私部城跡の範囲を確認する上で、調査が必要であると判断し、原因

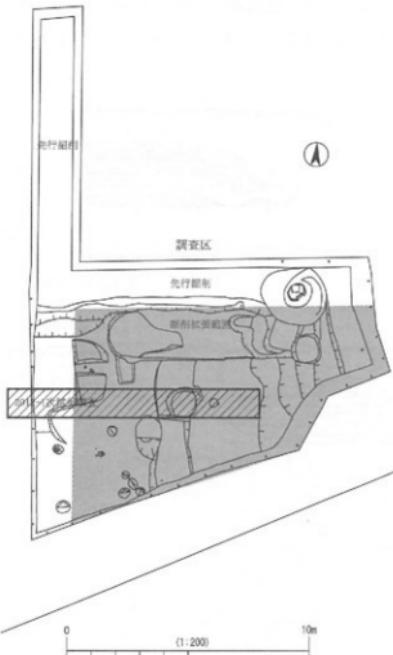
者と協議の上、発掘調査を実施した。

本調査においては、まずT字状に先行掘削を行い、調査地北半に向かって急激に落ち込む地形が存在することを確認した。この調査地北半では旧耕作土下面で遺構・遺物が検出されなかったことに加えて、この範囲を全面掘削すると、後の工事への影響が大きいため、調査地北半の調査掘削は先行掘削以上のは実施しなかった。

調査地南半においては、現地表面より浅い地点で地盤面が確認され、後の工事への影響も比較的小さかったため、掘削範囲を拡張し、この地盤層からなる高台の範囲を確認し、地盤面上で遺構・遺物の検出作業を行った。



第126図 2012-3次 調査地点位置図



第127図 2012-3次 調査区割図

## (2) 層序 (第 128・129 図)

## (a) 現代盛土・攪乱

現代の畑土壤の下面では、調査地北半に、最大で 2m ほどの分厚い盛土・攪乱が認められた。盛土自体は地山由来のブロック土を含むものであり、土中には現代遺物も多く含まれていた。昭和 23 年の航空写真ではこの盛土は確認できない。周辺住民からの教示によれば、1982 年に実施された道路工事の際の堆土による盛土とされる。

## (b) 近世～近現代耕作土層

現代盛土以前の旧地形は、調査地の南北で大きく変化する。調査地北半は、標高 T.P. 23.3 ～ 23.4m の平坦に堆積する旧耕作土層である。調査区中ほどで急傾斜をもって南に向かって高くなり、調査地南半では現代表土下の 0.2m ～ 0.4m ほ

どの浅い標高で、厚さ 0.2m ほどの旧耕作土が確認される。調査地北東では、同層中付近から近世の井戸が掘り込まれる。近世以降から近現代の間に形成された耕作土層である。

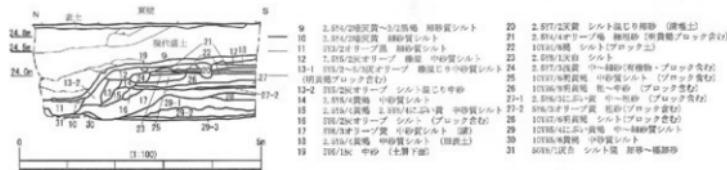
## (c) 遺構埋土

近世以後の耕作土下面では、地盤層が露出し、そこに弥生時代～中世の遺構埋土が検出された。

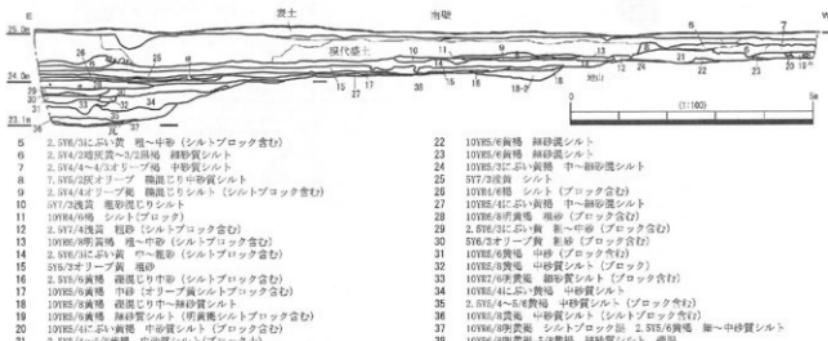
調査地東端で検出された堀跡・溝のほか、建物跡とみられるピット群などを確認した。瓦片・陶磁器片などを含み近世以前に埋没したものを中心としている。また一部には弥生時代にさかのばる可能性があるピット群も含まれていた。

## (d) 地盤層

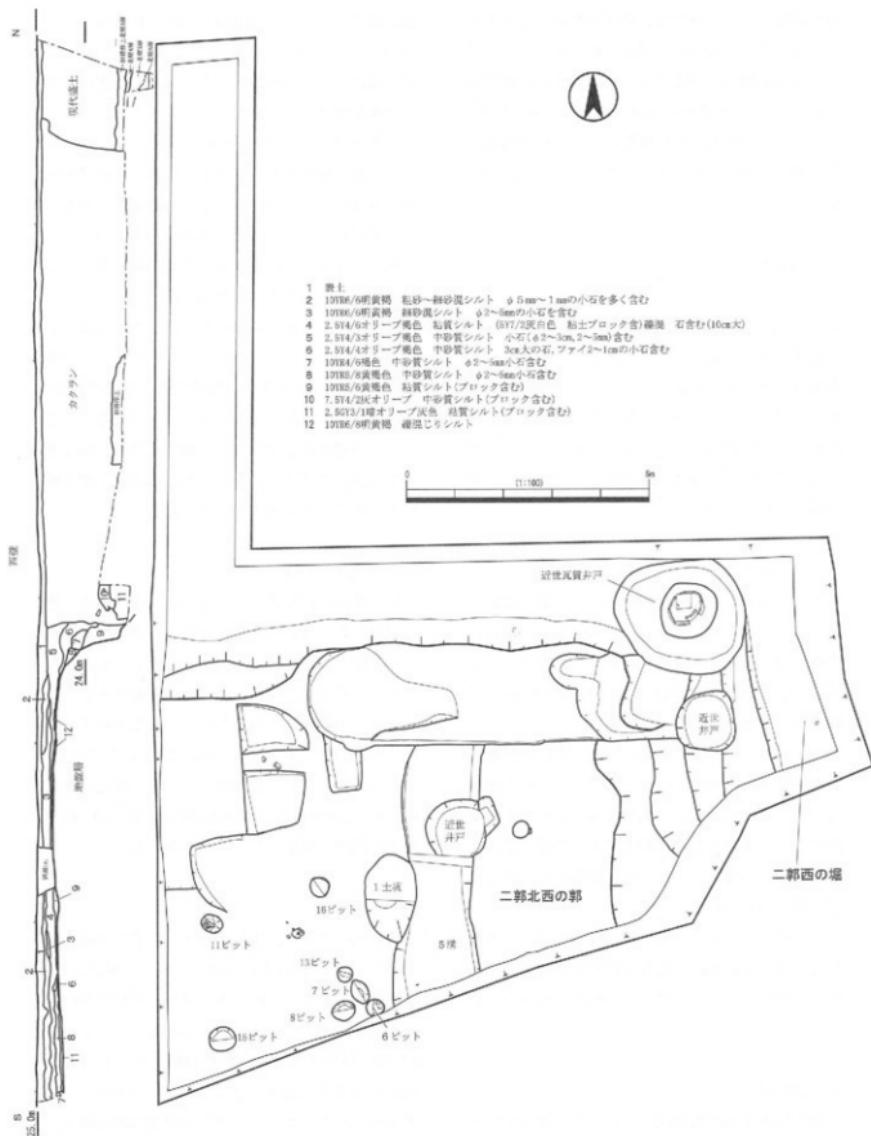
調査地北半と南半で地盤層の質は大きく異なる。調査区南半の高台の地盤層は、明黄褐色の堅



第 128 図 2012-3 次 調査区東壁断面図



第 129 図 2012-3 次 調査区南壁断面図



第130図 2012-3次 調査区平面・断面図

固な雑混じりシルト層で、郭状の高まりを構成する。北半では、青灰色・灰色の粘土及びシルト層で、湧水も激しく軟質であった。こうした地盤層の質の差は、自然地形を反映したものとみられる。ただし、北側斜面や東端堀部にみられる急傾斜は自然地形のみによるものではなく、人為的な切上を伴う

### (3) 遺構

#### (a) 二郭北西の郭

調査区南半で確認した。本調査区で確認された東西長が約12m、南北長が約10mで、さらに西と南に延長するものである。地山を利用し、上面の凹凸にわずかに盛上を行い平坦な面を作り出しているとみられる。後述の二郭西の堀により、二郭と隔てられている。

#### (b) 二郭西の堀

調査区東端で確認した南北に延びる溝の東側上端は、二郭の西端にあたるとみられる。その場合の推定幅は約6mになる。底面標高はT.P. 23.1m前後で、二郭北西の郭上面との比高は約1m、二郭上面との比高は約2mである。

埋土は、2～3種のブロック土が交互に堆積し、人為的に埋められたものと判断できる。その傾斜は、やや東が高く、西へ低くなっている。東に位置する二郭上面からの供給土によって埋没したと考えられる。埋土下部で瓦片・陶器片を、埋土上部で陶磁器片を検出している。

この堀は近世以後の表土層によって完全に覆われている。中世末にある程度埋め戻され、近世以後の耕地化の中で平坦にならされたものとみられる。

#### (c) 建物跡

調査区の南西隅の郭状の高台上で、残存する部分で深さ10cmほどと浅いが、直径45～50cm、

底面標高がT.P. 23.3m前後に揃う4基のピット（8・11・15・16ピット）が、2.5m前後の間隔で正方形に並ぶ。建物跡とみられるが、調査区内では全体を確認できていない。

うち11ピットでは、挙大の石が3点、さらに小片が数点検出された。礎石の根石の可能性があり、本来礎石を伴う建物であった可能性もある。

4基のピットからの出土遺物は、南東の8ピット埋土に含まれていた瓦小片1点のみである。これも図化しうるものではなかった。

出土遺物からその年代を推し量ることは難しいが、私部城が近世に農地化していることを考慮すると、中世以前のものと推定することができる。ピット内の堆積層も上層の耕作土とは異なる。さらに、同建物跡が堀と方向を揃える点や、郭上面の先端部に位置することからは、私部城の郭と併存して機能した建物跡と考えられる。

#### (d) 中世溝（5溝）

建物跡の東に位置する南北方向の溝である。近世以後に郭上面に加えられた改変により削平されているが、本来は、郭北斜面まで続いたものとみられる。残存部の深さ10～20cm程度である。その上部が旧耕作土に削平されていることを差し引いても浅い溝である。最大幅は1.3mほどである。

埋土下部で瓦小片を検出している。南北を向く軸方向は、建物跡および調査地東端の堀と併存し、私部城段階に機能したものとみられる。

#### (e) 弥生時代ピット（6・7・13ピット）

調査区南西隅で、弥生土器とみられる土器小片を含む40～50cm程度の深さのピットを検出した。断面形態や堆積状況は三者三様で、複数時期のものが混在している可能性もある。周辺で精査したが、堅穴建物の覆土や、周溝は確認できなかった。私部城築城時の改変などにより、削平を受けているとみられる。こうした遺存状況では建物跡などを復元することはできなかった。調査地より南に

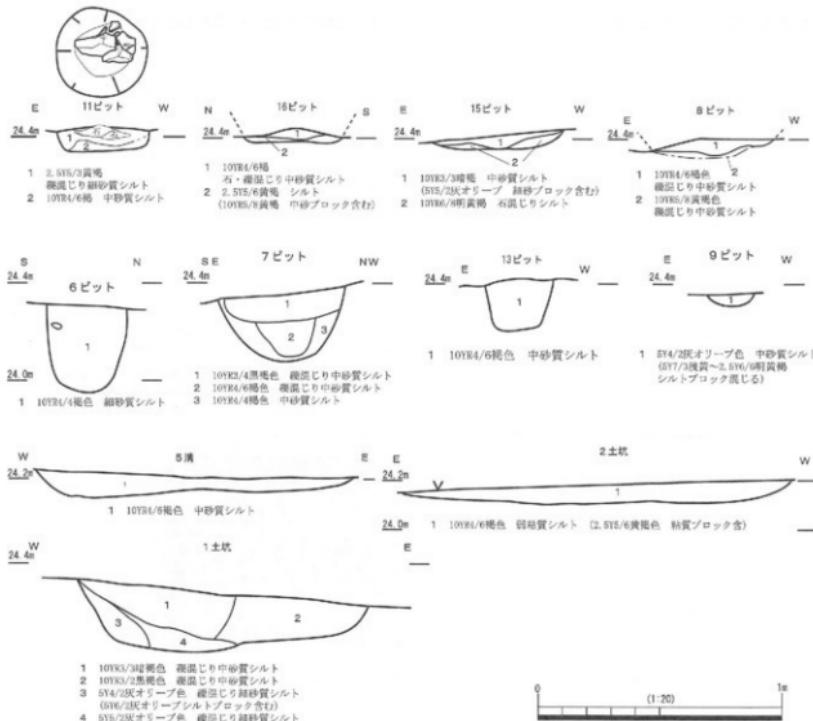
建物の中心がある可能性が高い。

#### (e) 近世以後の遺構

**瓦質井戸** 郡の南東隅で検出された。崩落の恐れがあったため完掘しなかった。掘り方は内外の2段堀で、外側掘り方径2.7～2.2m、内側掘り方径1.2mではほぼ垂直に掘り込む。内側の掘り方内に、第132図167の瓦質井戸枠を一段あたり8枚円形に並べて、径0.8mの井戸枠としていた。今回の掘削範囲では、3段まで瓦質井戸枠を積み重ねている状況を確認している。

**その他井戸** 瓦質井戸のほかに、5溝を切るものと、郭北東隅に位置するもの、2箇所で井戸掘り方とみられる土坑を検出している。いずれも径は1.2～1.3mほどでほぼ垂直に掘り込まれる。瓦質井戸枠をともなう井戸の内側掘り方に類似するものである。層相から近世以後のものとみられたため、この2つも完掘していない。

**1・2 土坑** 土坑は2基検出した。構造は異なるがいずれもブロック土により埋没する。ともに近世以後の耕作に伴って掘り込まれたものとみられる土坑である。



第131図 2012-3次 調査区遺構断面図

## (4) 出土遺物 (第132図)

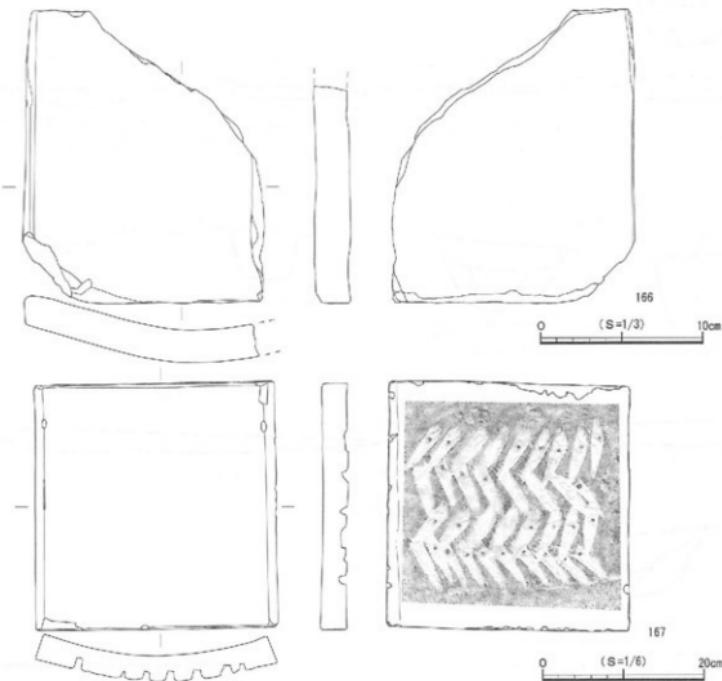
検出された遺物量は極めて少なく、近世以前の遺物で固形化しうるものはなかった。

5溝では平瓦の小片が出土している。また、166は近世遺構に混入した中世平瓦片である。周辺の堀埋土より混入したものとみられる。堀下部においても瓦小片・陶器片を検出している。いずれも固形化しうるものではなかったが、これらの遺構が近世以前に埋没したことを示す。

167は、近世の瓦質井戸枠である。瞳のような形の工具を一列あたり8~10回叩き、千鳥状に4列配置するものである。市域で多く確認され、私部周辺で生産された可能性の高いものである。

## (5) 小結

二郭の北西に、これまで未確認だった幅6m前後の堀と郭を確認した。郭上面では、建物跡・溝などの遺構も検出された。これらの遺構の年代の詳細は、出土遺物から明らかにすることはできなかつたが、郭上に位置する立地や、二郭の軸と揃えて構築されている点から、私部城の一部として機能した遺構群と考えられた。建物は礎石を伴う可能性があり、城域の北西端の見晴らしの良い地点にあることから櫓などの建物が存在した可能性もある。瓦の出土量は少ないが、郭上面の限定された調査区において破片が検出されたことからは、近隣で出土する可能性を残す。



第132図 2012・3次 調査区出土遺物

## 第3項 2013 - 5次調査

## (1) 地点と発掘に至る経過

同地点は二郭の北側斜面のうち西半にあたる。西には、2012・3次調査地点が、南には1982年の立会調査地点が位置する。現況でも二郭の高まりをはっきりと残しており、その平坦面では畠が営まれ、郭北側斜面は竹林として利用されている。鬱蒼とした斜面を下ると、東西に延びる百々川にたどりつく。これまで、市による発掘調査の機会はなかった。

現況がある程度二郭の形状を反映しているものとみられていたが、2012・3次調査時に、二郭北端部に多量の現代盛土が施されていることが判明した。その際の近隣地主らの教示から、同地点付近にも同様の盛土がなされ、その上に現況の竹林が形成されていることが判明していた。すなわち、現況の地形観察のみからでは、城の旧状を探ることは困難であった。調査検討委員会において、城として確実な郭周辺の状況を探る必要性を指摘さ

れていたことから、私部城段階の状況が不明となっていた二郭北端部の状況を探るために発掘調査を実施した。

調査地点は竹林に阻まれ、一直線に調査区を設定することが困難であったため、比較的竹林の分布が希薄な地点を選定し、小規模な調査区を4箇所、南北方向の同一線上に配置することによって、地中の堆積状況を確認した。

第1調査区は二郭上面の平坦面から、二郭北側斜面への切り替わり部にあたる。南北2m、東西1mで設定した。

第2調査区は、そこから竹林の生い茂る斜面に入った地点に南北1.5m、東西0.8mで設定した。

第3調査区は、第2調査区より北の竹林内に南北1m、東西1mで設定した。

第4調査区は現況の斜面裾にあたり、北には百々川の現況のコンクリート擁壁が近接する。規模は南北1m、東西1mで設定した。

以上の調査区を人力掘削により掘り下げ、私部城段階の形態を確認した。



第133図 2013 - 5次 調査地点位置図



第134図 2013 - 5次 調査区位置図

## (2) 層序 (第135図)

## (a) 現代表土

第1～4調査区まで共通して分布する。斜面部においては竹林造成土、平坦面においては畑土壤である。

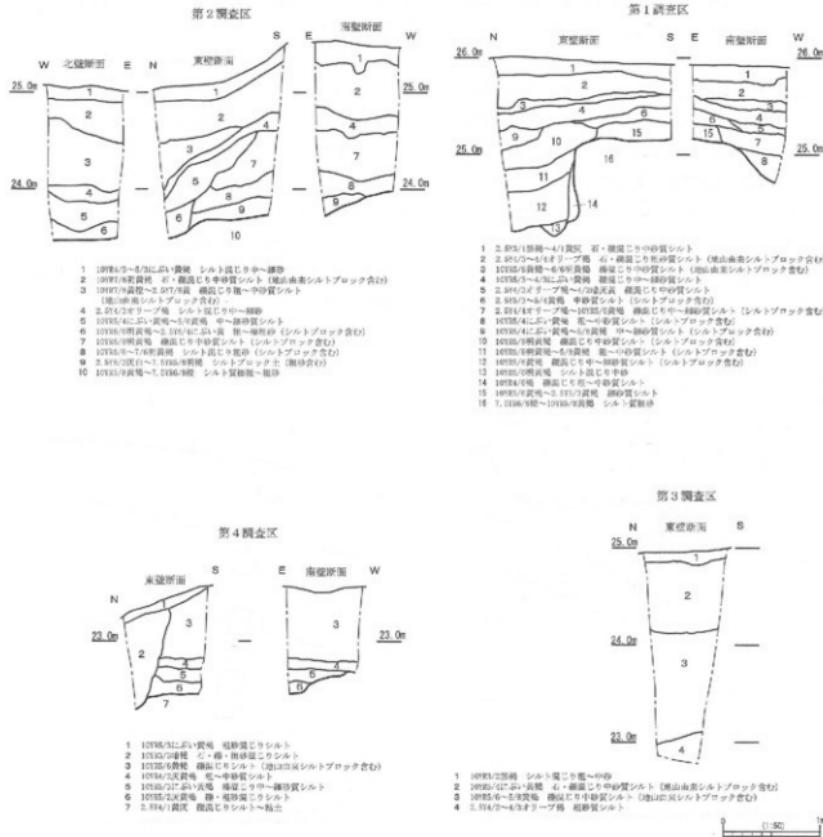
第4調査区では、同層下面で、昭和40年頃にコンクリート舗装された百々川の擁壁造成土を確認している。

## (b) 現代盛土

第1～4調査区で共通して堆積するが、特に斜面中腹の第3調査区で分厚い。地山由来土、旧表土土壤などのブロック土により構成される。同調査区西の鉄塔の工事の堆土によるものとされる。

## (c) 旧表土

現代盛土以前の土壤であり、全調査区で均一に



確認できる。後述の廃城後の盛土に堆積しており、近世以後近現代までの表土と考えられる。同層下面では地盤面が露出している箇所もあり、近世以後の遺構が確認されている。

第1調査区南半で確認された南北方向の溝は、落ち込み埋土を切るもので、近世の陶磁器片、丸瓦片が出土したことから江戸時代のものとみられる。

#### (d) 廃城後整地土と土壌基礎

地山由来土を含むブロック土が第1調査区から第2調査区の落ち込み部からテラス状地形までの間を埋めて、整地するように堆積する。堆積状況からは二郭上面からの供給土と判断できる。そして、二郭上面北端には固く締まりのよい盛土が一部残存し、土壌等の基礎部と推定される。落ち込み部からテラス状地形までの間を埋める整地土は、二郭上面に存在した土壌または土塙を切り崩して供給されたものとみられる。近世遺物を含まず中世段階のものと考えられ、私郭域の廃城に伴う堆積層と推定される。

#### (e) 遺構埋土

地盤面と廃城後整地土の間で溝等を検出した。第1・2・4調査区で確認されている。

#### (f) 地盤層

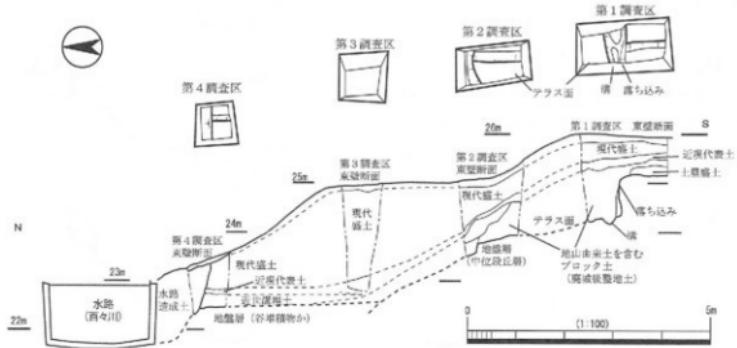
地盤層は第1・2・4調査区で検出された。高台上の第1・2調査区と、低地部の第4調査区では様相が異なる。

低地部の第4調査区では、中位段丘層ほど堅固ではないシルト分の多い層を調査区底で確認した。遺物の混入や人為的な擾乱は認められない。この層相は、今回の調査地の西にあたる2012-3次調査の北端の低地部でも確認されている。二郭の北に東西に延びる開析谷内の自然堆積層とみられる。

#### (3) 遺構

##### (a) 第1調査区

**落ち込みとテラス面** 調査区中央で、東西方向に延びる落ち込みを確認した。これは、堅固な地盤層をほぼ垂直に掘り込んでつくられたものである。また、落ち込みの床面はテラス状になり北に向かって緩やかに下り、第2調査区で確認された地表面に続く。この幅2mほどのテラス面の標高はT.P. 24.3m～24.0m付近にあたる。2013-3次調査にて確認された二郭東斜面の犬走りはT.P. 24.5m前後であり、比較的近似した標高にめぐらされたものであることがわかる。こうし



第136図 2013-5次 調査区平面・断面図

た段状の施設自体が二郭のみで認められるものであり、両者が関連した遺構である可能性も考えられる。

この遺構は、層序で確認したように地山由来土を含むブロック土により埋没する。近世以後の遺物が出土しないことや、その掘削土量の大きさからみて、私部城の築城時に加えられた地形改変と考えられる。私部城築城時に掘り込まれ、廃城とともに埋め立てられ整地されたと考えられる。

溝 落ち込みの下端に沿って幅20cmほどの溝が認められた。板塀など二郭上面の北端を区画・防御する設備の痕跡と考えられる。埋土からは中世の平瓦小片が数点出土している。また、二郭上面においても郭の軸と類似する方向をとる1条の溝が認められる。

#### (b) 第2調査区

溝 第1調査区より続くテラス面上に掘り込まれた溝が検出された。出土遺物はないが、層序から私部城段階のものである可能性がある。

#### (c) 第4調査区

地盤面上で溝が検出されているほか、溝検出面付近で中世の平瓦片が出土している。同層の上面付近が私部城段階の二郭裾の地盤面として機能したとみられる。

#### (4) 遺物

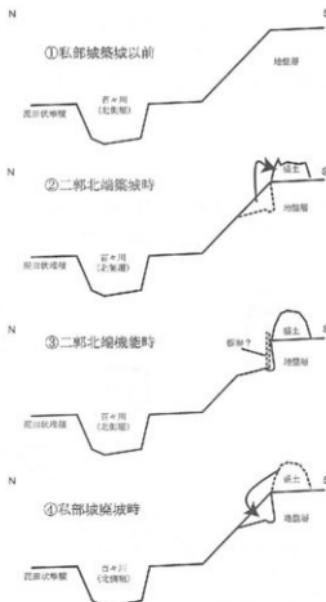
図化したのは第3調査区の現代盛土出土の楠葉型瓦器椀片である。この盛土自体は二郭周辺由来のものであり、中世前半における私部周辺の集落の存在を示唆するものである。このほかに、図化しえなかつ瓦小片が存在する。



第137図 2013-5次 調査区出土遺物

#### (5) 小結

現代の盛土によって不明瞭になっていた二郭北端の斜面形状を確認した。二郭北側は、泥田状の地形が広がり、現・百々川が堀として機能していたものの、本郭に比べて緩やかな斜面であるため防御機能は強くなかったとみられる。堅固な地山を削って形成された落ち込みは、この防御機能の弱さを補うために設けられた設備の痕跡とみられる。なお、城に大きな改変がなされた痕跡は認められなかった。こうした状況はこれまでの郭周辺の調査成果で共通している点であり、私部城の歴史を考える上で重要になりそうである。遺物整理を通じて各遺構の年代を精査した上で、城の変遷を明らかにすることとしたい。



第138図 二郭北側斜面推定復元図

## 第4項 二郭北西部の調査成果

## (1) 二郭北西部の構築

**二郭構築時の盛土** 1982年度の立会調査結果から、二郭構築以前に谷地形が存在していたことが確認できた。二郭の構築の際には、地盤層由來のブロック土を多量に含む盛土を行なう現況の形態を構築していた。この盛土は、後述の二郭南西部にも認められ広範囲に及ぶものである。

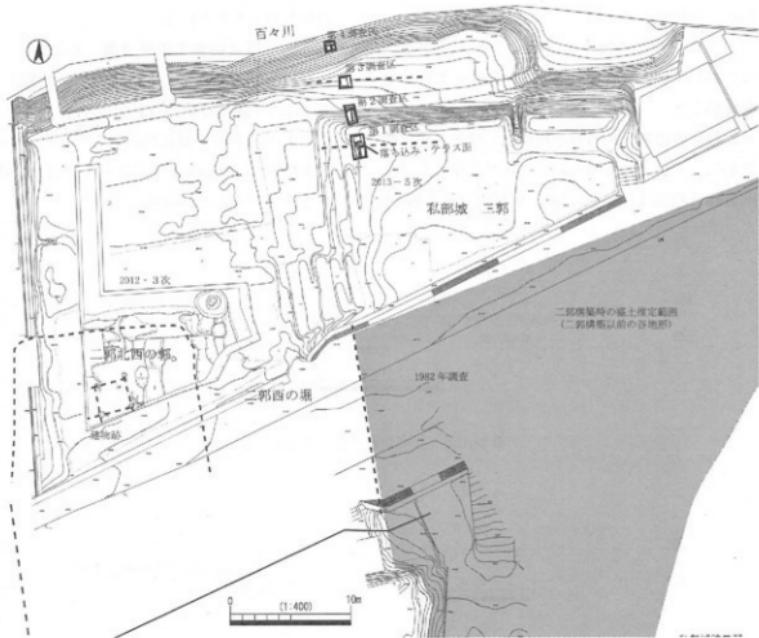
**二郭構築時の切土** また、北側斜面においては、地盤層を切り込んだ落ち込みとテラス状の施設が形成されるなど地盤層の改変も大きく行われていた。ここで排出された地盤層由来土が盛土に利用されたものとみられる。

## (2) 二郭北西部の構造

## (a) 北側斜面の形態

現代盛土により遺構保護がなされる反面、現地形の観察では城の形状はつかみにくくなっていた。2013-5次調査において、二郭の上面から北側斜面への切り替わり部で垂直に切り落とされた落ち込みと、その下方に広がるテラス面を検出した。

**落ち込み** 北側斜面への傾斜変換点をほぼ垂直に切土し、その底部に溝がめぐらされている。北側斜面の防御機能を高めるものとみられる。板塀などの防御施設が設置されていた可能性も考えられる。



第139図 2013-5次 調査区平面合成図

**テラス面** 落ち込みの下方に幅2.5mほどのテラス面が認められた。標高は二郭東斜面で認められた犬走りの標高と近いものであった。両者は関連する遺構である可能性も考えられる。

**百々川と斜面間の平坦面** 落ち込みとテラス面の下方に広がる傾斜面の下端から、堀と目される百々川までの間には、幅2.8mほどの平坦面が存在する。後述の二郭北西の郭の北側の平坦面および二郭西の堀へと接続していたものとみられる。

以上のように、二郭北側斜面の形状は多くの傾斜変換点を伴うものであった。これは本郭の直線的な急斜面と対照的である。本郭と二郭の機能・性格差を考える際の手がかりとなる。このような北側斜面の複雑な形状は、廃城段階に郭上面からの堆土により埋め戻されていた。

#### (b) 二郭北西の郭と堀

二郭の北西に隣接する2012・3次調査地点では、郭および、二郭の西に南北に掘り込まれた堀を確認した。

**二郭北西の郭** 地盤層を利用して構築された郭であり、二郭と堀により隔てられて存在する。検出された範囲は、南北約10m、東西約10mである。

昭和初期の航空写真や測量図の旧地形から推測すると東西幅は約15～20mほどのものとみられる。二郭南西部には平坦面が帯郭状に張り付くことが確認される（写真1）。この面の標高は、T.P. 25.0m付近であり、二郭北西の郭の標高に近いものである。このことから、この郭は、この帯郭状の平坦面の先端部となる可能性が高い。郭上には建物と溝が確認された。

**二郭西の堀** 先述の郭と二郭の間を隔てる堀跡で、推定幅約6mのものである。現況の二郭上面から堀底面との比高は3m、二郭北西の郭との比高は1mである。底面の堆積状況からは空堀と判断できる。旧地形の観察からは同地点より南に水田として利用されていた低地部が延び、二郭北側斜面の中ほどに認められる屈曲部付近まで及ぶ。この堀は少なくともこの付近まで南に延長していたものと考えられる。

**郭から百々川までの平坦面** 郭北側の下端から、百々川までの間には約15mほどの距離があり、ここには平坦面が広がっていた。

以上のように二郭北側斜面から北西にかけて、従来想定されていたものに比べて複雑な形状が保存されていることが判明した。



第140図 二郭北西の郭 南北断面合成図



第141図 二郭北西部 東西断面合成図

## 第8節 二郭南西部～南部の調査

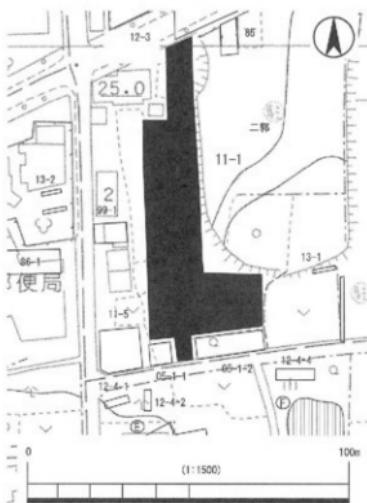
### 第1項 2011 - 1次調査

### (1) 地点と調査に至る経過

本調査地は、私部城跡二郭の南西部にあたる。既往の縄張り図では、南西隅に土塁も描かれる。近年まで畑などとして利用されており、植物などにより、形状はわかりにくくなっていた。また、これまで発掘調査が実施されたことはなく、地中の状況については不明であった。

同地点で宅地造成が行われることとなった。当初の工事予定では、遺構破壊を伴わないことを確認しており、斜面部の立会調査などを実施するのみにとどめていた。

ところが、工事途中で急遽、計画変更されたことにより、二郭西侧斜面に切土が発生することになったため、二郭西侧斜面に第1～5調査区を設定して堆積状況を確認した。また、工事施工時に



第142図 2011-1次 調査地点位置図

立会を行い、遺構・遺物の有無を確認した。

また、郭上面に第6調査区を設定し、遺構・遺物の状況を確認した。

また、水道管の設置等によりわずかながら掘削が及ぶ範囲についても工事立会を実施し、記録作成作業を行った。



第143図 2011-1次 調査区位置図

## (2) 層序 (第144図)

## (a) 現代表土～旧耕作土

表土は近現代までの耕作土およびその上の整地土である。各調査区の第1層に対応する。同層下面で次の遺構埋土、二郭盛土、盛土以前の地表土層が検出された。

## (b) 遺構埋土

二郭西端上面にあたる第6調査区で検出された。後述の地盤層および私部城期の盛土を掘り込んで形成されている。わずかながら、中世遺物が検出されていることに加えて、二郭盛土上に掘り込まれるものであることから、私部城二郭に伴う遺構群と考えられる。

## (c) 二郭盛土

調査地北半の第4～5調査区および、第6調査区北半で検出された。

第4調査区付近が地盤層から盛土層への切り替わり部にあたる。ここでは二郭築城以前の地表土層（第4調査区第4層）の上に細かい単位で堆積している。第5調査区ではブロック土により構成される盛土が水平に堆積する。それより北の地点にあたる西侧斜面立会地点においても盛土が交互に南から北へと積まれる堆積が確認された（写真151）。

1982年度調査南壁断面西半で確認された盛土と一連のものである。

層相からは、近隣の地盤上層を由来土とするものが多く認められ、周辺に堀などを掘削した際の排土を用いているものとみられる。

## (d) 盛土以前地表土層

第4調査区以南で検出された。第4調査区第11層・第1～3調査区第2層に対応する。地盤層との層相から地盤層が土壤化した層と判断できる。



第144図 2011-1次 調査区断面図



第145図 二郭南西部 南北断面図(2011-1次断面合成図)

## (e) 地盤層

斜面部の地盤層 第4調査区より南において、T.P. 26.2m前後で検出された。黄褐色系の縮まりのよい地層で、中位段丘の構成層である。南北方向の変化をみると、第4調査区以北で、30度前後で北側へ落ち込んでいく谷地形を呈している。この地形は1982年度立会調査地点南壁断面で確認され谷地形に連続するものとみられる。南側へ向けては、現在の二郭南端の傾斜とともに落ち込むものとみられる。

東西方向の変化を第3～1調査区北壁断面でみると、地盤層の切り替わりの傾斜は緩やかなもので、現表土により切られている。本来は緩やかな傾斜をもってより西へ延びていたと考えられる。これが二郭の西側斜面形成時に切上されたものとみられる。

二郭南西部平坦面の地盤層 二郭南西部にて水道管敷設時に立会調査を行った結果T.P. 25.0m前後に地盤面が続くことを確認している(写真162)。同地点の地盤層はやや縮まりの弱いものであり、段丘の合間の谷部の自然堆積層である可能性がある。工事時などに二郭斜面裾部の状況は確認しているが、斜面裾に掘などの遺構は認められなかった。

## (3) 遺構

## (a) 二郭盛土下面の遺構

自然谷 第4調査区東壁断面で、地盤層および旧表土層の落ち込みを確認した。傾斜や堆積状況の類似する落ち込みは、1982年度立会調査地点でも確認されている(116頁)。両者は連続するものとみられ、二郭付近を北東から南西へと下る谷筋が存在したものと考えられる。私部城の築城までは、この自然谷が機能していたとみられる。

第4調査区溝 第4調査区下面で盛土中に掘り込まれた溝を検出した(写真152)。底面構造は一定ではなく、刃先で切り込まれたような痕跡も残る。その上にさらに盛土が施されており、二郭形成時の加工痕跡と考えられる。埋土から丸瓦片が一点と、青磁片、小動物の骨が検出されている。

石の集積 第4調査区より北へ3mほどの地点の切土時に、二郭盛土中で、拳～人頭大の石5点ほどの集積を確認した。盛土に混入した石材とみられる。地盤層に含まれる石ではなく、近隣で使用するために人为的に持ち込まれた石材と判断できる。暗渠などの可能性を考えたが、はつきりとした構造を確認できるものではなかった(写真151)。



第146図 2011-1次 二郭南西部 東西断面合成図

## (b) 二郭南西部斜面～平坦面の構造

層序の中で確認したように、二郭南西部は中位段丘の地盤層西端を切土するとともに、谷地形を盛土して平坦面にすることによって形成されていた。その傾斜は30～40度ほどであり、本郭の斜面に比べて緩やかである。また、二郭西斜面に接して堀などの構造は伴っておらず、比高は北半で1m前後、南半で1.7m前後と小さいものである。

二郭南西部の平坦面は帶郭状に二郭に張りつくことが明らかになった。これは二郭北西で確認された郭に接続するものとみられるが、二郭北西で確認された堀が、郭南半までめぐるものではないことも確認された。

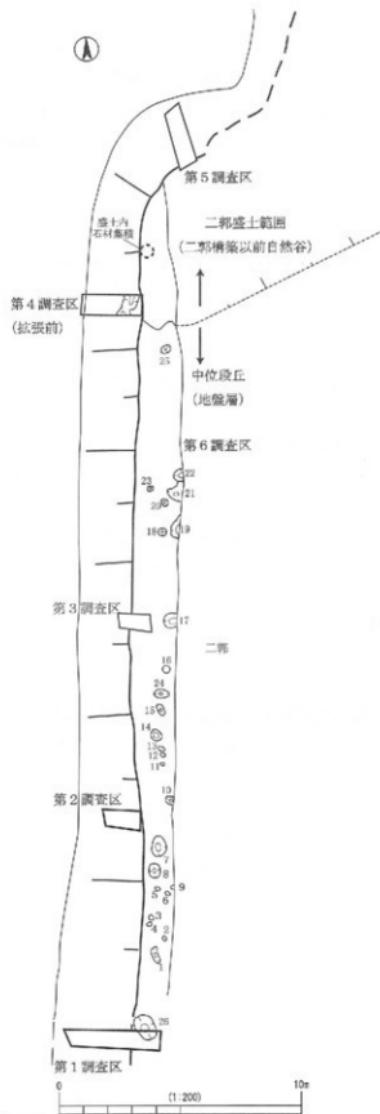
第5調査区付近で認められる東への屈曲部付近の構造は、自然谷地形を盛土により埋めて形成された箇所にあたる。私部城築城以前は落ち込みが存在した地点であり、同地点付近まで、二郭北西の堀が延長していた可能性が高い。

## (c) 郭上面（第6調査区）ピット・土坑

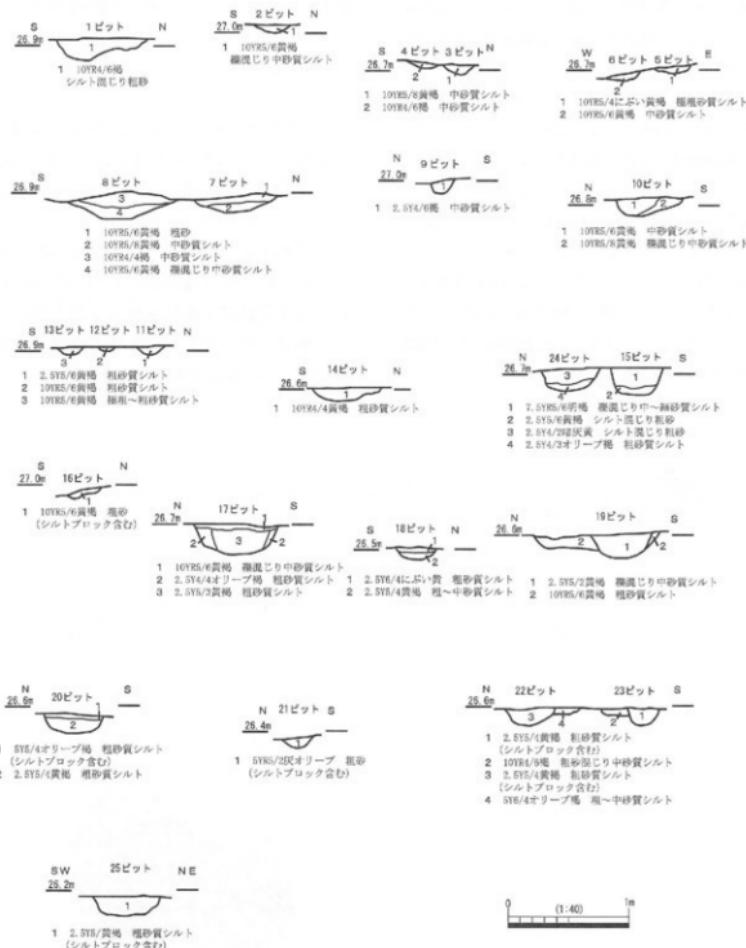
郭上面で土坑・ピット群を確認した。これらのピット群は、近現代までの耕作土層下面で検出されたものであり、私部城二郭に伴うものと考えられる。出土遺物は一部のピットに限定されるが、23ピットで刀子とみられる鉄器が出土している。いずれも、中世のものとは考えられる。

この中で第6調査区で検出された1・7・8・10・15・24・17・19・22・23ピットや、第1調査区で検出された26などのピットは安定した形態を残す。これらは郭の縁に沿って一定の間隔をもって並ぶものである。ピットの密集が認められなかった本郭の郭上面周縁と対照的である。

二郭西縁は前述のように比高・傾斜ともに緩やかな形態のものであり、これを補足し防御性を高めるため柵列などの上部構造を伴なった可能性が考えられる。



第147図 2011-1次 調査区平面図



第148図 2011-1次 遺構断面図

## (4) 出土遺物 (第149図)

## (a) 盛土中出土遺物

盛土下面の第4調査区溝中で、丸瓦片171が出士している。玉縁長3.4cm、胸部厚さ2.3cmである。胸部凸面は縦方向のナデにより調整されており、繩目叩き痕は完全に磨り消されている。胸部凹面の残存部の範囲の吊り紐痕は全て外縫じである。凹面側縁の面取り幅は1.8cmほどで、側縁の端面は1.2cmほどとややにぶい端部形態をなす。玉縁部側縁凹面側の面取りは、胸部にまで及ぶ。15世紀頃に遡る可能性がある。

青磁片も同層で出土した。底部内面に草花文を陰刻する。年代の詳細は不明だが、中世のものとわかる。二郭盛土が中世でも比較的新しい時期になされたものであることがうかがえる。

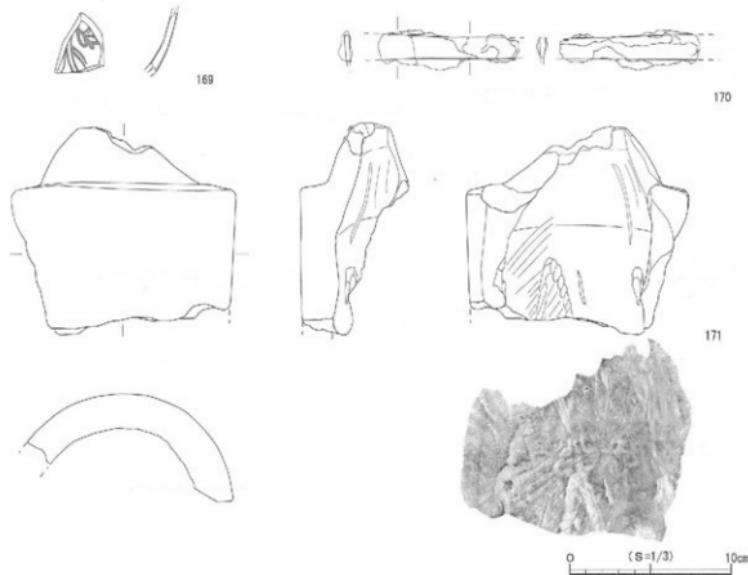
## (b) 郭上面ピット出土遺物

170は23ピットで出土した。厚さ0.5cm、幅1.4cm、残存長8.8cmの鉄器である。湾曲は二次的なものとみられる。刀子の可能性がある。

## (5) 小結

二郭南西部の形態・構築方法について新たな知見が得られた。またその盛土下面から年代の定点の一つとなる遺物が出土し、中世後半に二郭が築造されたとみられる。

また郭上面では、柵列の可能性のあるピット列やそれに伴う遺物がわずかながら得られた。土壙基礎部が検出された本郭北半とは大きく異なる構造であり、二郭の機能・性格を推定する手がかりとなる。



第149図 2011-1次 調査区出土遺物

## 第2項 1999-1次調査

## (3) 小結

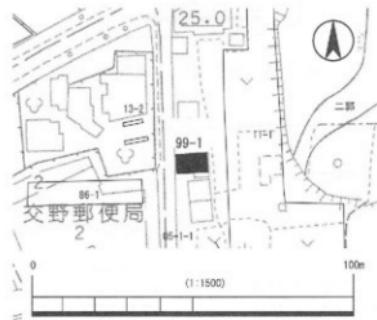
## (1) 調査地点の概要

私部城跡二郭の平坦面に位置する。個人住宅の建設に伴い確認調査を実施した。「平成11年度概要」にてわずかに報告したが(交野市教委2000)、図面類が未掲載であった。また、二郭西側の堆積状況を評価する上で重要な情報も含むため、ここで報告する。東西2.0m、南北1.0mの調査区を設定し、現地表下1.3mまで掘削した。

## (2) 層序(第151図)

第1層は現代までの耕作土である。その下層の第2・3層は現代以前の耕作土または現耕作土の床土と考えられる。

第4・5層には起伏が認められ、層の色調からも上層の耕作土とは異なる性格のものと推定できる。層相からは、黄褐色を基調とした周辺の地盤層とは異なる性格が考えられる。第5層中では、土器片とみられる土器片が混じることも報告されている。当調査区では、現地表下1.3m(T.P.24.5m)まで地盤層が確認されなかつことになる。後述のように第4・5層は堀の埋土と考えられる。

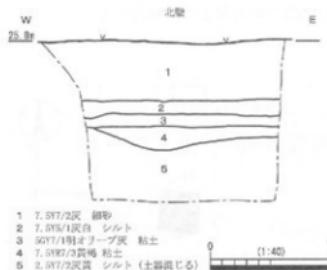


第150図 1999-1次 調査地点位置図

同地周辺の2011-5次調査区においては、T.P.25.5m前後で地盤層が検出される。本調査区ではT.P24.5mまで土器混じりの層が堆積することから、同地点には谷地形が存在することがわかる。

私部城域においては、径2m、深さ1mに近い土坑は検出されておらず、土坑などの遺構の可能性も低い。私部城期の段階の堀跡埋土に相当するものと考えられる。

二郭南西の平坦面において、内堀などのめぐる複雑な地形が存在したことをうかがわせる調査成果である。



第151図 1999-1次 調査区断面図



第152図 1999-1次 調査区位置図

## 第3項 2011 - 5次調査

## (1) 調査地点の概要

私部城跡二郭から南西の平坦面にあたる。駐車場として利用されていたが、個人住宅が建設されることに伴い、遺構の有無を確認するため確認調査を実施した。「平成21年度概要」にてわずかに報告したが（交野市教委2010）、写真類が未掲載であったため、ここで再掲載する。住居建設予定地に、南北2.0m、東西1.0mの調査区を設定し遺構・遺物の有無を確認した。

## (2) 層序（第155図）

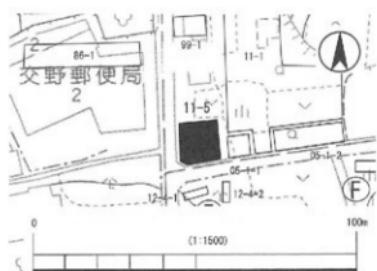
第1層は現代土である。駐車場として利用されていた際の碎石などで構成される。

その下層の第2層は駐車場として利用される以前の耕作土である。

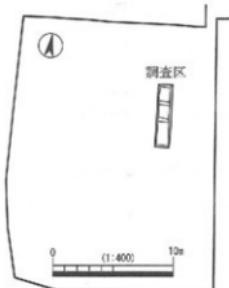
第3層以下では、東が高く西へと低く傾斜して堆積する地盤層を確認した。黄褐色から灰白色のシルト混じりの砂質層で構成されている。

## (3) 小結

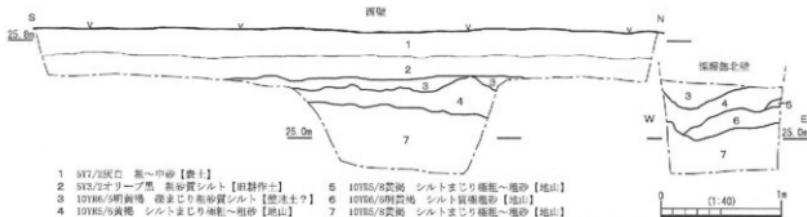
同調査区では、旧耕作土直下で地盤層を検出したが、調査区が限定されていたこともあるものの、遺構・遺物は検出されなかった。加えて、旧耕作土中に中世以前の遺物は含まれていないこともふまると、中世以前の遺構・遺物は希薄な地点であった可能性が高い。地盤層が比較的浅い地点で検出された。本地点北側の1999-1次調査で確認された堀とみられる堆積が少なくとも同地点まで延長するものではないことを確定できた。



第153図 2011-5次 調査地点位置図



第154図 2011-5次 調査区平面図



第155図 2011-5次 調査区断面図

## 第4項 2005-1次調査

## (1) 調査地点の概要

北に二郭、南西に土塁状遺構、南東に本丸池と周辺を地上遺構により囲まれた平坦面にあたる(写真164)。昭和40年代に東西方向に市道が設置されており、その北側に接する一角である。現況で平坦面の標高はT.P. 25.6m前後であり、二郭とはおよそ1～2m程度の比高がある。同地点においては、堀の有無など、現地形の観察では確認できていない課題もあった。同地点の宅地化に先立ち確認調査を行った。



第156図 2005-1次 調査地位置図

調査地の西端に東西1.3m、南北2.6mの第1調査区を設定し、現地表下0.2m以下で遺構検出した。また、調査地の東半においては、東西道路に沿って、南北0.8m、東西2.7mの調査区を設定し、現地表下0.35mまで掘削した。

## (2) 層序 (第158図)

## (a) 現代表土～近現代耕作土層

近世から現代までの耕作土である。第1調査区第1・2層、第2調査区第1～3層が相当する。

第1調査区ではまた、第1層下面是溝状に落ち込む。

同層下面是おおむね平坦な面を成しており、同層を除去した面で、次の遺構埋土および地盤層が同時に検出されている。

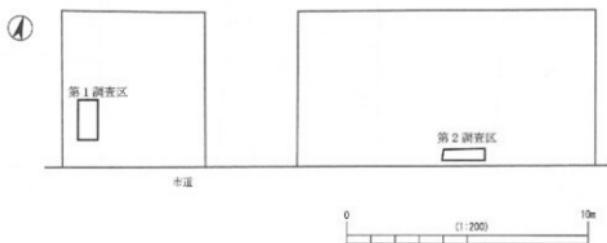
## (b) 遺構埋土

耕作土直下で検出されている。中世の遺構堆積土である。第1調査区第7～9層が相当する。

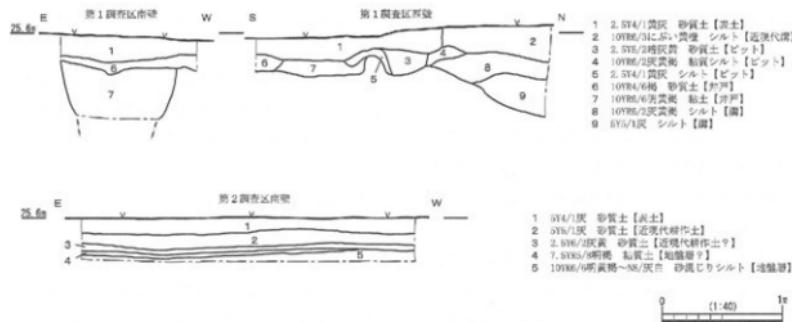
井戸・溝・ピットなどが検出されている。また溝からは調査面積に対して多くの中世遺物が出土している。

## (c) 地盤層

第1調査区では、現在保管されている図面に地盤層に関する注記はなかったが、写真観察か



第157図 2005-1次 調査区平面図

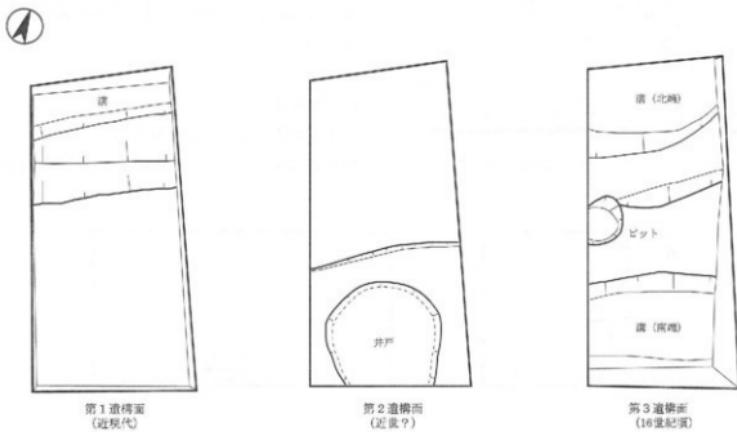


第158図 2005-1次 調査区断面図

ら、黄褐色系のシルトが堆積していることが確認できる。第2調査区では明黄褐色～灰白色の砂混じりシルトの第5層が相当する。両調査区ともT.P. 25.3m前後に地盤面が残存している。この標高は近世以後の削平を受けている可能性が高い。ただし、現況の耕作土の堆積層は厚いものではなく、その影響は大きくないものとみられる。

## (3) 遺構

第1・2調査区とともに前述のとおりT.P. 25.3m付近で地盤面が検出された。これは本丸池の堀跡が北側へ延長しないことを裏付ける成果である。このうち、第1調査区の地盤面上で3段階の遺構が検出されている。



第159図 2005-1次 第1調査区平面図

## (a) 第1遺構面(近現代)

表土層下面の遺構で耕作関連の溝とみられる。遺物は検出されていないが、層序から近現代の堆積層と判断できる。

## (b) 第2遺構面(近世?)

**井戸** 素掘りの井戸で、地山由来のブロック土や褐色のシルトブロック土により埋没している(写真図版28)。検出範囲における最大径は約1mである。工事による影響が及ぶ範囲より下層へは掘り下げを行っておらず、深さは確認されていない。

「概要」では近現代遺構とされる(交野市教委2006)。しかし、断面図の切り合い関係や、写真観察からは、近現代堆積層からは明瞭に区別される。

第3遺構面の南側の溝を切ることは確認できたが、調査地北側の溝と同時期のものである可能性が残る。

また、近隣では、近世以後になると素掘りの井戸に加えて瓦質井戸枠や、木枠などの構造を伴う事例が増える。これに対して、同井戸が素掘りであり、出土遺物からも井戸枠構造が伴わないとみられることからは、近現代の井戸と確定することは難しい。

層序や井戸の特徴から、近世に遡ることは確実であるが、近世以後の遺物が出土していないことから中世まで遡る可能性も残る。

## (c) 第3遺構面(中世後半)

溝2条とピットを検出している。

**溝(北側)** 溝の南側の上端から下端を検出している。検出範囲における幅は1.2m、深さ0.4mで、少なくとも2m以上のものと推測できる。東西に延びる溝の軸は、西南西から東北東に向く。おおむね東西に延びる二郭の南縁とはやや離れるものである。断面写真からは、ブロック土により埋没しており、傾斜角度からは、南から北側へと

埋土が供給されているものとみられる。ブロック土は地盤層直上で堆積しており、機能時堆積層ははつきりとは認められない。

出土遺物の種類は瓦器碗・瓦質土器・瓦・陶器片など多岐にわたる。量も検出面積に対して豊富である。年代は13世紀頃まで遡る瓦器碗片を多く含み、16世紀代まで下る遺物は少ない。溝の方向軸からも私部城期の遺構である可能性は低い。防御機能は弱い溝であることから、私部城以前の中世集落に伴う溝とみられる。

**溝(南側)** 溝の北側の上端から下端を検出している。北側の溝と同様に、西南西から東北東に延びる。溝の軸は、二郭の南縁と一致しない。

検出範囲における幅は0.8m、深さ0.1mほどで、推定幅は1mほどである。北側の溝に比べて、小規模な溝である。防御的な性格は弱いもので、私部城以前の中世集落に伴う溝とみられる。

**ピット** 残存径0.4m、深さ0.2mをはかる。切り合い関係からは、北側の溝より新しい時期のものである。出土遺物はないが、切り合い関係から私部城期の遺構である可能性が考えられる。

## (4) 出土遺物(第160・161図)

第1調査区第3遺構面の溝中で遺物が出土している。南側の溝ではわずかだったが、北側の溝から調査面積に対して多くの中世遺物が出土した。

## (a) 第3遺構面溝(南側)

172は瓦質の壺の頸部片である。中世後半頃のものとみられる。くびれの少ない形状である。13世紀頃まで遡る可能性がある。



第160図 2005-1次 溝(南側)出土遺物

## (b) 第3遺構面溝（北側）

北側の溝状遺構から多様な遺物が出土した。

瓦器碗 173は摩耗しており単位は不明瞭ながら内面にミガキを施すの対して、外面は横方向にナデている。端部内面に沈線を施す形態から楠葉型III-1～2期、12世紀末から13世紀前半頃とみられる。174・175・176は口縁を緩やかに内湾させながら尖らせ気味におさめる。ミガキは内面に細い単位でまばらに施すのみである。楠葉型III-3期からIV-3期、13世紀中頃から14世紀中頃までにおさまるものとみられる。

瓦質土器 摺鉢の底部片を検出した。摺り目は櫛状の工具により施されており、本数は一単位あたり7本である。外面は板状の工具により縦方向にナデられており、板目の痕跡が残る。16世紀頃のものとみられるが詳細は不明である。

土師質土器 177は口縁部片で、鋸より下方の外面に煤が付着する。炮烙・釜などの煮炊具か。

陶器 179は底部外面に糸切り痕を残す皿である。褐色の釉が内面から体部外面の上片にまで付着する。体部外面の下方の釉のかからない範囲に、胎土目積みが付着している。瀬戸美濃産のもので中世のものとみられるが年代の詳細は不明である。

瓦 180は平瓦の狭端部片である。残存部で確認できる面取り幅は狭い。厚さは2.4cm前後である。

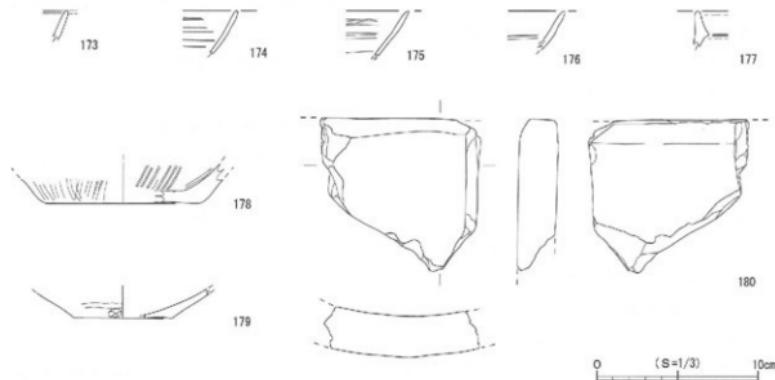
## (5) 小結

## (a) 二郭南の平坦面の確認

同調査地点では堅固な地盤層が確認されたことが一つの成果である。他の調査区とあわせると、本丸池の堀跡は二郭南西まで延長せず、二郭南西に平坦面が張り付いていたことが認められる。私部城期において、二郭南に張り付く帯郭もしくは通路として利用されたと推定できる。

## (b) 私部城以前の集落域

溝出土の中世遺物には、南北朝期頃まで遡りうる遺物もあった。この溝の方位軸は、私部城二郭南縁とされることからも私部城以前の居住域に伴うものと考えられる。2012-4次調査の郭（土壌状遺構）下層でも同様の遺物・遺構が検出されており、城の築城以前の同地周辺の集落域を推定できるようになった。小片ながら瓦も出土していることからは同地周辺に寺院が存在した可能性も考えられる。



第161図 2005-1次 溝（北側）出土遺物

## 第5項 2013 - 1次調査

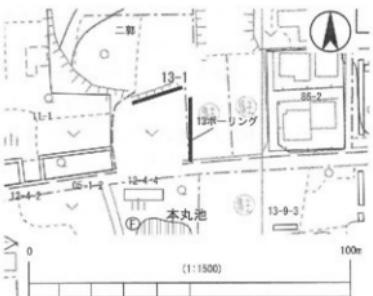
## (1) 調査地点の概要

二郭南斜面から平坦面への傾斜変換点付近にある。同地点におけるブロック塙設置に先立ち、東西長約15m、南北長0.8mの調査区として記録作成を実施した。また本郭・二郭間の堀が本地点付近までめぐって来るのかを確認するため、補足的にボーリング調査を実施した。

## (2) 層序 (第163・164図)

## (a) 現代表土

断面図第1・2層は現代表土である。南北方向に実施したボーリング調査(第164図)では水平に堆積し、同層下面の二郭南斜面堀で、近世以後現代まで利用された農業用水路が確認された。



第162図 2013 - 1次 調査地点位置図

## (b) 近世以後堆積層

第3層は旧表土で、近世の瓦片が含まれる。近世以後近現代までに郭上から流出するなどした土砂が表土となったものと考えられる。

## (c) 中世盛土等

第4～6層は、瓦片など、遺物小片が認められた。下層に対して薄く堆積しており、郭上面からの流水出土とみられる。近世以後の遺物は含まれておらず、廃城後まもない段階のものとみられる。

第7～9層は、単位は不明瞭ながら、固くしまった層で、二郭南斜面の形成に利用された盛土とみられる。ボーリング調査地点では、同層は明瞭に確認できていない。地盤面直上に極めて薄く堆積しているものと考えられる。

## (d) 盛土以前遺構埋土

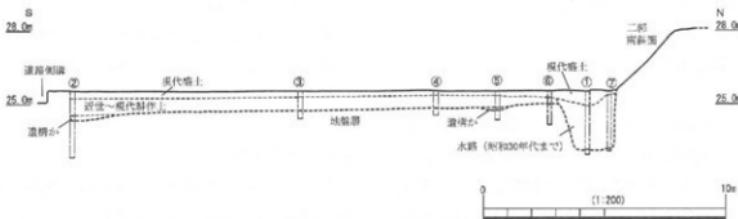
第10層は地盤面直上に掘り込まれたビット埋土である。層相から弥生時代頃のものとみられるが詳細は不明である。第164図ボーリング②・⑤地点でも同様の堆積層を確認している。

## (e) 地盤層

第11層は堅固な地盤層である。同層は、ボーリング調査地点では、近世以後の水路が検出された地点以外でT.P. 25.0m前後で検出された。南北方向に対してほぼ平坦に堆積することが確認された。これにより本丸池の堀跡が、同地点まで延長しないことが確認された。



第163図 2013 - 1次 調査区断面図



第164図 2013-1次 ボーリング柱状断面合成図

## (3) 出土遺物 (第165図)

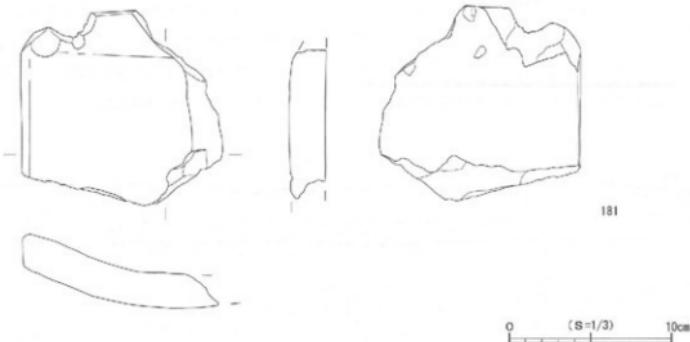
181は、北壁断面第5層中で検出された平瓦端部から側縁部片である。厚さ2.2cmのもので、凹面調整は丁寧にナデ、側縁端部に面取りを施す。凸面調整は板状工具により縦方向にナデしているが、側縁端部に面取りは施さない。また凸面側にいわゆるハナレ砂とみられる砂粒が付着しており、器表が荒い。本郭の土坑出土のものと類似している。

焼成はいわゆるサンドイッチ状のもので、外側が灰白色に焼けあがるのに対して、瓦の芯の部分は暗灰色～黒色を呈している。他の調査区でもわずかながら認められるものである。

## (4) 小結

二郭南斜面から平坦面における堆積状況を確認した。同地点では、地盤層を切上したものではなく、主に盛土で斜面形成されている可能性が高い。またその盛土付近では、瓦が出土した。

ボーリング調査の結果、近世以後の流路以外は堅固な地盤層が検出された。これにより、本丸池の堀跡が北側へ延長せず、本丸池の堀跡と、本郭・二郭間の堀が別個のものであることが判明した。同時に、2005-1次調査で確認された二郭南の平坦面が一定の広さを備えるものと認められる。さらに、これが、本郭南で確認された平坦面と連続するものと考えられるようになった。



第165図 2013-1次 調査区出土遺物

## 第6項 二郭南西部～南部の調査成果

### (1) 二郭南西部の構築

2011 - 1次調査では、二郭南西部の構築方法について成果が得られた。

**二郭築城以前の谷地形** 二郭北西部を横断した1982年度立会調査地点南壁断面で認められた谷地形の延長が、二郭南西部で認められた。現在の二郭を北東から南西へと下る谷とみられる。

**二郭南西部の構築** 二郭南西部の北半は、この谷地形を地盤層由来土などの盛土により埋没させて形成されたことが判明した。また、二郭南西部の南半の西側斜面では、地盤層の切り替わりが斜面の傾斜によって切られており、二郭斜面形成時に切土されたことがわかる。この切土が谷地形の盛土に利用された可能性が考えられる。

**二郭構築の年代** 年代の手がかりとなる出土遺物は、盛土下面で出土した丸瓦片である。詳細に年代を決定できるものではないが、おおむね中世後半以後の構築であることは確認できる。二郭に改修改築などの痕跡が認められないことなどからは、長期間機能したものではないことがうかがえる。さらに、郭の軸が本郭などの遺構と揃うことからは、一連のものとして構築されたことがわかる。こうした状況証拠を重ねると、本郭と同じく16世紀の中頃から後半頃の築城と考えられる。

### (2) 二郭南西部の形態

**二郭西侧の斜面形態と上面遺構** 調査の結果、二郭の西側斜面の傾斜は30度前後と他の地点に比べて緩やかなものであることが判明した。二郭北側と東側で認められた犬走り状の施設も認められず、直線的な斜面形態である。また、西側の比高も1～2m前後と比較的小さいものであった。

この斜面上の郭上面では、周縁に沿ってピットが密集していた。この緩やかな斜面形態を補足す

るよう柵列などの防護施設がめぐらされていたものと考えられる。

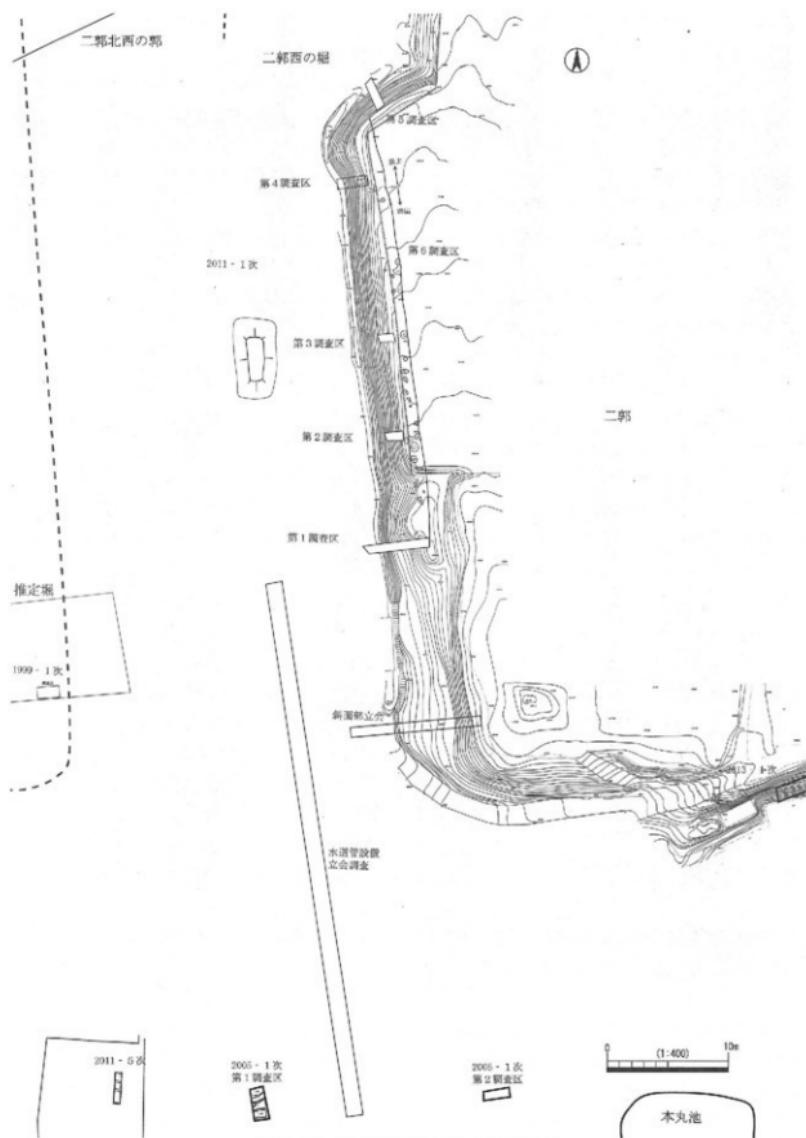
**二郭南西の平坦面** 二郭の周縁には堀がめぐらされている可能性も考えられたが、少なくとも、郭の裾野には、やや不安定ながら地盤面が広がっていた。二郭南部から南西部にかけては、平坦面が張り付いていたことが判明した。これは二郭南西部の帯郭または郭間を連結する通路として機能したものとみられる。また、この平坦面が北側へのびて、二郭北西の郭と一連のものとして機能した可能性も考えられる。

**内堀の存在** 南西部北半で認められた谷地形の存在からは、二郭北西で確認された堀が、二郭西側斜面中ほど屈曲部付近にまで延長するものと推定された。また、その堀跡から西側の1999-1次調査地点でも落ち込みが確認された。航空写真等の観察からは、同地点より北側へのびる南北方向の堀状の地形が存在したと推定される。全容は不明ながら、二郭南西の平坦面は、周間に堀などが配された複雑な形状を呈していたことが判明してきた。

南北方向に延びる堀跡もしくは堀状の地形は、より西側の2013-2次調査地点および1986-2次調査地点の2箇所でも確認されており、二郭および帶郭状の平坦面の西側に南北方向に数条の堀もしくは堀状の地形が配置されていたことが確認できた。東大阪市若江城の主郭の西側でも南北方向の堀跡が数条確認される（福永編1993ほか）。私部城の堀群と類似するものとみられる。

### (3) 私部城関連の可能性のある遺物

二郭上面の2011-1次調査第6調査区では、わずかながら、鉄器片が検出された。同調査地点は郭周縁部であり、二郭上面の利用状況をどこまで反映するものは不明であるが、二郭東側斜面の出土遺物と合わせて、二郭上面の利用状況を知るための数少ない関連資料である。



第166図 二郭南西部～南部 平面合成図

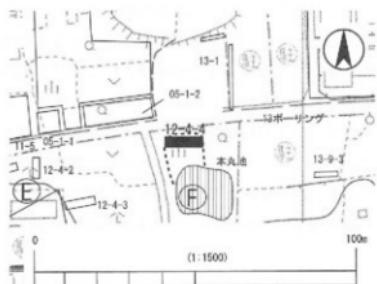
## 第9節 二郭南の堀跡（本丸池）の調査

### 第1項 2012-4次 第4調査区

#### （1）調査地点の概要

「本丸池」と呼ばれるL字状の池は、二郭の南に位置する。江戸時代の私部村絵図にも記載され、少なくとも近世段階には存在していたことが明らかであった。

その屈曲する平面形態や、郭の南に配置されて



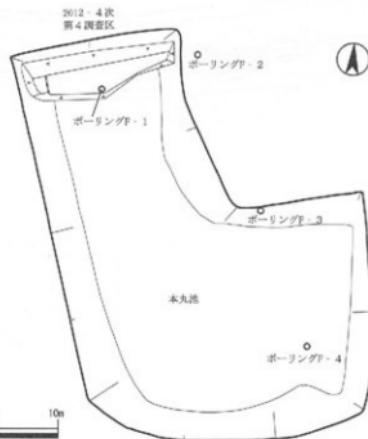
第167図 2012-4次 調査地点位置図

いることから、網張り研究において私部城の堀跡と指摘されてきた。

私部城周辺の調査を進める中で、二郭南の状況を確認するため、土壌状遺構の調査とあわせて、この本丸池の一部の調査を実施した。

まず、本丸池内でボーリング調査を実施した（ボーリングF地点）。本丸池北端にF-1地点、その東側上端付近にF-2地点、屈曲部北側上端にF-3地点、現況の池東端にF-4地点を設置し調査を実施した。この調査によってある程度の池または堀跡の堆積から地盤層への切り替わりは確認できた。

ただし、ボーリング調査では、堀の構造や年代を明らかにすることはできていなかった。こうした課題を解決するため、2012-4次調査にて、第4調査区を設定し、本丸池内の調査を実施した。調査区はL字の池の北端部に、東西9.3m、南北2.0～1.0mで設定した。これは限定された調査面積の中で、本丸池の堀跡が北側へ延長するのかどうか確認するためのものである。



第168図 2012-4次 第4調査区・ボーリング地点平面図

## (2) 層序 (第169図)

## (a) 現代表土

第169図の層番号に従って記述する。第1層は表土である。第2～9層は現代盛土である。城域を東西に横断する道路「私部城線」の設置に伴うものである。

## (b) 近現代池堆積層

第10～13層は盛土以前の現代までの本丸池堆積層である。その下層の出土遺物から、近世以後現代までのものである。ボーリング調査ではF-1地点においてT.P. 23.978m、F-4地点においてT.P. 23.787mで池の堆積上面を確認した。

## (c) 近世池堆積層

第14～21層は近世頃の本丸池堆積層である。それより下層では近世以前の遺物が出土しておらず、18層の堆積時期が中世に始まる可能性もある

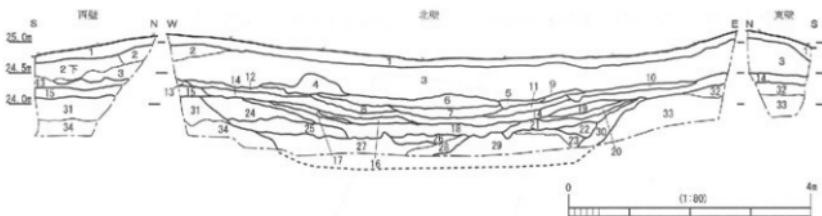
る。ボーリング調査では出土遺物が得られておらず、近現代池、および私部城段階の機能時堆積層との類別はつけられていない。

## (d) 私部城堀埋土

第22～30層までの堆積は近世以前のものである。地盤層に張り付く第30層は、堀の形成時の堆積層か機能時の堆積層である可能性がある。

それより上層では比較的細かい単位で、埋土が堀の両岸から供給されている。堀を埋没させた盛土とみられる。ただし、その間にはラミナが認められる層も含まれる。人為的な盛土により一挙に埋没したのではなく、ある程度埋没させられた後に、徐々に周辺から埋土が供給され、現況の池が形成された可能性が高い。

同層の下面が機能時の堀底面にあたるが、湧水のため、固化できていない。ただし、調査時の観察結果、およびボーリング調査によって検出された底面標高との比較からは、ほぼ平坦な面をなす



1. 2.SYS/1層 土・礫混じり砂質シルト～2.SYS/1オリーブ灰 中砂質シルト  
2. 下 3.SYS/2層 オリーブ灰・砂質シルト (2.SYS/2層 堆積 半大シルトブロック多く含む)  
3. 7.SYS/2層 オリーブシルト面にじり砂粗砂～粗砂 (半大の石シルトブロック含む)  
4. 10SYS/3層 土・砂質シルト  
5. 10SYS/4/8層 中・粗砂質シルト  
6. 8SYS/3層 オリーブ堆積砂～5cmのシルトブロック混 粗～細粒砂  
7. 2.8YS/4/オリーブ層 細～5cmのシルトブロック混 粗～細粒砂  
8. 8SYS/1/2層 オリーブ灰 土・砂質シルト (軟状)  
9. 2.8YS/5層 オリーブ灰 土・砂質シルト  
10. 8YS/6層 土・砂質シルト  
11. 8YS/7層 土・砂質シルト  
12. 2.8YS/7/2層 自・8YS/7/2後段 粗砂  
13. 2.8YS/5/2層 土・砂質シルト (SYS/2灰オリーブ 混在多く含む)  
14. 10YS/2/2層 土・砂質シルト  
15. 2.8YS/2/2層 土・砂質シルト  
16. 8YS/1/2層 細砂  
17. 8YS/4/2層 石灰質シルト (泥灰)  
18. 10YS/1/オリーブ灰 シルト (既脱あり、木片・近世瓦含む) 【近世池堆土】  
19. 7.8YS/2/2層 オリーブ灰 砂粗砂～細砂  
20. 7.8YS/3/2層 砂粗砂  
21. 7.SYS/1/灰 細粒砂質シルト 10YS/4/1層 砂粗砂含む  
22. 7.SYS/1/2層 砂粗砂～細粒砂質シルト  
23. 10YS/4/1層 シルト  
24. 10YS/4/2層 オリーブ灰 堆・堆積砂と7.8YS/4/1層シルト (最大厚5cm) の互層  
25. 6SYS/4/1層 オリーブ灰 砂混じり 細～細粒砂質シルト  
26. 10YS/5/2層 土・粗砂 (27層由来のブロック、シルト含む)  
27. 6SYS/1/1層 オリーブ灰 砂粗砂～堆積 (シルト含む)  
28. 2.8YS/6/1/2層 オリーブ灰 土・砂質シルト  
29. 10YS/7/1層 土・砂質シルト  
30. 8YS/7/2層 自・8YS/7/2後段 砂粗砂  
31. 8YS/5/2層 オリーブ灰 土・砂質シルト 5SYS/1/オリーブ灰 (シルト挟み層含む)  
32. 10YS/7/1層 自・中砂 (下層) 7.8YS/6/1層砂 砂混じり砂～細粒砂 (中層)  
33. 2.8YS/1/灰 白 砂混じりシルト 【地盤層】  
34. 2.8YS/1/オリーブ灰 細・中砂混じりシルト 【地盤層】

第169図 2012-4次 第4調査区断面図

ものと考えられる。

ボーリング調査では、上層の近世池堆積層との境は頗別できていない。

同層上部より中世の雁振り瓦片が出土している。

#### (e) 地盤層

第32～34層は地盤層であるが、本郭などで認められた堅固な堆積層ではない。築城以前から湧水しやすい岩筋であった可能性が高い。

ボーリング地点のうちF-1、F-4地点では谷部の脆弱な地盤層を検出している。これは堀部底面に相当するものである。その標高は、F-1地点でT.P. 22.3m、F-4地点でT.P. 22.6mである。北へ向かってやや低く傾斜する。

F-2、F-3、F-5地点では谷肩部のやや堅固な地盤層を検出した。これは、堀の肩部に相当するものである可能性が高いものである。その標高はF-2地点でT.P. 25.08m、F-3地点でT.P. 24.7m、F-5地点でT.P. 24.8mである。おむね平坦な面を呈している。

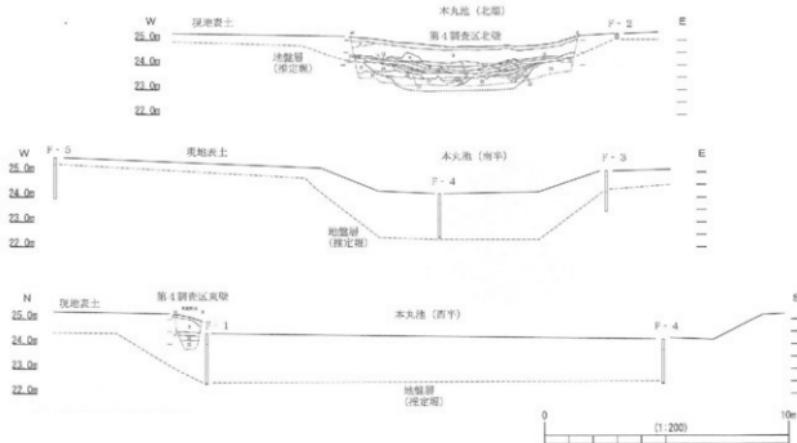
#### (3) 遺構

近世以後の池の堆積の下層で、人為的に掘り込まれた堀の底部形態を確認した。底面は平坦な箱堀である。その斜面には傾斜変換点が認められる。下半で45度ほどとくつ、上半で20度前後と緩くなる。

下端幅は約5m、傾斜変換点までの幅が7.2m、上端までの推定幅は約12mである。底面からの比高は約2mほどである。

底面にはシルト・粘土が堆積しており、湧水も著しい。泥田状から現状の池のように水堀に近い状態であったものとみられる。

なお、F-1地点から第4調査区断面まで地盤層底面の標高は急激に高くなっていることから、本丸池の堀は北側へ大きく延長するものではないと判断できる。成果から推定すると、現在の本丸池北側上端から約2mほどの地点に本来の堀の上端が存在したと推定できる。これは二郭南平坦部の調査成果とも合致してくるものである。



第170図 2012-4次 第4調査区・ボーリング断面合成図

## (4) 出土遺物 (第171図)

場跡では、第18層までの池の堆積層中に瓦・陶器片などの近世遺物が大量に含まれていた。これらは池に投棄されたものである。

その下層の堀部埋土で、182が出土した。中世の雁振り瓦が一点検出されている。平瓦部から瓦当部への接合部を残すものである。内外面ともに剥落が激しいが、凹面側に糸切り痕が認められることから、中世のものと確認できる。出土状況からは、廃城後の堀埋土に混入したものである。特に同地点は本丸池の北端にあたる場所であり、堀の北側から供給された可能性が高いものとみられる。

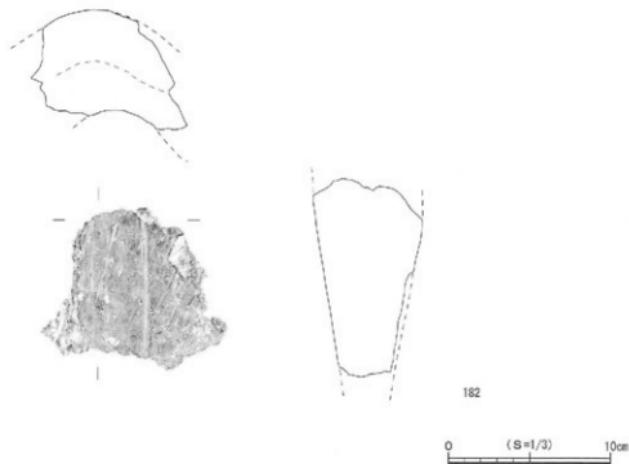
182以外に、顕著な中世遺物は検出されなかつた。この遺物量の少なさと、機能時堆積層がはつきりと確認できなかった堆積状況をあわせて考慮すると、長期間機能した堀ではないものと推定できる。

## (5) 小結

本丸池の堀跡が、私部城に推定幅約12m、深さ2mほどの箱堀であったことが確認できた。現在の本丸池と同様の堆積状況を示すようになる堆積層(第18層)には近世の瓦片が含まれている。

現在のように池として利用されるようになるのは、私部城が役割を終えた近世のことと考えられる。それ以前の底部の堆積状況からは、私部城の堀として機能した段階でも現況のように泥田状か、浅い水堀状の堆積をしていた可能性が高い。

形成年代については、手がかりとなる出土遺物は少なかった。しかしながら、堀に改変痕跡が認められないこと、堆積状況や出土遺物が少ないとからは、長期間機能したものではないものと認められる。この堀の軸は、東西から南北を指向するものであり、二郭や本郭と密接に関連するものであることもふまえると、城の中心部の遺構とともに一連で形成され、機能したものと考えられる。



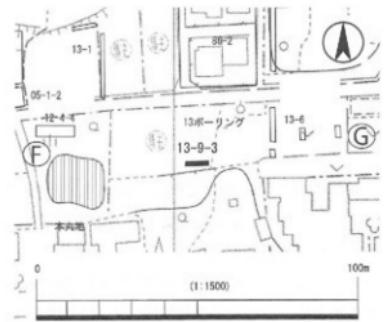
第171図 2012-4次 第4調査区出土雁振り瓦

## 第2項 2013 - 9次 第3調査区

## (1) 地点と調査に至る経過

現在の本丸池より東の地点である。昭和23年の航空写真などで確認できる本丸池は、同地点付近まで伸びている。

本調査区は、旧本丸池の東端を確認すること、またその下層の堆積状況を確認することにより、本丸池が堀として機能していた段階に、より東へと延びていたのか否かを確認するために設定し



第172図 2013 - 9次 調査地点位置図

た。堀部の断面形態については、2012 - 2次調査成果によって箱堀状の形態であったことを確認できていた。本調査においては、調査面積が限られる中で、確実に東端部をおさえるために、堀の東側端部付近に東西方向の調査区を設定した。

## (2) 層序 (第174図)

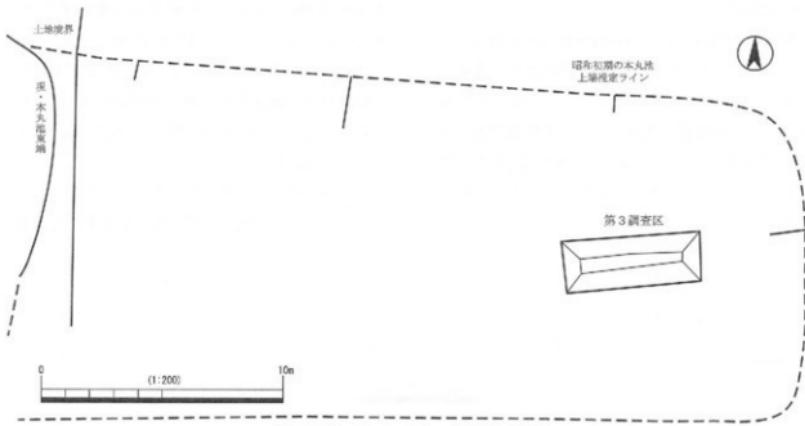
## (a) 現代盛土

現代表土は駐車場として利用するために設置された整地土である。その下層には、第174図 - 第2～第5層まで分厚い盛土が確認できる。人頭大の石・ブロック土などを含む。昭和40～50年頃の間に、近世の本丸池の東端を埋めたものである。

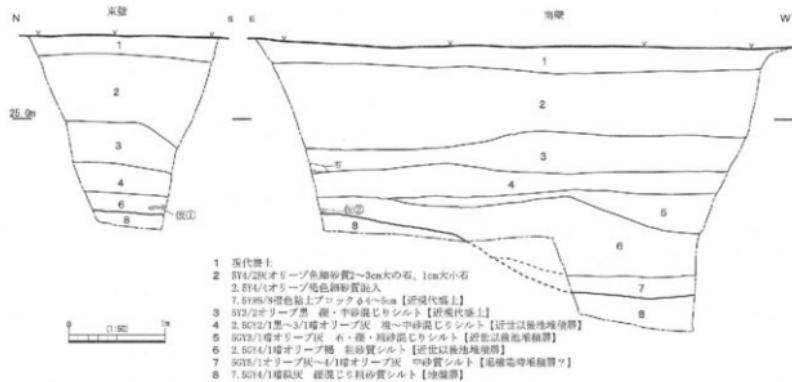
## (b) 本丸池の堆積土 (近世以後)

第6層は、青灰色のシルト・泥層で構成される。層下面の標高は西端でT.P. 23.2m、東端でT.P. 24.1mと東に向かって標高が上がる。

同層下部で近世瓦片が数点検出されており、私部城廃城以後の堆積層であることが確認できた。本丸池として機能していた段階の堆積層と考えられる。



第173図 2013 - 9次 調査区平面図



第174図 2013-9次 調査区断面図

## (c) 堀機能時堆積層

第7層では、シルト・粘土が堆積していたが、同層中には近世以後の遺物が含まれておらず、図化し得ないものであったが中世の土師器皿の小片が含まれていた。私部城の堀として機能した段階の堆積層と考えられる。中世遺物の出土量は極めて少なかった。

## (d) 地盤層

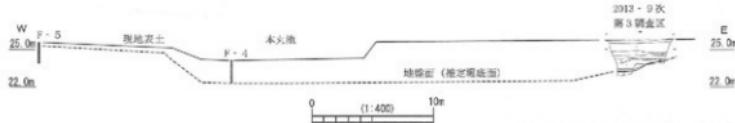
機能時堆積層より下層の第8層はやや脆弱ながら、砂混じりのシルト・粘土で構成され、遺物を含まない。盛土などによるものではないことは確実であり、地盤層と考えられる。地盤層は西が低く、東側が高い。この形状は、堀形成にあたって自然地形を利用して加工されたものである可能性が高い。

## (3) 遺構

本調査区では近世までの本丸池の東端を検出し、その下層で、堀の機能時堆積層を検出している。これは地盤層を削り込んだ後に堆積したものとみられるが、旧本丸池の東端付近の下端から上端の形状は、おむね中世段階にも遡る可能性が高いものである。現在確認された堀の東端の標高はT.P. 24.0mであり、その傾斜から推測すると、東に向かってより高くなるものとみられる。

同調査地点の東方の2013-6次調査第1・6～8調査区で確認された堀跡の底面がT.P. 24.0mであることから、両者の関係については、次のように考えられる。

2つの掘跡は、一連のものである可能性が高いと考えられる。従来、両者の間にも本丸池とは別



第175図 2013-9次 第3調査区・ボーリング断面合成図

に水田が存在しており、近年では沼地となっている。こうした地形をふまえ、従来の網張り図では連続する堀跡として推定されてきた。

今回の調査成果もふまると、堀底面は堀内障壁のような段構造をもつものとして推定復元される。現状で推定される堀跡の平面形からみて両者は連続する可能性が高いものとみられる。

ただし、2つの堀跡の間に土橋状の遺構が存在した可能性も残る。地盤面に認められた傾斜は盛土によるものではなく、地盤層を改変したものとみられること、この傾斜がゆるやかに東へと高くなり、土橋状の形状を呈していた可能性も残されている。この細部の内容については、今後の調査課題となる。

堀の復元案については課題も残すが、堀の底面で確認された堆積層の層相からは、泥田状堆積または、浅い水堀のような堆積をしていたことが判明した。同様の堆積は、本丸池の北端から西端でも確認されていることとも合致してくる。

また、中世の堆積層から近世以後の堆積層の間に、堀跡を埋没させようとした盛土等は認められなかった。同地点付近では、廢城後、堀跡がほぼそのまま近世以後の本丸池へと引き継がれたものとわかる。このことから、周間に土星状の遺構が存在しなかったこともうかがえる。

#### (4) 出土遺物（第176図）

堀の底部では、圓化しないほど土師器皿小片を検出した。堀の掘削年代の詳細を決定できるような資料ではない。またこの他には中世遺物は認められなかった。堀底面で中世遺物がわずかにしか検出されないのは、本丸池北端の調査でも同様であった。本丸池の堀跡が中世の長期にわたって機能したものではないことがうかがえる。

第176図183は第6層下部で検出された近世瓦片である。銀黒色に焼成されており、凹凸面ともに平滑に仕上げ、各端部を丁寧に面取りされている。こうした焼成・調整技法は、現在の私部周辺に残る近世瓦にも認められるものである。

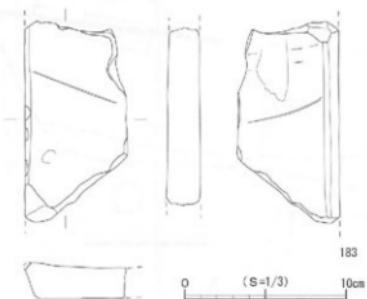
#### (5) 小結

近年まで本丸池として機能していた堀跡の東端を確認した。この下層で私部城の堀として機能した段階のものとみられる堆積層も確認できた。

同層中から中世の遺物出土量は極めて少なかつた。近隣の2012-4次第1～3調査区、2005-1次調査などで私部城築城以前の集落域が確認できるようになっているのとは対照的である。私部城以前の集落域が存在した段階では、本丸池の堀跡は開削されていなかったものと考えられる。

調査成果からは、昭和初期の航空写真・測量図に写る本丸池の平面形がほぼ私部城段階の堀跡に一致するものと考えられる。堀の形態は二郭や本郭と軸を揃え、L字状の形態をとる。この計画性からは、本丸池の堀跡も私部城本郭、二郭などと一連のものとして同時に開削されたものとみるのが妥当である。また今回の調査でも、堀の改変などの痕跡は認められず、遺物の出土量からも城の堀として機能したのは短いことがうかがえた。

同地周辺では、堀を埋没させず、近世以後に池として利用された。このことから、この周圍には土星などは存在しなかったものとみられる。



第176図 2013-9次 第3調査区堀内出土遺物

## 第3項 二郭南堀跡（本丸池）の調査成果

## (1) 私部城段階の堀の姿

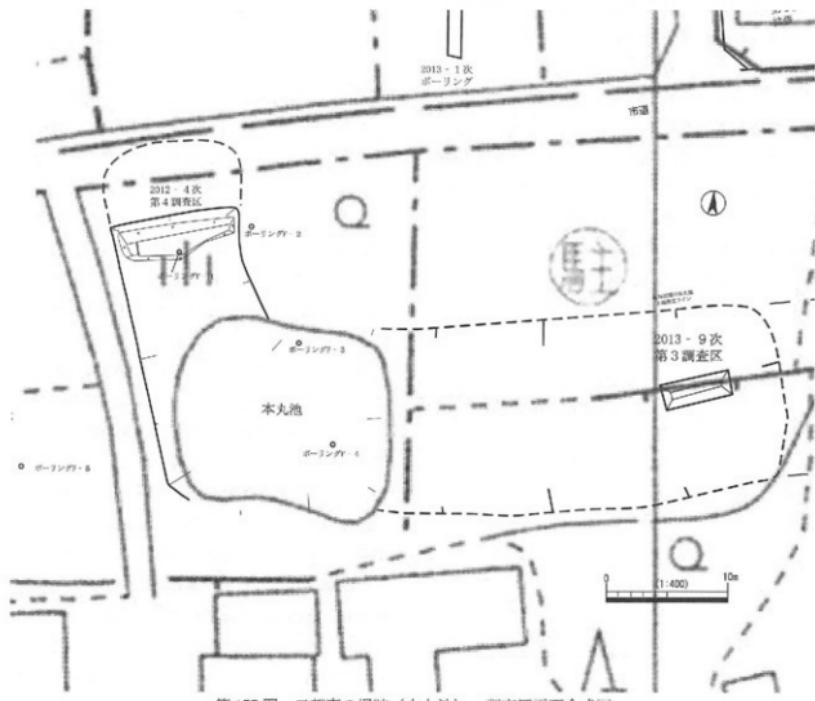
本丸池内の調査では、他の堀跡に比べて廃城後の人為的な盛土が顕著ではなかった。その後の堆積状況からもおおむね昭和初期の池の姿が私部城段階の堀跡に相当するものであると推定できるようになった。ただし、その幅は現状より若干広く、約12mほど、深さはおおむね2m前後のものと復元できる。また泥田状から浅い水堀に近い堆積を呈する箱堀であったことが判明した。現状では、その堀がより東へと延びる可能性が高いが、土橋状の遺構が存在した可能性も残る。また、同堀跡

が廃城後に埋没していないことから、周辺には土壙などの遺構が存在しなかったものとみられる。

## (2) 本丸池の堀跡の年代

出土遺物から中世段階に機能していたことはうかがえた。ただし、詳細な年代をおさえることはできなかった。その中で、状況証拠として、堆積状況や遺物の出土量自体が極めて少ないと、復元される堀の方位が本郭や二郭と類似するものであることが確認された。

こうした状況からは、本郭や二郭と一連で形成された堀とみるのが妥当である。16世紀中頃から後半頃のものとみられる。



第177図 二郭南の堀跡（本丸池） 調査区平面合成図